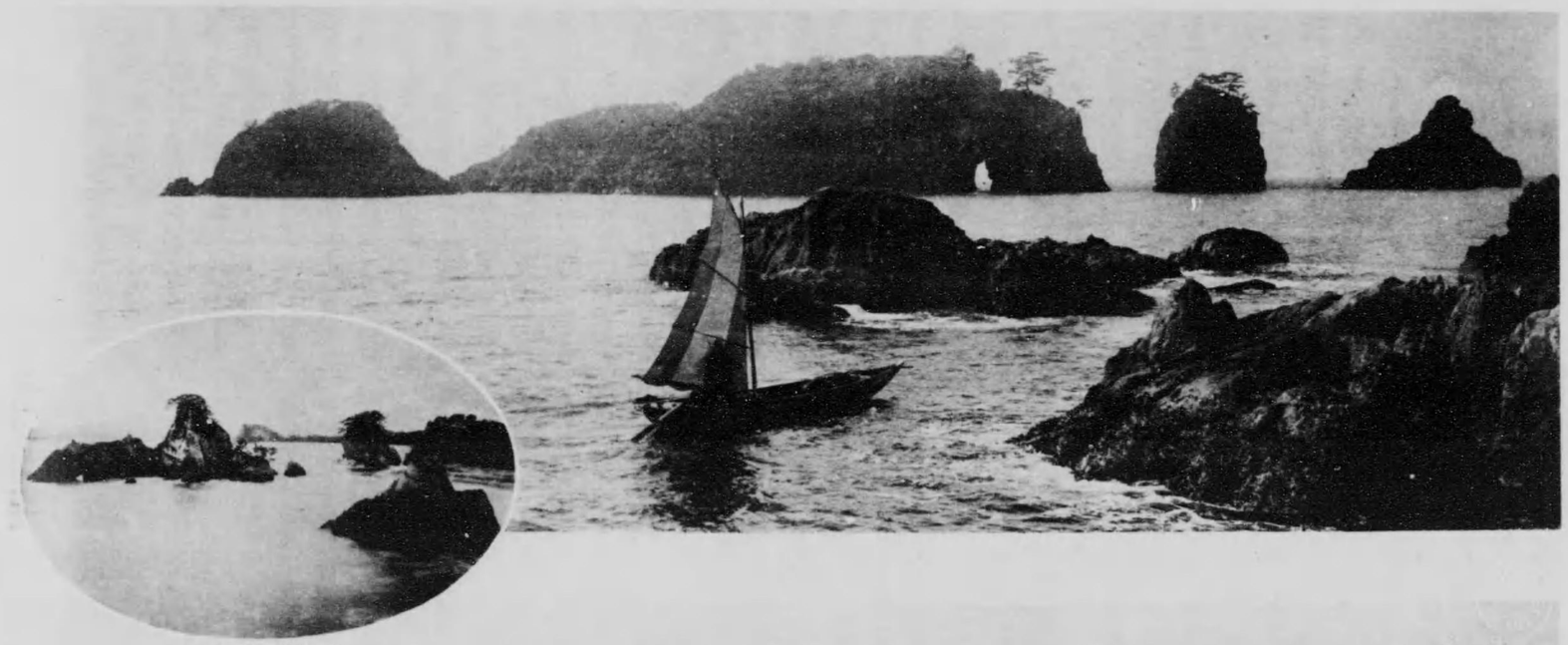
松島雄島の景



松島不老島

松島風景

●松島の絶勝（陸前）

集美歸松洲。天下無山水。の句は簡にして能く松島を盡せり、然り松島灣に於ける山水の秀麗風光の明媚なるは、古來天下に鳴、其絶勝たることは萬口一聲復た異議なき所なり。

之を安藝の嚴島丹後の天橋立と併稱するも、松島は素より冠絶せり、即ち星列碁布の諸島は皆な石身松髮にして、澄鏡の上に顯現し勢ひ浮動せんと欲す、恰も

つべし。

●雄　島（松島灣内）

雄島は瑞巌禪刹の西南海上に位置を占む、歌枕に小島と作り、見佛集等には御島と記し、俳句は千松島と爲す、御島と稱せるは往昔日本武尊此島に臨ませ給へりとの傳記より出づ、千松島に至りては慈覺開山の時松樹千株を栽えたるに因る

此島を繹ぬるには觀月埼より南に進み幽寂浦を過ぐれば苫屋の打に出づ「立か

建つと傳ふ。

●不老山（松島灣内）

松島灣は東北金華山に界し、西南相馬岬に至る仙臺灣の一邊にして、其區域は東、桃生郡宮戸村端島より、西、宮城郡鹽釜町字稻荷山に至る直距三里十五町、南、同郡七ケ濱村花淵岬より、北、同郡松島村字富山に至る直距三里三町とす、即ち其方域は六方里三、沿岸線約七里を下らず、而して宮戸島、桂島、寒風澤等

●松島の絶勝（陸前）

桑美歸松洲。天下無山水。の句は簡にして能く松島を盡せり、然り松島灣に於ける山水の秀麗風光の明媚なるは、古來天下に鳴、其絶勝たることは萬口一聲復た異議なき所なり。

之を安藝の嚴島丹後の天橋立と併稱するも、松島は素より冠絶せり、即ち星列恭布の諸島は皆な石身松髪にして、澄鏡の上に涌現し勢ひ浮動せんと欲す、恰も仙妃の瑠璃殿上に翱翔するが如く、蹁躚たる舞態、風丰の秀眞褻近すべからざるの趣あり、陸上より眺するも又舟中より矚するも總て可ならざるなく、一步を進むれば一奇を增し、一楫を搖がせば一象を變じ、晴好雨奇は勿論雪晨月夜亦妙ならざるはなし、舟中の人となり悠々回覽せんか、舟轉じ洲廻り灣礁相代り島嶼徂徠するに至りては、左右應接に遑あらず、其島巖の怪態或は處々に洞門を成し、或は一列に皴壁を作り、或は倒れんとするものあり、或は起たんとするものあり、若し失れ個々の島嶼に至りては大なるものは山の如く、小なるものは岩の如く、千狀萬態得て記すべからず、而して其島松は石に飽きて土に渴し、常に海風に弄せらるゝを以て、奇嬌蟠屈、畫ける龍の如く虹の如く苔鱗斑らにして霧衣髣たり豪駝師たらざるも垂涎三尺たらしむるもの多し、天下無山水の絶叫は此邊の感想ならん、松島の景を八ケ所に限り、七浦八崎を推奬せるは甚だ限極的なり、此雄大なる絶勝之を限極すべからず。

伊達政宗青葉城を築くに當り、其本丸に「帝座の間」を造り、瑞巖寺を建つるに際して、上々段に「玉座」を設け、共に何人と雖も立入る事を禁ず、是れ他日松島離宮を經營して叡賞を迎へんと欲せしものなりと傳ふ、政宗の松島觀大なりと謂つべし。

●雄　島（松島灣內）

雄島は瑞巖禪刹の西南海上に位置を占む、歌枕に小島と作り、見佛集等には御島と記し、俳句は千松島と爲す、御島と稱せるは往昔日本武尊此島に臨ませ給へりとの傳記より出づ、千松島に至りては慈覺開山の時松樹千株を栽えたるに因る

此島を繹ぬるには觀月埼より南に進み幽窒浦を過ぐれば苫屋の汀に出づ「立かへり又も來て見む松島や雄島の苫屋浪にあらすを」と俊成の咏めるは此處なり、汀を離れ象鼻巖を顧み小松埼を陟れば、右は峭壁左は曲灣にして、其路曲折逶迤たり、一朱橋在り之を渡月橋と稱す、渡れば即ち雄島なり、登ること數十步左丘に稻荷祠あり、既にして一茶亭のある所に至る、更に左折すれば松吟庵の前に達す、庵は寛文年中僧道水の建つる所、其傍らに藥師堂あり、豎國殿と扁す、內に丈六の藥師佛を安んず、佛前の靈牌に「當庵主草創見佛上人大和尙松島三代大悲圓滿國師」と併記す、又步を進むれば別業の一舍ある所に至る、小丘あり之を島端とす、若夫れ島上より右折し左丘に登れば國師坐禪堂あり、署して把不住軒と言ふ、寛永年中僧雲居の建つる所にして、往昔見佛の趺坐せし所なり、雲居瑞巖寺に住せる時、常に來りて此に寂坐し、見佛の道行を追慕し、其遺地に就て堂を建てたりと言ふ、此處より更に南行すれば又島端となる、四阿あり縣廳の設けて以て遊覽者の休憩に供する所なり、傍らに賴賢の碑其名甚だ高し、又骨塔あり「寶曆六丙子冬小春二十四鳥」と刻す、是れ建置の年月日なり、見佛堂即ち妙覺庵は今廢絶してなし、上記別業舍の處其舊蹟に當ると言ふ、見佛茅を結んで此島に居り、精勤苦練十有二年、法華六萬部を誦して塔を建つと傳ふ。

●不老山（松島灣內）

松島灣は東北金華山に界し、西南相馬岬に至る仙臺灣の一邊にして、其區域は東、桃生郡宮戸村端島より、西、宮城郡鹽釜町字稻荷山に至る直距三里十五町、南、同郡七ケ濱村花淵岬より、北、同郡松島村字富山に至る直距三里三町とす、即ち其方域は六方里三、沿岸線約七里を下らず、而して宮戸島、桂島、寒風澤等の巨島逶迤連嶂の如く、外、波濤を捍ぎ、內、島嶼を擁し、以て一大盆景を成す。

不老山は桃生郡野蒜港の東端に在り、地を餘景濱と言ふ、山脚竇穴多し、波濤突入し灑いで巖背に出づ、一進一退響音雷の如く飛沫雪の如し、巖崖の面上天然の佛形を印す、土人五百羅漢と稱す、此山舊と念佛壇と呼びしが、伊達綱村此に遊び其名の雅ならざるより、絶勝の地、人を老へざらしむるに足るとし不老山と改めしむ、野蒜港は桃生郡の南部鳴瀨川の口に在り、北上運河と岐る、處にして、開門あり守者開閉を掌る、港內水淺く濁高くして船舶の碇泊に適せず、明治十一年內務省は直轄工事として此に石堤を築き波濤を防捍し築港に着手せしが、遂に功を奏せずして止む、每日汽船鹽釜を發し此を經て石卷に至るを例とす。

記事の序を以て松島灣中第一の巨島たる宮戸島を記さん、宮戸島は周圍三里餘あり、島中田圃多く居民半農半漁なり、西南、鳳島寒風澤に對し、島の西端を里濱南を月濱、東北を大濱室の濱と言ふ、是れ即ち宮戸の四濱なり、大高峰は島中にあり、環海五山の一にして最も高し、故に四方銀盤中の數青螺一目指點して視るべし、島中山水の奇勝甚だ多く、又前後の島嶼奇形名狀すべからざるもの多し、皇都島始め數十の島嶼四方に點在す。

松島不老島

●松島瑞巖寺（松島）

瑞巖寺は松島に在り、古への所謂松島寺にして、青龍山と號し臨濟宗たり。

其表門に桑海禪林の大額を掲ぐ、門を入れば喬樹林立し嵐翠人を襲ふ、右邊一帶の山崖には洞穴相連る、悉く方形にして數十人を容るゝもの少なからず、昔時旅僧の來りて坐禪せし處なりと言ふ。寺の中央木戸口の左右に石川櫻所寄跡之碑及遠藤深谷之碑を建つ、木戸を入れば左崖に法身窟あり、一に無相窟と稱す、是れ開祖法身禪師の跌坐せし處、木欄之を遶る中に雲居禪師行狀之碑あり、窟前の二碑に觀音の立像を刻す、中門の左に御成門あり、「松島瑞巖圓福禪寺之碑」は中門の右に建つ、傍らに觀音の銅像あり、其携ふる所の壺中より清泉滴る、號して一脈靈泉と言ふ、佛殿始め附屬堂宇の結構は伊達政宗紀州の名匠刑部左衛門に命じて造營せしめたるものなれば、輪奐の壯嚴なること言を俟たず、内に入れば數個の間取あり、曰く奥の間、上段、孔雀の間及文王の間、菊の間、櫻の間、墨繪の間、鷹の間其他なり、格子天井欄間等の彫刻皆な諸國名工の技に成る、大小襖等の畫も亦有名なる畫家の筆に成り共に巧妙を盡せり、又奥の間は上々段と稱し、藩主たる政宗と雖も嘗て入られし事なし即ち玉座として備へたる神聖の一室なり明治九年聖駕東北に巡幸あらせられ、瑞巖寺を行在所となし給ひし時、此間を以て玉座に供し奉る、故に碑を建てゝ之を表せり、其碑の篆額は岩倉右大臣、撰文は杉宮内大輔、書は金井内閣大書記官なり、正殿孔雀の間には政宗の像を安置す、像は甲を環し刀を佩ひ胡床に踞し、冑上に弦月標を挿む、其面貌生けるが如く英氣人を襲ふ、是れ政宗廿七歳征韓出陣の狀と爲す。

瑞巖寺は仁明天皇の承和五年慈覺之を草創し、後、龜山天皇の文應年間時賴法身の爲めに革めて禪刹と爲し、名けて圓福寺と言ふ、之を鎌倉の建長圓覺南寺に籍屬す、而して名緇英衲相繼いで居るもの九十餘世、然るに法燈光を失ひ殿宇荒壞せり、伊達政宗之を一新し、更に青龍山瑞巖寺と稱し、京都妙心寺に隷す、殿宇は慶長九年秋八月より經始し、越へて十四年春三月廿六日を以て落成せり、政宗乃ち國風を賦して曰く「松島の松の齡も此寺の末榮えなむ年は經るとも」又記念の爲め自ら五鬣の松を栽え、海晏を請じて住持たらしむ、後、忠宗先考の遺命を以て雲居を召す、雲居一たび至れば叢規整肅鐘鼓響きを改む、乃ち政宗の遺容を模彫し正殿に安置して伽藍の守護神と爲す、當寺の本堂は桁行十三間、梁間右側九間左側八間、單層入母屋本瓦葺、中門は四足成門は藥醫門入母屋本瓦葺、御物切妻柿葺なり、其結構は築界に喧傳さる。

●觀瀾亭（松島）

亭は瑞巖寺の東南百數歩を距る觀月埼に在り、伊達政宗の創建する所、文士の所謂渚宮なり、當時の亭は正保二年火災に罹りて燒燼し、今の亭は文祿年間政宗が豊太閤より受けたる「伏見の行殿」にして、嘗て江戸品川の藩邸に建てしものに係る、正保の火災後二世忠宗船致して此に建設せしと言ふ、門を入れば老榎あり巨石を壓し蟠根怒張す、傍らに孤岩の側立するを見る、亭に入れば其南楣に「觀瀾亭」の扁額を掲ぐ、玄龍と署す、即ち佐々木文山の筆なり、其室は十八帖にして、柱は栂の四方柾、正面床の間の壁畫は金松、赤徐、栂の立木に流水とす、他に見ざる畫樣にして頗る奇拔なり、襖の畫も亦立木なり、共に金地に彩筆を施せしもの、相傳へて狩野山樂の畫く所と爲す、伊達家にては之を永德筆と言ふ。

亭は東北に面して開く、富山の嵐翠掬すべく、金華の眉黛依稀望むべし、福浦島前に横はり、經ヶ島の塔尖松間に見ゆ其麗景筆すべからず、明治九年六月廿八日　明治天皇東巡の際親しく憩息の榮を賜ふ、亭榭始めて光輝を發せり。

佐藤　一齋

觀瀾亭子枕清瀾　聞昔遙從伏水移
彷彿雨奇晴好景　宛然金石綺遙詩
舟如芹點新磨鏡　嶼似秤存未覆碁
爲是英雄遺結構　使人憑吊想當時

●五大堂島（松島）

五大堂島は元松島の前に在り、陸を距る數十歩、中間一岩ありて隔つ、二橋を架して以て陸に接す、前橋は短く後橋は長し、其製甚だ異り、二本を兩崖に架し、釘するに方材を以てす、恰も梯子を横ふるものゝ如し、俯して脚下を窺ふに波光搖漾し歩行稍々危し、之を松島橋と言ふ、一名を筏橋と稱す、岩畔長松多く、往昔紫藤花ありて橋上に蔭す。

●材木島（松島）

松島灣中の珍島と稱せらるゝ材木島は横に數十の條理ありて、恰も木材を積み重ねたるが如きを以て、之を島名とせらる、一邊に空洞あり、豁然樓門を開く、因て三十七八年戰役後俗に之を凱旋島と稱せり、實に珍島たるに値す。

●松島の大島小島（松島）

松島は八百八島ありと稱さる、僧靈巖の撰べる八景、藩主吉村の命名せる八景之を新古の八景と言ふ、七浦八埼を加へて推賞せる時代は去れり、其幾多の大小島皆な勝景ならざるはなし、大觀を要す。

瑞巖寺

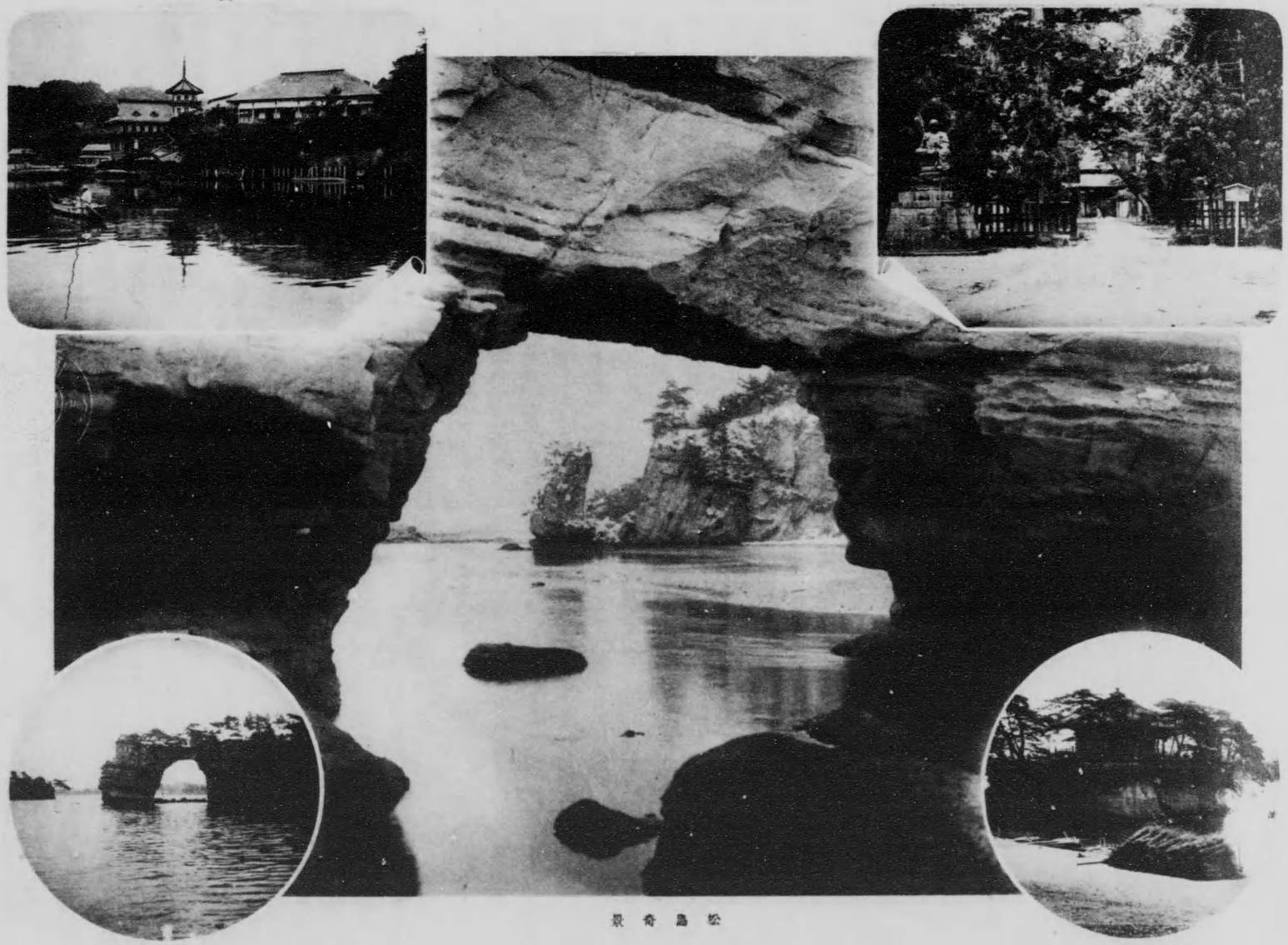
五大堂

て玉座に供し奉る、故に碑を建てゝ之を表せり、其碑の篆額は岩倉右大臣、撰文は杉宮内大輔、書は金井内閣大書記官なり、正殿孔雀の間には政宗の像を安置す、像は甲を環し刀を佩ひ胡床に踞し、冑上に弦月標を挿む、其面貌生けるが如く英氣人を襲ふ、是れ政宗廿七歳征韓出陣の狀と爲す。

巨石を壓し蟠根怒張す、傍らに孤岩の側立するを見る、亭に入れば其南楣に「觀瀾亭」の扁額を掲ぐ、玄龍と署す、即ち佐々木文山の筆なり、其室は十八帖にして、柱は栂の四方柾、正面床の間の壁畫は金松、赤徐、栂の立木に流々とす、他に見ざる畫樣にして頗る奇拔なり、襖の畫も亦立木なり、共に金地に彩筆を施せしも

●松島の大島小島（松島）

松島は八百八島ありと稱さる、僧靈巖の撰べる八景、藩主吉村の命名せる八景之を新古の八景と言ふ、七浦八崎を加へて推賞せる時代は去れり、其幾多の大小島皆な勝景ならざるはなし、大觀を要す。



観蒐亭

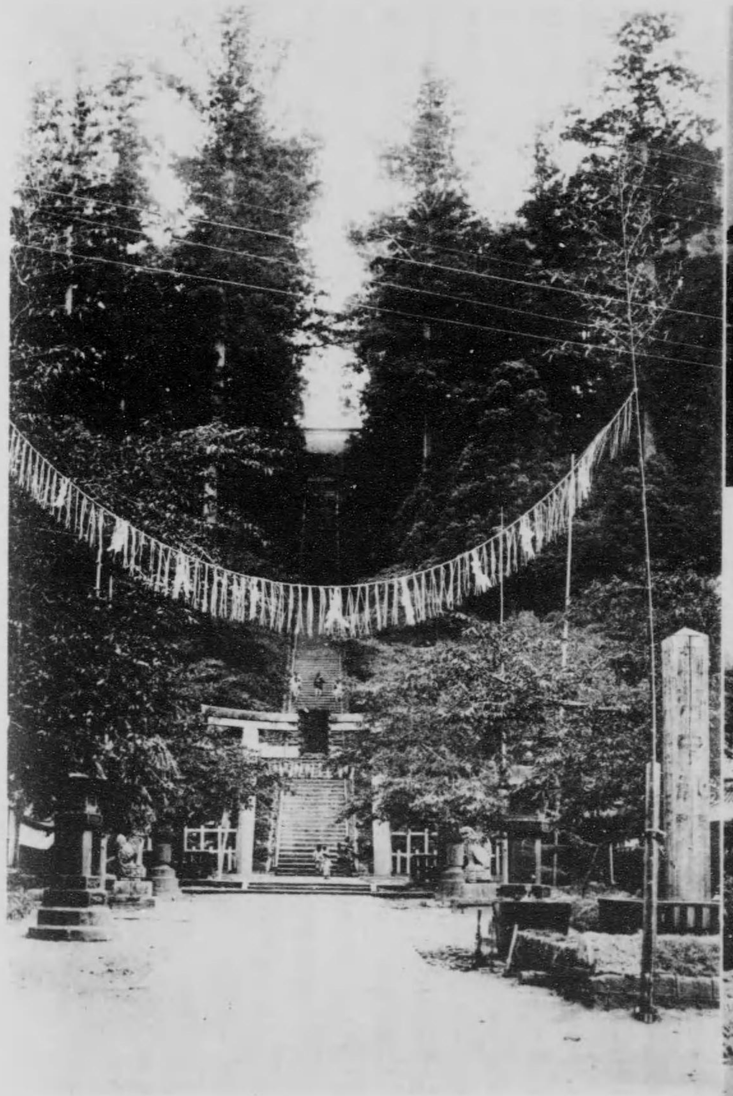
瑞巌寺

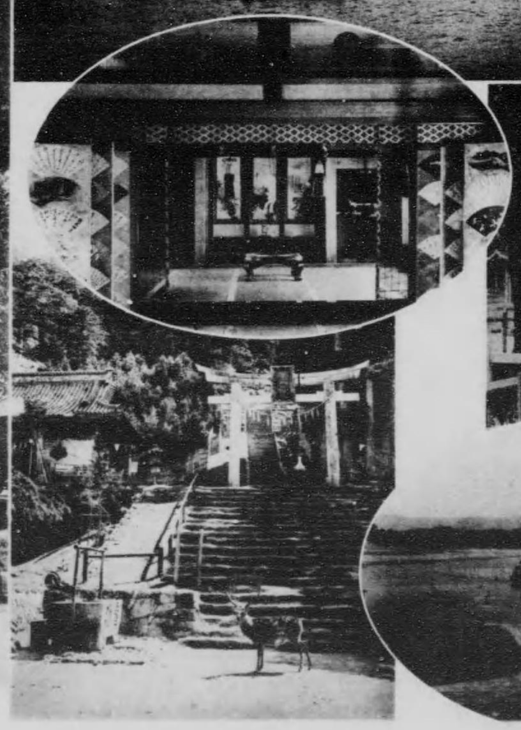
松島奇景

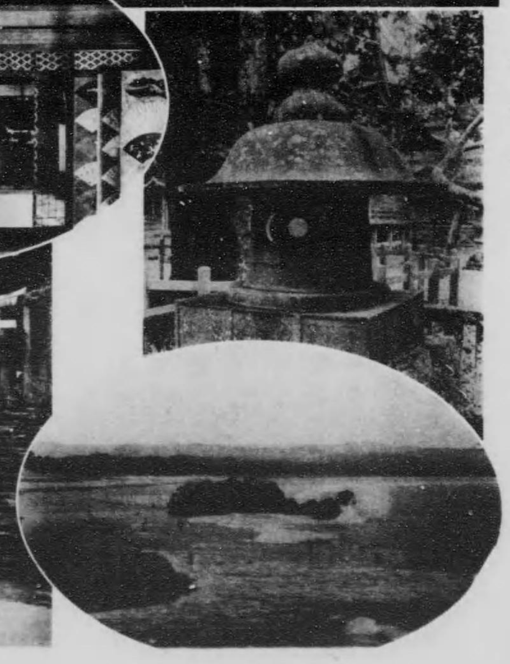
大島小島

下ノ九七

金華山全景（中）金華山神社内部







鹽竈神社

金華山石階

鹽竈

嘉瀬田海水浴場

●塩竈神社（陸前）

鹽竈市街の西北端一森山に鎮座す。

社殿は鬱蒼たる老杉古松に環擁せられ四顧極めて幽靜、二百五十四級の石磴を陟り此に詣拜するもの、森嚴なる古氣に打たれ、自ら肅然たるを覺ふ。

拜殿は檜板葺にして、燦たる七個の菊花章は棟上に耀く、社殿を分ちて兩宮と竈徑四尺八寸、西竈徑四尺六寸、國に殃ある時は釜中の水色各々變を爲し、或は紫或は赤其色同じからず、是に於て妖孽の兆を恐れ之を祀り、例年七月十日昧爽新水を以て舊水に易ふと、潮水は笹雞島の東釜ヶ淵より汲む、又神竈社の傍らに一祠あり「八鹽煮神社」と稱す、太古鹽土翁神煮鹽に與りて功績ある翁媼十四神を合祀せるなり。

釣漁し得べし、實に好個の娯樂場たり、創設者の功勞亦頗ぜずんばあらず。

●金華山（陸前）

金華山は牡鹿半島の東南端、鮎川村より山鳥渡を隔てゝ太平洋に屹立せる一島なり、其高さ山麓より絶頂まで一里十二町、周圍三里二十八町五十七間、全山花崗石より成り、山形五峰を爲し、之を六十八區に分ち、溪谷も亦四十八あり、清泉

●塩竈神社（陸前）

鹽竈市街の西北端一森山に鎮座す。

社殿は鬱蒼たる老杉古松に環擁せられ四顧極めて幽靜、二百五十四級の石磴を陟り此に詣拜するもの、森嚴なる古氣に打たれ、自ら肅然たるを覺ふ。

拜殿は檜板葺にして、燦たる七個の菊花章は棟上に耀く、社殿を分ちて兩宮と爲し、左宮に武甕槌神、右殿には經津主神、右の別宮に鹽土翁神向殿に志波彦神を祀る、數十基の鐵燈籠は社前の左右に相並ぶ、其中に日月の形を鐫れる古色掬すべき一基あり、是れ文治二年七月十日和泉三郎忠衡の進献せるものなり堀河天皇の御製「あけくれにさぞな愛で見ん鹽竈の櫻がもとの海士のかくれ家」の櫻樹は此社の前にあり「鹽竈櫻」と稱し來る。

鹽竈社略史の當社祭神に關して載する所を見れば「上代天孫降臨の初め、建御雷神經津主神蘆原中國を平定し給ふ時に鹽土翁神を以て嚮導と爲し、蠻民の神化を梗禦する者を討伐し、東北の諸國始めて綏平に屬せり、爾後建御雷神は常陸國鹿島に、經津主神は下總國香取に移り鎮座せられしも、鹽土翁神のみは留まり座しませり、是れ地形を熟察し水利を謀り、始めて海潮を煮て之を食鹽に製することを發明し、以て四國の蒼生をして普ねく無際の神澤を蒙らしむ、其盛德大業夫の耒耜を作り耕耨を教ふるものと其偉績を等ふす、是れ誠に山田の大宮に鎮まり座す豐受大神に亞ぐべき神德なり」云々

本社より南三町の所に「神竈社」あり、相傳ふ上古鹽土翁神始めて此浦に降り鹽を燒きて以て民に教ゆ、鹽釜浦の名因て出づる所、而して其竈器は上古、神の製する所なりと、現に存する所の神竈四口あり南方に在るもの二口、東竈徑四尺八寸、西徑四尺、北方に在るもの二口、東竈徑四尺八寸、西竈徑四尺六寸、國に殃ある時は釜中の水色各々變を爲し、或は紫或は赤其色同じからず、是に於て妖孽の兆を恐れ之を祀り、例年七月十日味爽新水を以て舊水に易ふと、潮水は笹雛島の東釜ケ淵より汲む、又神竈社の傍らに一祠あり「八鹽蒸神社」と稱す、太古鹽土翁神煮鹽に與りて功績ある翁媼十四神を合祀せるなり。

鹽竈神社境内の東端に勝畫樓あり、是れ舊別當法蓮寺の一閣にして、此樓より眺望すれば鹽竈全港は勿論大小遠近の群島悉く一眸の下に鏗まり、遙かに金華山を天末に望む、好景畫も如かず。

藤原　清輔

鹽竈の浦吹く風に霧はれて
八十島かけてすめる月影

大納言經信

けふり立あまのとまやも見えぬまで
震にけりな鹽竈のうら

道信　朝臣

千賀の浦に涙よせかへる心地して
ひるまなくても暮しつる哉

●菖蒲田海水浴（陸前）

鹽竈驛より東南一里三十町餘を隔つ。地を菖蒲田濱眺望ヶ崎と稱す、其名の如く眺矚に富める所なり、前面大洋に臨み、左方遙かに金華山の秀嶺を望み、相馬岬は遠く右方に連り、滄溟萬里渺として際涯なし、海岸一帶白沙青松と相映ず、而かも濤勢潮流大に海水浴に適するより、夏時は浴客頗る多し、此地冬季と雖も四十度を保つ、故に銷暑防寒の地として著る、伊達政宗屢々此に遊び、太く其風光を愛し、眺望ヶ崎と命名す。

因みに鹽竈港の東方一里餘「代ヶ崎」に鯛の生洲あり、是れ往年濱谷東兵衛と言ふ水產家が私財を割いて創設せるに基く此に遊び竿を投ずれば忽ちにして數尾を釣獲し得べし、實に好個の娯樂場たり、創設者の功勞亦頌せずんばあらず。

●金華山（陸前）

金華山は牡鹿半島の東南端、鮎川村より山島渡を隔てゝ太平洋に屹立せる一島なり、其高さ山麓より絕頂まで一里十二町、周圍三里二十八町五十七間、全山花崗石より成り、山形五峰を爲し、之を六十八區に分ち、溪谷も亦四十八あり、清泉處々に涌出し、調水に金砂を流す。

山腹に神社あり、金山產命金山媛命を祀る、延喜式に載する所の黃金山神社是なり、明治維新後縣社に列ぜらる、社殿廊閣の結構石磴の造營等頗る壯觀なり、信徒團體の遠くより相率て參拜するもの甚だ多し、聖武天皇の天平勝寶元年、陸奥守百濟敬福始めて黃金を献ず、朝廷乃ち幣を諸社に奉じて天平勝寶と改元し、陸奥國に三年の調庸を免ず、大伴家持「すべらきの御代さかえんとあつまなるみちのく山にこがね花咲く」の歌を奉りて之を祝す、當時黃金の此山より出でたりと言ふ、金華の稱は蓋し此に基く。

山の北岬を二王崎東岬を大箱崎南岬を蛇穴ヶ崎と稱す、山頂は社後より更に登ると十六町にして達す、海神命の小祠あり、天風衣を拂ふ處杖を停めて展望すれば、太平洋は浩渺として地平線を限り一碧際なく、西に松島の八百八島を俯瞰し、東北は陸前陸中の諸山蜿蜒起伏し遠く相連るを見る、而して怒濤澎湃として常に岩角を噛み、潮花白雪を碎きて飛散す、奇絕壯絕言ふべからず、此附近は嚴寒南潮の會衝する所なるを以て、平素水蒸氣多し、爲めに草樹繁茂し積翠蔚鬱たり、其間泉水潺湲として噴出し、清洌掬すべし、山中猿猴の樹梢に戲るゝあり、又群鹿の人に馴れて食を求むるあり、眞に塵外の一仙境たり。

●青葉城址（陸前）

青葉城址は仙臺市の西端に在り。

其金碧燦然たる城門は大橋々畔より之を仰觀するを得、城は青葉山の中腹を拓きて經營せるもの、自ら天然の要害にして、其後方は幾層の深谿幽淵を以て之を環繞し、懸崖相連り叢林鬱茂して今猶人跡の稀なる處多し、既に背後に此險を負ひ、前面は即ち廣瀬川の急流を擁す、是れ此城が要害無双の名高き所以にして、特に此地を撰定したる伊達政宗の眼識を推知し得べし、政宗は慶長五年を以て本城を築き、濠池を穿ち大廈高樓を聳し玉造郡岩出山城より此に遷る、此地南山初春綠色を吐く必ず他の群峰に先んず、故に古來青葉山の名あり、古歌に「たつねばや青葉の山のおそざくら花の殘るか春のとまるか」と城名の因て出づる所なり、其外城は伊達忠宗寛永十年戊寅之を經營し十六年己卯落成せり、大手城門は豊太閤征韓の役肥前名護屋の本陣に建設したる「營門」を移したるものにして、蓋し當時政宗之を太閤に請ひて拜領せしものなり、惜い哉明治十五年火を出し、封内百餘萬石の富を盡して結構せられたる殿堂門廡は悉く焦土に歸し、現今は唯だ僅かに城門を存するのみ、今其の城址には第二師團司令部を置く、又天守臺の址に征清紀念標あり、尖頭に巨鷲あり翼を打つて舞はんとす亦一偉觀たり、政宗此城を經營し居ること數年、武を偃せて無事閑遊す後、城東の地に築き之を小泉城と名け、此に移るや吟詠自ら老を養ふ。

●榴ケ岡公園（陸前）

往昔躑躅花の名所たりし榴ケ岡公園は仙臺市の東端にあり、當時躑躅の花を以て衣帛を摺り之を「躑躅摺」と稱し其名著れ古歌にも「東路やつゝじが岡を來て見れば赤袋の裾に色ぞかよへる」と詠まれたり、今や此岡躑躅花絶えてなし、唯だ孝勝寺僧房の庭前に一二株あるのみ、此地古への所謂「鞭建」の壘址にして、往昔陸奥國塞路王なる者兵を起して上國に上らんとす、坂上田村麻呂兵を率ゐて討伐す、賊衆此岡に陣して田村軍の先鋒を遮る、田村軍擊つて之を退け岡上に陣を布き、鞭を建て旅軍を祀る、鞭建の名是より出づ、中古文治の役に秦衡兵を率ゐて國分楯鞭に據とあるは即ち此處なり、是より數世を經、元祿八年乙亥伊達綱村釋迦堂を建設するに當り、大に此岡を開き栽ゆるに單瓣蘇鉄櫻數百株を以てす、且つ騎射馬場弓銃射的場を設けて士人遊覽歌樂の地となせり、又松楓二樹を栽えて櫻樹の間に參へること幾百株なるを知らず、花時に至れば遊人集りて絡繹たり。

●經ケ峰政宗廟（陸前）

經ケ峰は青葉城址の東南に峙立す、相傳ふ、昔時經を峰頭に埋む故に此名ありと、伊達氏三代の廟墓は此峰の中腹なる瑞鳳寺にあり、地は廣瀬川の清流山下を繞り、四ッ谷町、靈屋下町等水畔にありて、門前には密林鬱として周り、之を登れば古松老杉綠蔭晝猶暗く、寺門の前を横ぎり靈廟の山門に入る、柵門の傍ら大華表あり、廟門に入り石階を登れば則ち前殿なり、瑞鳳殿の大額を掲ぐ、其奥緣簾幕の裡、政宗の靈像衣冠肅然として深殿中に坐す、墓石は殉死者二十名を左右に列ね中央最高丘に位す、殿の奥に廟宇あり、是れ即ち政宗の遺骸を歛めたる所なり。

嗚呼絶代の英雄其志を達するに至らずして此に永眠すと憶へば轉た感慨なき能はず、明治三十四年朝廷其勳功を追賞あり特に正三位を贈られ、策命使を廟墓に遣はさる、政宗以て瞑すべきなり、順慶に係る。

るに政宗十八歳にして家を襲ぎし以來四隣を征服し、畠山氏を討つて父の讐を報じ、葦名氏と戰つて會津を略し、尋で大崎氏を倒し仙道諸豪を降す、茲に至る大小數十戰、其捲有する所、西に越後北は津輕に接し、東南は常野二國に蔽む、更に力を中原に伸して群雄と衡を爭ひ、餘威朝鮮に及び、終に使臣をして南歐を偵察せしめ、之を呑まんと欲したるが如き其雄志實に大なりと言ふべし、豊太閤は「野に在るの虎は吾れ能く之を縛せん」と政宗を御する已に成算ありしなり而して陸奥の平ぐや、政宗の時ありて咆哮四出するを慮れり、此一事に見るも政宗の大器を窺ふに足る、政宗後年に至り鵬翼を收め以て吟詠に耽りし如きは、其意の在りし處を察せずんばあらず。

伊達　政宗

邪法迷邦稱不終　欲征蠻國未成功
圖南鵬翼何時奮　久待扶搖萬里風
何知今歳棹滄海　高麗大明屬掌中
匣劍藁弓治國處　歸帆須是待秋風

又政宗戲作の參差時雨歌は左の如し。

參差時雨か萱野の雨か
昔もせで來て濡れかゝる

●三澤初子墓（陸前）

墓は榴ケ岡の南なる孝勝寺にあり、門内石甃して徑と爲し、石欄墓を繞らす、墓碑の正面に三澤氏初子之墓、裏面に從四位左近衛權少將兼陸奥守綱宗側室三澤清長女、貞享三年丙寅二月二十四日歿年四十八と刻す、是れ院本の所謂乳母政岡なり。

●伊達政宗筆蹟

本書に掲ぐるものは伊達政宗より越後少將即ち松平忠輝に致せる書狀なり、政宗は一に正宗とも書す東京金子滿喜氏所藏に係る。

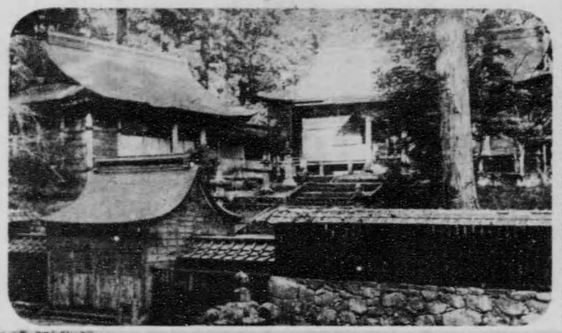
伊達政宗像

三澤初子墓

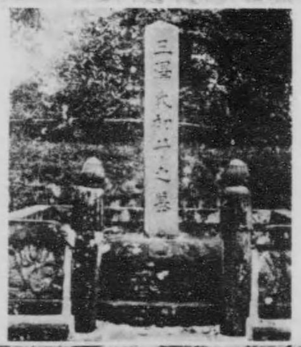
榴ケ岡公園

伊達政宗像

政宗筆蹟

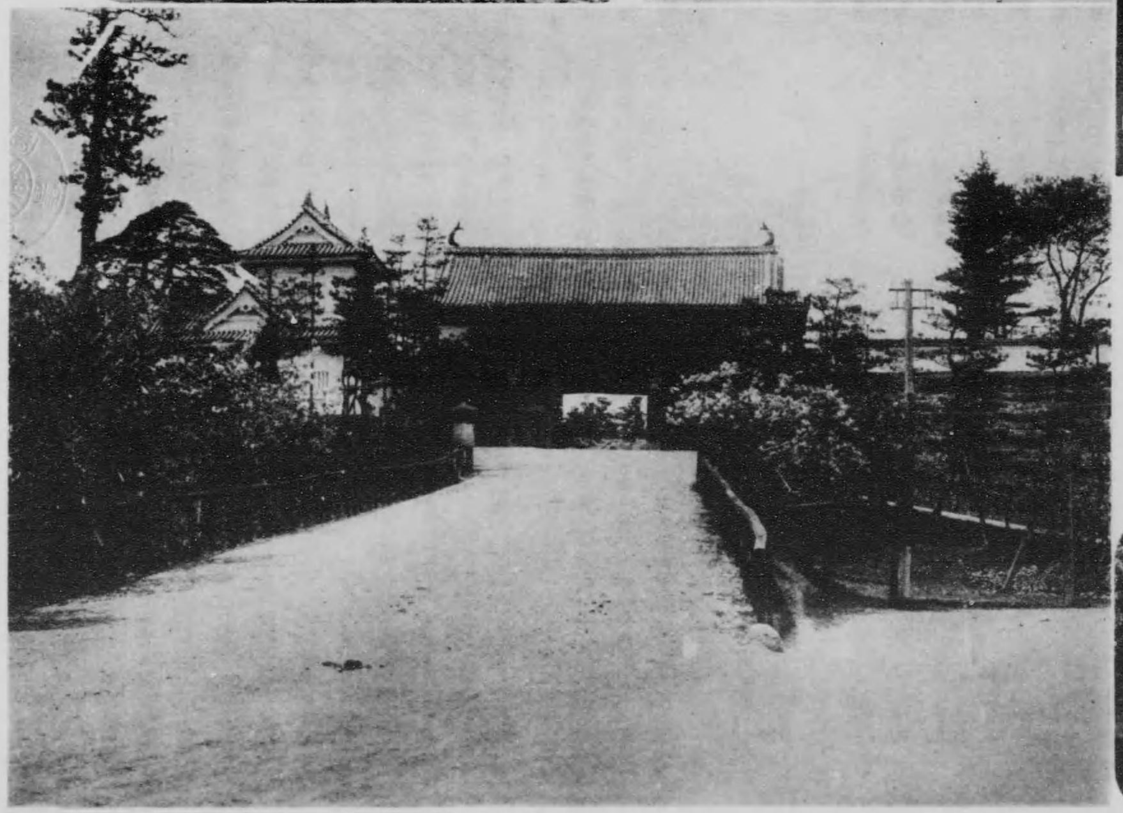


經ヶ峯靈廟



三澤初子墓

榴ヶ岡公園



青葉山城址

征清紀念標あり、尖頭に巨鷲あり翼を打つて舞はんとす亦一偉觀たり、政宗此城を經營し居ること數年、武を偃せて無事閑遊す後、城東の地に築き之を小泉城と名け、此に移るや吟詠自ら老を養ふ。

●榴ヶ岡公園（陸前）

往昔躑躅花の名所たりし榴ヶ岡公園は仙臺市の東端にあり、當時躑躅の花を以て衣帛を摺り之を「躑躅摺」と稱し其名著れ古歌にも「東路やつゝじが岡を來て見れば」とあり。

鳴呼絶代の英雄其志を達するに至らずして此に永眠すと憶へば轉た感慨なき能はず、明治三十四年朝廷其勳功を追賞あり て特に正三位を贈られ、策命使を廟墓に遣はさる、政宗以て瞑すべきなり、廟前殿なり、瑞鳳殿の大額を掲ぐ、其奥緑蘚幕の裡、政宗の靈像衣冠粛然として深殿中に坐す、墓石は殉死者二十名を左右に列ね中央最高丘に位す、殿の奥に廟宇あり、是れ即ち政宗の遺骸を歛めたる所なり。

●伊達政宗筆蹟

本書に掲ぐるものは伊達政宗より越後少將即ち松平忠輝に致せる書狀なり、政宗は一に正宗とも書す東京金子滿喜氏所藏に係る。

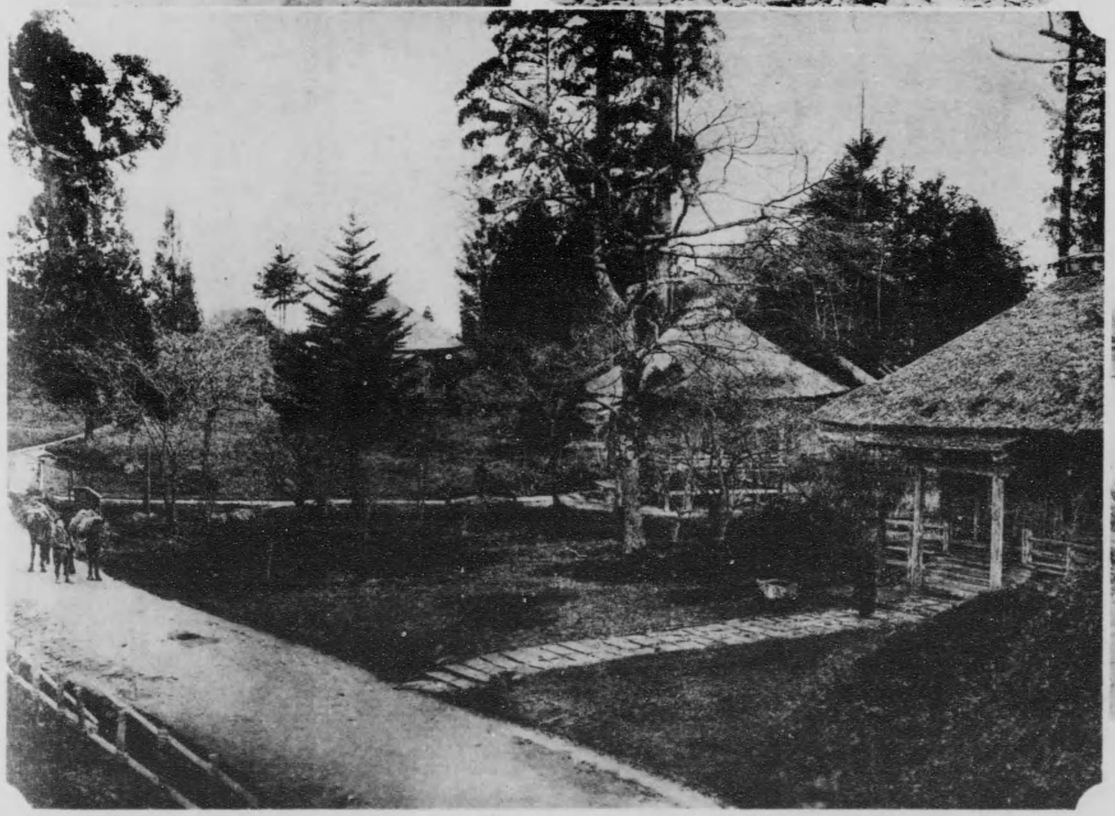
墓碑の正面に三澤氏初子之墓、裏面に從四位左近衛權少將兼陸奥守綱宗側室三澤清長女、貞享三年丙寅二月二十四日歿年四十八と刻す、是れ院本の所謂乳母政岡なり。

藤原秀衡像

衣川より衣館を望む

源義經筆蹟

多賀城碑



中尊寺

●多賀城碑（陸前）

碑は宮城郡多賀城村字市川の多賀城址南麓にあり、其高さ六尺五分、周九尺六寸八分、濶さ二尺六寸四分、西面して建ち、今は屋を設けて雨露を防ぐ、文に曰く

多賀城　去京壹千五百里　去蝦夷國界壹百貳拾貳里　去常陸國界百拾貳里　去下野國界貳百七拾四里　去下野國界三千里、此城神龜元年歲次甲子按古家一考を要す。

●衣川より衣館を望む（陸前）

衣川は其源二つあり、一は衣川村高日王山より發す、之を北股川と言ふ、一は同村の西南、清水大森の山間より發す、之を南股川と言ふ、此二川衣舘址の下に至りて相合し、泉ヶ城址を繞回して、中尊寺の北麓を繞り北上川に入る。

法經を書寫して之を安置し、且つ當山の鎮守として日吉白山の兩社を南北に勸請せり、是れ寺堂草創の起原にして、時の陸奥守藤原興世資財を投じて堂宇を修造せしむ、清和天皇貞觀元年に「中尊寺」の號を賜ひ、且つ四境を定められ、天喜五年源頼義安倍貞任を征伐の時、日吉白山兩社を衣の關月見坂に拜して戰勝を祈願し、凱旋の後膽澤郡なる長尻、小前澤の二邑を寄進せり、堀河天皇の長治二年勅命

古家一考を要す。

●衣川より衣館を望む　（陸前）

衣川は其源二つあり、一は衣川村高日王山より發す、之を北股川と言ふ、一は同村の西南、清水大森の山間より發す、之を南股川と言ふ、此二川衣館址の下に至りて相合し、泉ヶ城址を繞回して、中尊寺の北麓を繞り北上川に入る。

衣館址は一に妥悟館とも言ひ、往時安倍頼時の居館とせる所、平泉志の記する所に依れば、址は衣川橋より五六町川上にして、琵琶柵と川を隔てゝ相對す、櫻の古木あり、里俗之を間斷櫻と言ひ傳ふとあるも、今は館址及櫻の古木も見當らず、一書に依れば衣館址は卽ち高館址なりと言ふ、若し高館址が衣館址とせば、衣川よりの眺望佳なりと言ふべし、掲ぐる所の寫眞は此方面を撮影せるなり。

●中尊寺金色堂　（陸中）

東奥唯一の古蹟たる中尊寺は、陸中國西磐井郡平原村大字中尊寺に在り。

一山の境内東西十七町三十間、南北十三町、東は國道を限り西は大字戸河内村、南は大字平泉村北は膽澤郡衣川村の境を限る、地勢東は高館及平泉館に對し、又東山の連峰北上川の長流を望み、西は山隘に關門の古蹟あり、右に道路あり左に近く月山あり遠く臺野あり遠く駒ヶ嶽の秀峰を望むべく、南は鷄足の洞、鐘ヶ嶽より毛越寺達谷に連り北は琵琶柵の舊址衣川の流水を負ふ、四隅老樹鬱々として茂り、幽邃絶塵の淨域、東奥稀に觀る巨刹たり。

中尊寺は嘉祥三年慈覺大師の開基にして當て、比叡山より法杖を曳き此に淨地を卜し其中央に一堂を創建して本堂と爲し「弘臺藏院」と號す、又佛像を手刻し如法經を書寫して之を安置し、且つ當山の鎭守として日吉白山の兩社を南北に勸請せり、是れ寺堂草創の起原にして、時の陸奥守藤原興世資財を投じて堂宇を修造せしむ、清和天皇貞觀元年に「中尊寺」の號を賜ひ、且つ四境を定められ、天喜五年源頼義安倍貞任を征伐の時、日吉白山兩社を衣の關月見坂に拜して戰勝を祈願し、凱旋の後膽澤郡なる長尻、小前澤の二邑を寄進せり、堀河天皇の長治二年勅命あり藤原清衡をして當寺を經營せしめ天仁二年に渉り工を竣へ、堂塔四十餘宇僧坊三百餘宇成る、乃ち鎭護國家の靈場たるべしとて勅願所と爲し給ふ、中央山上に最初院を創造し、次に大金堂以下堂塔を建立して七堂莊嚴を極め、林園、築垣、泉水、橋梁等修繕至らざるなし、崇徳天皇の天治三年三月按察使中納言顯隆を勅使とし、伽藍堂塔を供養し給ふ、其後基衡秀衡堂塔坊屋を增築し、山谷蔓延相望み殿閣樓臺の結構、光彩躍如として眞に海内屈指の靈場となりしが、建武四年野火延燒して堂宇悉く烏有となり、唯だ經藏、金色堂の二宇其全きを存するのみ、金色堂は正應元年鎌倉將軍惟康親王、此堂の常に雨露に沾ひ金裝全く剝脫せん事を惜ませ給ひ、保存の爲め覆堂を造立せらる、金色堂の外部は四面悉く麁布を張り黑漆を塗り金箔を貼し、内部は鶴柱彫梁皆な螺鈿珠玉を裝ひ、美を極めたる七寶の柱には各十二光佛の圖を畫き、其壇上には佛像十一軀を安置し、壇下に清衡秀衡基衡の棺を藏す。掲ぐる所の神燈は中尊寺の「文治神燈」として著名なる古燈なり、又藤原秀衡像は本堂に安置せらる。

●源義經筆蹟

紀伊金剛峰寺所藏の書狀にして「可書上子細之狀如件」の花押は義經の自筆なり。

●多賀城碑　（陸前）

碑は宮城郡多賀城村字市川の多賀城址南麓にあり、其高さ六尺五分、周九尺六寸八分、濶さ二尺六寸四分、西面して建ち、今は屋を設けて雨露を防ぐ、文に曰く

多賀城　去京壹千五百里　去蝦夷國界壹百貳拾里　去常陸國界百拾貳里　去下野國界貳百七拾四里　去下野國界三千里、此城神龜元年歲次甲子按察使兼鎭守府將軍從四位上勳四等大野朝臣東人之處置也、天平寶字六年歲次壬寅參議東海東山節度使從四位上仁部省卿兼按察使鎭守府將軍藤原惠美朝臣朝獦修造也、天平寶字六年十二月一日。

と、卽ち碑は昔多賀城門に立て四境の遠近を示したるものなり、當時蠻夷の來り侵すや、京師に報じ四隣に告げ、或は兵を募り軍を出す、急遽匆卒の際此碑に依り遠近を測り日子を定め緩急、機に臨み變に應せしめたるなり、碑に蝦夷を去る壹百貳拾里とあり、此里數は六町壹里なれば壹百貳拾里は今の二十里、此碑空しく草叢中に埋沒する壹千年、水戸黃門光圀其文字を伊達綱村に請はるゝに及んで、綱村は儒臣佐久間洞巖に命じ之を搜索せしむ、洞巖市川邊の田土を堀り穿つこと數十町にして得ず、市川橋を撤するに及んで始めて之を橋材中に得たり。此碑世に「壺之碑」と稱し、源頼朝の歌に「みちのくのいはでしのぶはえぞしらぬかきつくしてよ壺の碑」と詠せしもの是れなりと言ふものあれど、此碑は多賀城の碑にして壺の碑にはあらず、二者素と別物にして、壺の碑は陸奥國に在りし事は疑ふべからずとの說有力なり、尙ほ近地に末の松山、千引石、野田玉川等の名勝あり、末の松山、千引石も亦陸奥にありて又野田玉川は陸中九戸地方にもあり好

【陸前、陸中】

勝川

石割櫻

●嚴美溪（陸中）

嚴美溪は一に五串溪流と呼び、東北屈指の山水なり、一の關町より行くべく、其間二里餘、地は即ち磐井川の上流にして、五串とは其流に臨める一村落の名なり。

此溪、深潭藍を凝し、松櫻諸樹所々に點在して風景の美言ふべからず、溪に一橋を架して「天狗橋」と言ふ、其對岸に一小堂あり、踞して溪を臨むに適せり、又瀑布あり、二層となりて落下す、曾て露伴博士其著「易心後語」の中に、此瀑布を木曾の寢覺に對比して弟たり難く兄たり難しと言ひしより其名益々著る、地に一碑建つ、題額は白河樂翁文は松崎復にして、松島の絶勝と共に眺むべき勝地たることを揭ぐ、大八洲遊記の此地を記せるもの如左

五串、此爲磐井川上流、兩岸水底皆石無一沙背、巨石連延、牛蹲虎踞、質皆圓滑、不嶮刻、其水紺淨、或石所窄、磐旋衍激、噴雲、飜銀、大石生松、趨々爲趣、岸右植櫻數十株、至天狗橋、橋上俯瞰、激流爲瀧、故人呼爲五串溪、度橋而左、有一亭臨泝、幽致可愛。

●盛岡石割櫻（陸中）

最も珍なる石割櫻は、盛岡地方裁判所の門内右方に在り、高さ七八尺長さ二丈餘幅八九尺なる大巖石の上に生へり、是れ頗る珍とす、樹大にして根の周り五尺餘、根元より二尺以上の所に於て双木となり、枝葉鬱々として繁茂すれ共、其巖上には一の土塊なし、而して此樹の生長するに隨ひて斯る大石も爲めに二つに割れたり、市人巖を呼んで「櫻雲石」と言ふ支那の詩に「松生絶壁不知土」と言ひし例もあれど、櫻に於ては最も珍らしきものなり。

●厨川柵址（陸中）

厨川柵址は盛岡驛の西方三十町餘、厨川村字下屈川に在り、一に安倍館とも呼ばる、東は北上川に臨み斷崖數丈、西は大路に沿ひ壘壕の址猶存す。

地は嘔戸柵址と近く、急流北上川は柵址を繞りて下り、一株の老松笠の如く對岸の絶壁を蔽ひ、附近風景亦宛然として一幅の繪畫の如し、而かも其下に深潭常に渦紋を捲き、水色藍の如く、其深さ幾尋なるを知らず、此近傍八村落は皆て厨川鄕と總稱す、貞任亦厨川二郎と稱し此柵に據りて威を振ふ、即ち此柵は貞任一生の勝敗を決したる所にして、後又藤原泰衡の潛伏したる著名の城址なりしに、文祿元年南部氏之を毀てり、獨り嘔戸柵址のみは今「嘔屋敷」と稱し、舊觀歴然たるものあり、顧みるに康平五年貞任厨川柵に據るや樓櫓を構へ精鋭の兵をして之を守らしめ、河と柵との間に深隍を設け又隍底に刄を倒立し、遠距離の敵に向つては强弩を以てし、近く薄るものには石々投じて之を苦しめ、隍を踰へんとする者をば、倒刄を以て害し、其弛む所を鏖殺せんと企つ。

時に九月十六日源頼義大軍を率ゐて此城に薄る、貞任數十人の女を樓櫓に登らしめ、盛んに俗歌を唄はせ官軍を挑撥せしむ、頼義大に怒り攻擊終日、遂に夜を徹して肉薄すると雖も利あらず、十七日に及んで頼義令を下して附近村落の家屋を毀たしめ之を運び來らしめて隍を塡むること急なり、同時に萱を刈らしめて之を河岸に積ましめ、之に火を放てば黑雲天に漲り火勢熾んに揚る、折柄暴風起つて猛火樓櫓に向つて飛ぶ、此間精兵は矢に萱火を結び付け絶へず射發せるより、火は遂に樓櫓の屋舍を燒き、忽ちにして四方に延燒す、城中にある數千の男女猛

猛を極め、城遂に陷り貞任殺さる。

●毛越寺（陸中）

毛越寺は西磐井郡平泉村にあり、金剛王院醫王山と號し、中に圓隆寺、嘉祥寺を併せ新御堂の如き又之に屬す、創立は嘉祥三年、中尊寺と同じく慈覺大師の開基に係る其堂宇の偉觀も亦三代の經營を俟つて初めて完かりしが、風雨幾百年今は唯だ僅かに常行法華の二堂を殘むるに過ぎず、大金堂、圓隆寺舊址は今の常行堂の右に位し、當時其堂宇及内部の莊嚴なる、金銀珠玉燦として人目を眩し、粧飾の美を盡し善を盡せる、殆ゝ當時本邦に之に比すべきなかりしと言ふ、南大門址の東端國道の左に芭蕉の句を刻せる碑建つ、句に曰く

夏草やつはもの共の夢の跡

●高館址（陸中）

館址は毛越寺飛地境内にして平泉館址の西北部に位す、一帶長方形を爲せる臺地の東端に堂宇あり「判官館」と言ふ、中に義經の肖像を安置す、堂は天和三年伊達綱村の建立せるもの、像も亦同時代の作なり、此堂より遙かに北上の大河を隔てゝ、形勝婉然たる東稻山の風姿を望むの景は、平泉第一の好景たり。

●伽羅御所址（陸中）

藤原秀衡の居館たりし伽羅御所址は平泉館址の西に存す、今猶御所屋敷と呼ぶ其西隣に無量光院址、南に西木戸邸址等ありて城壕の舊址亦近きにあり。

●藤原基衡室墓（陸中）

墓は毛越寺境内小阿彌陀堂址の後に在り、三重臺にして臺共五尺の碑面に「前鎮守府將軍藤原基衡室安倍宗任女」仁平二壬申年四月二十日と勒す。

毛越寺

餘幅八九尺なる大巖石の上に生へり、是れ頗る珍とす、樹大にして根の周り五尺餘、根元より二尺以上の所に於て双木となり、枝葉鬱々として繁茂すれ共、其巖上には一の土塊なし、而して此樹の生長するに隨ひて斯る大石も爲めに二つに割れたり、市人巖を呼んで「櫻雲石」と言ふ支那の詩に「松生絕壁不知土」と言ひし例もあれど、櫻に於ては最も珍らしきものなり。

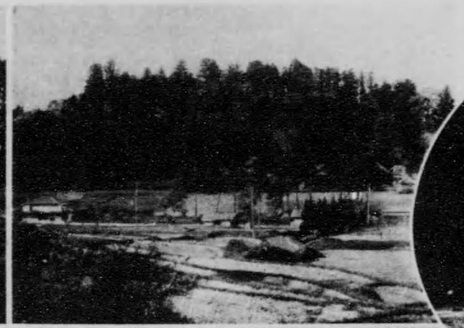
徹して肉薄すると雖も利あらず、十七日に及んで類燒令を下して附近村落の家屋を毀たしめ之を運び來らしめて隍を塡むること急なり、同時に蕓を刈らしめて之を河岸に積ましめ、之に火を放てば黑雲天に漲り火勢熾んに揚る、折柄暴風起つて猛火樓櫓に向つて飛ぶ、此間精兵は矢に蕓火を結び付け絕へず射發せるより、火は遂に樓櫓の屋舍を燒き、忽ちにして四方に延燒す、城中にある數千の男女狼

藤原秀衡の居館たりし伽羅御所址は平泉館址の西に存す、今猶御所屋敷と呼ぶ其西隣に無量光院址、南に西小路邸址等ありて城壕の舊址亦近きにあり。

●藤原基衡室墓（陸中）

墓は毛越寺境内小阿彌陀堂址の後に在り、三重臺にして臺共五尺の碑面に「前鎭守府將軍藤原基衡室安倍宗任女」仁平二壬申年四月二十日と勒す。

櫻雲御所址



高館古址

磨川橋址

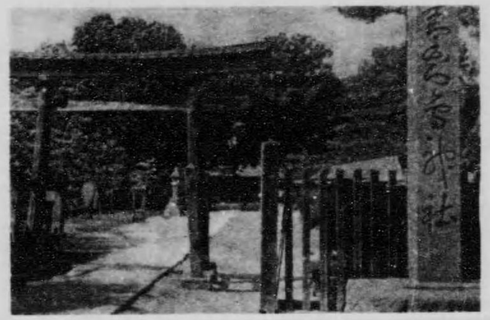
厳美渓

（中尊）基衡夫人墓

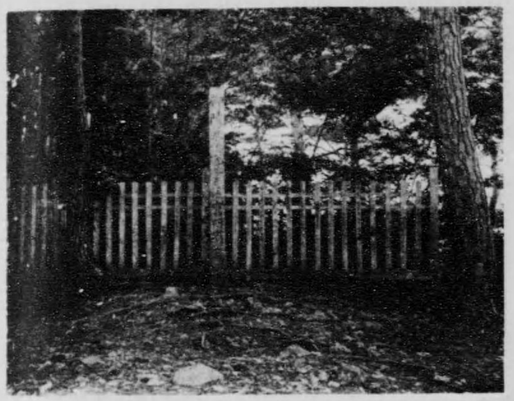
毛越寺

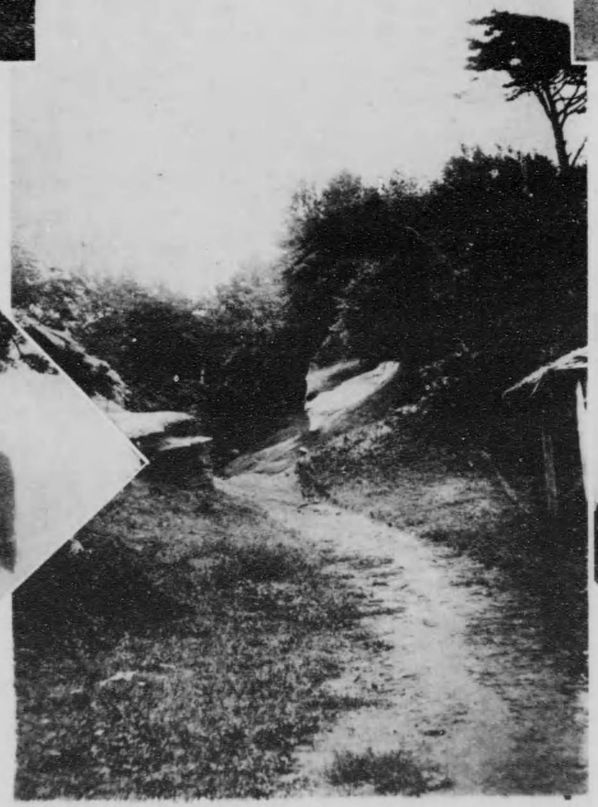
長慶天皇宸翰

菅知鳥神社

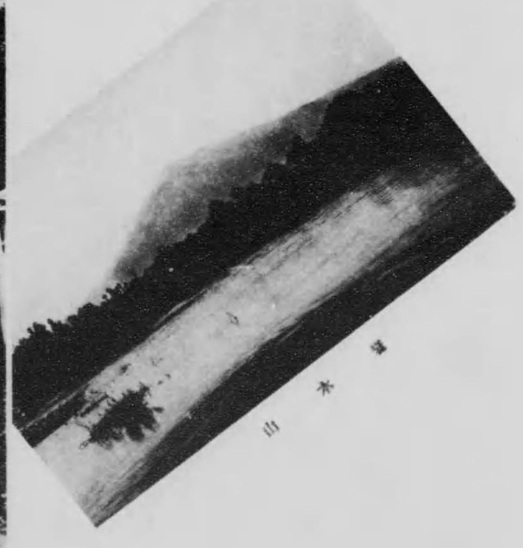


長慶天皇御陵

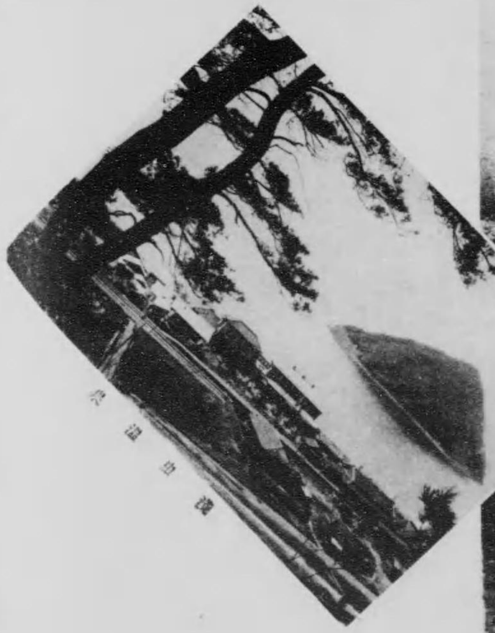




末の松山



末の松山



念珠の岩

●長慶天皇御陵參考地（陸奥）

弘前市を距る西三里餘、相馬村大字紙漉澤の丘上にあり、俗に稱して「上皇堂」と言ふ、傳ふる所に依れば長慶天皇の裔孫某修驗道を修めて僧籍に入り、此山上に常照院を營みて天皇の冥福を祈る、同院に秘藏する所の古記錄中には歴史の遺漏を補ふに足るもの少なからずと。

嘆ぜしむ、樓門の如き高欄附の四方椽にして、丹塗の色頗る鮮かなり、之を入れば神樂殿あり、夫れより總黑塗鍍金の金具を打る中門を過れば、朱塗の瑞離左右に連り、直ちに高五丈一尺東西五丈五尺南北五丈一尺總朱塗の拜殿に達す、本社は更に唐門を入りたる奥にありて、白木造りの柵立及瑞離を以て二重に繞らし、六段の階を上れば、高欄附大床濱床内陣外陣の美麗然として目を驚かす、蓋し東は「故郷の人に見せばやしらなみのきくより越ゆる末の松山」等の古歌の名所は此峠なるや否やは俄かに斷じ難し。

●淺蟲温泉（陸奥）

温泉は淺蟲驛より一町に過ぎず、傳へて言ふ、昔時圓光大師東國巡錫の途此地に來り、一頭の牝鹿温泉中に游浴せるを見、初めて此靈泉の効驗あるを知り、鄉民を諭して浴場を開設せしむ、是れ其濫

●長慶天皇御陵參考地（陸奥）

弘前市を距る西三里餘、相馬村大字紙漉澤の丘上にあり、俗に稱して「上皇堂」と言ふ、傳ふる所に依れば長慶天皇の裔孫某修驗道を修めて僧籍に入り、此山上に常照院を營みて天皇の冥福を祈る、同院に秘藏する所の古記錄中には歴史の遺漏を補ふに足るもの少なからずと。

天皇紀伊國玉川宮を出でさせ給ひて、伊勢國多氣郡なる北畠氏の兵に頼りて、恢復を謀らせ給ふと雖も時到らずして果さず、潛かに聖蹕を東國に遷し、津輕浪岡の城に頼り給ひしを、南部氏は足利に屬せしを以て大軍を率ゐて浪岡城を攻む、天皇力竭き終に一方を切開きて相馬山中紙漉澤の地に遁れ給ひ、應永十年六月朔日終に同所に於て崩御あらせらる、時に聖壽六十歳、乃ち遺命を奉じて此地に葬る、今の上皇堂是れなりと、明治十五年同地の有志者其由緒を宮内省に上申せしに、宮内省に於ては此地を御陵墓參考地と定め、同省附屬に編入せられたり、因みに記す、三戸驛を距る一里餘、名久井嶽の半腹に「長慶天皇行宮址」と稱する所あり此行宮址に就ての傳説も略ぼ此處の傳説に似たるものあり、識者の判斷を俟つ。

●岩木山（陸奥）

津輕富士と稱せらるゝ岩木山は、東北著名の高山にして海を拔くこと五千二百六十尺、奥富士とも稱さる。

地は中津輕郡岩木村外三村に屬し、西は西津輕郡中村に跨る、之に登らんとするには、先づ岩木村字百澤よりするを順とす、百澤は岩木山の東麓にして、其地に國幣小社岩木神社あり、顯國魂命、多都比毘賣命、宇賀能賣命を祀る、當社は延暦十五年の創建に係り、奥の日光と稱され社殿其他の建造物は觀る者をして驚嘆せしむ、樓門の如き高欄附の四方椽にして、丹堊の色頗る鮮かなり、之を入れば神樂殿あり、夫れより總黑塗鍍金の金具を打る中門を過れば、朱塗の瑞籬左右に連り、直ちに高五丈一尺東西五丈五尺南北五丈一尺總朱塗の拜殿に達す、本社は更に唐門を入りたる奥にありて、白木造りの柵立及瑞籬を以て二重に繞らし、六段の階を上れば、高欄附大床濱床内陣外陣の美燦然として目を驚かす、蓋し東北地方罕に觀るの好建築なり、岩木山は當社より一里餘、半腹より以上は岩石嵯峨として、處々鎔岩流の跡を存し、其西側即ち西津輕郡方面には二三の湖沼あり、山勢峭拔登路頗る嶮峻なるが故に、駿河の富士山に攀登して經驗ある人々と雖も、此山には登盡し得ずして中途に下山する者多しと。

山頂に岩木神社の本宮あり、白木造にして極めて小宇なれ共、其用材は俗に所謂節無しの御用木なるものにして、一箇材は必ず一箇の扁柏生木を用ゆ、而して三年毎には必ず之を改造するを例とし、其間風雪の爲めに損所を生ずるも、之を修繕せずして必ず之を改造すと言ふ。

岩木山は四時雪を戴き、其山容八葉の蓮華の如し、南麓には數個所の温泉あり、山巓の廣濶は五町四方内外、此に立ちて眼を放てば千山萬嶽の雜踏せるものを見ず、唯だ八甲田白神二山を伯仲の間に望む。

●末の松山（陸奥）

古歌の所謂「末の松山」なりと傳ふる浪打峠は、二戸郡一戸と福岡の間なる坂路にして、馬淵川の東岸に屹立す、嶺の上なる第三紀層の露出せる形狀、恰も波濤の土砂を淘汰せるに似たるを以て浪打の名あり、然れ共古歌の「君をおきて仇し心を我れもたば末の松山波も越へなん」又は一故郷の人に見せばやしらなみのきくより越ゆる末の松山」等の古歌の名所は此峠なるや否やは俄かに斷じ難し。

●淺蟲温泉（陸奥）

温泉は淺蟲驛より一町に過ぎず、傳へて言ふ、昔時圓光大師東國巡錫の途此地に來り、一頭の牝鹿温泉中に游浴せるを見、初めて此靈泉の効驗あるを知り、鄕民を諭して浴場を開設せしむ、是れ其濫觴なり、泉源は六箇所、即ち椿湯、大湯の湯。裸の湯、柳の湯、目の湯、鶏の湯等なり、此地風景に富み青森郊外唯一として著る。

●善知鳥神社（陸奥）

みちのくの外が濱なる呼子鳥
なくなる聲はうとふやすかた

此古歌の善知鳥に緣ある善知鳥神社は青森驛より約七町、安方町の一角にあり、祭神は市杵島媛命、多紀理媛命にして縣社に列す、往古にありては當社の周圍一面の潟地なりしと言ふ、今の安方沼は實に其一部なりと、且つ社名の善知鳥と言へるは、此附近鳧鷗に類したる鳥に其名ありて、能く砂中に巢ひたるより、村を善知鳥と稱し、神社も亦其稱を襲ひたるならんと。

善知鳥に就て佐藤一齋詩あり。

北溟有異鳥　其名曰善知　頸長而脛促
黄觜而白甝　尾如鷺之短　背似鴉之緇
岩洞寄棲止　匹處雄逐雌　情意驚且戀
聚鳴不相離　所以才調子　采入國風詞
一變爲曲本　再變爲傳奇　綺語使人感
能泣群女兒　妄誕難難信　足想不凡姿
遺種今安在　物色及島夷　水濱空蹤迹
欲尋更憑誰　莫是爰居類　千載存古祠

西行　法師

子を思ふなみだの雨を笠のうへに
かゝるもわびしやすかたの鳥

●弘前城址（陸奥）

弘前市の中央丘阜を爲し喬木鬱蒼たる處是れ舊城址なり、地域東西五町四十間南北八町四十六間に亘る、築城當年は三層の石壘を築き四周に塹壕を設け、牙城の外に五郭八樓を構へ十三門を置けり、城は慶長十五年津輕信牧の築く所にして津輕氏累世之に居城し、明治四年藩籍奉還の時より陸軍省の所管に移り、今は舊二之丸三之丸址に兵器廠舍を置き、舊本丸址を拓きて公園に充つ、内外の壘壁壕池依然として舊觀を保ち、城樓四基猶殘存して當年を偲ばしむ。

●津輕爲信銅像（陸奥）

弘前藩祖津輕爲信の銅像は弘前公園に建つ、英武豪勇、大浦城より起り津輕全部を平げ以て祖宗の仇を復し、遂に東奥の一雄鎮となれる爲信當年の偉は四方を睥睨して儼然たり。

津輕氏は藤原秀衡の子左衛門尉秀榮より出づ、其十一世の孫光信信濃守と稱して大津を氏とし後津輕に改む、爲信は守信の子右京亮と稱す、父祖三世南部氏に苦められ、封土又其管領に歸せるを憤り奮然大浦城より蹶起して先づ津輕全部を回復し、爾來威望加はり東奥の雄鎮として重視せらる、天正十八年小田原の役に際し、豊臣秀吉に謁して封地の安堵を得たり、後、關ヶ原の役に及んで東軍に屬し、大阪城を攻め之を拔き、功を以て上州大館の地を賜ふ、慶長十二年病を以て歿す、爲信を藩祖とする津輕氏は、信牧信義、信政、信壽、信奥、信著、信寧、信明、寧親、信順、順承を歴て十一世承昭に至り藩籍奉還となる。

●弘前城と大浦城（陸奥）

序を以て當年の弘前城及大浦城を記す

隨鑒紀程は弘前城當年の形勢を記して曰く

西隔巨川對岩木山、阡陌連焉、初信牧父爲信、豪爽多權略、用兵拓疆、東至狩場、南達碇關、西北限以大洋、土壤肥美、加以魚鹽之利、豊闢白道前田片欄諸將來檢地、爲信不告以實、鶴川氏秉政、定諸侯封邑、秩僅四萬七千石、及爲信玄孫信政襲封、起徒闢荒、疏溝池築堤防、所墾田十四萬石、幷算舊田有二十九萬六千餘石、而秩尚仍其舊、雖後世增至十萬石、名實未稱、王政維新列藩納土、賜其主、以舊封租額十分之一、於是津輕氏多祿、亞所謂十八國主宜乎城市殷富、東奥推爲一都會也云々

之に依りて觀るも弘前城當年の區域廣濶なりしを知るを得べし、而して其藩祖爲信は曾に英武豪勇の人たりしに止まらず、亦以て經濟の人たりしなり、歴世相襲ぎ能く富强の道を講じたる所以のも、の偶然に非ざりき其藩祖爲信の發祥地たる大浦城は弘前市の西一里餘にあり。

地は賀田と言ひ、西根城址として存す是れ即ち大浦城の古址にして、津輕氏四代此に居城し、爲信此城より蹶起して津輕全部を平定し、父祖の鬱憤を慰め、亦以て大に威を振へること別記の如し。

賀田の大浦城址は、其本丸址東西四十八間南北三十八間、東に虎口ありて、石垣殘存し、北西にも出入の口あり、南の堀幅三間西に曲折して八間、二之丸址は本丸址の東にあり、東西四十六間南北九十六間、南と東に入口あり、北方は後流川なり、古城の俤歴然として其當時の形勢を想像せしむるものは、弘前城及此城幷に堀越城址なりと稱さる、弘前藩祖爲信の發祥地たるが故に、特に附記せるなり。

●大日堂の萩桂（陸奥）

稀有の珍木「萩桂」は北津輕郡鶴館村

大日堂の前にあり、高さ十餘丈周り一丈餘、枝條屈曲桂樹に同じく、花葉胡枝花に似たり、古來萩桂と呼んで其名著る。

大日堂は大圓寺と言ひ、古義眞言宗にして文龜二年の草創に係る古刹なり、開山を隆善僧都とす、此地到る處に温泉湧出し、現に藏館温泉場あり、地は東北に楠ヶ峰、西南に甚吉森の峰巒を擁し、西方遠く阿闍羅山の險崖を望み、風景秀麗なり。

●十和田湖（陸奥）

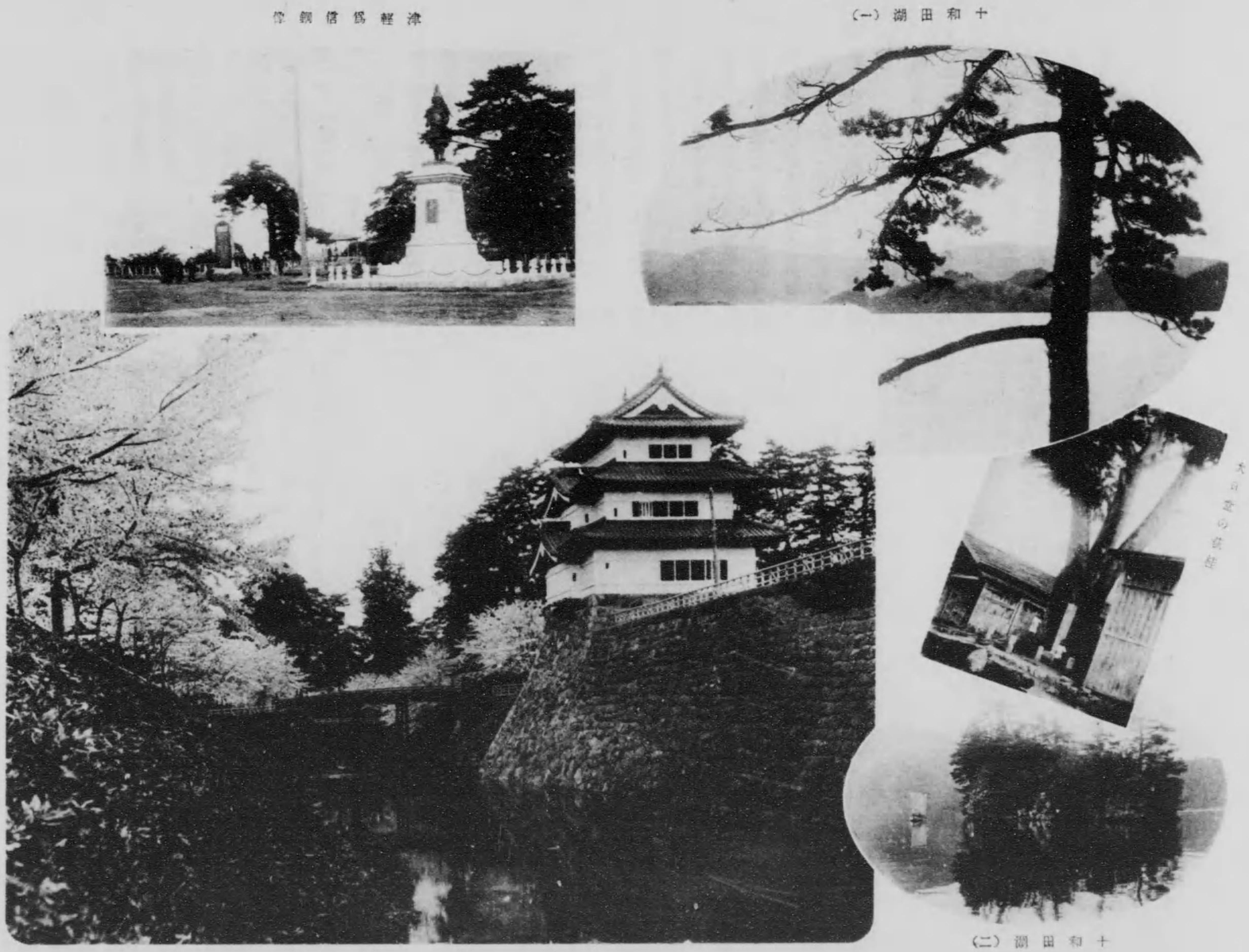
湖は陸中鹿角、陸奥上北の兩郡に跨れる深山重疊の中にあり、一に十輪田と稱され、或は十灣田に作らる。

四邊を環擁せる高山に花部山、十和田嶽戸來嶽等あり、其北方は更に八甲田群山の雄峻巍然として雲漢を摩せるあり、而して周圍の村落には休屋、宇樽部、十灣田等あり、西南稍々平坦なる所を小國平と稱し、其北に相坂川の源流を爲せる銚子瀑あり、湖の周圍奇景に富み、惠比壽島、甲島、鎧島、種島、蓬萊島等あり又御門石なるものあり、是れ巨大なる長方形の石二個併立して、頭部を水面に顯はし宛然たる門狀を爲す。十和田神社は此御門石の岸にありて、惠比壽島より約二町を隔つ、社殿は甚だ小にして、附近は古杉蓊鬱晝猶暗し、鐵鎖に縋り鐵梯を傳ひて、數十仞の舊火口壁を下り中湖の沿岸に達すれば所謂古所なる奥區なり、東西三里三十町南北四里周回十五里三町の地域に跨る此湖は、小坂村より東北三里、奥澤村より四里其何れよりするも通路便ならず。

湖は東隅に至りて窄まり、奔湍溢出して一大瀑布を懸く、晩秋錦を晒すの候に至れば、紅葉は水に映じて水燃えんとするの壯觀あり、寔に風光清絶、人寰を絶つの趣あるも唯だ通路險峻なるを遺憾とす

大日堂の萩桂

十和田湖（二）



十和田湖（一）

津軽偽信銅像

十和田湖（二）

大日堂の萩桂

弘前城

し、大阪城を攻め之を拔き、功を以て上州大館の地を賜ふ、慶長十二年病を以て歿す、爲信を藩祖とする津輕氏は、信牧信義、信政、信壽、信興、信著、信寧、信明、寧親、信順、順承を歷て十一世承昭に至り藩籍奉還となる。

●弘前城と大浦城（陸奥）

序を以て當年の弘前城及大浦城を記す

本丸址の東にあり、東西四十六間南北九十六間、南と東に入口あり、北方は後流川なり、古城の俤歷然として其當時の形勢を想像せしむるものは、弘前城及此城幷に堀越城址なりと稱さる、弘前藩祖爲信の發祥地たるが故に、特に附記せるなり。

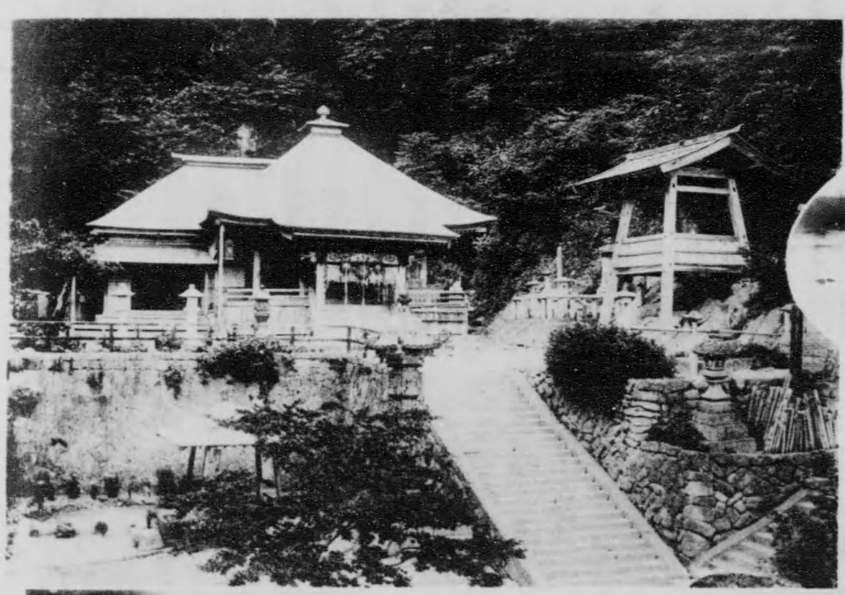
●大日堂の萩桂（陸奥）

稀有の珍木「萩桂」は北津輕郡鶴館村

治戸に近ければ所謂古所なる奥區なり、東西三里三十町南北四里周回十五里三町の地域に跨る此湖は、小坂村より東北三里、奥澤村より四里其何れよりするも通路便ならず。

湖は東隅に至りて窄まり、奔湍溢出して一大瀑布を懸く、晩秋錦を晒すの候に至れば、紅葉は水に映じて水燃えんとするの壯觀あり、寔に風光清絶、人寰を絶つの趣あるも唯だ通路險峻なるを遺憾とす

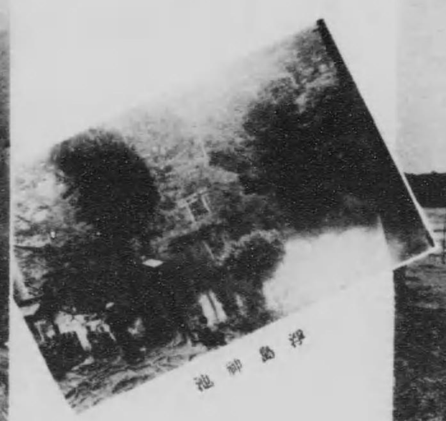
山寺立石寺



最上川

立石寺奥の院

立石寺天狗岩



浮島神池

念珠ヶ關拝天島

●山寺立石寺（羽前）

羽前國屈指の靈刹たる山寺立石寺は東村山郡山寺村大字山寺にあり寶珠山立石寺と號す、貞觀二年慈覺大師の草創に係り、三國傳來の釋迦牟尼佛及多寶如來を本尊とし、境内五萬八千六百餘坪の廣きに亘り、寺は山寺山の中腹に位し、磴道紆鬱、躋攀容易ならず、山形市より東北杉、對面石の椣、岩谷の卒都婆、極樂院の椿、御山の鴨脚樹を、山寺の七木と稱す。

四面群巒を環らし、立谷川其中央を流れ、山中の風景略ぼ上野の榛名山に似て巨巖磊落、洞窟を有するものあり、圓柱の如きものあり、其神工鬼鑿の妙に至りては彼れに優る所あり、開山堂の壯麗は高百尺餘の天狗巖と共に當山を代表す、のあり、舟の奔下するに隨ひ一瀑を送れば又一瀑を迎へ高きあり低きあり、大なるあり小なるあり、潺々として樹間に隱れ堂宮として巖面に露はれ、其奇其妙筆の能く盡す所にあらず、四十八瀧中著名なるものを白絲の瀧、大瀧、三の瀧、駒形瀧、來迎瀧、綠瀧、東ね瀧と言ふ、白絲の瀧は高さ七丈、幅四間、夫木集源重之の歌に

最上川瀧のしら絲くる人の

●山寺立石寺（羽前）

羽前國屈指の靈刹たる山寺立石寺は東村山郡山寺村大字山寺にあり寶珠山立石寺と號す、貞觀二年慈覺大師の草創に係り、三國傳來の釋迦牟尼佛及多寶如來を本尊とし、境内五萬八千六百餘坪の廣きに亘り、寺は山寺山の中腹に位し、磴道紆繁、躋攀容易ならず、山形市より東北三里餘、天童町より東南二里、先づ山寺本村の民家を過ぎ、立谷川に架せる高橋を渡りて左すれば、立石寺本坊に達し右すれば大宮の前に至る、大宮の右側に中堂あり、其背後に姫岩屹立し、清和天皇の寶塔は岩下に安置せらる、大宮前を過ぎ、數十歩の所に聖女堂、念佛堂、鐘樓堂あり、之を經て多寶塔の傍らより磴道に就き石階を齊ること數百歩にして二王門あり、途中磴の左右には老杉鬱然として繁茂し、杉林の盡くる處二三の巨巖あり、御手掛巖、彌陀洞、琵琶石と言ふ。二王門を過ぎ更に登ること二町餘、左方岩山の上に開山堂あり、此に慈覺大師の像を安置し傍らに窟あり入定窟と稱す、開山堂より左折すれば五大堂、極樂院、を經て旭觀音窟に抵る。右曲すれば性相院、澤之院、金乘院、中之院、善行院、中性院の前を經て奥の院に達す、山麓より此處に至る十餘町なり。

●奥の院の天狗巖（羽前）

及惟石珍樹

山は奇巖怪石を以て成る、累々疊々、眼に映するもの盡く是れならざるはなし其奥の院の如き最も多きを見る、曰く天狗巖、曰く胎内寶、曰く垂水岩、曰く潜蓬巖を始め、鹽岩、龜石、堂石、壽老石立石、赤石、鸚鵡石、硯石、等枚擧に遑あらず、龜石より鴎鵡石までを山寺の七石と稱し、南院の藤、暖澤の桂、馬形の杉、對面石の槻、岩谷の辛都婆、極樂院の椿、御山の鴨脚樹を、山寺の七木と稱す。

四面群巒を環らし、立谷川其中央を流れ、山中の風景略ぼ上野の榛名山に似て巨巖磊落、洞窟を有するものあり、圓柱の如きものあり、其神工鬼鑿の妙に至りては彼れに優る所あり、開山堂の壯麗は高百尺餘の天狗巖と共に當山を代表す、曾ては德川家光千四百二十石の朱印地を立石寺に與ふ。

芭蕉

閑かさや岩にしみ入る蟬の聲

芭蕉が此句を吟じたる時の感想は奥の細道にあり「山形領に立石寺といふ山寺あり、慈覺大師の開基にて清閑の地なり、一見すべきよし、人のすゝむるによりて尾花澤より取つて返し其間七里ばかりなり、日いまだ暮れず、麓の坊に宿かりおきて、山上の堂にのぼる、岩に岩を重ねて山とし、松柏年ふり土石老いて、苔なめらかに、岩上の院々扉を閉ぢて、物の音きこえず、蹕をめぐり岩を這ひて、佛閣を拜し、佳景寂寞として、心すみ行くのみ覺ゆ」云々と記す。

●最上川（羽前）

最上川は源を南置賜郡吾妻嶽に發して始め松川と稱し、羽黑川、野川、鬼面川白川等を合せて北流し、西村山郡に入りて最上川となり、同郡に於て寒河江川を容れ、最上郡に出づるや小國川鮭川を合せ、更に西流し、西田川郡及羽後の飽海郡境に至りて酒田港に注ぐ、水源より河口に至るまで延長六十六里濶さ十三間二十餘町、夏季は水多く、流れ急にして酒田に赴く旅客は、多く北村山郡大石田驛より川舟に乘りて流れを下るを常とす、其途中兩岸の風景絶佳にして、殊に最上郡古口村の沿岸には所謂四十八瀧なるものあり、舟の奔下するに隨ひ一瀧を過れば又一瀧を迎へ高きあり低きあり、大なるあり小なるあり、潺々として樹間に隱れ堂答として巖面に露はれ、其奇其妙筆の能く盡す所にあらず、四十八瀧中著名なるものを白絲の瀧、大瀧、三の瀧、駒形瀧、來迎瀧、綠瀧、東ね瀧と言ふ、白絲の瀧は高さ七丈、幅四間、夫木集源重之の歌に

最上川瀧のしら絲くる人の
ここによらぬはあらじと思ふ

とあるは是れなり、他に最上川を詠める歌多けれど今ま二三首を掲ぐ

崇德院

最上川綱手ひくとも稲舟の
しばしのほどはいかりおろさん

●大沼より（羽前）

浮島神社を望む

西村山郡大谷村大字大沼に一小湖あり之を浮島沼と言ふ、又大沼と通稱す、東西二百間南北三百五十間、湖中に大小數十の浮島あり、皆な萱の根相集まりて島狀を成すものにして、松樹の生へる儘水上に浮び、風に從ふて東西に走り南北に回り集合離散す、其岸に緊著して動かざるものも杖にて湖中に突き放せば、又颺々として漂ひ、泛々として浮游す、實に天下の奇觀なり、其後山に浮島神社あり稲倉魂命を祀る、大沼湖畔より之を望めば風光頗る佳し、寫眞は即ち景なり。

●念珠ケ關辨天島（羽前）

關は西田川郡にあり、其地先の海面に辨天島ありて、直立凡そ十二丈廣袤三十間、島上に嚴島神社を祀る。

其左右に和布島、方の島、等の岩礁あり、遠くは佐渡島、飛島等を水天髣髴の間に望み、東には温泉嶽の翠を凝すを見る山色水光共に絶佳の地なり。

立石寺天狗岩

●羽黒山（羽前）

羽黒山は東田川郡手向村の東嶺にして月山表坂の北に接續すれ共、全く第三紀層丘陵に屬し其成立を異にす、西溪を祓川と言ひ、東澗を立谷澤川と言ひ、山丘の横幅一里、狩川清川の二村は此第三紀層丘陵の北端を占め二里餘を隔つ。

羽黒山神社は手向村より三十餘町にありて、羽黒山の半腹に鎮座す、先づ山麓手向村より一の華表を過ぎ、左右に松並木を見て、行くこと數町、隨神門あり、左にあるを社務所とし右　あるを皇典講究所とす、是より磴道に就き、足指漸く仰ぐ、其兩側密林の間に數字の小祠あり祓川橋は祓川に架す、其上流巉壁の間に飛瀑を懸く、天慶年中平將門建立し後北條高時武藤政氏等の再建せりと稱する五層塔の前を過ぎて、嶮しき石階を登ること數町にして平坦の地に達す。

●其本殿と黄金堂（羽前）

高さ二丈有餘の銅華表を入れば本殿あり、殿は桁行十三間二尺梁間九間二尺、其結構甚だ壯麗、左傍に攝社蜂子神社あり、又境内に東照宮其他の末社多し。

當社は推古天皇元年の創建にして、稻倉なるが、往昔は羽黒大權現と稱し七千の僧徒之を守り、天喜年間冷泉天皇より勅額を賜はり、且つ奥羽の總鎮守たるべしとの勅宣あり、當時源義家大に社殿を造營せり、爾來代々の武將國守等尊崇の意を盡し、降りて德川氏の世に至り將軍綱吉より千五百石の社領を附せられ、攝社蜂子神社は蜂子皇子の靈を祭り、境内字魔所と稱する處には皇子の墓あり、皇子は崇峻天皇第三の皇子にして御名は參拂理、法名を弘海と號し給ひ當山に於て修驗道を開き、自ら羽黒派なるものを起し給ふ。後、此山に幾じ照山大菩薩の謚號あり。

曾て三十有餘の僧房と四百有餘の山伏堂を置ける當山は境内廣濶にして、山中亦風致に富める所多し、黄金堂の如きも名勝中に屬す、堂は應化堂とも稱され三十三觀音を安置する所なり、土肥次郎實平奉行として建立し、甘糟備後守が中興たりとの事より堂名殊に著る。

月山湯殿を合せて三山と稱さるゝ羽黒は其高峻產山に及ばざりしも、修驗道と言ひ殿堂の構造と言ひ、產山に似たるもの多しと言はれたり、足、一たび此に至れば其靈山たることを首肯し得べし。

涼しさやほのみか月の羽黒山　芭蕉

又芭蕉及桃隣の南谷を咏める句あり

有かたや雪をかをらす南谷

水無月は隱れて居たし南谷

南谷は山中の庵室の名なり

●月山の絶巔（羽前）

月山は羽黒山と六里餘を隔つ。

羽黒山の嶮道を辿り、谷を渡り岩石に躓ち、絶壁に縋り行程六里餘、漸くにして月山の絶巔に達す、其磊々たる巖石の上に一社殿在り、石を以て四面を圍み、危磴機かに之に通ず、官幣中社月山神社は此に鎮座す、山は海を拔くこと六千五百尺餘、其山容渾大にして臥牛の如く、此處に於ける眺望の絶佳なる、西は日本海の淼々として極まりなく、北は鳥海山を隔てゝ羽後連山の波濤の如く連れる、或は最上平原より陸前の連山、或は會津地方の遠きに至るまで、一として眼中に集まらざるなし、蓋し天下の大觀たり。

欝盡三山頂、崢嶸如柱天、路隨鳥鵲跡、人犯斗牛邊、月窟千秋雪、靈場五色煙、更疑入兜率、親自謁金仙、

此詩能く此處を喰じ盡せり、社傳に依れば月山神神は神代の昔より當山の頂上に鎮座し延喜式神名帳に出羽國飽海郡月山神社是れなり、三代實錄に、貞觀六年二月出羽國正四位勳六等月山神社に從三位を授くとあるを始めとし屢々叙位叙勳あり、先是、右中辯兼權守藤原保則、上古より征戰に方りて奇驗ありし旨を奏上し、元慶四年二月には月山神社に正三位を授けらる、以て古來朝廷の尊崇他に超え給ふを知るべし、其創建年月に至りては未だ詳かならざるも、崇峻天皇の皇子たる蜂子皇子が推古天皇の元年羽黒山を開かせ給ひ、尋で月山湯殿山を開かせ給ひしと言へば、社殿を創建せられしも亦當時の事なるべし云々、月山神社の祭神は月夜見命にして、此絶巔は四時雪を戴き山中到る處に名所舊蹟少なからず、就中鍛冶屋敷、毒水、腰掛岩、二三坂、等著る揭ぐる所の「一の華表」も亦山中に於ける一偉觀に屬す。

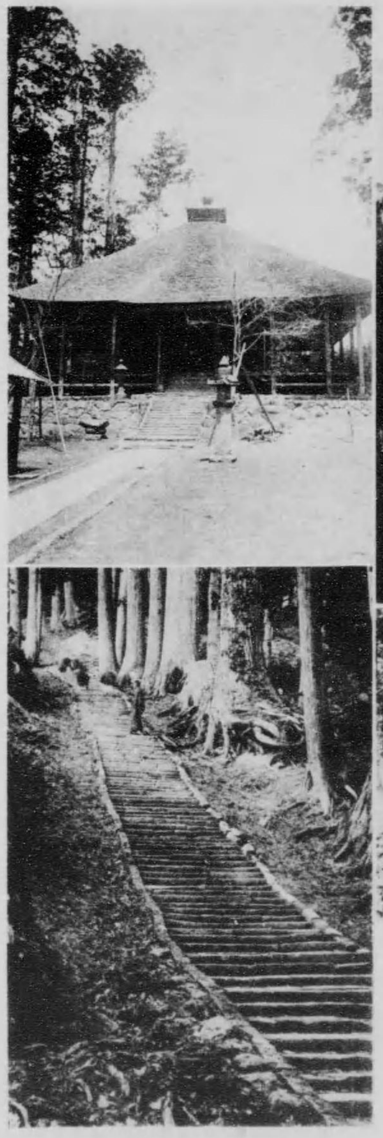
●湯殿山鐵鎖の瀧（羽前）

湯殿山は月山の西南に聳立す、西山和距ること凡二里、地は幽邃の深谷にして五味の藥湯噴出するの靈域なり、山上に湯殿山神社あり。

社格は國幣小社にして、大巳貴命、少彦名命、大山祇命を合祀し、古來社殿は此に鎮座す、一の靈窟を以て其本社となせり、即ち月山の奥の院とも稱すべき地とす、參詣の諸人、此地を踏みて洞前に到り、天然に大神の形を具へたる靈巖を三拜して、親しく大神に見えしものとし、神心の清爽なるを覺ゆと言ふ、夏期白衣行者の登山頗る多し、賽路は嵯峨として登り易からず、途中懸崖の側面に長十三間の鐵階と、百二十間の鐵鎖を設く、賽人は其階を踏み、其鎖をたぐり匍匐して靈窟の前に出づ、以て其嶮なるを知るべし。此溪澗に一大瀑布あり是れ「鐵鎖の瀧」にして御瀧と稱す。

三山入口一の鳥居

鐵鎖の瀧

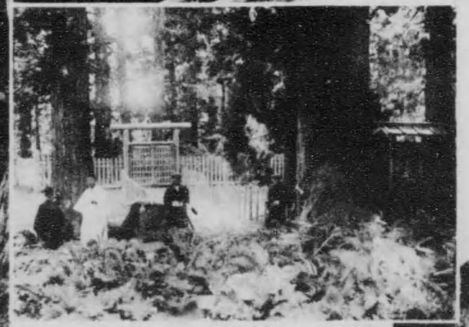


黄金堂

羽黒山本殿

三山入口一の鳥居

羽黒山二の坂



峰子皇子御陵

月山頂上

鐵鎖の配

ひとの驚異あり、當時源義家大に社殿を造營せり、爾來代々の武將國守等尊崇の意を盡し、降りて德川氏の世に至り將軍綱吉より千五百石の社領を附せられ、攝社蜂子神社は蜂子皇子の靈を祭り、境内字魔所と稱する處には皇子の墓あり、皇子は崇峻天皇第三の皇子にして御名は參一拂理、法名を弘海と號し給ひ當山に於て修驗道を開き、自ら羽黒派なるものを起し給ふ。後、此山に薨じ照山大菩薩の諡

海の彌々として極まりなく、北は鳥海山を隔て、羽後連山の波濤の如く連れる、或は最上平原より陸前の連山、或は會津地方の遠きに至るまで、一として眼中に集まらざるなし、蓋し天下の大觀たり。

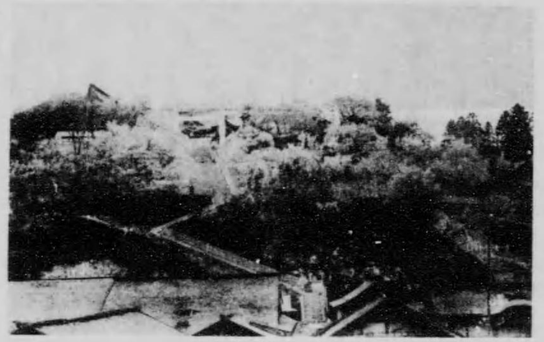
欝盡三山頂、峥嶸如柱天、路隨鳥鵲跡、人犯斗牛邊、月窟千秋雪、靈場五色煙、更疑入兜率、親自謁金仙、

此詩能く此處を唫じ盡せり、社傳に依れば月山神神は神代の昔より當山の頂上

り、天然に大神の形を具へたる靈巖を三拜して、親しく大神に見えしものとし、神心の清爽なるを覺ゆと言ふ、夏期白衣行者の登山頗る多し、賽路は嶮峻として登り易からず、途中懸崖の側面に長十三間の鐵階と、百二十間の鐵鎖を設く、賽人は其階を踏み、其鎖をたぐり匍匐して靈窟の前に出づ、以て其險なるを知るべし。此溪澗に一大瀑布あり是れ「鐵鎖の瀧」にして御瀧と稱す。

慈恩寺本堂

赤湯温泉八幡社遠望



慈恩寺阿彌陀像

慶松大悲閣

藤兒弟の古墳

●赤湯温泉（羽前）

赤湯温泉は東置賜郡赤湯町にあり、地は米澤平野の北端にして、宮内町と共に吉野川に緣り、羽州山道の名驛と稱さる、温泉は二源に出で、一は硫黄泉、一は鹽類泉なり、共に熱百度以上、浴客一年平均三萬人以上に達し、二色、長岡、狙柳、椚塚の諸村を合せ大なる赤湯町を構成す此地伊達氏の領有たりし頃、湯村湯目の二氏ありて共に緣族なりき、今の地名は如郡醍醐村大字慈恩寺にあり、天台眞言兩宗兼學の巨刹にして、往昔は聖武天皇の勅願所として鎭護國家の道場たりき、

神龜元年行基僧正此に地を相して奏上し、天平年中勅許あり精舍造營成りて彌勒菩薩を本尊とせり、天仁元年に至り願西上人再び鳥羽天皇の勅を奉じて再興せしも、數回の兵亂に遭ひ太く頽廢を極め保元元年に及んで弘俊阿闍利殘礎を探りて寺宇を造營せるより、弘俊を以て中興の開山と爲す、後、山形城主最上義俊本

餘寒林下三千歳　春日待花王母桃

白山曉月

院々捲簾吟興闌　白山曉月大慈觀
孤峰頂上普門境　萬里清光玉一團

新山紅葉

霜下新山紅葉加　詩人坐愛思無邪
秋來半是二三月　吟入机林心在華

聞持院晚鐘

林院老僧禮樂王　曉鐘遠聽響無常
東西餘景櫻臺上　百八聲中送夕陽

●赤湯温泉（羽前）

赤湯温泉は東置賜郡赤湯町にあり、地は米澤平野の北端にして、宮内町と共に吉野川に緣り、羽州山道の名驛と稱さる、温泉は二源に出で、一は硫黄泉、一は鹽類泉なり、共に熱百度以上、浴客一年平均三萬人以上に達し、二色、長岡、狙柳、槻塚の諸村を合せ大なる赤湯町を構成す此地伊達氏の領有たりし頃、湯村湯目の二氏ありて共に豪族たりき、今の地名は即ち二氏ありしより、湯戸を意味する赤湯を以て村名とせり、細井平洲の詩に曰く

　云界秋光座自親　滿庭楓葉錦爲茵
　雲邊鴈影空中字　徑上歌樵畫裏人
　日暮層巒霜氣動　風情萬壑月明新
　丹泉浴罷心神爽　不怪攀蹻脫世塵

又郷回日記に「路入置賜郡、山麓水涯、桑樹鬱々、幹皆老大、蠶業之盛可知也、赤湯以南、山圍四澗、大道如髮、抵米澤」と見ゆ、平洲の詩は月を東正寺に觀たる暮秋の吟なるが、其東正寺は赤湯にありて風光に富める所なり、又境内の石室には梵字を刻み佛像を刻めるもの多し、慈覺大師開基の古刹と傳ふ、而して朴澤觀音前に彌陀三佛を彫れる古碑ある外、俗稱理御所にも光明遍照と彫り彌陀を彫れるものあり、東正寺の北方山腹にある碑と共に赤湯の古碑と稱さる、元弘三年若くは建武四年と刻す、元弘は二年にして正慶と改元され、建武は三年にして延元と改元せられたるを知らざりしと見え、斯く彫刻しあるは亦一興なり、置賜最上の分水界は白龍湖畔にあり、此湖は元赤湯沼と稱し赤湯名勝の一なり、温泉地を距る東北十町、山陰中納言十二世の孫粟野次郎義廣の居城址は二色根に存す。

●慈恩寺（羽前）

慈恩寺は山號を瑞寶山と言ひ、西村山郡醍醐村大字慈恩寺にあり、天台眞言兩宗兼學の巨刹にして、往昔は聖武天皇の勅願所として鎭護國家の道場たりき、

神龜元年行基僧正此に地を相して奏上し、天平年中勅許あり精舍造營成りて彌勒菩薩を本尊とせり、天仁元年に至り願西上人再び鳥羽天皇の勅を奉じて再興せしも、數回の兵亂に遭ひ太く頽廢を極め保元元年に及んで弘俊阿闍利殘礎を探りて寺宇を造營せるより、弘俊を以て中興の開山と爲す、後、山形城主最上義俊本堂を再建し、德川幕府よりも亦寺領を下附せりとは寺傳の記する所なり、寺の位置は一山の中央にありて山腹天惠の地を占め、千古の樹木鬱生し、花樹梢を交え清水滾々として堂後に湧き旱天其源を斷たず、四時の風景自から存す、北には峨々たる葉山月山の高嶺を負ひ、西に朝日嶽、東に五所、面白、刈田の峻峰を望み、南に寒河江川の碧流あり、加ふるに最上川の東流する處虛空藏嶽屹として現はれ又村上四郡の雄勢は來り一眸の下に鍾まる等、實に天與の靈地と言ふを得べし、此畫の如き勝區に本堂あり、藥師堂あり、阿彌陀堂、不動堂、釋迦堂、三重塔、鎭羅門堂、大黑天堂、樓門、鐘樓堂を始め其他の堂宇點在して、三千六百餘坪の寺域殆と餘裕なきが如き觀あり。

寺門の前に街路あり、西は湯殿山の參路にして、東は谷地への通路なり、白山の曉月、新山の紅葉、岩清水の納涼、櫻澤の落花、禪定の殘月、開持院の曉鐘、陳峰の牧童、雪淵の暮雨、醍醐の落鳰、寒河江の渡船、之を境内の十勝と稱す、山僧の詩を掲ぐ。

　櫻城落花
　山澤白櫻半尙濃　東風吹散思茫々
　水邊林中落花雪　半是春耶半是冬
　禪定殘雪
　禪定院深家何在　東西殘雪似山高
　餘寒林下三千歲　春日待花王母桃
　白山曉月
　院々捲簾吟興闌　白山曉月大慈觀
　孤峰頂上普門境　萬里清光玉一團
　新山紅葉
　霜下新山紅葉加　詩人坐愛思無邪
　秋來半是二三月　吟入机林心在夢
　開持院曉鐘
　林院老僧禮樂王　曉鐘遠聽響無常
　東西餘景櫻臺上　百八聲中送夕陽

●佐藤兄弟古蹟（羽前）

米澤市の東方凡そ二十五町、字花澤に「佐氏泉公園」あり、之れ米澤市を訪ふもの必ず過ぐべき所にして、其境地の開闊なる、田圃の中に一小丘を成し、老松の盤旋、清泉の噴出、人をして思はず悠遊半日の閑を消せしむるに足る。

傳へて言ふ、地は元佐藤正信の宅址にして、其子繼信忠信は此處に生れたるなりと、而して湧出する清泉に名けて「佐藤清水」と言ふ、是れ園の名を得たる所以なり、又傍らに蟠屈せる小丘を月見山と言ひ、佐藤氏觀月の址と稱す。

●義經接待碑（羽前）

佐氏泉公園の丘南に一碑房あり、之を常信庵と稱す、其境内瀟洒の處に「義經接待の碑」なるものあり、亦傳へて往年義經の來れる時、此に接待せし遺蹟なりと云ふ。

●唐松大悲閣（羽前）

唐松大悲閣は山形市外東澤村大字妙見寺にあり、弘法大師作と傳ふ、最上札所第五番の靈場なり、堂宇周圍四間高さ七丈餘山腹に巍立し前面馬見ヶ崎の源泉を帶び、風致屈指の勝景にして、其所在と言ひ、堂宇の構造と言ひ、能く京都の清水寺に似たる處あり。

慈恩寺阿彌陀像

●千歳山公園と阿古耶の松（羽前）

山形市外瀧山村字平清水に千歳山あり千歳山公園は其山腹に位置を占む、山容倒扇に似て蒼松簇生す、西麓の稻々平斜なる處より望めば白鷹山西南に聳え、其麓沃野茫々、山形市街の冥濛は一眸の下に集り、眉目快豁、風景絶佳の地なり、著名なる「阿古耶の松」は園内熊野神社の傍らにありて、今は樹株を存するのみなるも、稚松茂生して母松の當年を偲ばしむ、阿古耶の松に眷縁ある所謂阿古耶姫の墳墓は萬松禪刹の後山に存し「萬松寺殿眞操貞幹將基法尼」と謚され、禮者多く常に香煙絶へずと。

●萬松寺と阿古耶姫（羽前）

無常何迅速　物換又星移　懐古萬松寺
深雲埋斷碑

是れ故宗演禪師の千歳山懐古なり、昔陸奥信夫の牧主中納言藤原豊充の女阿古耶姫甚く此地の阿古耶松を愛し、山上に庵を結び遂に尼となりて、此處に終れりとは萬松寺縁起の骨髓にして姫は即ち萬松寺の創建者たり、而して姫の死せるは慶雲四年丁未二月十六日、其三十餘年後に至り行基菩薩當寺に留まり法相宗と爲し專ら教化に力め、九十年後に至りて天台の高僧慈覺大師來り住み、最上佛法の道場と稱し、一刀三禮の觀音菩薩像を彫刻し之を本尊とせり、爾來天台の道場として旺盛を極め、大師東北巡錫に出で遂に山寺立石寺を開き、清和天良の勅願所と爲し、貞觀六年正月十四日山寺の巖窟に入寂す、後、清巖良淨和尚曹洞開祖となり、一世貞慧和尚より二十八世の現住笠翁和尚に及べる古刹なれば、佛殿を始め堂宇の宏壯なる、觀る者をして驚歎せしむ、殊に佛殿の結構は建築界を利するもの多しと言ふ、阿古耶姫法體の像は藏められて此佛殿にあり、又姫の墓碑面に刻せる辭世の和歌は萬葉假名にして左の如し。

憎志世濃跡問松能末掛而名悔已盤
千々乃亀乃月影

即ち「憎えし世の跡問ふ松の末かけて名のみは千々の秋の月影」なり、幕府の儒官たりし安積艮齋の阿古耶松碑中に

則其名勝著于天下久矣　意者此松聞敎百歳　枝幹森蔚垂霄幾壑　爲天下偉觀時有佳人阿古耶者　其風流婉淑一丹國秀　平生愛之咏賞其下　以寄雅情　故土人稱阿古耶松　騷人詞客爭詠之　而浮圖氏乃幡會以爲楓人水客之類　嶮巇矣千歳　其松與人既亡有　其事莫得而詳焉　尚可惜也　云々

千歳峰前吊古邊　月明何處聽鳴鐘
美人香草香無迹　積翠依然松滿山

西岡　逸明

殿樓縹出赤瑠璃　落日長松凌九衢
我物三生尋佛燈　靈煙千古蔽靈區
呈祥夙讃逢天闕　授爵亦應封大夫
妙句欲追源白石　老龍依舊護明珠

末松　青萍

日下部鳴鶴

不見古松顰　只聞孝女名
涓々一澗水　猶作斷腸聲

東久世通禧

千歳山ちとせの後も陸奥の
あこやの松の影しのぶかな

久我　通久

古寺の古き昔をたつぬれば
あこやの松の風ぞ身にしむ

●實方中將墓（羽前）

陸奥の阿古耶の松に木隱れて
いづべき月の出でやらぬかな

此古歌の阿古耶の松を探るべく、陸奥に下れる中將實方は、途上名取郡笠島の地に於て死せりと傳ふ、而して實方の墓なるもの陸前名取郡愛島村にあり、又萬松寺境内にも實方及其女中將姫墓なるものありて、笠島村には實方招魂の碑あり二者何れが眞なるか。

萬松寺の縁起に依れば、實方は三山、象潟、松島は固より名所舊蹟餘す方なく三年間探せるも、阿古耶の松の所在は知る者すらなきに落膽し、途上鹽釜神社に詣で神託を乞ひしに一老翁忽然として現はれ、阿古耶の松は出羽浦千歳山の嶺にありと告げたるより、途を名取に取り笠島の地に至り圖らず落馬して重傷を負ひ其生くべからざるを知り、從者に命じて「吾れ出羽に越え阿古耶の松を尋ねて、帝都に上り、主上に奏聞すべきに今は其事も已みぬ、願はくは切めて吾が骨を千歳山阿古耶の松の側らに葬るべし、靈は汝と共に行きて望みを遂げん、都に一女子のあるあり我死を告げよ」と言ひ「陸奥の阿古耶の松を尋ねわび身は朽人となるぞかなしき」の一首を遺して逝けり、從者は遺骸を火葬と爲し之を携へて阿古耶の松の側に葬れるを、萬松寺の住僧其哀情を酌み「中心院殿善實方大居士」と謚したりと、又實方の側らにある中將姫墓なるものは實方の女が父の死を聞き此地に來り墓石を建てたる後、尼となりて遂に逝けるを葬れりと、是れ萬松寺縁起の言ふ所にして、其眞僞を斷定する能はず。

新井　白石

昔曰藤公宅　禪林一遥深　東隣千一淚
北闕百年心　蒲葉無人識　松聲幾處尋
山中墳四尺　空有綠苔侵

細井　平州

姑射神仙綽約容　千年山上只遺蹤
瑤琴似聽當時調　日暮秋風入古松

秋元　吉順

はる〳〵と都をいでゝちとせ山
あはれをのこす石ふみぞこれ

剃し之を本尊とせり、爾來天台の道場として旺盛を極め、大師東北巡錫に出で遂に山寺立石寺を開き、清和天良の勅願所と爲し、貞觀六年正月十四日山寺の巖窟に入寂す、後、清巖良淨和尙曹洞開祖となり、一世貞懸和尙より二十八世の現住笠翁和尙に及べる古刹なれば、佛殿を始め堂宇の宏壯なる、觀る者をして驚歎せしむ、殊に佛殿の結構は建築界を利するも

古寺の古き昔をたつぬれば
あこやの松の風ぞ身にしむ

久我　通久

●實方中將墓（羽前）

陸奥の阿古耶の松に木隱れて
いづべき月の出でやらぬかな

此古歌の阿古耶の松を探るべく、陸奥に下れる中將實方は、途上名取郡笠島の

昔日廢及宅　禪林一逕深　東國千一流
北闕百年心　蒲葉無人識　松聲幾處尋
山中墳四尺　空有綠苔侵

細井　平州

姑射神仙綽約容　千年山上只遺蹤
瑤琴似聽當時調　日暮秋風入古松

秋元　吉順

はる〳〵と都をいでゝちとせ山
あはれをのこす石ふみぞこれ

萬松寺佛殿

阿古耶姫像

阿古耶の松

阿古耶姫及實方中將墓

蔵ヶ岡随心門

酒田日和山公園

鳥海山絶巓切通景

鳥海新山の景

了梅湖

●鳥海山（羽後）

鳥海山は飽海郡の北界に矗立す、其山背は由利郡にして、即ち自然界限なり、山容峻—の富士に髣髴し直ちに海岸より昂起して庄内平原を俯視するを以て、殊に人目に射映す、東峰を新山と言ひ、西峰を笙ヶ嶽と稱し、兩峰の間に小湖あり、之を鳥の海と呼ぶ。

鳥海山は一に北山と稱され、兩所宮古寺全盛時代の建設に係る。

●鳥海山の絶巓（羽後）

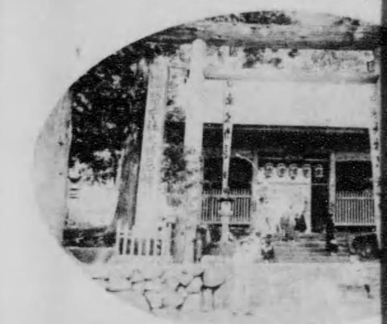
鳥海山の最高峰は卽ち新山にして、鳥海山及笙ヶ嶽とは東方一里を隔つ、山は燒岩の重疊せるものより成り、其間孔隙多く、往々巨人の通過し得べき洞穴ありき。

其峰巒は長嶺連珠の如く、風岩、蟲穴、時々蒸汽を吐くことあり。今を距る四十餘年前までは、此山頂より行者岳、伏拜岳、文珠岳、御峰等の數峰前新にありては、地方の百貨皆此地に輻湊し、最上平野の產物も亦最上川の水運

●酒田日和山公園（羽後）

東北日本海面の一名津たる酒田町は、山形市を距ること十八里二十町、秋田市より二十八里十九町の地にして、新潟、伏木、土崎の三港と併稱せらる。

地は最上河口に位し元砂潟と稱す、維



蕨ヶ岡隨心門

寺全盛時代の建設に係る。

●鳥海山（羽後）

鳥海山は飽海郡の北界に聳立す、其山背は由利郡にして、即ち自然界限なり、山容駿一の富士に髣髴し直ちに海岸より昂起して庄内平原を俯視するを以て、殊に人目に射映す、東峰を新山と言ひ、西峰を笙ヶ嶽と稱し、兩峰の間に小湖あり、之を鳥の海と呼ぶ。

鳥海山は一に北山と稱され、兩所宮古記に北嶽、羽黒山古記には艮頂とあり、義經記五卷に、忠信吉野山合戰後義經の行衛を慕ひたる詞に「西は鎭西、博多の津北は北山、佐渡ヶ島、東は夷の千島」と見え、羽源記八卷には、最上出羽守、軍師山名一運を從へて、主從二人羽黒山に詣でたる時、案内せる山伏の詞として「浪間に浮ぶ島あり、飛島、淡島、佐渡ヶ島北仙ヶ嶽」と記す。

鳥海山は羽後の北部より之を望めば、巍然たる圓錐形を呈すれ共、南羽前の地より望めば、其形狀牛の臥すに似たり、是れ北方には舊噴口壁崩壞し、其中央に聳する最高峰新山を表出するも、南方には舊噴口壁猶存して、仰望を遮るが爲めなり、其噴口は二所あり、吹浦より山頂まで九里の行程と稱するも其實六里に過ぎざるべし、遙拜殿所在の峰に達すれば先づ其一噴口壁に到れるなり、鳥の海は即ち脚下に見ゆ、池の側に錐峰あり鍋森と稱す、更に東に進めば第二の大噴口壁に至る、大物忌神社此に鎭座す。

山崎理學博士の説に依れば「山體の構造複雜なれ共、大要二個の二重式火山より成り、更に其山腹に寄生火山を有す、七高山は外輪の一部を成し、新山の中央火口山を擁し、笙ヶ嶽も亦月山森と共に外輪丘を成し、其中に鍋森の中央火口丘鳥の海の爆裂火口を有す、前者は新噴出に成り後者は舊成生に係る。云々

【羽　後】

●鳥海山の絶巓（羽後）

鳥海山の最高峰は卽ち新山にして、鳥海山及笙ヶ嶽とは東方一里を隔つ、山は燒岩の重疊せるものより成り、其間孔隙多く、往々巨人の通過し得べき洞穴ありと今を距る四十餘年前までは、此山頂より時々蒸汽を吐くことありき。

其峰巒は長嶺連珠の如く、風岩、蟲穴、行者岳、伏拜岳、文珠岳、御峰等の數峰に分る、山勢急峻削るが如く、常に白雪を戴き樹木其跡を絶つ、西に荒神岳あり此岳は新山の中の新山なり、新山とは權現の一名目にして「鳥海明神」の眷族と稱され、昔より其名あり、古人は新山權現の一名を荒神と言へり、是れアラブルの古語より「活動火山の狀」に取れるなりと、故に荒神岳は新山と同體にして、新山以外にあらず、唯だ其新山名を有するのみ、山中に瑠璃臺外數種の名稱ある所少なからずと雖も之を省く。

●其裾野蕨岡（羽後）

蕨岡は鳥海山の裾野にして、遊佐驛の東南一里、一條觀音寺より北一里の地なり、山神遙拜の祠殿ありて、元は兩所權現の表口上寺と稱したり。

相傳ふ、安倍貞任此地に城を構へ、以て英氣を養へる處なりと、其墟鳥海山神社の東にあり、東西四十餘間南北五十餘間の凹字形を成せる高燥の地なり、今に土を鑿つもの往々古器を得る事あり、先年石櫃を堀出したるに、大治二年の紀名を存せりと言ふ、鳥海山神社は當村松岡に鎭座す、吹浦祠と並稱せられて、鳥海の里宮と稱せらる、杉澤蓬萊山を經て登嶽す。

曾ては慈照和尙の創建せる龍頭寺に寺領百八十石を與へ、鳥海山神社の別當たらしむ、蕨岡口の宮隨神門の如きは龍頭

●酒田日和山公園（羽後）

東北日本海面の一名津たる酒田町は、山形市を距ること十八里二十町、秋田市より二十八里十九町の地にして、新潟、伏木、土崎の三港と併稱せらる。

地は最上河口に位し元砂潟と稱す、維前新にありては、地方の百貨皆此地に輻湊し、最上平野の產物も亦最上川の水運によりて、此地より京阪地方に輸出せられたり、是に於てか其繁華は實に兩羽地方に冠たりしが、今は港口泥沙淺く大船を容るゝ能はざると、各地方交通の便開けたるとに由りて、昔日の繁華を割がる町を東より西に橫斷すれば日枝神社及日和山公園を有する一丘陵長く連り、上に風情雅ならざる松樹亂立す。

日枝神社は卽ち其松原の中にあり、堂宇宏壯、貞觀年間始めて此地の津頭に勸請し、後再三の變遷を經て此に鎭座す、

丘陵の上に一碑立つ、土豪本間氏が天明年間風砂の患を除かんが爲め、丘陵を築き松樹を植ゑたる事を記す、蓋し此海岸は冬季に至るや西北風高く怒濤を捲き、十數里の砂濱より飛來せる砂は殆ど天地を晦冥ならしむればなり。

此松樹の茂生せる丘陵の間を左に下れば、「日和山公園」あり、眼下には最上川の海に注ぐの光景を開き、大洋の間、飛島の一青螺淡として無からんとするを見る、地の高さ水面上約五丈餘、碇泊せる數十の船舶を望み、且つ北には巍峨たる鳥海山を仰ぐ景致甚だ平凡ならず。

公園より遠からざる金華崎卽ち元の高野濱は、田川郡宮浦と相對す、青松白沙相映じて畫くが如し、所謂釉の浦の名處なり、序に庄内の俗謠を揭ぐ。

花の今町もみぢの新地、すゞみ臺町、
かすみの出町、沖をながむる日より山

●湯澤愛宕山（羽後）

愛宕山は湯澤町の勝區にして、南は松澤に接し、北は八森山に連り、一大崗を形成し田圃の間に斗出す。

其山頂に愛宕神社あり、社殿を始め拜殿等頗る壯觀を極め、域内清潔にして纖塵を留めず、蓊鬱たる松樹の間に櫻樹多く交はり、花時に至れば白雲滿山を罩め綵霞山麓を圍繞して、清香馥郁、人衣を撲つ、櫻樹の多きは曾に此處のみならず、高堤百尺の花見岡にも其數、千を越ゆるの櫻樹ありて、桃李、躑躅、菖蒲等亦排置よく點在す、實に稀に見るの勝地たり此山をして斯くならしめたるは、土地の特志家奥山六右衛門氏其人の力なり、同氏は當山鎮座の愛宕神社を崇敬し、私財を抛つて樹木を栽え磴路を開き、代々相承けて之を爲し、今や三十二勝を數ふるの景となれり、其德頌せずんはあらず。

●武石代議士頌德碑（羽後）

故衆議院議員武石敬治君頌德碑

正二位勳二等侯爵西園寺公望篆額

君諱敬治。武石氏。羽後國雄勝郡山田村人。世爲里正。君年十八襲職。頗有令聞。還爲縣會議員十餘年。功績大顯。後爲衆議院議員者五。常以經世自任。正議公論。眞有國士之風。當有奥羽鐵道布設之議。而官因循不果。君日夜盡瘁經畫。遂能成其功。是以德望隤然。高於東北。明治三十七年十月十三日歿。享年四十七。君外温和而内貞固。接人不設城府。處事公明。不爲身圖。數捐資財以周窮乏。又誘掖後進。有爲之士。籍君力。以修學成業者。不遑枚舉。而其沒也一貧如洗。可以知其平生矣。頃者故舊相謀、欲建碑以不朽其功德。請予銘　銘曰。

志存經綸　斃而後已　國士百世
使儒夫起　家無餘儲　唯好頌予
周急達材　決如時雨

明治四十四年四月

東宮侍講正四位勳二等文學博士　三島毅撰

此碑は湯澤町の勝區愛宕山麓に在り、故代議士武石敬治氏の靈は欽められて青山墓地に眠ると雖も、其德は故山に頌せられて後進の好範となる、嗚、純潔の士武石氏逝いて十有六年、憲政年を逐ふて進捗し、其有終の美は期年ならずして結ばれんとし、今や政黨熾盛の時なり、故人の政友たり後進たる者にして風雲に際會せるもの尠なからず、此時に方り逝ける政客中の人格者を追懷し來り、氏の如き純潔の士に迫べば哀悼の念を新たにするものあり、氏は黨人たりしと雖も、所謂黨人らしからざるの人格者たりき、籍を改進黨に置ける時代に在りても、其政敵たる自由黨より人格者として畏敬せらる、故板垣伯の如き特に氏を推奬して「政界腐敗の今日、純潔、清廉、武石の如きは稀れに見る處、實に東北政治家中の第一人者なり」と激賞せられ知遇最も厚かりしといふ、奥羽鐵道の布設せらるゝや、南は福島より新庄まで車を進め、北は青森より縣境まで開通せるも、獨り秋田線に至りては逡巡停滯して進まず、而かも殆ど工事中止の形あり、秋田縣下に取りては不幸之より甚だしきものなし、縣の有志者先輩は身を挺して速成運動を試みたるも、竟に何等の効なく、唯々當路者の爲す處に任するの外なかりき。

時に政友會の領袖たる故星亨氏は一日或る人をして、秋田縣選出の代議士一同に意を致して曰く「諸氏擧つて政友會に投ずるあらば、星亨誓つて秋田線を速成せしめん」と、然れ共當時秋田は東北改進黨の中堅たりし地、各代議士とも節を變じて政友會に入るを欲せず、斷然として之を拒斥せり、星氏又人をして說て曰く、止むを得ずば武石氏一人を以て秋田全縣に代んと事茲に至りては縣民八十萬の利害は武石氏一人の進退に依て決せずんばあらず、氏の當時に於ける苦心は、尋常事に非ざりしを知るべし、深思熟慮せる氏は獨り大に決する所あり、慨然一番、其身を拉し行きて政友會に投せり、此事ある一時氏に對し非難攻擊は八方に起れるも爾來僅に幾年にして奥羽南北線は聯絡し縣民咸な其惠に浴するを得たるも當時に於ける氏の清節と苦痛を知れるもの果して幾人かある氏は實に我秋田縣の恩人にして所謂節に殉したるもの也。

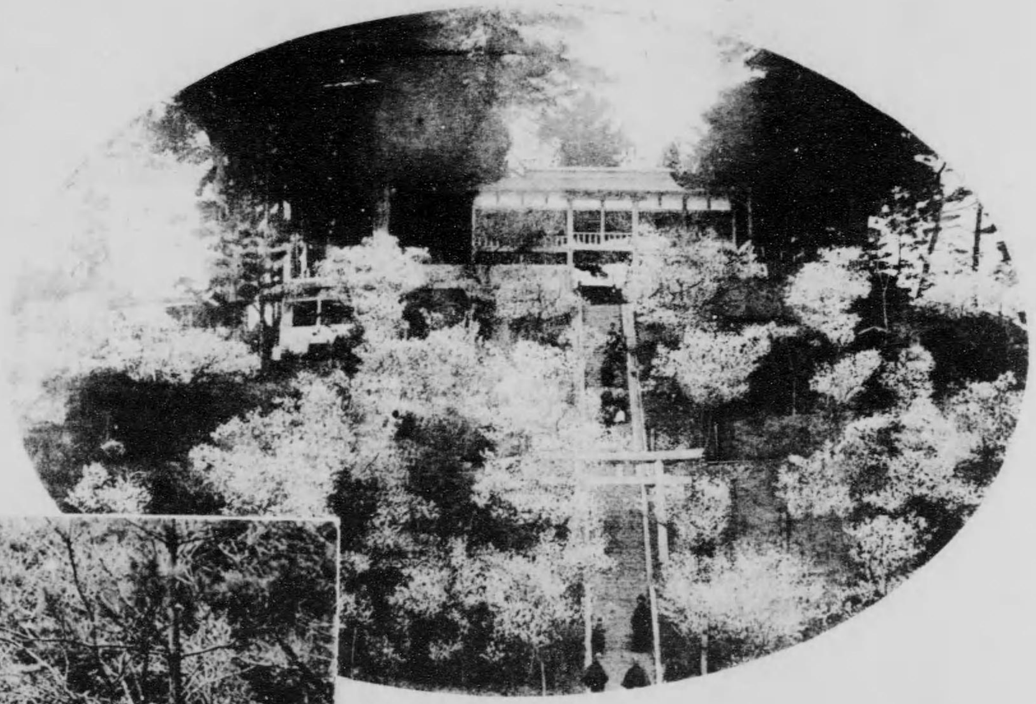
武石氏は資性温厚にして大度あり、常に小事に頓着せず、而かも大局に通じ、深沈寡默、嘗て人と爭はず、事に臨んで勇斷ありき、身は里正の家に生れ、其世襲財産尠なからざりしも、社會の爲めに之を散じ、又後進の養成に力を注ぎ、自己は飽まで純潔を守り清貧に甘んじて終焉を告ぐ、是れ現代得易からざるの人格者と謂ふべき也。

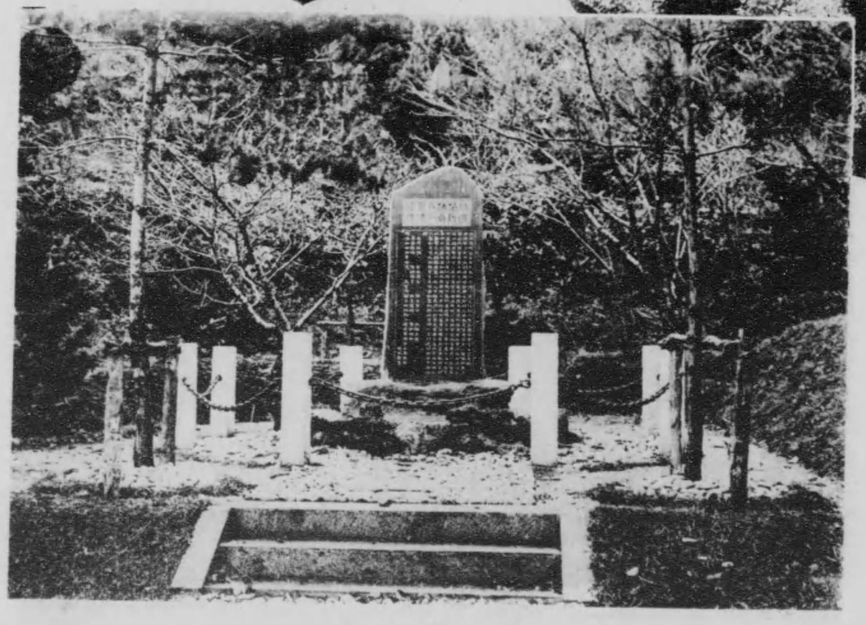
●小野小町舊蹟（羽後）

小野小町舊蹟は雄勝郡小野村大字小野にあり、里人呼んで駒形の庄、小野の里と言ふ、古老相傳へて曰く、此村は古へ福富庄と稱し、出羽郡司小野良實の京より下りて住せし處なり、大同四年春一女を擧ぐ之を小町と名く、小町長じて國風を善くす、年十三父に從ふて京に上り宮廷に仕ふ、慶長の初年まで村に「和歌の宮」ありて小町歌集、良實の記錄等を藏したりしが、最上義光の兵火に罹り悉く燒失せり云々と、今ま此村に年經りたる芍藥あり、是れ手植のものなりと言ふ、小町の事に關して異說紛々なりと雖も、小町が此地に出生せる一事だけは稍々信ずるに足る。

武石敬治肖像

湯澤愛宕神社





武石敬治碑

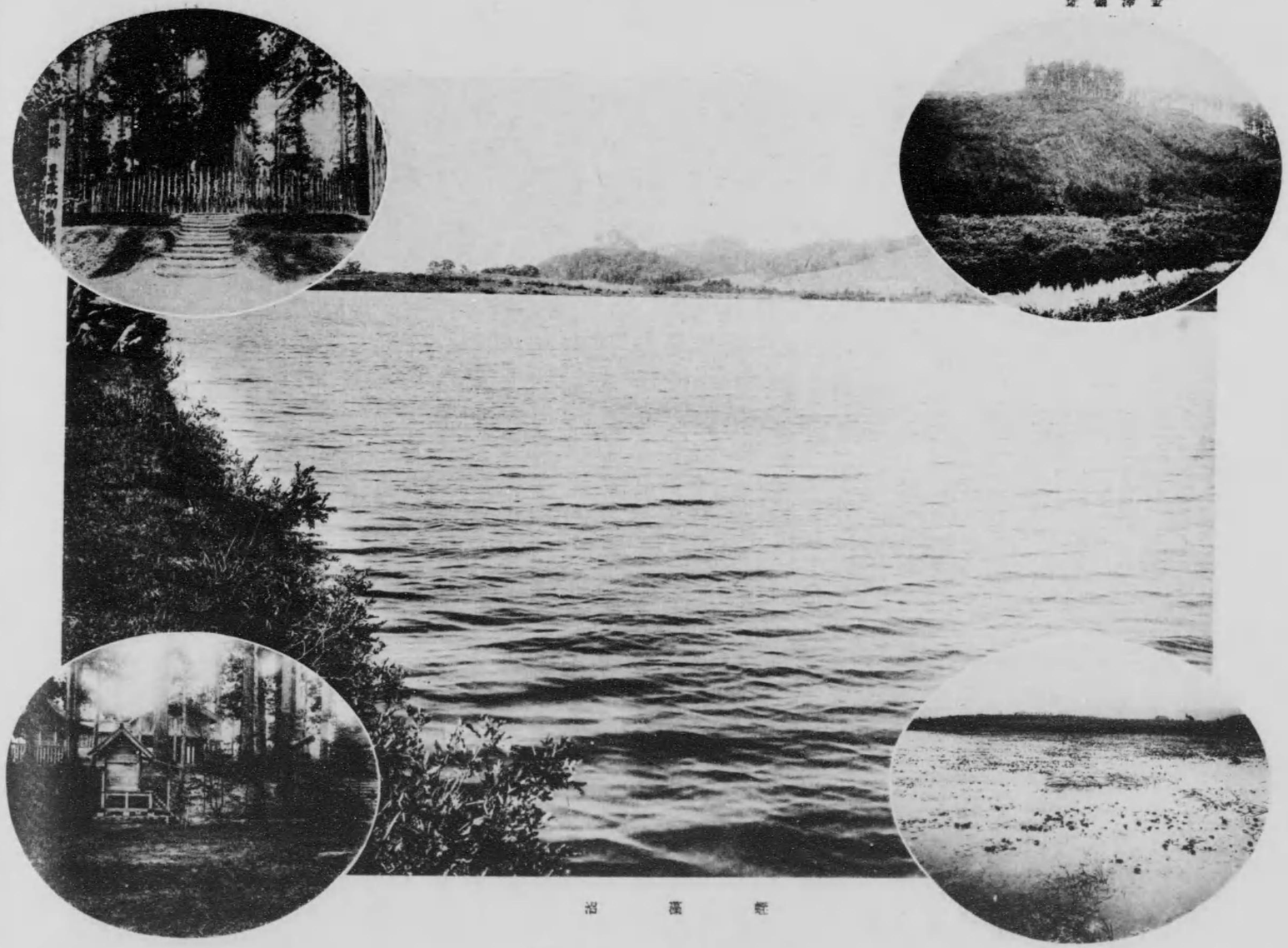
小野小町舊址

經畫。遂能成其功。是以德望隱然。高於東北。明治三十七年十月十三日歿。享年四十七。君外溫和而內貞固。接人不設城府。處事公明。不爲身圖。數捐資財以周窮乏。又誘掖後進。有爲之士。籍君力。以修學成業者。不遑枚舉。而其沒也一貧如洗。可以知其平生矣。頃者故舊相謀。欲建碑以不朽其功德。請予銘。銘曰。

志者先輩は身を挺して速成運動を試みたるも、竟に何等の効なく、唯々當路者の爲す處に任するの外なかりき。

時に政友會の領袖たる故星亨氏は一日或る人をして、秋田縣選出の代議士一同に意を致して曰く「諸氏皐つて政友會に投ずるあらば、星亨誓つて秋田線を速成せしめん」と、然れ共當時秋田は東北改進黨の中堅たりし地、各代議士とも節を變

を舉ぐ之を小町と名く、小町長じて國風を善くす、年十三父に從ふて京に上り宮廷に仕ふ、慶長の初年まで村に「和歌の宮」ありて小町歌集、良實の記錄等を藏したりしが、最上義光の兵火に罹り悉く燒失せり云々と、今ま此村に年經りたる芍藥あり、是れ手植のものなりと言ふ、小町の事に關して異說紛々なりと雖も、小町が此地に出生せる一事だけは稍々信ずるに足る。



景致功名塚

金澤柵址

金澤八幡社

蛭藻沼

西沼

●金澤柵址（羽後）

過金澤、後負重山、前俯平疇、天然建都之地矣、昔人城此有以也、永保中清原武衡家衡據柵叛、源將軍義家、攻圍連年僅而克、即此、遺址在山上、八幡祠在焉、蓋義家所建也。

是れ終北錄に所載の金澤柵址記事なり其金澤は仙北郡金澤町にして、大曲の東南四里、横手の北二里餘、東に山嶺を負ひ、西は廣き田野なり、柵址は本町に存

慶作獅子の畏面、同作猿田彦の假面、古驛鈴、古鏡、古劍等あり、毎年四月十五日八月十五日を以て祭典を行ふ、古へより社山及舊柵の周圍に於て嚴に殺生を禁じ、正月八月の朔日より十五日間を限りて鳥獸の肉を喰ふ事を禁じたりしが、維新以來此慣例を廢せり、又北浦の女子は例祭に社參して徹夜の祈願を爲さゃれば決して他に嫁する事なし、之を御通夜と稱し今猶ほ行はる何の故なるを知らず。

はもの之を爭ひかけて城の下にて殺すまた城下へ亂れ入りて殺す、逃るものは千が一なり、武衡逃げて城の中に沌のありけるに飛び入りて水に沈みて顔を叢に隠して居る、つはもの共入り亂れてこれを求む、遂に見付けて池より引き出して生捕り、首を斬らる、將軍これを見て、二年の愁眉けふ既に開けぬ、ただし猶恨むるところは家衡が首を見ざることをと言ふ、城中の宅ども一時に燒け滅びぬ、戰の場、城の中に

●金澤柵址（羽後）

過金澤、後負重山、前俯平疇、天然建都之地矣、昔人城此有以也、永保中清原武衡家衡據柵叛、源將軍義家、攻圍連年僅而克、即此、遺址在山上、八幡祠在焉、蓋義家所建也。

是れ終北錄に所載の金澤柵址記事なり其金澤は仙北郡金澤町にして、大曲の東南四里、横手の北二里餘、東に山嶺を負ひ、西は廣き田野なり、柵址は本町に存す。

此に築城せる年代は詳かならざるも、康平以前より清原氏累代之に據りしなるべし、地形山河の險を占め周圍凡そ五十町餘、名けて孔雀の柵と言ふ、蓋し奥羽の大山脈を尾にし、南北の山を左右の翼と爲し、本丸二の丸等は頭となり鬙となるを以てなり、今猶其舊形を觀ることを得べし、八幡神社の北に方り山上の平地東西四十間南北六十間にして、今ま畑地となれるもの即ち本丸址なり、北の丸は老樹蔚然として昔日の俤なきにあらず、本丸址の側らに倉廩の跡あり、時々土中より兵火を經て炭化したる糧米を出すと言ふ、柵址の北崖を繞りて西に流るゝものを厨川とす、此川に產する石斑魚は盡く眇なるより里人相傳へて景政傷眼を洗ひたる爲めと言ふ、實に奇なり。

●金澤八幡宮（羽後）

八幡宮は金澤柵址に鎮座す。

寛治年中源義家の創建に係るものにして、譽田別命、息長足媛命、玉依媛命を合祀す、秋田泰長佐竹義宣等も大に崇敬して神領を寄附せしと言ふ、神殿、拜殿神明社、及源義家義光を合祀せる兜八幡宮等ありて、神寶中には義家の持念佛なる阿彌陀如來像、古棟札、里見義忠同義安小笠原義冬等の書したる大般若經、運慶作獅子の唐面、同作猿田彦の假面、古驛鈴、古鏡、古劍等あり、毎年四月十五日八月十五日を以て祭典を行ふ、古へより社山及舊柵の周圍に於て嚴に殺生を禁じ、正月八月の朔日より十五日間を限りて鳥獸の肉を喰ふ事を禁じたりしが、維新以來此慣例を廢せり、又北浦の女子は例祭に社參して徹夜の祈願を爲さゞれば決して他に嫁する事なし、之を御通夜と稱し今猶ほ行はる何の故なるを知らず。

●景政功名塚（羽後）

八幡宮より五十町餘を隔てる街路の傍らに「權五郎景政功名塚」なるものありて老杉屹然として塚畔を護る、源平盛衰記に「昔八幡殿の後三年御戰に、出羽國千福金澤城を攻め給ひし時、生年十六歳と名乘りて眞先駈け、弓手の眼を、兜の鉢附の板に射附られながら、其矢を拔かで、當の矢を射返して、敵を射落し、感賞蒙り、名を後代に上げたりし鎌倉權五郎景政」とあり、塚は其功を頌せるものか、靑苔碑面を包んで古色蒼然たり。

●蛭藻沼（羽後）

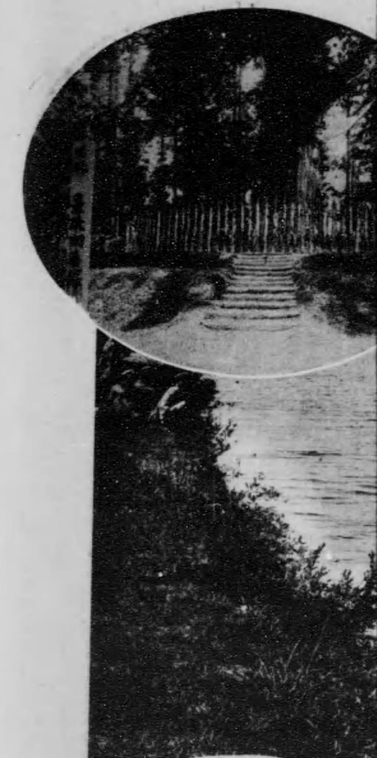
金澤柵址と共に舊蹟たる所少なからざる中に義家の陣所址、甲石、唐櫃石、蛭藻沼等皆な柵址の區域内にあり、此蛭藻沼は眼子菜沼とも稱され、義家金澤柵に迫れる頃は、城中にありしもの、如し、今は八幡宮を距ること十七八町の地なり、傳へて曰ふ武衡遁ぐるに道なく、池中即ち蛭藻沼に飛び込み、藻を以て顏を隱せるも遂に發見せられたりと、後三年記は當時の狀況を記して曰く

武衡家衡、食物悉く盡きて、寛治五年十一月十五日の夜遂に落ち畢りぬ、城中の家ども皆な火をつけつ、煙の中におめき言ること地獄の如し、四方に亂れ蜘蛛の子を散すに似たり、將軍のつはものゝ之を爭ひかけて城の下にて殺すまた城下へ亂れ入りて殺す、逃るものは千が一なり、武衡逃げて城の中に池のありけるに飛び入りて水に沈みて顏を叢に隱して居る、つはもの共入り亂れてこれを求む、遂に見付けて池より引き出して生捕り、首を斬らる、將軍これを見て、二年の愁眉けふ既に開けぬ、ただし猶恨むるところは家衡が首を見ざることをと言ふ、城中の宅ども一時に燒け滅びぬ、戰の場、城の中に臥したる人馬麻を亂せるが如し、縣次任と言ふものあり、城中のもの、逃げ去らんとする道を知りて、遠くのきて道をかためたり、戰の場を逃げて脫るゝもの皆な次任に得られぬ、その中に家衡の怪げのまねして逃げんとて出で來るを、次任之を見つけて打捕へつ其首を斬つて將軍の前に持來れり云々

蛭藻沼の外に「西沼」あり是れ義家が自ら數萬騎の將として金澤柵を攻むるに方り、敵伏兵を甘部即ち西沼の傍に待たしむ、義家雁の亂れ行くを望み、必ず伏兵在ることを知り兵を縱つて搜索せしめたる其甘部は、金澤柵址より一里餘の地六鄕町字甘部なりと言ふ、記事の序を以て六鄕に在る「六鄕城址」の上に及ぶべし。

六鄕城は素と元館と稱し六鄕兵庫頭政乘の居城たりき、慶長年間政乘德川氏に盡す所あり、常陸國府中へ轉封せられ後由利郡本庄に貳萬石を賜はり子孫世襲す佐竹氏入部の初め六鄕の舊館に居れり、秋田沿革史に「二階堂信濃守行光鎌倉右府に仕へ、行光の十代山城守忠行、寶德元年四月政所に補せられ、執事評定衆となる、忠行の七代河内守の時出羽國仙北六鄕に住し、依て六鄕を家號とし其男兵庫頭政乘なり」と見ゆ、明治二十九年八月三十一日山北大地震の時、六鄕の地最も甚だしかりし事は今猶記憶に存す。

景政功名塚



金澤八幡社

●秋田市千秋公園（羽後）

園は秋田城址にして、神明山又は箭留山と言ひ、後、蓑根城、亜城とも稱せり、慶長八年佐竹義宣常陸より移封せらるゝに及び、其臣澁谷政光梶原美濃に命じて築かしめ、九年八月を以て竣効す、地は平地より高きこと八丈餘、本丸、二の丸、帶郭、北の丸、兵庫、曲輪、上中城、下中城、及外郭に分ちて造營せる名城なりしも、明治維新後陸軍省所營に歸し、十三年火災に罹り、二十三年佐竹家へ拂下げられ、今ま市有となりて其大部は千秋公園となれり、園内に佐竹家別墅、縣立圖書館、武德殿、記念公會堂　遊戯場等ありて、舊本丸址には藩祖佐竹義宣を祀れる秋田神社あり、先づ外郭を入りて正門に至れば、路は之より逶迤として丘陵の上に通じ、其園めぐる城壕には蓮花を植ゆ、青松修竹の間を過ぎて平地に至る、小丘より眺望すれば、東北一帶の山脈遙かに其湧くが如き翠微の色を送りて、一層の景致を添ふ、庭圃の配置、亭榭の位地、地方罕に觀るの公園たり、舊搦手址に唐見殿あり、此殿の林泉は頗る壯觀を極め、亦大盤石の燈籠に至りては天下一品と稱さる。

園の西北に面したる一角は最も眺矚に富める處にして、秋田市街の數千家はパノラマの如く見え、白堊粉壁の夕陽に輝ける、寺院會堂の空中に聳えたる、宛然東京愛宕山上より全市を望むに髣髴す、殊に御物川の清流は市の外郭を繞りて溶々として遠く、一帶の砂丘を隔てゝ日本海の怒濤双眸に集まる、其壯觀奇景筆能く之を盡し得ざるなり。

●秋田美人と蕗（羽後）

秋田米と共に其名の高きものは、秋田美人と秋田蕗なり、然れ共所謂秋田美人なるもの「アレサあばいにおらやんだ、がつこにばつこに火こもてけ、姉ちやこちや向けばくまけな」式の言語を濫發せば、其美貌のみを以て推賞せらるゝことは聊か考へ物となるべし、蕗に至りては天下稀覯のものたり、秋田平、秋田木綿、蕗摺等の名によりても、珍物なるを知るべし。

●能代港（羽後）

港は秋田市より六里餘を隔つ。

此地は上古よりの港にして、未だ出羽國を置かざりし前に於て、齊明天皇の四年に淳代郡の大領沙尼具那の居りし處なり、此年此郡の大小領に位階を賜はり、沙尼具那をして蝦夷の戸口を檢覈せしめたり、其後三韓の使者此港に漂着せしこと數度ありしと言ふ、天正年中秋田實季の臣大高相模守能代野代として之を治め慶長以後は佐竹侯より野代奉行を置き、元禄及寛永の震災に罹りて後「能代」と改む、港は米代川の河口に位す。

●男鹿半島（羽後）

男鹿半島は八郎潟を隔てゝ其西北に在り、東西五里南北三里乃至五里、十村に分れて、島の東北は沙嘴山本郡に連り、東南には八郎潟の狹水道ありて、天王村と岸を分つ、男鹿名勝誌に曰く。

男鹿は今秋田郡に屬すれど、此地を島郡と稱せしこと、康永年中安倍兼季が北浦の山王神社へ納めし棟札に記したれば、往時は別に一郡とせしにや、其名の顯はれたるは、三十八代齊明天皇紀に鰐田の蝦夷恩荷、間兎の蝦夷瞻鹿島とあり、男鹿は蝦夷の酋長の名なるを、後に島の名に喚びなせしか、又元より島の名なるを、其地の酋長なれば、直に己が名に呼びしか詳かならざれ共鵜鹿島と言ふを以て見れば島名なるが如し、又延暦年中に、大將軍坂上田村麿が、夷賊の巨魁大瀧丸を仙北郡女々木嶽より追討して、太平の邊を過ぎ、男鹿島へ追込み討取たる由を里老の口碑に傳へ、其舊跡の處々に殘りあるを見れば、其事の虛ならざるを徵するに足れり。云々

●藤原藤房墓（羽後）

秋田市より北一里餘の地、旭川村大字山内に龜像山補陀寺あり、曹洞宗總持寺派に屬する名刹たり、正平年中秋田守季の創建に係り、山を月泉良印和尚と言ひ、二世無等良雄和尚は即ち萬里小路藤房なりと言ふ、寺記に依れば正平年中越後蒲原に正續寺僧月泉なるものあり、智德の名高し、秋田守季、月泉に請ふて此に住せしむ、月泉乃ち一僧を携へて來る即ち藤房なり、藤房遁世の後抖擻して越後に抵り月泉を禮して師と爲し、服事すること多年月泉深く之を器とす、其後月泉は奥の正法寺に轉任す因て席を藤房に讓る、無等良雄和尚住職たること纔かに四年にして、正平十七年十月十日を以て寂を示す年六十七、寺の巽隅に葬ると、蓋し藤房の遁世は史に其所を知らずと言ひ異說紛々たり、或は曰く妙心寺二世授翁は即ち藤房なり、或は江州の妙感寺に住すと言ひ、或は高野山に隱ると言ひ、或は常陸の藤澤に沒すと言ひ、或は武藏の金杉に終ると言ふ、伊豆の溫泉寺には其手植の松あり、下野の長光寺には其鏡を埋むる處あり、美作には墳墓あり、筑後には碑石あり、此中に於て補陀寺の傳ふる所と里人の口碑等皆憑る所あるなり、藤房筆碧巖錄其の袈裟及負笈外數品は同寺に藏す

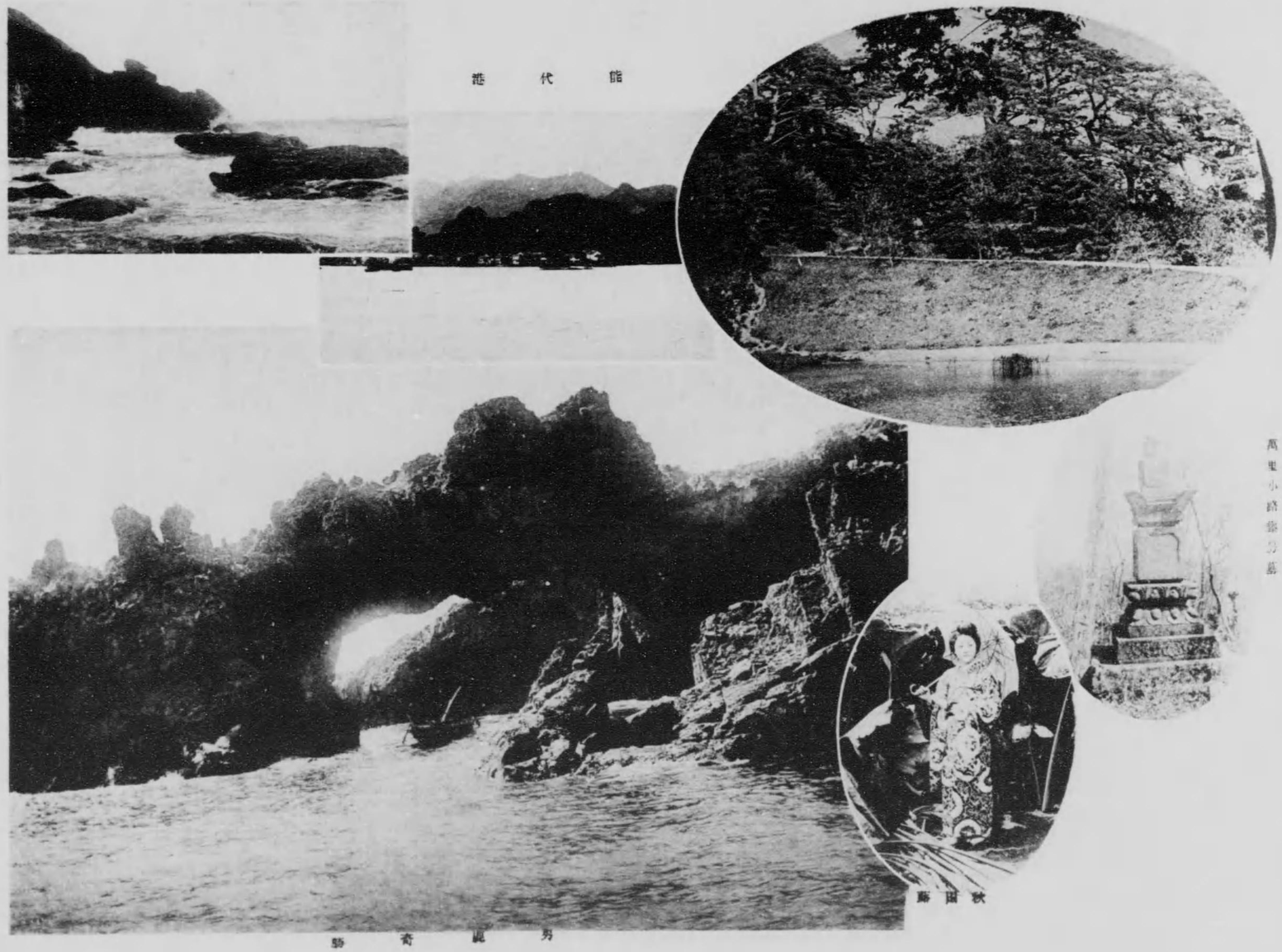
藤房の咏歌中より左の二首を揭ぐ

いかにせんたのむ蔭とて立寄れば
なほ袖ぬらす松の下露

すみ捨る山を浮世の人間はゃ
風や庭の松にこたへん

久保田城

萬里小路藤房墓



萬葉小路徐の墓

ける、寺院會堂の空中に聳えたる、宛然東京愛宕山上より全市を望むに髣髴す、殊に御物川の清流は市の外郭を繞りて溶々として遠く、一帶の砂丘を隔てゝ日本海の怒濤双眸に集まる、其壯觀奇景筆能く之を盡し得ざるなり。

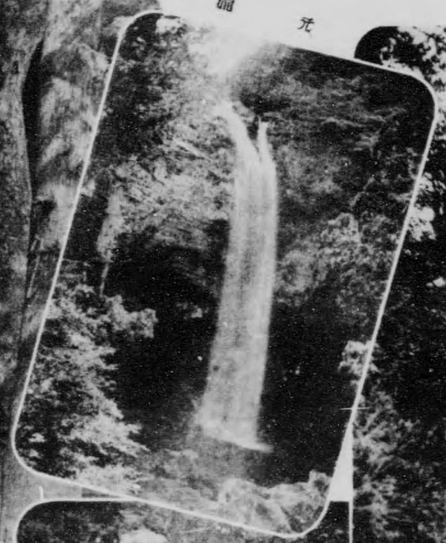
●秋田美人と蕗（羽後）

秋田米と共に其名の高きものは、秋田美人と秋田蕗なり、然れ共所謂秋田美人郡と稱せしこと、康永年中安倍兼季が北浦の山王神社へ納めし棟札に記したれば、往時は別に一郡とせしにや、其名の顯はれたるは、三十八代齊明天皇紀に齶田の蝦夷恩荷、問兎の蝦夷瞻鹿島とあり、男鹿は蝦夷の酋長の名なるを、後に島の名に喚びなせしか、又元より島の名なるを、其地の酋長なれば、直に己が名に呼びしか詳かならざれ共瞻鹿島と言ふを以て見れば島名なるが松あり、下野の長光寺には其鏡を埋むる處あり、美作には墳墓あり、筑後には碑石あり、此中に於て補陀寺の傳ふる所と里人の口碑等皆憑る所あるなり、藤房筆碧巖錄其の袈裟及負笈外數品は同寺に藏す

藤房の咏歌中より左の二首を掲ぐ

いかにせんたのむ蔭とて立寄れば
なほ袖ぬらす松の下露

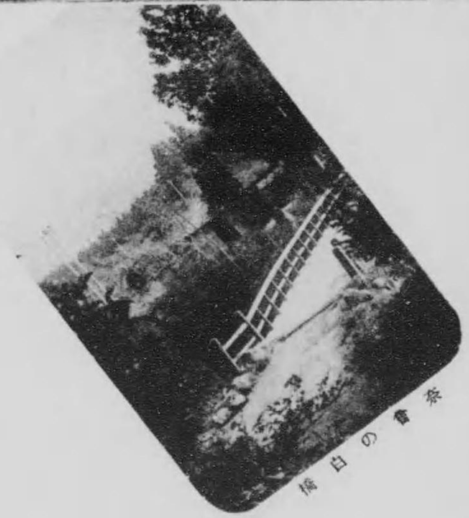
すみ捨る山を浮世の人間はゞ
嵐や庭の松にこたへん



元瀧

金峰神社

奈曾の白滝



奈曾の白橋

●金峰神社（羽後）

雄勝郡明治村大字大澤に金峰山あり、此山別に上法寺山、若木山、熊野山、御殿山、熊伏山、養老山等の名を有す。

滿山老樹蔚然として茂生し、松篁を生するを以て名あり、又白兎多く棲息す、大澤の山麓より頂上まで凡そ一里、山中に有名なる相生の松あり、又往昔烏海三郎康道が、山神に奉納せんと自ら負ひ來如し。

●奈曾の白橋（羽後）

稲村嶽より落る白絲の瀧は、小瀧村に來りて奈曾の瀧となる、其高さ七丈幅四間餘、此瀑上に小橋を架せるもの卽ち白橋なり、地は上郷村大字小瀧と稱す。

白橋は山間の一小橋に過ぎざれ共、古へよりの名所にして『千早振る神はちかひの結だすきかけてぞ渡る奈曾の白橋』ゆるの觀あり。

●奈曾の子瀧と八大金剛童子（羽後）

子瀧は元瀧の側らに在り、先づ元瀧より記さん、元瀧は小瀧村を距る十餘町の上流にありて其高さ三十尋を超ゆ、之を白絲の瀧に比すれば、麗にして艶なり、故に雌瀧の稱あり、且つ白絲の瀧の峻に反し通路概ね坦々たるより、瀧壺の周圍を遊覽することを容易なり、瀧の姿勢日光

●金峰神社（羽後）

雄勝郡明治村大字大澤に金峰山あり、此山別に上法寺山、若木山、熊野山、御殿山、熊伏山、養老山等の名を有す。

瀧山老樹蔚然として茂生し、松篁を生ずるを以て名あり、又白兎多く棲息す、大澤の山麓より頂上まで凡そ一里、山中に有名なる相生の松あり、又往昔鳥海三郎康道が、山神に奉納せんと自ら負ひ來りしと言ふ凡そ八十貫餘の大石あり、杖足荷縄の痕らしきものを存す、山は二千尺餘の秀麗にして、同地方に於ける唯一の勝地なり、金峰神社は其絶頂に在り。

社は養老七年齋主阿倍山元の創建に係り、安閑天皇を祭れる鄕社にして、文治年間源義經の東國に下りし時此社に參詣せりと傳ふ、社記に依れば此社は往昔にありて歳王大權現と稱し、天武天皇の勅願道場たり、初め役行者大和國吉野山より勸請し、當時は奈曾白瀧の邊に祀り、白鳳八年諸國悪疫猖獗を極めたる時、役行者に勅して皇城の鬼門、北國第一の名山として鳥海山を祀らしめ給ふ、行者乃ち鳥海山を開基し、藥師如來を安置して藥師密法を修し、麓小瀧村奈曾の社を天下無二の靈場として、金剛藏王大權現を祀り、皇城守護山上護持の兩部曼荼羅秘密道場と爲し、鳥海山一之宮と稱す、降りて將軍足利義詮時代に北辰一之宮と稱され神領の寄進あり、後、楯岡豐前守由利の總社として崇敬し社殿の改築を爲す爾來代々國主地頭の崇敬社たりしが、明治七年金峰神社と改稱せられ、安閑天皇を以て祭神とするに至れり。

地は天然の勝區にして、近く鳥海の峻嶺を望み、又渓澗到る處に大小數百の瀑ありて、常に韡韡の聲を絶たず、殊に慈覺大師の築けりと傳ふる、五十三段の石階は既に一千有餘年を經たるも今猶舊の如し。

●奈曾の白橋（羽後）

稲村嶽より落る白絲の瀧は、小瀧村に來りて奈曾の瀧となる、其高さ七丈幅四間餘、此瀑上に小橋を架せるもの即ち白橋なり、地は上郷村大字小瀧と稱す。

白橋は山間の一小橋に過ぎざれ共、古へよりの名所にして『千早振る神はちかひの結だすきかけてぞ渡る奈曾の白橋』又は『出羽なる奈曾の白橋なれてしも人やあやなく戀わびるかな』と詠めるは此處なり、白絲の瀧は道嶮峻にして人跡到らず、中央に巨巖を挾み二層に下る、水漲の時は二里を隔てゝ之を望むを得べしと言ふ、稲村嶽は鳥海山の北に聳立す、横岡村よりの登路三里餘、針葉樹の美林之を蔽ふ、關川及上流西の大澤は其南西麓を繞り、東の大澤は其東麓を劃せり、蓋し舊火口の殘壁とす、即ち其東西兩澤の上流は狹隘なる一連の絶壁を以て隔てられ、里俗、之を蟻戸渡と稱し、其傍らに山道を通ず、幅僅かに一二米、左右の深谷は削れるが如く、懸崖數百米、白雲浮動して亦一奇觀を呈す、白橋及白絲の瀧を咏める歌一二首を掲げん。

鳥海彌三郎

我戀は奈曾の白橋神かけて
戀わたる間に年は經にけり

たらちねのおもひ入さの小瀧山
ましら啼くなり奈曾の白橋

貞　臣

天地もくづれんばかりうちどよみ
霧まきおこす奈曾の白瀧

白絲の瀧は水清く鮮魚多く棲む、殊に鱒、鮭、鮎の類夥しく游泳す、今や水力電氣の發電所を設けられたれば、發電所に於て水を引ける時は瀧の雄勢を割くことあり、金峰神社より此瀧を望み、併せて白橋を眺むる風致は、景中別に景を副ゆるの觀あり。

●奈曾の子瀧と八大金剛童子（羽後）

子瀧は元瀧の側らに在り、先づ元瀧より記さん、元瀧は小瀧村を距る十餘町の上流にありて其高さ三十尋を超ゆ、之を白絲の瀧に比すれば、麗にして艶なり、故に雌瀧の稱あり、且つ白絲の瀧の嶮に反し通路概ね坦々たるより、瀧壺の周圍を回覽すること容易なり、瀧の姿勢日光裏見の瀧に似て、瀧盡の平靜なる酒杯を浮べて對岸の者と献酬するを得、此處亦風致富み、老松古杉四圍を蔽ひ、岩石滑かにして坐臥に任す、藤、躑躅の花時に至れば來り遊ぶもの多し、子瀧は元瀧の側にありて、白絲元瀧の二瀧と共に奈曾三重の瀧と稱さる、昔、役行者此に八大金剛童子を祀り鳥海一の王子と稱す、飛泉岩石に碎くる狀恰も玉を申けるが如し、故に瓔珞の瀧とも稱さる、白絲の雄勢、元瀧の艶麗を觀て此瀧に對せば更に爽快を覺ふ。

●奈曾の浮島（羽後）

小瀧の村端に一湖あり、湖中に浮べる島を『浮島』と稱す、其周圍二十町に滿たざるも、島形瀟洒にして、畫けるが如し嚴島神社此に祀られ、鯉、鮒多く湖中に棲み、奈曾名所の一たり。

奈曾の名所は甚だ多し、亦舊蹟として傳へらるゝもの少なからず、其二三を附記すれば、慈覺大師築造に係れりと稱する閼浮提壇は金峰神社の華表前にあり、鳥海一の木戸、即ち奈曾の十二頭嗣前には周圍六尋を超ゆる巨欅屹立す、十二鄕の古松なるもの鳥海山參詣道にあり、昔手長足長の惡魔を退治すべく築けると言ふ『護摩壇』は第一發電所上部の峯に存す而して彼の『どや〳〵森の有耶無耶の關』は觀音森に當る。

●三方湖（若狭）

三方湖は三方郡三方町の西にあり。

三方の四湖と稱され三方、水月、久々子、日向の四湖に分る、其中三方湖は三方驛の西北に位し、東西二十三町南北十二町、周圍凡そ二里餘を有せり、水月湖は之が北に隣り、東西二十町南北十一町周圍二里廿八町四湖中最も大なるものにして、湖水は南に於て三方湖と相通ず、水月湖の東北に連るを久々子湖と言ふ。日向湖は水月湖の北にありて他の三湖と水脈を絶ち纔かに北に開きて海に入る、而して三方、水月、久々子の三湖は素と人工の水路により相通せるものにして、其最深點は中央より稍や北に位し、約四十米突許を有し湖底は全部海面下にありて地學上の所謂潜窪と稱するものに屬すと

往時にありては、此湖の水位は現今より稍や高く、急流を成して海に入りしも近世に至りて現今の河を開鑿し、湖の水位を下げ以て漁船の出入に便せしを以て海上波高き時は屢々海水の逆流を見ることありと、又湖岸には顯著なる水流の更に注入するものなけれ共、其南端には舊時水月湖の洪水氾濫を防ぐ爲めに設けたる疏水暗渠あるを以て、從つて日向湖は時として海水の浸入を受け、又時としては水月湖より淡水湖の供給を受くることありと言ふ。

三方、水月、日向の三湖は、四周古生層若くは花崗石の丘陵によりて圍繞せられ、地體の陷落によりて生せしものなれ共、獨り久々子湖は西に古生層の丘陵を負ひ、東に第四紀の平野を控え、一條の砂嘴によりて外海を隔てられ、所謂潟湖と稱するものに屬すと、而かも此四湖の互に連綴して其肢節の複雜なるに至りては我國の湖水中稀に見る所なりと言ふ、四湖中最も景勝の秀でたるは三方水月の二湖なり。

寛文元年角倉了意命を受けて此湖の疏通工事に當る、之を浦見坂普請と言へり、久々子湖の水を海へ通ずる工事は翌二年に至りて成り、此年五月大地震の爲め氣山川塞り三方湖氾濫して湖畔の諸村水害を被むる、即ち急に工事を督勵し氣山川を通ず、同三年再び浦見工事を起す、石工三百餘人をして殊に磐を削らしむ、正月より五月に至る、疏渠底廣三間半、長百六十間、深二十三間、空濶八十間に及ぶ役夫すべて三萬七千餘人、沿湖の地新に墾田數町を得たり云々と地學雜誌に見ゆ

●若狭彦神社（若狭）

若狭國第一の大社たる若狭神社は遠敷村大字龍前に鎮座す、小濱町より東南に距ること一里三十町の所なり。

祭神は彦火々出見尊にして、靈龜元年元正天皇の勅命によりて創建せるものと傳ふ、社殿は本社、拜殿、樓門、神饌所樂殿、繪馬殿、社務所等ありて結構莊嚴を極む、地は後に山を負ひ老松欝として枝を重ね、一の華表二の華表は樹間に聳ゆ、古劒數口以下數十點の神寶あり、又本社を相距る十五町の地に若狭姫神社あり、此社は豊玉姫命を祭神とす、往昔にありては若狭彦神社と共に若狭國の一の富と稱されたり、一に遠敷の上下宮と言ふ、創建は養老五年にして、現在の社殿は寛永年間酒井忠勝の造營に係り、本殿拜殿、樓門、神饌所、社務所等あり境域略ぼ上宮と同じく、結構の莊麗なる上宮に讓らず、神寶としては紫石の硯及村正の古刀、古代神器等を藏すと、二社共に國幣中社たり、遠敷の地は古村にして、古の「國分寺址」を存す。

●大門小門と唐船島（若狭）

小濱港の前面に久須夜ヶ嶽あり、其外壁大洋に面するの地は峻巖聳立、島嶼起伏、怒濤之に激し頗る奇觀を成す、是れ所謂大門小門の外面と稱する所にして、此内に大門小門の勝あり、一巖海中に屹立し、其面に大小二門を開けるが如く、小舟は帆檣を立て、之を過ぐるを得るもの即ち大門小門の偉觀たり、門内には奇巖錯落飛瀑之に注ぎ眞に多く見るべからざるの奇景なり。

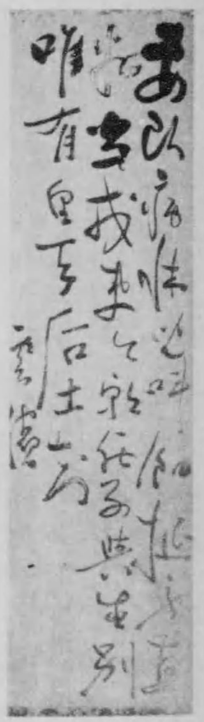
小濱港は若狭國中第一の都會にして、東北より西南に長く、南北に狹く、西南には後瀬山の翠微を帶び、東は雲濱、西津の兩名邑を控へて、北に灣を隔て、久志夜ヶ嶽を見る、其灣の風光頗る明媚、山海の美之を他に觀るべからざるものあり酒井氏の古城址は南北兩川の合湊する北岸にありて、其所に藩祖を祀れる神社あり、塹壕の地既に空しと雖も、海に面して天主閣の殘れるあり、登臨すれば小濱灣の晴波と市街の瓦甍を一眸の中に收むべし、小濱灣は松ヶ崎裾岬東西より突出して海門を作れるを以て、風濤奔騰の日も港内は平靜にして、能く北海航行の避難所たるを得、此地より福井市へ二十八里餘、敦賀町へ十二里餘、舞鶴へ十三里常に船舶の來往頻繁なり。

大門小門の海岸には奇景多く、唐船島あり、白壁、吹雪瀑の勝あり、又幾多島嶼の灣内に碁布する中に双子島あり、其他枚擧するに遑あらず。

●梅田雲濱筆蹟（若狭）

妻臥病床兒叫飢　挺身直欲當戎夷
今朝死別與生別　唯有皇天后土知

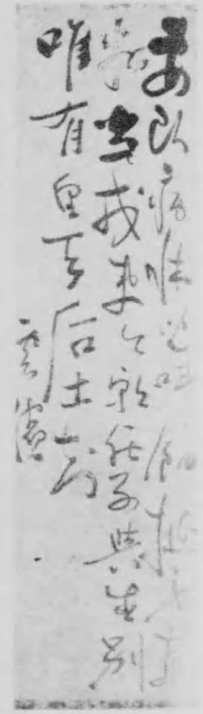
是れ幕末の志士梅田雲濱が縛に就き將さに護送せられんとする時、萬斛の涙を灑ぎ以て揮毫せる斷腸の詩なり、即ち掲ぐる所のものは其遺墨にして、雲濱と交情篤かりし京都蕪谷氏（鳩居堂）之を藏す



梅田雲濱筆蹟

若狭彦神社

層若くは花崗石の丘陵によりて圍繞せられ、地體の陷落によりて生せしものなれ共、獨り久々子湖は西に古生層の丘陵を負ひ、東に第四紀の平野を控え、一條の砂嘴によりて外海を隔てられ、所謂潟湖と稱するものに屬すと、而かも此四湖の互に連綴して其肢節の複雜なるに至りては我國の湖水中稀に見る所なりと言ふ、四湖中最も景勝の秀でたるは三方水月の二



朝鮮島

梅田雲濱筆蹟

若狭產物社

三方湖

大門小門の景

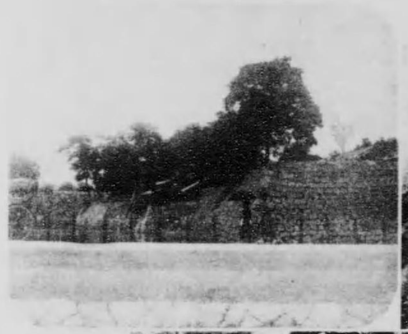
略ぼ上宮と同じく、結構の莊麗なる上宮に讓らず、神寶としては紫石の硯及村正の古刀、古代神器等を藏すと、二社共に國幣中社たり、遠敷の地は古村にして、古の「國分寺址」を存す。

●大門小門と唐船島（若狭）

小濱港の前面に久須夜ヶ嶽あり、其外

妻臥病床兒叫飢　挺身直欲當戎夷
今朝死別與生別　唯有皇天后土知

是れ幕末の志士梅田雲濱が縛に就き將さに讓送せられんとする時、萬斛の涙を灑ぎ以て揮毫せる斷腸の詩なり、即ち揭ぐる所のものは其遺墨にして、雲濱と交情篤かりし京都鳩谷氏（鳩居堂）之を藏す



福井城址

金崎宮

氣比神宮神苑

氣比神宮

九十九橋

敦賀港

●金ケ崎宮（越前）

宮は敦賀町の東北端にあり。

延元元年後醍醐天皇一たび北朝と和睦し給ふ時、新田義貞兄弟は、第一皇子尊良親王及皇太子恒良親王を奉じて北に走り、金ケ崎城に據り杣山の守將瓜生保と互に聲息を通じ、義徒を集めて回復を計り、足利の大軍來り攻むるに及び、衆寡敵せず、力盡きて城陷り、親王は自刃し給ひ皇太子は捕へられて奉らじ、此重圍を免れさせ給へ」と申せる時、親王は莞爾として

主上、孤を以て元首の將とし、卿を以て股肱の臣たらしむ、股肱なくして元首能く持つことを得んや、我れ命を白刃に殞して怨を黄泉に報ゆべし、抑も自害は如何にすべきぞ。

と問はせ給ひければ、義顯泣いて言ふを得ず、暫くして爾か思召さば斯樣にこそと刀を拔き腹を割き破り其刀を御前に進めて伏せり、親王刀を執り給ひ泰然として蟋蟀橋等あり、例祭は毎年九月二日より十五日まで執行す。

●敦賀港（越前）

港は金ケ崎古城址のある丘陵の麓にて松原神社のある松原公園とを以て之を包み、二箇の埠頭は長く海中に突出し、帆檣林立、常に汽船の碇泊するもの少なからず、此港よりする主なる航路は露國浦鹽斯德航路、日本郵船會社西廻航路、大阪商船會社日本海航路、丹州汽船會社の

福井城址

●金ケ崎宮（越前）

宮は敦賀町の東北端にあり。

延元元年後醍醐天皇一たび北朝と和睦し給ふ時、新田義貞兄弟は、第一皇子尊良親王及皇太子恒良親王を奉じて北に走り、金ケ崎城に據り杣山の守將瓜生保と互に聲息を通じ、義徒を集めて回復を計り、足利の大軍來り攻むるに及び、衆寡敵せず、力盡きて城陷り、親王は自刄し給ひ皇太子は捕へられて後害され給ふ、新田氏の主從も亦多く此所に戰死し、最も悼ましき事蹟を歴史の上に留めたり。

宮は即ち親王及皇太子の英靈を奉祭せる官幣中社にして、傍らに金ケ崎城址の一碑を立て、詳細に當時の顚末を記す。

尊良親王は後醍醐天皇第一皇子にましまして天資聰明、嘉暦元年中務卿に任せられ給ひ、元弘元年御父陛下に從ひて笠置に赴かせられ、尋で楠正成の赤阪城に入らせ給ふ、幾くもなく笠置城陷りて天皇幽せられ給へりと聞かせらるゝや、直ちに上京の途に就かせられ、其途上賊軍に捕へられ佐々木時信の家に幽せらるゝ事となり、翌年二月更に土佐の幡多に遷され給ふ、三年亂平らぐに及びて京師に歸らせ給ふ事を得たり。

建武二年足利尊氏の叛するや、親王は東國管領の職を帶ばせられて、之を討し給ふ、尊氏京師に逼り、天皇延暦寺に幸し給ふ時、親王亦之に從ひ給へり、延元元年冬皇太子恒良親王を輔けて金ケ崎城を守らせ給ひけるが、賊の勢熾んにして糧食乏しくなりければ、城中の苦み譬へんに物なく、明年春に至り城將さに陷らんとす、新田義顯親王の前に跪づき泣拜して、「既に力なし、臣は將家の子苟くも生くべきにあらず、殿下は皇室の胄にいます、縱令敵中に出で給ふとも害を加へ奉らじ、此重圍を免れさせ給へ、」と申せる時、親王は莞爾として

主上、孤を以て元首の將とし、卿を以て股肱の臣たらしむ、股肱なくして元首能く持つことを得んや、我れ命を白刄に殞して怨を黄泉に報ゆべし、抑も自害は如何にすべきぞ。

と問はせ給ひければ、義顯泣いて言ふを得ず、暫くして爾か思召さば斯樣にこそと刀を拔き腹を割き破り其刀を御前に進めて伏せり、親王刀を執り給ひ泰然として自刄し給へり。

親王の英靈は此くの如くにして此處に鎭まり給ふ、御弟たる皇太子は京師に於て毒藥を進められて薨じ給へるなり、當宮に跪拜する者誰か感泣せざらんや。

●氣比神宮（越前）

官幣大社氣比神宮は敦賀驛より東北約一町弱の所に鎭座す。

社は北陸第一の宮居にして、主神を御食津大神、仲哀天皇、神功皇后とす、其前殿には日本武尊、譽田別尊、淀姫命、武内宿禰命を配祀せり、故に延喜式には氣比神社七大坐と言ふ、境内廣濶ならざるも社殿壯嚴にして、地、幽清を極む、社頭に屹立する朱塗の大華表は正保年間佐渡より敦賀港へ漂着せし一本の桂の木を以て造りたるもの、高三丈五尺周圍七尺八寸にして、天下一品の作と稱され、明治三十四年特別保護に與れり。

境内先づ一の華表を入り小板橋を渡りて東すれば、繪馬殿遙拜所あり、左折すれば拜殿あり瑞離門あり、左右瑞離を繞らし之を入れば正面に本殿、總社、平殿其左右に西殿東殿あり、本殿には御食津仲哀、神功の三柱を奉祭し、日本武尊は東殿に、譽田別尊を總社に、淀姫命は平殿に、武内宿禰命を西殿に祀る、又境内に龜の池、十用松、菅公梅、龍虎泉石、蟋蟀橋等あり、例祭は毎年九月二日より十五日まで執行す。

●敦賀港（越前）

港は金ケ崎古城址のある丘陵の絶痕と松原神社のある松原公園とを以て之を包み、二箇の埠頭は長く海中に突出し、帆檣林立、常に汽船の碇泊するもの少なからず、此港よりする主なる航路は露國蒲鹽斯德航路、日本郵船會社西廻航路、大阪商船會社日本海航路、丹州汽船會社の航路等なり。

而して敦賀町は、日本海の深く彎入せる敦賀灣の南岸に位して、西には蝶螺ケ嶽の山脈蜿蜒として連亘するあり、東には木目峠を其山中に有する野阪山脈の横はるあり、地形優勝、風景絶佳、且海陸交通の要路に衝り、其沿革亦最も古し。

●福井城址（越前）

城址は福井市の中央に在り、方數町の平城にして、今猶壘壁濠渠を存し、當年雄大の城閣たりし事を偲ばしむ。

慶長六年德川家康の二男結城中納言秀康東國より移封せられ、此に入國するや先づ北庄城の北に繩張して新たに城閣を築き、江濃二州を合せて六拾七萬石を食み江戸將軍を實兄とし故豊太閤を岳父とするより、越前黄門の威自ら東西に振へり、俗に御外の御家と言ふ、十三年逝去、嫡子參河守忠直相續、之を越前宰相と稱す、爾後幾世を經て松平春嶽より同慶永に至りて廣藩となれり、今舊城内に藩祖を祀れる佐佳枝神社及松平侯爵邸あり。

●九十九橋（越前）

橋は福井市の西南端にあり、長さ八十七間幅三間二尺、半ば石造半ば木造の建築にして、頗る奇工を極め「日本三奇橋」の一と稱され其名著る。

●足羽山（越前）

足羽山は其長さ約一里の丘陵にして、福井市の東北に當り、停車場と十五町餘を隔つ、之に登るには橋南字石場、清水の兩町に道路あり、石場の本道より躋れば石階重疊、其左右酒樓軒を連ぬる所を過ぎ、更に進めば尖塔あり、高さ十間、內に藥師佛を安置す、右折して登ること數百歩、左に石の華表あり、之を足羽神社の賽路とす。

其山腹に至れば一坦地あり、茶臼山と言ふ、傍らに地藏堂あり、斜に阪路を下り行くこと三町餘、左右に二三の石碑及石燈籠數基を立つ、正面に招魂社ありて戊辰の役戰歿せし藩士の靈を祀る、祠は後に山を負ひ左右に山下の田圃を眺め得べき勝地に位す、南の溪間を下ること十五六町にして一宇あり、地藏堂と言ふ、此處山崖壁立恰も屏風を繞らせるが如し之より石階を下り東すれば山麓山奥村に出づ、招魂社より途を艮位に轉ずれば山の最高處に達すべし、男大迹皇子の石像及碑石は其高處にあり、東北に下れば山腹の巖窟に不動の像を刻せる所あり、更に東に向へば山麓に黑龍神社あり此境內櫻樹多し、同社の華表を出で石階を下れば橋南字神宮寺上町に出づるなり、足羽神社は山の半腹に鎭座す。

祭神は男大迹皇子にして、相殿に生井、福井、阿須波、波比岐の四神を祀る。

男大迹皇子は嘗て當國高向郷に住はせ給ひ、仁慈を施して國民を撫育し、日野、足羽、九頭龍、三大川の疏通を計らせられ、三國を水門として之を海に注ぎ、一は以て浸水の害を除き、一は以て灌漑の便に供せらる、是に於てか農民其業に安んじ收穫大に上れり、武烈天皇崩御に及び皇子は皇統を嗣ぎて位に即かせ給ひ、都を山背筒城に定め繼體天皇と稱させ給へり、國人欣慕の情に堪へず、乃ち御活靈を祠に留めて足羽宮と號せるが今ま縣社に列す。

當社は境內九百六十餘坪を有し、鬱蒼たる樹間より福井市街を瞰下し得べき所なり。

●藤島神社（越前）

社は亦是れ足羽山上に鎭座す。別格官幣社にして、贈正一位左近衛中將新田義貞及脇田義助新田義宗同義顯同義興の英靈を祭る、最初は義貞戰死の地たる燈明寺畷に鎭座せしを、其後牧の島村に遷座し、更に明治三十四年に及びて此地に遷座せるものなり、社殿拜殿等の壯嚴なる、地域の幽邃なる、詣者をして襟を正さしむ。

●燈明寺畷（越前）

新田義貞戰死の地たる燈明寺畷は、福井市より北壹里餘の地なり、大八洲遊記に曰く

新田公戰死地、距公所嘗營燈明寺十餘町、明曆中土人穿地得一鐵兜、其兜有元應元年八月造及銘辭、所謂筋兜者、筋間彫神名凡三十柱、眉庇有銀象款、公所被無可疑、萬治三年國主松平光通立豐碑、書新田相戰死所、距此二三町、有一小橋、土人呼回馬濟、公從是回馬就戰、史云、公馬中五矢斃、與此異、又有一水、相傳、洗公首所、呼爲赤川、蓋嘗時倉卒間、我兵斬公首、與兜共埋之地、敵或獲首遺兜、我兵埋兜以使敵不知爲公屍也云々

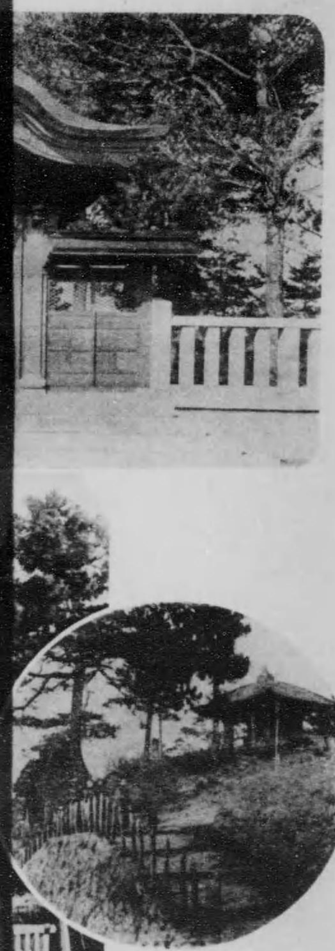
又太平記は義貞戰死の有樣を記して大將義貞は燈明寺の前に控へて、手負の實驗しておはしけるに、藤島の戰强うして官軍動もすれば追立らるゝ體に見えける間、安からぬ事に思はれけるにや、馬に乘りかへ鎧を着かへて、僅かに五十餘騎の勢を相從へ、路をかへ畔を傳ひ、藤島の城へぞ向はれける（中略）前なる兵義貞の前に立ち塞りてたゞ的になしてぞ射られける、中野藤內左衛門は義貞に目くばせして、千鈞の弩は鼠のために機を發せずと申けるを、美貞きゝもあへず士を失ひ獨りのがるゝは我意にあらずと言ひて、尙ほ敵の中へ駈け入らんと、駿馬に一鞭をすゝめらる。云々

地は實に延元の役南朝の忠臣新田義貞敵將足利高經と戰ひて、偶ま流矢に中り終に自刎せる古戰地なり、而かも義貞戰死の地としては西藤島村大字三屋の地に之を說きて、萬治年間國主松平光通は其傍に碑を立てゝ以て其戰歿の箇所を詳にせり、更に後、此地に藤島神社を造營せしも、數年にして上記の足羽山へ遷されたり。

●新田義貞墓（越前）

墓は坂井郡高椋村大字長崎の舊稱念寺境內にあり、建武三年七月七日義貞燈明寺畷に戰死するや、足利高經其死屍を此に葬る、當時の住僧蘭阿は義貞に謚して「源光院正四位上左近衛中將新田太守義貞覺阿彌陀佛」とし、墓畔に一株の松を植へたり、稱念寺は吉田郡藤島村燈明寺畷をも所管せる名刹なりしも、維新後頹廢して寒煙荒草の裡に埋沒し、從つて名將の墳墓も荒寥悽慘を極めたりき、然るに大正四年新田公菩提所再興會なるもの發起せられ、佐藤福井縣知事贊成者總代となり、新田男爵之が會長に當り、松平侯爵其總裁として幹旋盡力する事となれり

掲ぐる所の筆蹟は東京帝國大學文科大學所藏に係る、軍忠狀證判にして、本書は義貞が鎌倉を陷れたる後、市村王石丸代後藤彌四郎信明が味方に馳せ參じ軍功を注進したる時、義貞は之に承了と書花押を添へたるものなり。



足羽山

男大迹皇子は曾て當國高向郷に住はせ給ひ、仁慈を施して國民を撫育し、日野、足羽、九頭龍、三大川の疏通を計らせられ、三國を水門として之を海に注ぎ、一は以て浸水の害を除き、一は以て灌漑の便に供せらる、是に於てか農民其業に安んじ收穫大に上れり、武烈天皇崩御に及び皇子は皇統を嗣ぎて位に即かせ給ひ、都を山背筒城に定め繼體天皇と稱させ給

蓋當時倉卒間、我兵斬公首、與兜共埋之地、敵或獲首遺兜、我兵埋兜以使敵不知爲公屍也云々

又太平記は義貞戰死の有樣を記して大將義貞は燈明寺の前に控へて、手負の實驗しておはしけるに、藤島の戰强うして官軍動もすれば追立らるゝ體に見えける間、安からぬ事に思はれけるにや、馬に乘りかへ鎧を着かへて、僅かに五十餘騎

起せられ、佐藤福井縣知事贊成者總代となり、新田男爵之が會長に當り、松平侯爵其總裁として斡旋盡力する事となれり

掲ぐる所の筆蹟は東京帝國大學文科大學所藏に係る、軍忠狀證判にして、本書は義貞が鎌倉を陷れたる後、市村王石丸代後藤彌四郎信明が咏方に馳せ參じ軍功を注進したる時、義貞は之に承了と書し花押を添へたるものなり。

藤島神社本殿

新田義貞墓

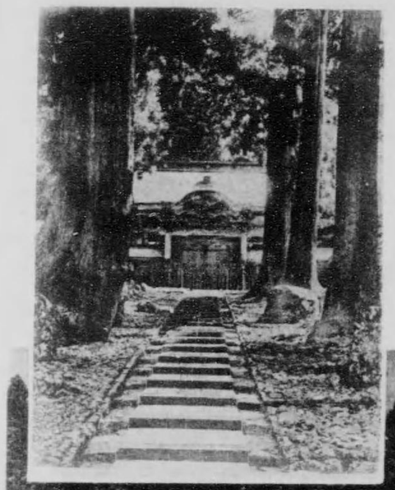
拜殿

足羽山

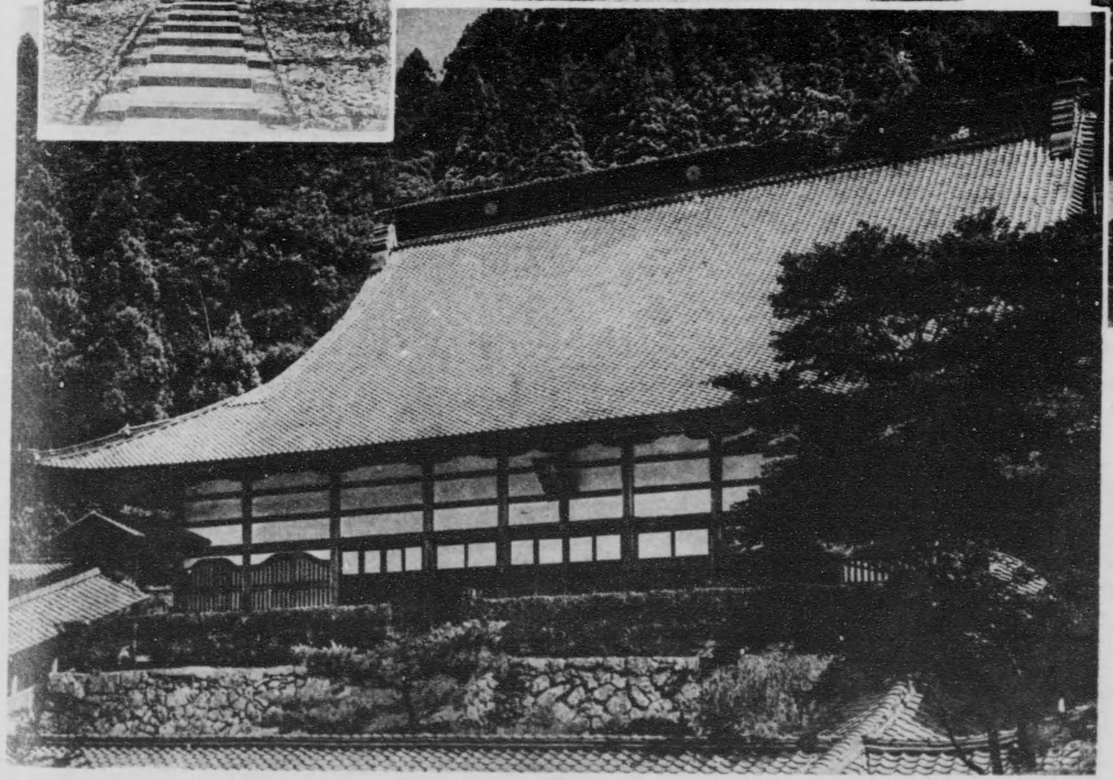
燈明寺堂

佛殿

同　承陽殿



勅使門



永平寺

經藏

●永平寺（越前）

禪宗曹洞派の總本山たる永平寺は、福井驛の東約四里、志比谷村字志比に在り著名なる巨刹にして、其末寺全國に亘りて壹萬四千餘、檀信徒一千餘萬を數ふ。

此地昔は波多野義重の所領たり、義重曾て當寺の高祖道元和尚に歸依し、領地の山中に古寺の廢址あるを復興し之を道元に寄附す、道元喜んで之を諾し寛元元村より通じ、寺域六千二百八十餘坪、入りて數十歩進める正面に莊嚴なる勅使門あり、常に固く閉鎖して之を通行せしめず、別に通用門を並立す、通用門を入り左すれは山門あり、二層の樓門にして「吉祥山」の大額を掲ぐ是れ所謂總門なり。

總門の大額は大師の揮毫に係り、左右に安置せる靈像は古代彫刻の四天王にして、樓上には華嚴會上釋迦牟尼佛十六羅漢、五百羅漢等を安置し、又正面に掲げし

より承陽大師の諡號を賜はれり。

●經藏と他の殿堂（越前）

勅使門を始め總門承陽殿等の説明を了し、殘る所は經藏のみなれ共、單に經藏のみを説明するは大規模の永平寺に於ける建造物を四離五散せしむるものなれば經藏と共に他の殿堂等をも記さん。

上記の中雀門は總門より佛殿に至る中間の正門にして廊廡四達し、右は大庫院

勅使門

●永平寺（越前）

禪宗曹洞派の總本山たる永平寺は、福井驛の東約四里、志比谷村字志比に在り著名なる巨刹にして、其末寺全國に亘りて壹萬四千餘、檀信徒一千餘萬を數ふ。

此地昔は波多野義重の所領たり、義重曾て當寺の高祖道元和尚に歸依し、領地の山中に古寺の廢址あるを復興し之を道元に寄附す、道元喜んで之を諾し寛元元年七月を以て山城の興聖寺を發し義重と共に此地に來り、先づ吉峰に庵居し、尋で禪師峰に移り、翌年伽藍を造營し七月十八日開堂して大佛寺と名け、同四年改めて永平寺と稱す。

建長五年に至り道元は之を孤雲に讓り病を京に養ひ同年八月入寂せり、孤雲の當山に住する事十五年、文永八年を以て徹通に讓る、九世宗吾住持たるに及びて檀越波多野氏、後圓融天皇に奏する所あり、其結果天皇勅して『出世道場』に補し給ふ、當時永平寺の衰微甚だしく加ふるに文明五年堂塔皆な兵火に罹りて烏有に歸す、長享元年堂宇を再興し數年にして悉く成る、天文年間更に出世道場の勅宣を賜はり、元和元年德川幕府より永平寺法度を禀け曹洞宗總本山の規模を立つ、寛文元年越前守松平光通寺領五十五石を寄附し、延寶年間松平昌親更に二十石を加へて七十石の寺領とせり、當時能登の總持寺幕府より峨山下の僧は永平寺に於て出世すべからずとの公帖を受く、爲めに永平寺は控訴に及び爭議數年に亘る、五十世玄透住するに及んで始めて舊に復す、明治十二年祖廟回祿の災に罹り、十四年之を再興し六十三世琢宗大に諸堂を修理し且道路を開鑿して面目を一新せり村より通じ、寺域六千二百八十餘坪、入りて數十歩進める正面に莊嚴なる勅使門あり、常に固く閉鎖して之を通行せしめず、別に通用門を並立す、通用門を入り左すれは山門あり、二層の樓門にして「吉祥山」の大額を掲ぐ是れ所謂總門なり。

總門の大額は大師の揮毫に係り、左右に安置せる靈像は古代彫刻の四天王にして、樓上には華嚴會上釋迦牟尼佛十六羅漢、五百羅漢等を安置し、又正面に掲げし「日本曹洞第一道場」の勅額は後圓融天皇の宸翰にして、國寶中に編入せらる。

此總門を入りて石階を登れば中雀門あり、此處を過ぐれば佛殿あり、法堂ありて法堂の前より左に折れ更に右に曲れる所に承陽殿及拜殿あり授陽殿亦相並立す、

●承陽殿（越前）

殿は是れ當山の高祖たる道元和尚、即ち勅諡佛性傳東國師、承陽大師の靈廟にして、其奥殿正面には大師の像を安置す、前殿中央の楣間に掲ぐる「承陽」の額は明治天皇より特に賜はりたる宸翰なり、當殿の右壇に當寺歴住の靈牌、左壇に大師の生家たる久我家及緣家岩倉家、開基波多野家、木下道正庵等累葉の靈牌幷に、開基義重及道正庵主の像を安置し、大師の遺骨は歛められて授陽殿にあり。

大師は村上天皇九代の裔孫内大臣久我通親の子にして、正治二年京都に生る、十三歳佛門に入り建仁寺の榮西和尚に師事し、貞應二年明全和尚に從ひて宋に渡り、天童、徑山、育王等の名刹に歴遊し、安貞二年歸朝するや建仁寺に寓して普觀座禪儀を撰す、是れ實に我國曹洞宗開創第一の本典なり、後、移りて深草に閑居し又當寺を草創し五十四歳を以て入寂せり、嘉永五年は其六百回忌に當れるより、孝明天皇より佛性傳東國師の諡號を賜ひ明治十二年六百五十回忌に於て明治天皇より承陽大師の諡號を賜はれり。

●經藏と他の殿堂（越前）

勅使門を始め總門承陽殿等の說明を了し、殘る所は經藏のみなれ共、單に經藏のみを說明するは大規模の永平寺に於ける建造物を四離五散せしむるものなれば經藏と共に他の殿堂等をも記さん。

上記の中雀門は總門より佛殿に至る中間の正門にして廊廡四達し、右は大庫院より瑞雲閣、知庫寮、副寺寮、大光明藏妙光臺、輪藏（即ち經藏）不老閣等に通じ、左は僧堂、接賓、承陽殿、孤雲閣等に通す。

佛殿は明治三十五年の再建に係り、須彌壇上の安置佛は其中央に釋迦牟尼佛、左に藥師佛、右に阿彌陀佛を安んじ、正面の高壇に　今上天皇の聖壽牌を奉安し、左右に當寺祈願の歴代天皇の尊牌、其又下壇の左右に關係諸侯等の靈牌を配置す欄間には種々の彫刻あり、即ち正面入口は善財一枝草圖、須彌壇上は釋迦拈花圖右側は二祖立雪圖、知門蓮華圖、洞山獨木橋圖、香嚴擊竹圖、大隨龜話圖、又左側は六祖踏碓圖、南泉牡丹圖、大中天子圖、栽松道者圖等、孰れも悟道に關するものゝみ、經藏即ち輪藏には一切經等貴重の經文を藏す、此他碓房、金毘羅堂、秋葉堂、稻荷堂、地藏堂、荒神堂、辨天堂、藥師堂、寶藏、文庫、役寮、又は三百二十餘間の廻廊、七間の東司等廣き境内に點在するも一々枚擧するに遑あらず。

桑西禪師筆蹟は福岡縣大泉坊の所藏に屬す。

伽藍全體の總數は百八棟二千七百八十餘坪の多きに上る、地は山間幽邃の境、鬱蒼たる古松老杉境内を包擁し、潺湲たる溪水寺畔を繞り、眞に佳境靈地と稱するを得べき所なり、道元禪師病革まれる時左の偈を書す。

五十四年　　照第一天　　打箇蹄跳
觸破大千　　渾身無覓　　活陷黃泉

●倶利伽羅峠（加賀）

古來北陸道の要隘として名ある倶利伽羅峠は津幡驛の東二里越中國石動驛に至る界嶺なり、地は河北郡に屬す。

此峠は礪波山の中にして、古書にも倶利伽羅が峰とあり、往昔泰澄禪師此山に留錫して倶利伽羅不動明王を祀れるより峠の名も遂に倶利伽羅と稱さる、壽永二年木曾義仲信濃より起り平家を亡ぼさんとして此峠の麓に陣を取る、平家七萬餘騎の大軍は三位中將維盛を大將とし、加賀より越中に入らんとし此處に來りて相對陣す、源平盛衰記は當時の戰況を記して曰く

倶利伽羅山と言ふは越中礪並郡の境なれば砥並とも申たり、谷深くして山高く、嶮難にして道細く、馬も人も通ふこと輙からず、五月十一日平家の先陣倶利伽羅の堂、國見、猿馬場の塔橋に控へて、赤旗所々に立て並べて、源平陣を合せて二町に過ぎず、木曾は礪並山黒阪の北の麓埴生社八幡宮より、松永柳原を後にして、黒阪口を南に向ひて陣を取り、西陣相隔つこと五六段に過ぎず、互に楯を突き向へり。

五月十一日の夜半となりければ、五月の空の癖なれば朧に照らす月影、夏山の木の下暗き細道に源平互に見え分かず、平家は夜討もこそあれ打解寐べからずと催けれども、下り疲れたる武者なれば甲の袖を片敷冑の鉢を枕とせり源氏は追手搦手等樣々に用意しける中に、樋口次郎兼光は搦手に廻りけるが、三千餘騎其中に太皷法螺千ばかりこそ籠めたりけれ。

木曾は追手に寄せけるが、牛五六百匹取集めて角に炬松結び付けて夜の更るをぞ相待ちける、去程に樋口次郎、林富樫を打具して中山を打上り、律原に押寄せたり、根井小彌太二千餘騎、今井四郎二千餘騎小室太郎三千餘騎巴女壹千餘騎五手を一手に合せ、壹萬餘騎北黒阪南黒阪引廻し、鬨を作り、太皷を打ち法螺を吹き、木本萱本を打はためき、蟇目鏑を射上げてとゞめき懸りたれば山彦答へて幾千萬とも覺えざりける、木曾すはや搦手は廻りける鬨を合せよとて四五百頭の牛の角に松明を燃して平家の陣に追ひ入る、胡頽子原、柳原、上野邊に控へたる軍兵三萬餘騎鬨を合せ喚叫黒阪表に押寄せる、前後四萬餘騎は鬨の聲山も崩れ岩も摧けんと夥し、道は狹し山は高し、我先我先と進む兵は多し、馬人共に壓し押されて矢をはげ弓を引くに及ばず、打物は鞘はづし兼たり、唯だ我先我先にと爭へ共、西は搦手東は大手、北は岩石高くして、南は深き谷なり、唯だ敵に攻め立られ先陣後陣に押しあゞされて、南の谷へ連れ落ちたり、馬には人、人には馬、上が上に落ち重なりて、平家壹萬八千餘騎、十餘丈の倶利伽羅谷をぞ埋めける。云々

●那谷寺（加賀）

那谷寺は動橋驛より東南一里餘の所にあり、地は那谷村大字那谷と言ふ。

北國に於ける有名の巨刹にして眞言宗なり、而かも境内の勝景を以て著る、寺の緣起に依れば今を距ること一千二百年前泰澄禪師當寺を草創し、禪師自ら千手觀音の像を造り、冶工に命じて之を鑄さしめ、山中の岩窟に安置し、且つ七堂山門及數宇の坊舍を造營して自生山巖谷寺と號す、其後花山院法皇北陸御巡遊の際當寺に成らせられ、西國三十三番の札所なる那智、谷汲の頭字を取り那谷寺と命じ給ひ、且つ法皇隨身の如意輪觀音を賜はりしが、惜い哉天正年間一山都て兵火に罹り盡く烏有に歸せり、後、殆ど頽廢せしを寛永十七年前田利常財を投じて今の本堂、護摩堂、三重塔を再興し、又寺領若干を寄附して祈願所と定めたりと。

同村大字菩提村に法皇陵と稱する所あり、相傳ふ花山院法皇の山陵なりと、其他法皇遺蹟と稱する所少なからず。

●三國東尋坊（越前）

越前の名勝地として聞ゆる三國東尋坊は、三國町の北一里餘、金津驛より約二里を隔てたる海岸にして、地は雄島、安東岬と併せ稱せらるゝ此方面の勝區なり。

此處、稜々たる怪石は鋸の如く、巍々たる奇巖は障壁の如く、下には一面海水の深碧を湛ゆ、其絶景容易に狀すべからず。

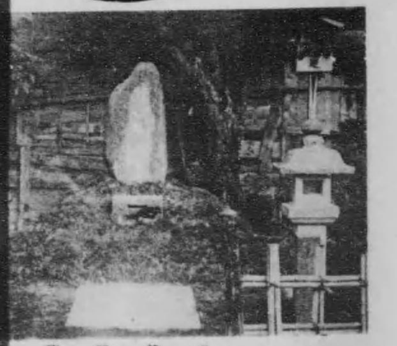
傳說あり、昔當國大野郡平泉寺に東尋坊と稱する惡僧住み、居常亂暴狼藉人を苦しむるを以て事と爲す、衆徒之が爲めに皆な此僧を憎み、一日詐り導きて坊を此巖上に誘ひ、共に酒を飲み彼れの亂醉せる隙を窺ひ、遂に之を海中に投じて溺死せしむ、因りて爾後此地を東尋坊と稱せりと。

●俳人千代女墓（加賀）

加賀の千代として聞ゆる「俳人千代女」の墓は松任町聖興寺内に在り。

千代は加賀國松任驛福增屋六兵衛の女幼にして文藝の志篤く殊に俳句を好くし始め支考に就て學び、支考歿後虚元坊に從ふ、十八歳の時福岡氏に嫁したるが、不幸にして二十三歳の時夫歿したるを以て、爾來兩夫に見えず、益々俳諧を研鑽し秀吟尠なからず、後、伊勢に赴き乙由の門に入れり、次で二十七歳の時京に上り、幾ばくなく剃髪して素園尼と號す、其郷里松任驛は京都へ往來の衝に當れるを以て、旅客千代尼の俳名を傳へ聞きて訪ふもの尠なからず。

那谷寺



千代尼墓

なれば甲の釉を片敷胃の鉢を枕とせり源氏は追手搦手等樣々に用意しける中に、樋口次郎兼光は搦手に廻りけるが、三千餘騎其中に太鼓法螺千ばかりこそ籠めたりけれ。

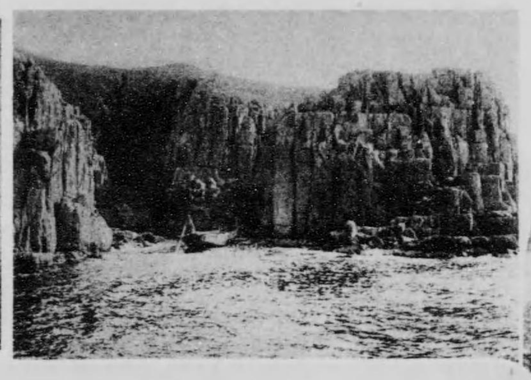
木曾は追手に寄せけるが、牛五六百匹取集めて角に炬松結び付けて夜の更るをぞ相待ちける、去程に樋口次郎、林富樫を打具して中山を打上り、津原に

前奏澄禪師當寺を草創し、禪師自ら千手觀音の像を造り、冶工に命じて之を鑄さしめ、山中の岩窟に安置し、且つ七堂山門及數宇の坊舍を造營して自生山巖谷寺と號す、其後花山院法皇北陸御巡遊の際當寺に成らせられ、西國三十三番の札所なる那智、谷汲の頭字を取り那谷寺と命じ給ひ、且つ法皇隨身の如意輪觀音を賜はりしが、惜い哉天正年間一山都て兵火

從ふ、十八歳の時福岡氏に嫁したるが、不幸にして二十三歳の時夫歿したるを以て、爾來兩夫に見えず、益々俳諧を研鑽し秀吟尠なからず、後、伊勢に赴き乙由の門に入れり、次で二十七歳の時京に上り、幾ばくなく剃髪して素園尼と號す、其郷里松任驛は京都へ往來の衝に當れるを以て、旅客千代尼の俳名を傳へ聞きて訪ふもの尠なからず。

那谷寺

三國東尋坊

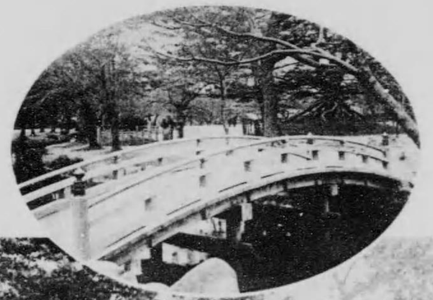


千代尼自畫自賛像

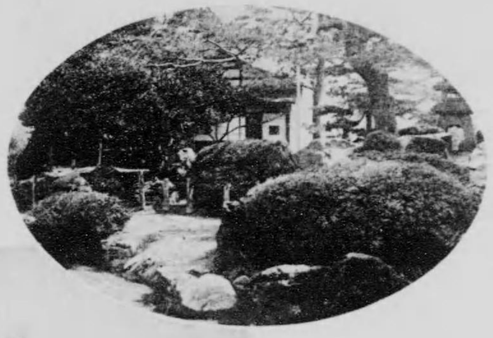
千代尼墓

倶利伽羅峠

兼六公園雪景



御幸橋



七福神山

兼六公園曲水の菖蒲

龜甲松

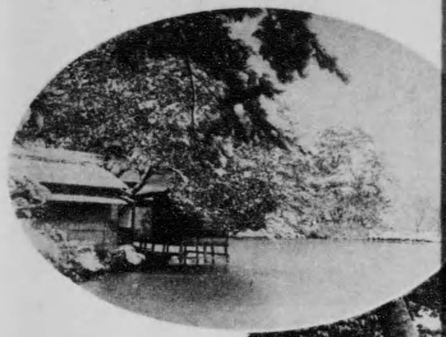
翠の瀧

●兼六公園（加賀）

園は舊城址と東南百間濠を隔てゝ相對す。古への山崎山は此地の前身にして、園は即ち竹澤殿の舊址なり、文政元年前田家十二世齊廣此に築造して菟裘とし、館を竹澤と號し園を兼六と稱す、蓋し宏大、幽邃、人力、蒼古、水泉、眺望の六に注ぎ又西北に分れて支流となる、池中に島あり「蓬萊島」と言ひ又北塘に巨石を以て橋を架し之を虹霓橋と言ふ、菖蒲杜若等多く池畔に植ゆ「曲水の菖蒲曲水の杜若」として賞觀さる、虹霓橋を下りて右方五葉松の樹蔭に虎嘯石あり、長さ六尺餘其形虎の嘯けるが如し、池の西岸に突出せる亭を「内橋の亭」と言ふ、周圍八間、母龍眞夫人の爲めに再び此地に新館を造營し、「巽殿」と稱す、用材盡く佳なるものを撰び、室の前栽は殊に意匠を籠め、木石の布置宜しきを得て頗る雅致に富めり。

●翠瀧と龜甲松（加賀）

翠瀧は霞ケ池に隣れる瓢ケ池の畔にあ



兼六公園雪景

龜甲松

●兼六公園（加賀）

園は舊城址と東南百間堀を隔てゝ相對す。古への山崎山は此地の前身にして、園は即ち竹澤殿の舊址なり、文政元年前田家十二世齊廣此に築造して苑囿とし、館を竹澤と號し園を兼六と稱す、蓋し宏大、幽邃、人力、蒼古、水泉、眺望の六勝を兼ぬるの意に由る、是れ宋の李格非洛陽名園記に取りて白川侯樂翁の命ずる所なり、地域東西四町四十間南北四町十八間、面積貳萬三千五百九十八坪、丘陵蜿蜒として起伏し、綠樹蓊鬱として茂生し、規模宏大にして景致幽邃、能く人工を施して而かも蒼古の趣を失はず、泉水多き處眺望絶く事なし。

先づ園の西北百間堀の表阪より入れば北畔に「夕顏亭」あり、蓮池に臨める小亭にして、前に池を隔てゝ松蔭之瀧を望む、是れ小堀遠州の意匠を凝らせる茶室たり欄端に遠州筆瓢庵二字の扁額を掲げ、庭園には李白手水鉢、竹根石等を布置す、亭の前より蓮池中の小洲に通ずる矼を「日暮橋」と言ふ、長さ四丈幅五尺三寸巨石を疊みて之を架す、橋上は殊に瀑布を觀るに宜し。

●黃門橋（加賀）

夕顏亭の東北に白龍瀧あり、其溪間に架せる橋を黃門橋と名く、長さ一丈九尺幅一尺三寸、花崗の一枚石を以て作る、此邊の景致最も深邃自から深山の趣きを爲す、又橋の東畔に獅子巖あり、長三尺三寸餘色蒼黑にして猨猴の蹲まるに似たり、橋の東に「拳螺山」と稱する小丘あり、登路回轉して拳螺の殼の如し、其周圍には楓杉鬱茂し頂上は平坦にして磐石疊み、又石造の三層塔を立つ、園の中央に「霞ヶ池」あり、拳螺山を下れば其西岸に至る、池は周圍百九十五間餘、曲水此處に注ぎ又西北に分れて支流となる、池中に島あり「蓬萊島」と言ひ又北塘に巨石を以て橋を架し之を虹霓橋と言ふ、菖蒲杜若等多く池畔に植ゆ「曲水の菖蒲曲水の杜若」として賞觀さる、虹霓橋を下りて右方五葉松の樹蔭に虎嘯石あり、長さ六尺餘其形虎の嘯けるが如し、池の西岸に突出せる亭を「内橋の亭」と言ふ、周圍八間、池に面したる處に小欄を設く。

●七福神山（加賀）

霞ヶ池の東、雪見橋の上小丘あり、之を福壽山と言ひ一に七福神山とも稱す、丘上に孤松あり、松下一帶躑躅繁生し、其間七箇の奇石を置く、此山に登りて瞰望すれば金澤の全市街及遠近郊野を一眸に收め得べく、實に園中第一の眺望を有す。

園の東隅に當る東阪の上に明治記念碑あり、明治十年西南の役に戰歿せし將士の忠魂を祭る、標高高さ二丈四尺五寸中央の碣石に「明治紀念之標」の六大隸書を刻す、即ち故有栖川熾仁親王殿下の御筆なり、其上に日本武尊の銅像を置く、像の高さ一丈八尺三寸、標基の周圍には石柵を設く、柵内に圓形の石碑あり、是又西南役に戰歿せし石川縣人の爲めに建つるものにして、碑銘は舊藩主前田齊泰の撰に係る、而して園の東南隅に勸業博物館あり、新館百八十坪、東本館百三十八坪、集産館百九十一坪、西本館百三十八坪餘にして、動物、植物、礦物、工藝品、美術品機械類等を陳列し、其一部に圖書室の設けあり、毎年三月一日より十一月三十日まで開館し、明治三十一年關西府縣聯合共進會を開くに及びて更に之を增築せり、博物館の棟續きに、「成巽閣」あり、元文武の二棟なり、文政二年前田齊廣此棟を他に移し此に樓閣を造營せしが齊廣薨去の後之を廢し、文久三年齊泰其母龍眞夫人の爲めに再び此地に新館を造營し、「巽殿」と稱す、用材盡く佳なるものを撰び、室の前栽は殊に意匠を籠め、木石の布置宜しきを得て頗る雅致に富めり。

●翠瀧と龜甲松（加賀）

翠瀧は霞ヶ池に隣れる瓢ヶ池の畔にあり、轟轟の音を絶たず、即ち上記の夕顏亭と相對す、龜甲松なるものは霞ヶ池の池心にある龜甲山の周圍に蟠屈する唐崎松にして、此處には有名なる「徽軫燈籠」あり、又紅葉山は園の東端にあり、高さ五間周圍三町餘にして全山楓樹繁茂し晩秋の眺め殊に佳なり、山の中腹に花崗石を以て造れる五層塔あり、京都御室御所にありしを此處に移せりと言ふ、紅葉山の西北麓に鶴鴿島あり、曲水其周圍を繞りて小洲を爲し、中に連理の松陰陽石等あり又三社と廻せし石類を區せる一の華表建つ。

園の南頭字出羽町壹番町に金澤神社あり、鄕社にして菅原道眞の靈を祀り、文政七年の創建なり、初めは藩主の別邸なる竹澤殿鎭守の社として竹澤天滿宮と號せり、境内千五百七十餘坪、本社、拜殿及末社稻荷社、鎭火神あり、其庭園を神苑と稱し、山あり水あり公園内にありて別に一天地を開くものなり、神社の傍らに湧出する清泉を「金城靈澤」と稱す、旱魃數月に及ぶも涸るゝ事なく、其水極めて清し、池側鳳凰山下の巖窟中に碑を建てゝ靈澤の由來を詳記す、其碑銘の中に

北陸之鎭曰白山。雪封其巔。而四時不盡。其峻高逼霄。稱爲本邦三嶽之一。自古屬我藩管内。其麓跨五州。山脈蜿蜒。向北而來。至山崎庄而止。環匝三面。蒼海當其前。中有龍蟠虎踞之都。元精鬱勃。鍾秀標瑞。實爲靖州之雄鎭。

山中温泉

●金澤城址（加賀）

城址は市の中央にあり、初め尾山城と稱す。

天正十一年豊臣秀吉之を前田利家に附與し、利家舊居城能登の七尾より此に移り、其子利長に命じて大に城濠を擴張し尾山城を金澤城に改めたり、當時面積九萬千六百坪餘、此内濠池三萬貳千八百坪餘を修め、東北を大手とし南西を搦手とせる名城たりき、慶長三年より明治二年に至るまで、壘壁塹濠頗る堅牢に久しく北國の雄鎮たりしが、惜い哉明治十四年火を失し舊城は全く灰燼に歸し、今は僅に石川門のみとなれり、前田氏の之を領せざる前、文明年中一向宗の僧徒此地に起りて、豪族富樫氏を滅し、本源寺を建て且つ堡砦を築きし事あり、之れ名高き北國一向宗の一揆にして尾山城は實に其根據地に充てられしものなり、舊記に依れば『當城は子丑の間に向ふ、東西六町十五間南北六町八間許と稱す、文祿元年更に壘石を編纂し、金澤城と號け、慶長四年前田氏德川氏に釁あり、高山南坊に命じて城壘を修め、大に羅郭を成し内塹を堀らしむ、十五年外羅郭の塹を鑿ち作る、寛永九年城水の乏しきを以て、犀川の水を激揚し城中へ入る』と見ゆ

前田家歴代の墳墓は野田山にあり、一に船底山と言ふ、利家は慶長四年六十二歳を以て大阪に薨ず、謚して贈從一位高德院殿前亞相桃雲居士と言ふ、遺命により て此地に埋葬せり、利家病むや備さに身後の事を嫡男利長に遺囑す、猶薨するに臨み『唯だ我が卒後掛念なるは秀頼公幼くして父に離れ給ひ、其後内府と我れとを江戸祖父加賀祖父と常に宣ひ力とし給ふに、我れ卒せば力を落し給はん事遺憾萬々なり』と瞋眼切齒、側にありし國光の脇刺を取りて胸に當て、二三聲呻吟して薨せりと、利家の孤を念ふ事切實なり、青山延光の利家を論じたる中に曰く

大なる哉豊太閤の人を用ふるや、天下の才捜羅せざるなし、尺寸の功甄錄せざるなし、屠瑣の技奬擢せざるなし、微賤の勇激賞せざるなし、此を以て賊を誅し、此を以て海内を汎掃し、此を以て朝鮮明國を鞭撻し、向ふ所意の如くならざるはなし、偉なりと言ふべし、然り而して孤を託する一事に至りては則ち太閤も蓋し憂なきこと能はず、孤を託するは天下の大任なり、君能く其人を知りて、而して之を託し、其任に當りて愧ぢざるもの、近古僅に足利義詮細川頼之を推すのみ、太閤の時人無きにあらず、但だ天命人心巳に歸する所ありて、太閤も之を奈何ともするなきのみ、然りと雖も太閤の宿將にありては、則ち其責に任せざるを得ず、而して當時の宿將利家に如くはなし、太閤必ず利家に望あり、吾れ利家死に臨むの言を觀るに、蓋し慨然として天下の大任に當りて撓まず、其意壯ならずとせず、然れ共徒らに此言を爲すは、事に於て益なし、將た何を以て太閤に報せんや、吾れ聞く利家嘗て加藤清正淺野行長を招ぎ、語るに論語の託孤寄命の章を以てす、此れ必ず以あり、夫れ大厦の傾くは一木の支ふる所にあらず、然れ共臣下にありては則ち必ず力を竭して然る後已む、何ぞ其力の足らざるを顧みるに暇あらんや、彼れ利家は豊臣氏の必ず衰へて救ふべからざるに至るを知らざるにあらず、又天命人心の歸する所に決して他人の能く抗衡する所にあらざるを知らざるにあらず然れ共太閤の爲めに力を竭して其意に負かざらんと欲す、則ち孤を託するの人を擇ばざるべからず』

と論じ鄭元の唐才、景勝の聽猶權詐、三成の詭譎傾險は以て孤を託すべからずとし、徴意を清正幸長に示す所以かと、是れ味ふべき言なり。

揭ぐる所の筆蹟は天正十八年利家小田原征討の役に從ひ、其家臣に兵糧五千俵の輸送を命じたるものなり、前田侯爵所藏に係る。

●小舞子濱（加賀）

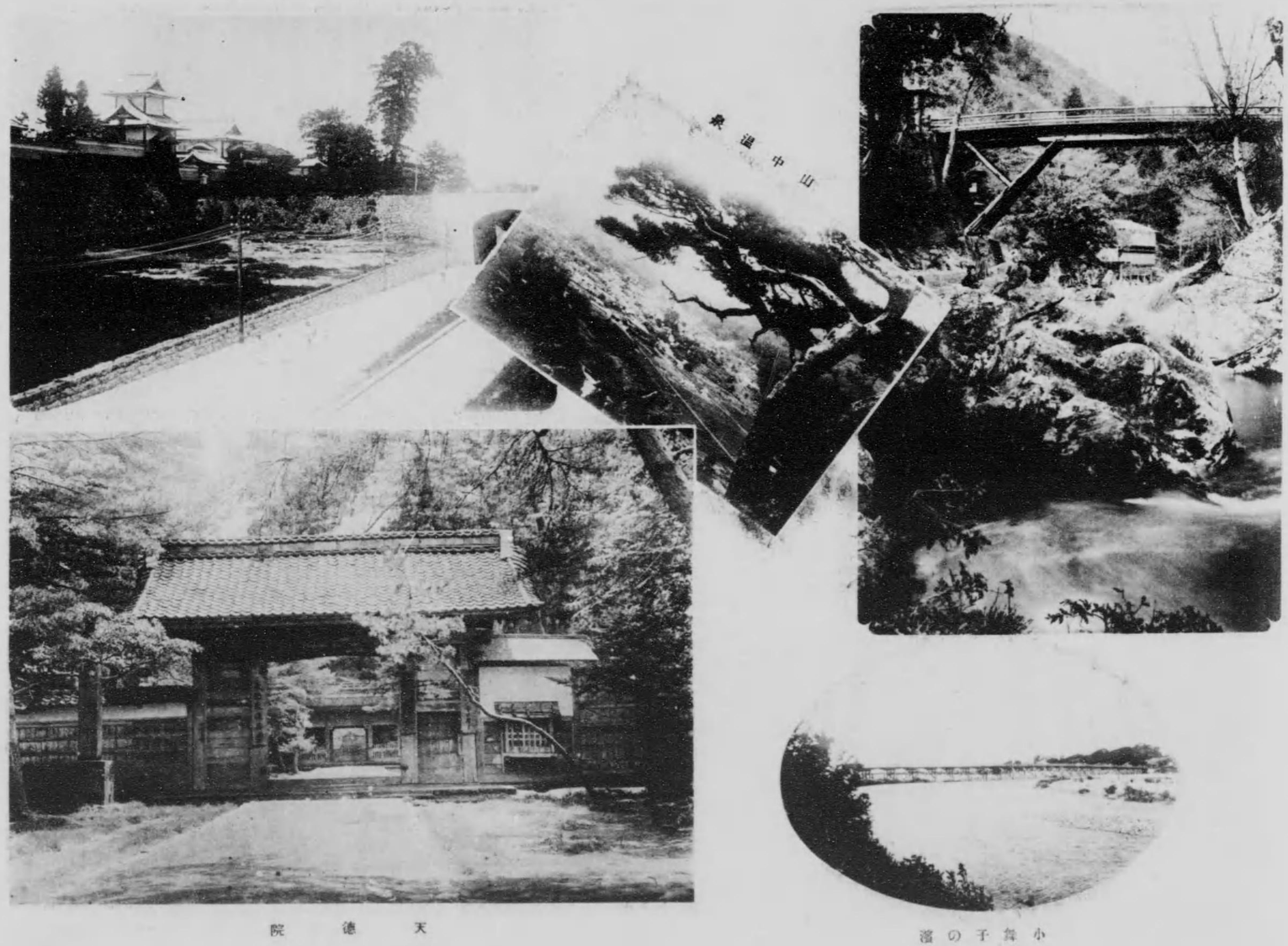
北陸線美川鐵橋の西岸に青松白沙の勝地あり、其風光山陽線の舞子濱に似たるを以て小舞子濱と言ふ、海濱に旗亭數軒ありて夏期に入れば海水浴の適好地として賑ふ、美川停車場より約五町、夏期は避暑者の爲め此に停車す、此地方紫蟹及香魚の產地なり。

●天德院（加賀）

院は金澤市小立野上鶴間町にあり、翠松蒼々として、山門に至るの間大路を挾み、頗る幽邃の淨地なり、元和九年舊藩主前田利常其室天德院の菩提を弔ふ爲めに建設せられたるもの、其後寛文十二年綱紀の時更に規模を擴張し、輪奐の美殆ど人目を驚かしたるも、明和五年火災に罹り、僅かに山門を殘し、後、再建して今に及べり後山には舊藩主の墳墓あり、境内廣く梅花の勝地として聞ゆ。

●山中溫泉（加賀）

大聖寺川の上流兩岸の山嶽峭立する所にあり、大聖寺驛より南方二里餘、泉質は鹽類性にして常温度百十八度なりと、此温泉の發見は聖武天皇の御宇にありて狩野遠久等浴槽を設け、其後廢絶することと久しかりしに、文治年間源頼政の舊臣長谷部信連此山に分け入り、偶々白鷺の疾脚を洗ふを見て其靈泉なるを知り、之を開拓したりと傳ふ。此地頗る景趣に富み、其附近又名勝多し。



金澤城址

山中温泉蟋蟀橋

山中温泉

天德院

小舞子の濱

徳院殿前亞相桃雲居士と言ふ、遺命によりて此地に埋葬せり、利家病むや備さに身後の事を嫡男利長に遺囑す、猶毫ずるに臨み『唯だ我が卒後掛念なるは秀頼公幼くして父に離れ給ひ、其後内府と我れとを江戸祖父加賀祖父と常に宣ひ力とし給ふに、我れ卒せば力を落し給はん事遺憾萬々なり』と瞋眼切歯、側にありし國光の脇刺を取りて胸に當て、二三聲呻吟ざるを顧みるに暇あらんや、彼れ利家は豊臣氏の必す衰へて救ふべからざるに至るを知らざるにあらす、又天命人心の歸する所に決して他人の能く抗衡する所にあらざるを知らざるにあらず然れ共太閤の爲めに力を竭して其意に負かざらんと欲す、則ち孤を託するの人を擇ばざるべからず』

と論じ郎元の庸才、景勝の驍猾權詐、三にあり、大聖寺驛より南方二里餘、泉質は鹽類性にして常温度百十八度なりと、此温泉の發見は聖武天皇の御宇にありて狩野遠久等浴槽を設け、其後廢絶すること久しかりしに、文治年間源頼政の舊臣長谷部信連此山に分け入り、偶々白鷺の疾脚を洗ふを見て其靈泉なるを知り、之を開拓したりと傳ふ。此地頗る景趣に富み、其附近又名勝多し。

神通川

立山頂上

五箇山天柱石

愛本劍橋

五箇山釣橋

●立山絶頂地獄谷（越中）

駿河の富士山、加賀の白山と共に日本三靈山の稱ある立山は、一名を雄山と云ひ、中新川郡立山村にあり、海拔八千五百尺、全山岩石より成り、巍然として雲表に聳え雄姿遠く數十里外より望むを得べし、其絶頂には盛夏の候と雖も尙積雪の殘るを見る。其の連峯は飛騨山脈の一

大伴家持

され、是れに佛敎の因緣輪廻說を附會して俗說したるも少からず、由來火山には多少の怪異を見ざるはあらざるも立山の如きは殊に恐るべき驚異すべき凄景を具へたれば一層迷信を說くの材料となれり

宗良親王

ふるさとの人に見せばや立山の
千歲經るてふ雪のあけぼの

遺族玆處に隱栖せりと云ふ。一書に曰ふ五箇山は村數七十二あり、村民の祖先は平家の落人にて風俗他に異り、此地に神樂踊コキリコ歌なる囃あり、每年中秋に之を行ふ、其囃歌に曰く『波の八島を遙れ來て薪こるてふ深山邊烏帽子狩衣脫ぎすて丶今は越路の岨山に』と亦是れ平氏が末路の悲慘を語るものと謂ふべし。

●立山絶頂地獄谷（越中）

駿河の富士山、加賀の白山と共に日本三靈山の稱ある立山は、一名を雄山と云ひ、中新川郡立山村にあり、海拔八千五百尺、全山岩石より成り、巍然として雲表に聳え雄姿遠く數十里外より望むを得べし、其絶頂には盛夏の候と雖も尙積雪の殘るを見る。其の連峯は飛驒山脈の一部を爲して峻嶺嶮岳累々として附近に起り、山容極めて雄偉の觀あり。山中に稱名川の流れあり其水源を遡りし大日嶽と室堂との中間に噴火口ありて常に異色の水を湛へて硫烟噴騰するものあり是れを地獄谷と云ふ、此他、山中に八大地獄、賽の河原等の名稱ある地あり。絶頂には雄山神社あり社前より四望すれば東には越後の妙高、下野の日光、信濃の戸隱、黑姫、淺間の諸山屹立し、南には八ヶ岳立科山連り、富士山其背後に巍然として雲表に聳え、甲斐の白根山、駒ヶ岳、信濃の駒ヶ岳、御嶽、鎗ヶ嶽、乘鞍岳等を望み、西南には加賀の白山を眺め、西は中越の平野を下瞰し、而して北方洋々たる日本海を望み、遠景近勝翕然として一眸に聚まり來り、轉た雄大崇嚴の感を禁ずる能はざるものあり。登山の順路は富山より南三里餘の上瀧町に至り岩峻を經て蘆峻に出で、夫より歩を進むるに從ひ山路漸く峯蹬し峻嶮次第に加はる、帆立、馬止の峻坂を踰え進む事少許にして稱名川に架したる藤橋を渡り、黃金坂、草生坂、材木坂等を攀ぢ、山毛欅坂に至れば有名なる鷲窟、美女杉、禿杉あり、更に坂を踰へて稱名瀧を仰ぎ、進んで一ノ谷、二ノ谷等の嶮路を經て室堂に達す。室堂は蘆峻を距る九里にして登山者が唯一の休泊所たり、室堂より絶頂へは更に五十九町の嶮坂を登らざるべからず。因に曰ふ、立山地獄谷の事は古來種々の書に記され、是れに佛敎の因緣輪廻說を附會して俗說したるも少からず、由來火山には多少の怪異を見ざるはあらざるも立山の如きは殊に恐るべき驚異すべき凄景を具へたれば一層迷信を說くの材料となれり

ふるさとの人に見せばや立山の
千歲經るてふ雪のあけぼの　宗良親王

立山に降り積ける雪を常夏に
見れども飽かず神かくならし　大伴家持

玉山壁立撫青空
曉酌會仙壇畔雪　鐵鎖攪雲摩月宮
朗吟飛下北溟風　亀田鵬齋

●五箇山天柱石（越中）

東礪波郡なる庄川の上流、城端町、井波町の東南、赤尾谷、上梨谷、大谷、利賀谷を總稱して五箇山と云ふ。此地峯巒重疊して其間に村落點々として所在し、土民の風俗質朴淳良にして宛然太古の趣あり。昔は加賀藩の謫所に充てられたり。山中また勝景に富み、庄川の兩岸怪巖奇石多し、就中最も奇怪なる異觀を示せるものは天柱石なりとす。天柱石は城端町より四里、平村大字松尾の高原中に在り唯だ見る一大巨巖、柱狀を爲して斜に天に向つて屹立すること約三百尺、其幅二十五間、形ち宛かも大魚の天に冲せんとして半身を顯はすに似たり、古來探勝家は相傳へて來觀するもの多し。

●同　釣橋（越中）

五箇山の山谷には鐵鎖を以て釣橋を作り交通の便を計り居れり、一に之を猿橋とも稱す、此種の釣橋は山中六ヶ所の多きに及べり。以て如何に此地が深山幽谷の間に在るかを想ふべし、亦是れ山中の一奇觀たり。

傳ふる所に據れば五箇山は昔時平家の遺族茲處に隱栖せりと云ふ。一書に曰ふ五箇山は村數七十二あり、村民の祖先は平家の落人にて風俗他に異り、此地に神樂踊コキリコ歌なる囃あり、每年中秋に之を行ふ、其囃歌に曰く『波の八島を遁れ來て薪こるてふ深山邊烏帽子狩衣脫ぎすて丶今は越路の岨山に』と亦是れ平氏が末路の悲慘を語るものと謂ふべし。

●愛本刎橋（越中）

下新川郡なる黑部川の上流に架せる奇橋にして愛本村と下立村との間に架す。長さ三十五間、兩岸は斷崖絶壁、橋下數十仞一の支柱を用ゐず、大淀三千風此橋を叙して曰く、黑部四十八箇瀨の川上、合本の刎橋は日本第一の奇棧、宛ら虹梯の天工を奪ふ、東西の岩根に五拱六尋の良木、甲を鐫入れ、片岸五段にはね重ね、行合の間八間には大桁を投渡し棧梁最たく〻しく銅鐵にてくるみ長四十間に欄杆を組みたり、橋より見下せば凡三十尋もあるらむ『橋より下に見る川音の白雨かな』此橋は寛文二年加賀藩主前田綱紀の創設に係ると云ふ。附近の風色亦頗る景勝に富み、殊に晩秋の候は滿山の紅葉、碧流に映じて美觀云ふべからず。

●神通川（越中）

北陸七大河の一にして信濃川に次げる大河なり、源を飛驒の位山に發し諸川を合し越中に入りて神通川と稱し上新川、婦負兩郡の界を爲し下流二派に分れ再び合して北流し富山市の西北部を貫流して東岩瀨港に注ぐ流域約十四里に及ぶ富山を過ぐる流には舟橋を架して神通橋と云ひ長百五十間幅四間五尺慶長元年前田利家の創築に係る越中三奇橋の一として有名なりしが明治十五年舟橋を撤して木橋を架したり。其流域中新大橋附近は明治四十一年以來御獵場に編入されたり。

●高岡公園（越中）

高岡舊城址は即ち高岡公園にして、市の東隅にあり、慶長十四年前田利長此に城き、殿閣の如きは曾て豊太閤より與へられたる『伏見遺館』の良材を用ひて造營せるものなれば、其壯觀匹儔すべきものなかりき、當時利長の威望頗る高く、遐邇畏敬瞻仰せざるはなし、城は山海の險嶮に據らざるも、高垣深濠、要害堅固、無雙の名城と稱せられたり、元和元年に及んで之を廢城し、藩政時代は高岡古城と稱して常に監守を置き、又米穀及鹽等を藏むる倉庫數棟を建設し、高岡奉行之を管理せり、明治八年七月公園となる。

公園としては面積六萬三千有餘坪の地域を占め、四邊の深濠今猶存して碧を湛へ、古色蒼然として掬すべく、青松楓樹鬱として枝を交へ、櫻桃其間を點綴し、園内到る處眺望に富み、園後二上山及伏木港を望むの邊景致殊に佳なり、其規模の宏大なる全國公園中罕に觀る所なるべし、園の中央に射水神社を鎮し、前に射水郡役所、高岡區裁判所あり、後に縣立高岡中學校、縣立工藝學校あり、明治四十二年十月二日、今上陛下東宮として行啓あらせられたる時、玉歩を此園に運ばせ給へり、射水神社は元二上山の麓にありしを明治八年此に遷座せるものにして傳ふる所に依れば養老元年僧行基勅を奉じ、大和國二上山權現を勸請して、二上山上に養老寺を創立し、本社を以て鎮守とせり、元正天皇詔して越中四郡内各戸に、初穂米一升宛を毎年供へしめらる、所謂知識米是れなり、爾來歴代の朝廷深く本社を崇敬し給ひ、延喜の制、名神大社に列せらる、往時本殿、拜殿、鐘樓、九重塔等あり、末社四十九、神人社僧四百八十戸に及べりと言ふ、中世兵亂の爲め社運甚だ衰へ知識米亦絶へたりしが、慶長十五年前田利長社殿を修復し、再び知識米の取立を許可せり、爾來明治四年五月に至るまで、越中全國の各戸より初穂米を納む、明治六年國幣中社に列せらる、祭神は瓊々杵命なり、境内老樹鬱蒼として清風常に紅塵を拂ふ、本社の背後舊三の丸址字小竹藪に『朝陽橋』あり、擬寶珠欄干式の橋なるが、此處を元橋臺と呼び梁址なりしより、明治十一年九月再び此橋を架せり、當時の詩人卷阿詩あり『鳳凰鳴矣。于彼高岡。梧桐生矣。于彼朝陽。奏奏萋萋、雝雝喈喈』により高岡に因み朝陽橋と名けたりと言ふ。

大伴　家持

玉くしげふたかみ山に鳴く鳥の
　聲の戀しき時は來にけり

關守一

波たたでふりにし城の跡とめて
　うきねゆたけき池の鴨鳥

公園に十勝あり曰く、二上の朝霞、公園の盛花、深田の探苗、中川の杜月、小松原の秋草、古城地の水鳥、立山の晴雪、射水港の連帆、高岡の炊煙、社頭の松風にして、共に公園遠近の景を補ひ、亦韻士の吟腸を洗ふに足る。

●櫻馬場公園（越中）

櫻馬場は高岡驛と相對す。

慶長年中前田利長高岡在城の時、騎射場として開設せし所なり、其兩邊に櫻樹を移栽せしを以て櫻馬場と稱したり、馬埒の長さ二百七十六間幅九間餘、利長臣下を率ゐて駿馬に鞭ち、英姿颯爽、櫻雲靉靆たる間に、高潔なる日本魂を練磨せし當年の光景、欽慕に堪へざるものあり延寶年中櫻樹多く枯れたるを以て、町奉行に命じ芳野の櫻樹を移栽せしむ、間々雜ふるに松を以てす、櫻松年を逐ふて繁茂し、毎春綺霞鬱々、白雲搖曳、韶光極めて濃かなり、風流韻士踵を接して此に到る、明治三十四年八月市の公園となり、舊城址高岡公園と共に壯觀を極む。

僧　大夢

亞相當年卜苑裘　土功纔就忽仙游
千年遺愛君看取　馬埒無人繫紫騮

眞如院夙子

彌たかき梢あまたに咲きつゞく
　さくらの春の花ぞゆかしき
花の咲く月の夕べは雪とのみ
　めつる言葉やさぞつもるらん

●繁久寺と前田利長墓（越中）

高岡市の南端下關村に瑞龍寺と稱する名刹あり、是れ前田利常が其祖先利長の菩提供養の爲め、此地に方四萬歩の境地を卜し七堂伽藍を搬建せるものにして其工事は承應三年に始まり、明暦二年に終れり、當寺の山門に登りて北を望めば庄川小矢部の二水蜿蜒として曠野の間を貫流し、伏木港には汽船の黒煙を吐きて出入するあり有磯海には漁船の白帆を掛けて隠見するあり、東方には立山、劍ヶ峰の峻嶺四時白雪を戴きて巍峩崔嵬の勢を競ひ、以て蒼穹を摩するの景悉く雙眸に集まる、乃ち千里を寸尺にするの概あり

此勝景區域にありて別に小天地を劃する處に亦一名刹あり、瑞龍寺と相隣接す、寺を繁久寺と言ひ、瑞龍寺搬建以前前田利長の建立に係る、寺中に利長墓ありて廟門を設け四周頗る淸寂たり、瑞龍繁久の二寺は前田家に關係ある名刹なれば、二寺の殿宇等結構を極めざるものなし。

高岡の地、往昔にありては『關野』と稱し、荒凉たる一曠野なりき、利長此に居城せるより住民增加し商工の業盛んなるに至れり、其當年關野の紀念物たる『七本杉』は僅かに一株殘りて市内御旅屋町に存す、高さ十三丈五尺、亭々として天を擊す、呼んで大杉又明神と言ふ。

し、大和國二上山權現を勸請して、二上山上に養老寺を創立し、本社を以て鎭守とせり、元正天皇詔して越中四郡内各戸に、初穗米一升宛を毎年供へしめらる、所謂知識米是れなり、爾來歷代の朝廷深く本社を崇敬し給ひ、延喜の制、名神大社に列せらる、往時本殿、拜殿、鐘樓、九重塔等あり、末社四十九、神人社僧四百八十戸に及べりと言ふ、中世兵亂の爲め社運甚だ衰へ知識米亦絕へたりしが、

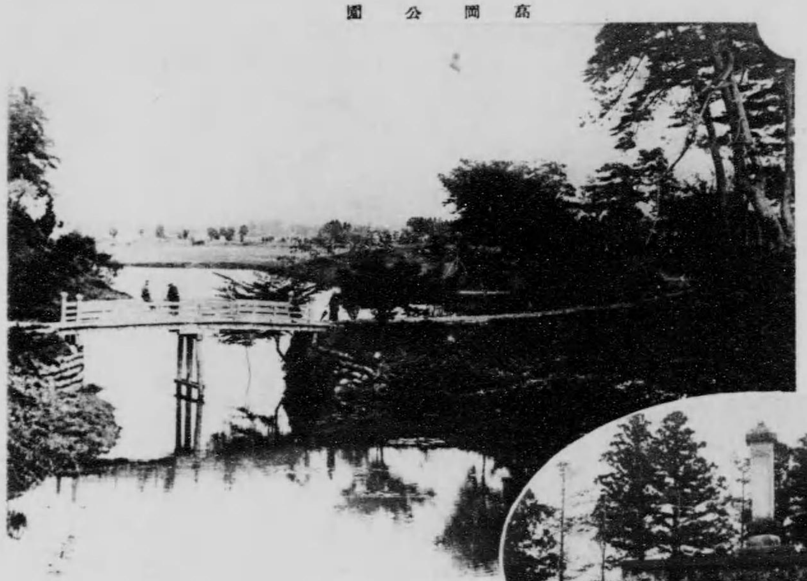
櫻馬場は公園の下を率ゐて駿馬に鞭ち、英姿颯爽、櫻雲霞靄たる間に、高潔なる日本魂を練磨せし當年の光景、欽慕に堪へざるものあり延寶年中櫻樹多く枯れたるを以て、町奉行に命じ芳野の櫻樹を移栽せしむ、間々雜ふるに松を以てす、櫻松年を逐ふて繁茂し、毎春綺霞靄々、白雲搖曳、韶光極めて濃かなり、風流韻士踵を接して此に

を移栽せしを以て櫻馬場と稱したり、馬場の長さ二百七十六間幅九間餘、利長臣

廟門を設け四周頗る淸寂たり、瑞龍繁久の二寺は前田家に關係ある名刹なれば、二寺の殿宇等結構を極めざるものなし。

高岡の地、往昔にありては『關野』と稱し、荒凉たる一曠野なりき、利長此に居城せるより住民增加し商工の業盛んなるに至れり、其當年關野の紀念物たる『七本杉』は僅かに一株殘りて市内御旅屋町に存す、高さ十三丈五尺、亭々として天を擎す、呼んで大杉に明神と言ふ。

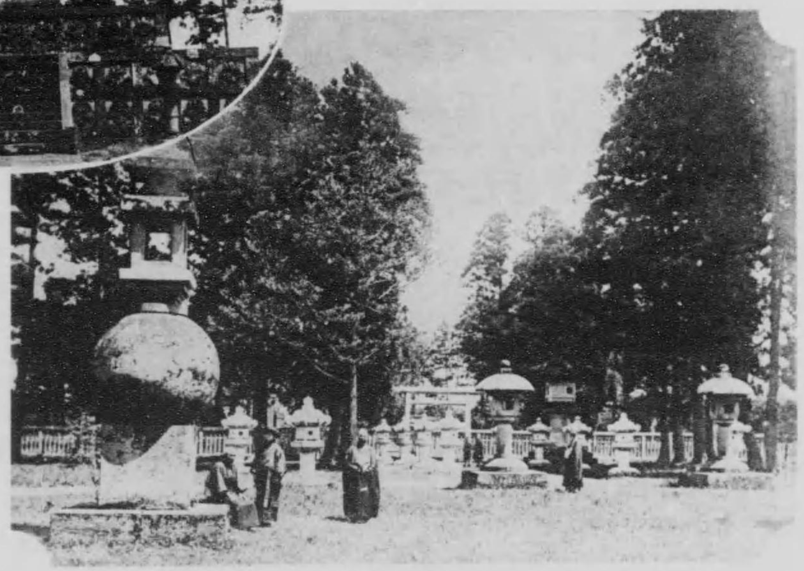
高岡公園



櫻馬場公園

前田利長廟

繁久寺



前田利長廟前の景

白山公園

春日山古城址

萬代橋

白山神社

寺泊港

信濃川

●白山公園（越後）

新潟市の西端に在りて信濃川に沿ふ、園内に新潟の鎮守神たる白山神社あり、是れ公園の名に呼ぶ所以なり。前面は溝渠を隔てゝ本町通り一番町に接す、園の廣袤約四千五百坪、丘陵、池沼の景趣甚だ佳く丘に倚り、池に臨める亭榭亦頗る瀟洒にして四季の散歩に最も適せり。白

流にして、水源を信州に發す、故に信濃川と云ふ。飯山の高原を貫流し、越後國界總瀧に至るや川中岩石並列し、水勢急激にして瀑布の如く舟航運輸の便は茲に至つて全く杜絶す、中魚沼郡に入りて中津清津の二川を合せ、北魚沼に至り魚野川を容れて長岡に走り、澁見、刈矢田、五十嵐の諸水を合せ更に諸川を合し新潟市街の東北より海に入る、延長約八十里

名寄に此地を叙して曰く「寺泊はそのかみ鹽燒く海士の子のみ住みて幽なりしを鎌倉三代將軍の時代より居家もつき〳〵しく暮し侍りし、承久三年、順德院佐渡へ御遷行の時、寺泊浦に御船よそほひの間、驛長菊屋が館に滯留、今も其家の庭に構へし磯山の中段に平かなるところあり、之を皇居の址なりと傳ふ云々。日蓮上人佐渡配流當時の遺跡と傳へらるゝ法

●白山公園（越後）

新潟市の西端に在りて信濃川に沿ふ、園内に新潟の鎮守神たる白山神社あり、是れ公園の名に呼ぶ所以なり。前面は溝渠を隔てゝ本町通り一番町に接す、園の廣袤約四千五百坪、丘陵、池沼の景趣甚だ佳く丘に倚り、池に臨める亭榭亦頗る瀟洒にして四季の散歩に最も適せり。白山神社は伊弉諾尊、伊弉冊尊、菊理姫命を祭る、舊記に據れば當神社は元龜年間の創建にして素と眞言宗の寺刹に屬し、加賀の白山權現を勸請す、永祿年中火災に罹り、正保元年之を再興し、現存する寶龜院は其の別當なりしが、明治維新後神佛混淆を禁ぜられし結果、分離して白山神社と稱せり、社殿は清楚にして高雅境内樹木亭々として茂り、翠色信濃河水に映じて風色掬すべきなり、毎年三月十八日、六月十八日の二回例祭を行ひ群集盛況を極む。

●萬代橋（越後）

溝渠縱横頗る水利に便なる新潟市は到る處に橋梁架せられ、大小約二百を數ふ就中最も大なるは信濃川に架したる萬代橋なりとす。橋の長さ四百二十八間幅四間、明治十九年の建設に係る、蓋し北陸道中第一の長橋なり。橋は新潟市より中蒲原郡沼垂町に通ずるものにして、橋梁は全部水面上に架し、新潟市の瓦甍粉壁は畫の如く其影を信濃川に映ずる所、居然として一帶虹の如き萬代橋の横はれる壯觀は、他に多く其比を見ざるなり。

鱸　松　塘

雖把橋名呼萬代　妾心不易與橋同
郎意却如橋畔柳　纔吹綿去又隨風

●信濃川（越後）

信越二國に跨りて流る千曲、犀川の合流にして、水源を信州に發す、故に信濃川と云ふ。飯山の高原を貫流し、越後國界總瀧に至るや川中岩石並列し、水勢急激にして瀑布の如く舟航運輸の便は茲に至つて全く杜絶す、中魚沼郡に入りて中津清津の二川を合せ、北魚沼に至り魚野川を容れて長岡に走り、澁見、刈矢田、五十嵐の諸水を合せ更に諸川を合し新潟市街の東北より海に入る、延長約八十里その注入する溪流多きを以て、一に八千八川の稱あり。其海に入らんとする河口は水勢最も猛烈を極め、海水を突破して激流する事一里餘、河水海波と衝突し、爲めに往々船舶を覆へす事あり、河口は即ち新潟港なり。

みすゞ刈る信濃の山路千曲經て
ながらへ落る越の大川

岡部　春平

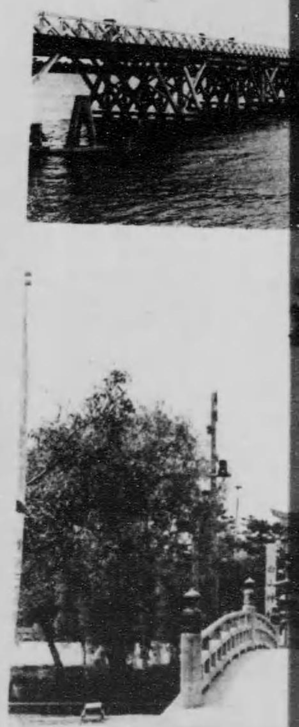
一書に曰ふ、信濃川の運送は魚沼郡六日町に胴高船あり、四十八艘を備へ、貢米四十二俵を積むを定法とす、六日町より川口を經て長岡まで通船するに、山川放瀬々多く、船滯る事度々あり、仍て舟の造作板薄く柔軟なり、此舟瀨なき所を乘る事ならず、米八九十俵も積むべき大さなり、浦佐にも同船五十艘あり、其外小出島、十日町、千手、上野、小千谷邊も皆同船あり、長岡に大胴船八十餘艘あり、米四斗入二百俵積なり云々。

●寺泊町（越後）

新潟市を距る西南約十一里半、出雲崎の北方三里半に在り、北陸道の舊驛にして當國の海岸中佐渡に至る最も近き地なるを以て同島との航通は常に頻繁を極む戸數約三千餘、市街は海岸に沿ふて長く東北に連り、彌彦、角田の二峯市街の北に聳え、東は丘陵長く連續して風光頗る秀麗なり、近年海岸には海水浴場の設備ありて夏季茲に遊浴するもの多し、越後名寄に此地を叙して曰く「寺泊はそのかみ鹽燒く海士の子のみ住みて幽なりしを鎌倉三代將軍の時代より居家もつき〳〵しく暮し侍りし、承久三年、順德院佐渡へ御遷行の時、寺泊浦に御船よそほひの間、驛長菊屋が館に滯留、今も其家の庭に構へし磯山の中段に平かなるところあり、之を皇居の址なりと傳ふ云々。日蓮上人佐渡配流當時の遺跡と傳へらるゝ法福寺は市中に在りて名刹として知らる、其他圓福寺は佐藤忠信の塔と稱するものあり、是れ或は承久の亂に此地へ流謫せられたる藤原忠信の墓ならんとの說あり

●春日山（越後）

信越鐵道の高田、直江津間に於ける車窓の西方に當りて、蜿蜒たる丘陵の中、平坦なる頂上、老松鬱蒼たる壘址を望見すべし、是れ即ち春日山にして此地西頸城郡春日村に屬し高田町より西北一里、直江津町より西南一里餘に在り。是れ戰國時代北越の英雄として諸將の心膽を寒からしめたる不識菴上杉謙信の居城の址なり。一書に曰く、春日山本丸は鉢峰と云ふ、城を引廻し大池あり一方に愛宕山あり、此山高くして二の丸三の丸を見下す、山の內曲輪あり大なる堤あり則ち直曲輪と云ふ搦手の坂を中條と云ひ御門を千貫と云ひ大手は辰巳に向ひ恐らく日本無双の名城也と。天正六年三月十三日謙信茲に歿して、義子景勝嗣ぎしが慶長二年會津に移封し堀秀治代りて茲に居城したるも幾もなく城は荒廢に歸し、今は唯だ僅に一堆の丘陵に當年英雄の俤を偲ぶに止まるのみ。而かも謙信の詠み殘せる「極樂も地獄も共に有明の月ぞ心にかゝる雲なき」の辭世は、其の徹底せる大悟的襟懷を示して千秋の下尙ほ其高風を仰がしめて餘りありと謂ふべし。



彌彦神社

●親不知の險（越後）

飛驒山脈の末端海に入らんとするの處西頸城郡隨一の險路にて、市振より青梅に至る一帶の海濱約五十町の間を親不知と稱す、一方は峭嵓亂峙して、削如たる斷崖は屏風の如く、一方は洋々たる大海怒濤を逐つて崖裾を嚙む、此險難の間、僅に國道を通ず、行旅の客は其怒濤の退くを俟ちて道路を走り、浪寄せ來れば、斷崖に穿たれたる天然の岩穴に身を忍ばせて避け斯くして歩を進めて茲を過ぐ、而して其寄せ來る波の間を走るや、相互に救援くるに暇あらず、親は子を失ふも知らず、子は親を顧みるを得ず、蓋し其名稱の起る所以なり、而かも是れ昔時の旅行譚に殘るのみとなり國道は明治十六年山の半腹を穿ちて通じ、其通行する頭上の崖には「如砥如矢」の四大字を刻せり。更に大正に至りて富直線の開通と共に山腹鐵道を通じて斯の如き天下の險路も唯だ車窓より瞥見し得るに至れり。左に橋南谿が東遊記の一節を抄して昔時如何に親不知の旅行が危險なりしかを紹介せん

「越中越後の境に親不知子不知と云ふ所あり、北陸道第一の難所として普く人の知る所なり。越中立山の裾、北海へ張り出たる所にて、市振といふ驛より歌村と云所までを山の下と稱して二里半あり、立山の裾ある故に、斷巖絶壁にて路徑もつけがたき故に波打際を旅人通行する事なり、一方は壁を立てたる如き山、一方は大海なり、風無く沈靜なる日は、旅人通行する道幅七八間或は十間ばかりあり、又所によりては半町一町もある所あり、然るに風起りて波荒き時は直ちにかの絶壁の所へ波打かけて通路なし。右二里半のうちに一箇所長さ五六町の間、別に道幅狹き所あるを、世に親不知子不知と云ふ甚だ難所にして親も子も思ふに遑なしと云ふ心より土俗稱し來りたるなり、其間絶壁の根に岩穴あり十間程づゝ置きて其穴幾つもあり、波の打寄る時は通行の人此穴へ走り入て波の引く時を見合せて走り過ぎ又波來れば次の穴に入りて之を避く、若し北風强き時は數日を歴と雖も通行ならずとなり、去々年も越後の商人、越中に越ゆとて此所を無理に通りかゝり中程にて波風殊に强くなり、件の穴に逃入りたるに穴際まで大波打掛て走り過ぐべき隙なく八日が間其穴の中に居、漸う波風靜り命助り其穴を出でたり、其間の饑渴心遣ひ、言ふべからずとなり云々。

●野積濱、男竈女竈の景（越後）

寺泊町を距る一里半、西蒲原郡の境に接する一村にして、背面國上山を負ふて北は怒濤打ち寄する北海に面す、野積の音、往々にしてノゾミと呼ぶ一說にノゾミとは臨海の意なるべしと云ふ。野積濱以北彌彦山麓の海岸一帶を浦濱海岸と稱す、此邊巨巖海中に出沒し、姿態百出、怒濤の間に隱見し千狀萬態應接に遑あらず、男竈、女竈は亦此海濱に於ける奇景の一になり、行旅の客、殊更に寺泊町に醵して此の海濱の奇勝を遊賞するもの尠からず。又野積村には西生寺なる古刹あり、弘安年間の再建に係ると云ふ、寺に弘智法印の乾軀を藏す、是れ所謂越後七不思議の一に數へらるゝものなり。

●彌彦神社（越後）

西蒲原郡なる所謂越後平野の海岸に峙つもの之を彌彦山とす。彌彦神社は此山の頂上に鎭座す、國幣中社にして天香語山命を祭り、傳へて崇神天皇勅して社殿を創建せしめらるゝと云ふ。天香語山命は天照皇大神の曾孫にして、神武天皇の御宇に此地に降臨し給ひ、賊を平らげて民を燒炭の裡より救ひ田野を拓き農業を勸め衣食を足らしめ禮節を敎へ給へり是を以て國民尊敬して其德に感じ越後一の宮と稱す、降りて元明、村上の諸帝又深く尊崇し給ひ屢々殿廟を改修せしめ給へり。境内坪數約壹萬四千五百坪、一の華表は國道の西側に建ち、本社、幣殿、祥殿、額殿、其他の社宇域内に散在し、中の華表の傍に御手洗川の流あり、域内の老樹は千古の翠枝を交へて鬱然として繁り風趣頗る幽邃を極む。且つ收藏の社寶には貴重なるもの多く正宮大明神の大額は小野道風の眞筆に係るものなりと云ふ。

●小丸山別院（越後）

中頸城郡春日村大字大場に在り。西本願寺の別院にして同宗信徒の最も崇敬するところなり承元元年眞宗の開祖親鸞聖人其師源空上人の事件に坐して此地に配流せられ居ること五年、具さに辛酸を嘗め難行苦行を凌ぎて、眞宗の弘通に努力したる結果信徒は翕然として集り、北陸に於ける眞宗の勢力は非常なる强大を爲すに至れり、此地は眞宗に採りては斯くの如き發祥の舊地なるを以て、同派の門葉、遠近の道俗協力して聖人謫居の舊址たる小丸山に一宇を創建し惠心僧都の作なる阿彌陀佛の像を本尊として安置し、且つ聖人が曩に信徒渡邊某に與へたる眞筆の彌陀名號を茲に安置せり、是れ即ち形見の名號なるものなり、因に、此名號は當時聖人一紙を八枚に切りて認めたる内の一枚にて又八ッ切の名號とも云ふ。

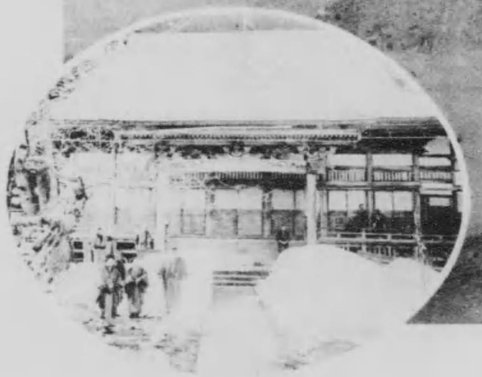
●同別院門前（越後）

是れ小丸山西本願寺別院門前の景なり。親鸞上人舊蹟たる小丸山は後に叢林の嶺峙ち、前は深淵の沼、左右に繞り中に些かなる山脚十歩に足らざる地に二基の石碑を建つ共に親鸞聖人の遺跡を記念するものなり。

野積漁男踊・女窩

彌彦神社

親不知の嶮



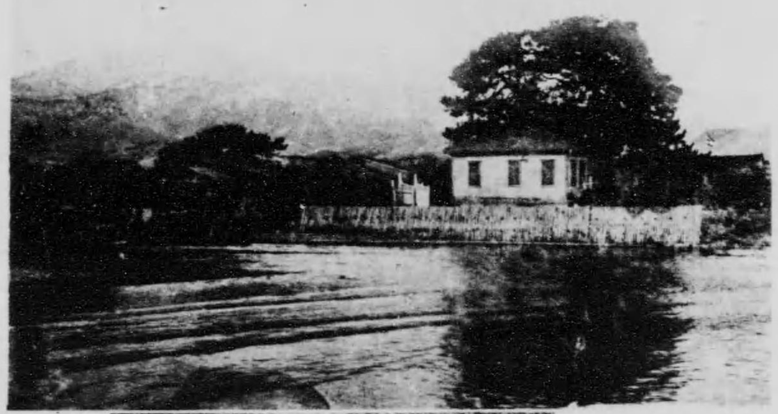
五智小丸山別院

行する道幅七八間或は十間ばかりあり、又所によりては半町一町もある所あり、然るに風起りて波荒き時は直ちにかの絶壁の所へ波打かけて通路なし。右二里半のうちに一箇所長さ五六町の間、別に道幅狭き所あるを、世に親不知子不知と云ふ甚だ難所にして親も子も思ふに遑なし

つもの之を彌彦山とす。彌彦神社は此山の頂上に鎮座す、國幣中社にして天香語山命を祭り、傳へて崇神天皇勅して社殿を創建せしめらるゝと云ふ。天香語山命は天照皇大神の曾孫にして、神武天皇の御宇に此地に降臨し給ひ、賊を平らげて民を塗炭の裡より救ひ田野を拓き農業を

●同別院門前（越後）

是れ小丸山西本願寺別院門前の景なり。親鸞上人舊蹟たる小丸山は後に叢林の嶺峙ち、前は深淵の沼、左右に繞り中に些かなる山脚十歩に足らざる地に二基の石碑を建つ共に親鸞聖人の遺跡を記念するものなり。



東港より金北山遠望

慶子女王御墓

渡津神社

布施砂利ケ濱

相川金山

●相川鑛山（佐渡）

俗に佐渡の金山と稱し、古來本邦屈指の大鑛山として知らる。相川町の東北、北澤川の溪間に位す。本鑛山の發見は慶長六年なりと云ふ。嘗て上杉謙信此地の金鑛を採掘して軍用資金に充てたる事ありしとの說あり、德川時代にありては幕府が財政運用金の最大產出地と稱せられ

と稱せられたるが、今は國幣小社に列せり、祭神は五十猛命を主神とし大屋津姬抓津姬の二神を配祀す、創建年代は詳らざるも正和年間に社殿を改造し、其後文祿二年水災の爲め社壇悉く流失したるを以て同村八幡宮に合祀し後再び舊地に造營せり、社域は約千三百坪翠巒四周に續りて樹木鬱茂し、前面羽茂川の流を控へ、稻田之に連續して景趣頗る佳なり。

みたれあしのかゝる折しも
おのれのみ青葉ぞ見ゆるかもの淵

●布施砂利ケ濱（佐渡）

一名田切須と云ふ、佐渡郡に屬し、鵜脇の北に在り、海濱田切須の鼻に小布施明神の祠あり。此邊一に土器塚と稱す、蓋し石器時代の遺跡あるに依てなり、此地眞野灣の南角にして北は二見の臺鼻に

●相川鑛山（佐渡）

俗に佐渡の金山と稱し、古來本邦屈指の大鑛山として知らる。相川町の東北、北澤川の溪間に位す。本鑛山の發見は慶長六年なりと云ふ。嘗て上杉謙信此地の金鑛を採掘して軍用資金に充てたる事ありしとの說あり、德川時代にありては幕府が財政運用金の最大產出地と稱せられたる一大寶庫にして佐渡奉行なるものを置き重罪囚を此地に送りて以て金鑛採掘に從事せしめたりき、明治維新後、帝室の所有に歸し、漸次泰西の新式製法を採用し、總ての設備に完全を期したりしが其後三菱會社に拂下られ、現今は同會社の所有に屬せり、各深さ一千尺の大竪穴坑と高任坑、各深さ三百五十尺の鳥越坑と大切坑、三百四十尺の百枚坑及び道遊坑等は、盛に採掘され、之に伴ふ工場には鑛物淘汰所、搗鑛製煉所、混鴻製煉所、鎔鑛製煉所、沈澱製煉所、分析場、器械製造所、營繕所、選鑛所等あり、而して鑛夫の數は男女合せて三千人に上ると云ふ。一書に據れば佐渡鑛山は採掘面積百八十三萬五千七百坪にして其地體を構成する地質は第三紀層の凝灰岩、泥板岩並に之を貫通する輝石富士岩にして鑛脈の主なるもの三條あり、互に平行して東西に走り、傾斜何れも急峻なり其大切山脈の頂上にあるものを大切脈又は鳥越脈と云ひ、左澤に沿ひ銀山町を距る二町餘なり、青磐山脈の頂上にあるものを青磐脈と云ひ、二者の中間にある谷底のものを大竪脈と云ふ、其厚薄長短極りなしと雖も、青磐脈中のものは概して變化なく、金銀を含有すること多しと云ふ。

●渡津神社（佐渡）

佐渡郡羽茂村大字飯岡に鎭座す、昔時は佐渡式內九社の第一にして當國の一宮と稱せられたるが、今は國幣小社に列せり、祭神は五十猛命を主神とし大屋津姫抓津姫の二神を配祀す、創建年代は詳らざるも正和年間に社殿を改造し、其後文祿二年水災の爲め社壇悉く流失したるを以て同村八幡宮に合祀し後再び舊地に造營せり、社域は約千三百坪翠巒四周に繞りて樹木鬱茂し、前面羽茂川の流を控へ、稻田之に連續して景趣頗る佳なり。川を隔てゝ前面に二峰屹峙す、恰も雌雄相對するが如き趣きあり、名けて妹脊山と云ふ、佐渡名勝の一として數へらるゝ

●金北山と夷港（佐渡）

北部即ち大佐渡に所在する佐渡第一の高山にて一名越高嶽又は雪高嶽とも稱す海拔三千八百三十八尺、山脈二ッに分れて一は二見の海岸室ケ鼻に至て盡く、相川町、河原田町、夷町、金澤村、吉井村、二宮眞光寺等よりは大約三里にして山頂に達するを得べし。頂上より眼を放てば東西に日本海を望み南に國府川の金溪谷、及び全島南半の連山を下瞰し、遠く兩羽、能州、越後の野をも眺望すべし。

一角巍然鼇背峯　大久保湘南
夜衝星斗金銀氣　不知何處秀靈鍾
霞佩仙人乘海水　春照穹窿氷雪容
著書未遂虞卿誌　玉冠天子揖芙蓉
愧我名山夢裡逢

夷港は本島東島東海岸第一の大邑にして、新潟港を距る海路三十二哩にあり、港頭の灣を夷灣と云ひ其南口を湊町、北口を夷町と稱す、此の二口を合稱して兩津町又は夷港と云ふ、島內有名なる加茂湖の水は東北に決して夷灣に注ぐ、其湖口に一橋を架す、名けて兩津橋と云ふ、是を以て兩市街を相通せり、人情淳樸にして物價又廉なりと云ふ。

みたれあしのかゝる折しも
おのれのみ青葉ぞ見ゆるかもの湖　宗忍　法師

●布施砂利ケ濱（佐渡）

一名田切須と云ふ、佐渡郡に屬し、龜脇の北に在り、海濱田切須の鼻に小布施明神の祠あり。此邊一に土器塚と稱す、蓋し石器時代の遺跡あるに依てなり、此地眞野灣の南角にして北は二見の臺鼻に對す一帶の海濱を砂利ケ濱と稱し風光甚だ明媚なり。

●慶子姫御廟（佐渡）

一の宮大明神と稱す佐渡郡宮浦村にあり、傳ふる所に據れば順德帝御在島中に二人の皇女一人の皇子降誕あり、御母は供奉の官女三人中誰にか有りけん定かならず、或家の記には御母右衛門佐の局と記せり、後、薨去後島人等神と祀つて、一宮、二宮、三宮大明神と仰ぎぬ、一宮は慶子姫と申したり。神殿は後年屢々兵燹に罹りたる事は當神社の別當慶宮寺の大般若經奧書に記せり、慶宮寺は一宮明神造營と同時に創建せられたるものなりと傳へらる。今より約二百年前、慶宮寺の住僧一宮明神を國中一の宮と言做し度津神社になさんと謀り飯岡一の宮別當と爭ひ官裁を仰ぎたる結果敗訴したり此時よりして實說を失へりとぞ。

●經ケ島遠望（佐渡）

本島外海の一小島嶼にして彼日蓮上人の弟子日朗法師が文永十一年三月日蓮赦免の敎書を携帶して佐渡に航し最初に到着せる島にして同宗に採りては忘るべからざる宗敎史蹟たり。

怒濤岸を嚙んで、怪岩奇石其の間に趣伏し、遠望水天相接する所、畫圖の如き青螺を見る絕景筆紙の盡し得べきにあらず。

●順德帝御遺蹟（佐渡）

（黑木御所址）

佐渡郡平泉村大字泉に在り。是れ承久の往時、北條義時の專横暴慢の毒牙にかからせられて此地に遷され給ひたる順德天皇が假の御所を置かせ給ひし所謂黑木御所址なり、萬乘の尊を以て潮風吹き荒む孤島の茅屋に幾春秋を過し給ひし當年を回顧し奉れば漫ろに暗涙を禁じ得ざるものあり、當時天皇が「啼けば聞く聞けば都の戀しきに此里過ぎよ山ほとゝぎす」の御製ありたるは即ち此地なり。義時は順德天皇を此地に遷し奉りしと同時に後鳥羽法皇を隱岐に流し奉りしを以て天皇は佐渡に着し給ひし當時隱岐の方は如何あらんかと案じ給ひて「いざゝらば磯打つ波にことゝはん沖の方には何事かある」と詠ませ給へり、天皇は御徒然の餘り都忘と云ふ白菊を玆に植ゑさせられ日に愛でさせ給ひしが、此菊近來まで叢の裡に稀に咲き出でたりと云ふ。斯くて天皇は此の絶海の孤島に二十二年の星霜を送らせ給ひ仁治三年九月十二日を以て遂に黑木の御所に崩じ給へり。玆に於て御隨身なる後池藏人權頭清範は玆より東方十數町を隔つる泉澤の中に一地を卜して尊骸を奉葬せりと云ふ。

●順德天皇御陵（佐渡）

黑木御所址を距る西北一里、佐渡郡眞野村に在り、眞野山陵と稱す。天皇の崩御當時御隨身の後池清範が奉葬せし地は幾百年を經て、荊棘の間に埋沒したるが延寶七年佐渡の國司曾根吉正、幕府に請ふて五十間四方の地を寄附し、國分寺末なる眞輪寺をして之を護らしめたり。

明治維新後、眞輪寺を以て眞野宮と爲せり。御陵墓は上方五六町に在りて、方五十間高さ二尺餘の石垣を遶らし、中央には青松一樹と二基の石燈籠を建てたり。是れ曾根吉正の造營に係る。

短夜や仁治三年薄けむり　旦　水

●順德帝御手植の櫻

（佐渡）

是れ佐渡の童謠に「佐渡の三崎の御所櫻枝は越後に」云々と謠はるゝもの、小木町の西方二十町、岬村大字小木村なる海潮寺境内に在り。古櫻にして高さ二丈餘、花は重瓣淡紅色を呈す、寺傳に據れば順德天皇櫻を愛させたまひ、此地に遷幸の後、人を都に遣はさられて數種の櫻を取寄せさせられ、黑木御所の南に栽えさせ給ふ、此櫻は即ち其一なりとぞ。中世頃までは世に稀なる大樹にて葩も大くなり其名越後にまで聞えたるが、惜いかな枯槁して現存せるは其の蘖生なりと云ふ。

●妙宣寺（佐渡）

佐渡郡眞野村大字阿佛坊に在り、即ち國分寺の東方なり、日蓮宗にして山號を蓮華王山と稱す。寺傳に據れば當寺は阿佛坊日得の開基に係る、日得は俗稱を遠藤左衞門尉爲盛と云ひ北面の武士たり、承久三年順德帝此地に遷幸あらせらるゝや爲盛其の供奉の一人として玆に移住す仁治三年帝崩御の後は薙髮して阿佛坊と名乘りたるが、文永八年日蓮上人當國に流謫せられし際、爲盛入道潛に衣食を送りて日蓮の危急を救ひ、又深く敎法を崇信せり、既にして日蓮赦されて鎌倉に歸り次で身延山に移るや爲盛又屢々日蓮を訪ふて其敎を受けしと云ふ、弘安二年爲盛卒し其子藤九郎盛綱繼で敎法を信じ自ら豐後日滿と號し其家を捨てゝ寺とす是れ當時の創建なり、素と新保村に在りしを嘉曆年間竹田の城主本間泰昌當寺を其居城の傍に移し天正中其孫高滋田園を寄附し更に今の地に移せり、當初寺號を單に阿佛坊と稱せしが是年より妙宣寺と號するに至れり、境内四千四十九坪、本堂、祖師堂、庫裡、玄關、階樓、五重塔、妙見堂、寶藏、山門、仁王門等あり、境地の三方は山を遶らし一方は村落に向つて構へられたり。

●日野資朝墓（佐渡）

妙宣寺境内の東北隅に在り。五輪の石塔にして高さ僅に三尺餘、方五寸に過ぎず、近代其周圍に柵を繞らし石燈籠を建設せり。日野中納言資朝は正中二年十二月北條氏の爲めに此地に流されたるが、資朝を預りし國府の地頭本間山城入道は鎌倉の命を奉じ一族本間三郎をして資朝を殺さしめたり。明治二十年、日野家の末裔なる敘伯爵柳原前光此墓に詣で、爾來毎年七月永代法會を執行せり。

●阿新丸の隱松（佐渡）

資朝の墓と共に妙宣寺境内に在り。是れ阿新丸が復讐の當夜、當寺に逃れ入りて潛匿したりと傳ふる松にて、後世稱して阿新隱松と云ふ、枝葉四方に繁茂して其姿趣恰も青木を張れるが如し。

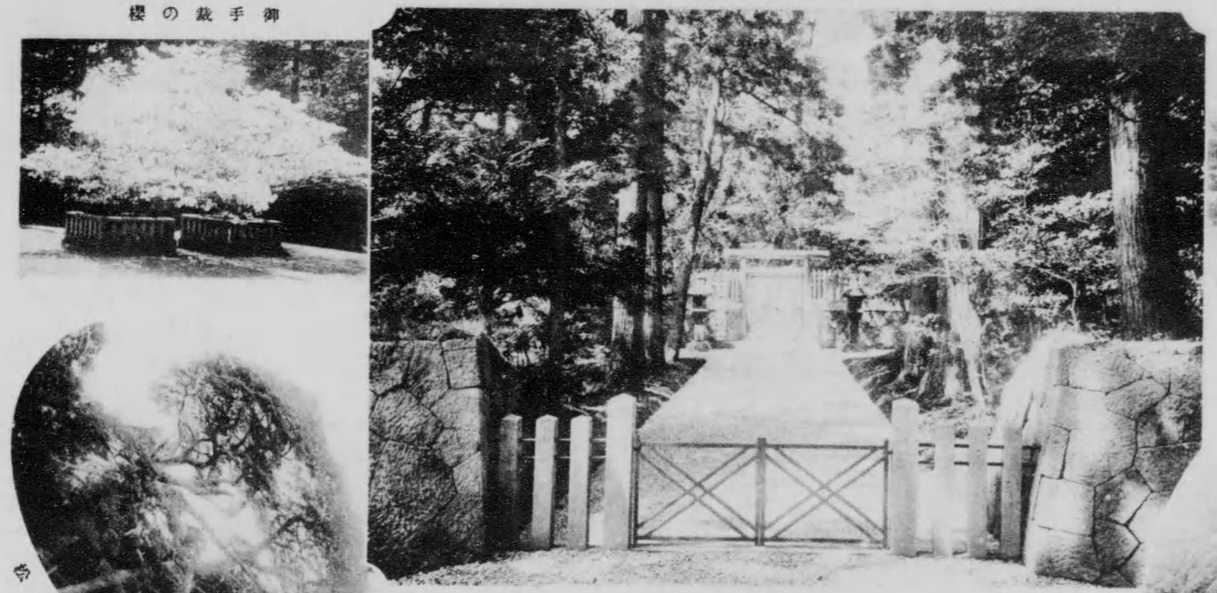
阿新丸は日野資朝の一子にして、父の流謫を悲み、跡を追ふて佐渡に渡り、資朝の預けられたる本間に就て父に面會を請ひたれども許されずして、父は終に殺害されたるより、阿新丸は悲憤に耐えず、夜間潛かに本間三郎の家に入り本間を斬て父の仇を復したる事は、太平記に詳記して人の知る所なり。

●根本寺三昧堂（佐渡）

日蓮上人謫居の舊蹟として知られたる寺刹にして妙宣寺の東北約一里、新穗村字塚原に在り、境内七千六百八十坪、祖師堂外二三の堂宇あり、結構頗る莊嚴なり。天文年間僧日成の開基に係る、境内に弔犬塚なるものあり、是れ日蓮上人の身代りに立ちし家犬の塚なりと傳ふ。

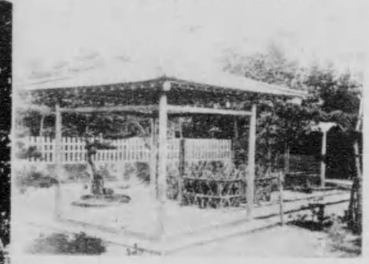
順德院御遺蹟黑木御所

國佛門と日野資朝墓

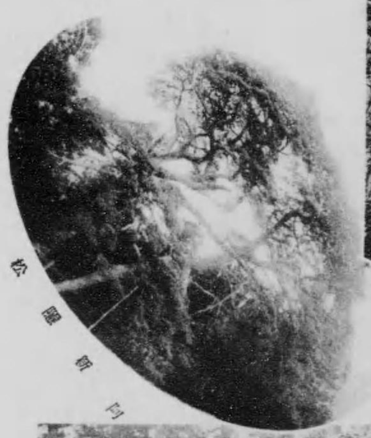


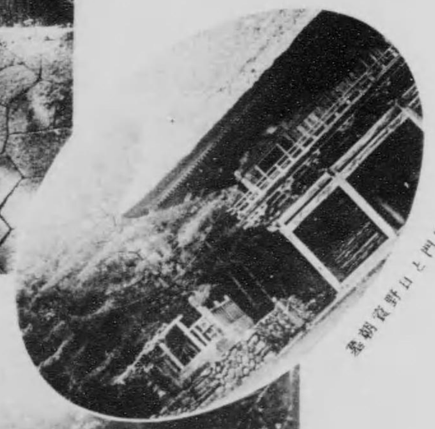
順德院御陵

御手裁の櫻



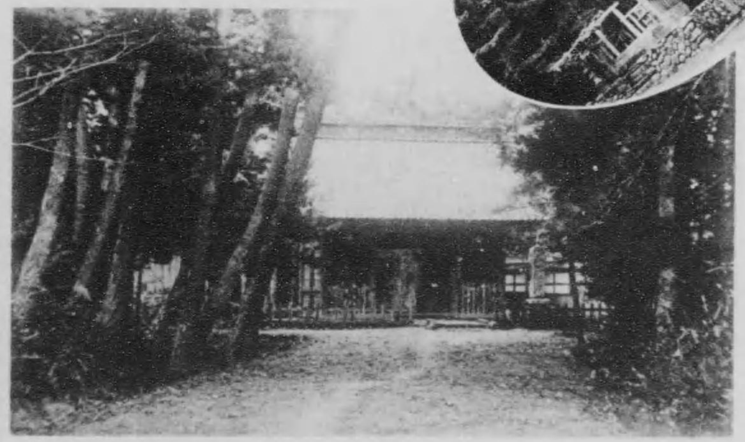
順德院御遺蹟黑木御所





國德門と日野宮朝臣

根本寺三昧堂



妙宣寺

延寶七年佐渡の國司曾根吉正、幕府に請ふて五十間四方の地を寄附し、國分寺末なる眞輪寺をして之を護らしめたり。

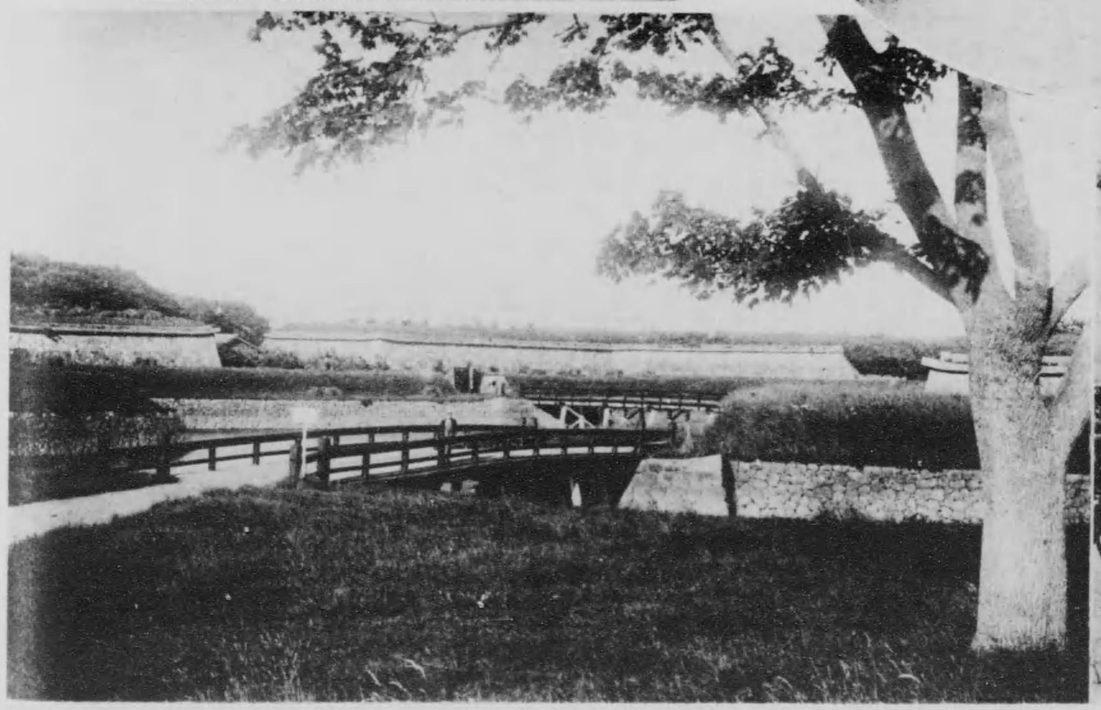
明治維新後、眞輪寺を以て眞野宮と爲せり。御陵墓は上方五六町に在りて、方五十間高さ二尺餘の石垣を邊らし、中央

訪ふて其教を受けしと云ふ、弘安二年爲盛卒し其子藤九郎盛綱繼で教法を信と自ら懇後日滿と號し其家を捨てゝ寺とす是れ當時の創建なり、素と新保村に在りしを嘉曆年間竹田の城主本間泰昌當寺を其居城の傍に移し天正中其孫高滋田園を寄附し更に今の地に移せり、當初寺號を單

日蓮上人謫居の舊蹟として知られたる寺刹にして妙宣寺の東北約一里、新穗村字塚原に在り、境内七千六百八十坪、祖師堂外二三の堂宇あり、結構頗る莊嚴なり。天文年間僧日成の開基に係る、境内に弔犬塚なるものあり、是れ日蓮上人の身代りに立ちし家犬の塚なりと傳ふ。

福山舊城

大沼公園より駒ケ嶽を望む



五稜郭址

函館公園雪景

●函館港棧橋（北海道）

五港の一にして、札幌、小樽と共に北海道の三大都と稱せらる、地形狹長にして東北に延き海水深く入りて巴字形を爲すを以て一名を巴港と稱す、海中長く斗出せる棧橋は多く其比を見ざる有數の長大棧橋として知らる、此地小樽、室蘭、根室、青森の各地方に至る航路の起點にして全道第一の公園と稱せらる、四時遊客多く殊に夏期を以て最も盛とす鐵道省は爲めに夏期臨時に大沼公園驛を特設す。

●福山舊城址（北海道）

渡島國松前郡福山町に在り、福山は北海道南端の一都會にして舊松前藩時代には城下の一市街として其開闢最も古く四百年來の歴史を有し、史蹟亦尠からず、福山城址も蓋し其一なり、城址は市街の北方、七面山上に存す、歴史の記す所に據れば福山城は慶長五年松前慶廣の創築

因に云ふ、此地火山噴出物の爲め河流を塡塞して生じたるなりと、軍川、宿野邊川の二水茲に注入し、餘水は更に折戸川となりて流出す、沼中鯉、鮒等を產す。大沼は長祿年間下國氏の臣相原政胤城山

●函館港棧橋（北海道）

五港の一にして、札幌、小樽と共に北海道の三大都と稱せらる、地形狹長にして東北に延き海水深く入りて巴字形を爲すを以て一名を巴港と稱す、海中長く斗出せる棧橋は多く其比を見ざる有數の長大棧橋として知らる、此地小樽、室蘭、根室、青森の各地方に至る航路の起點にして北海に入るの關門たり東京を距る百九十八里、青森へは五十九浬、室蘭へは七十二浬、札幌へは凡四十五里二十三町小樽へは五十四里十一町、市街は一小半島に跨り、後に函館山を負ひ、前面には七重濱を望み、街路整然、商業極めて繁盛なり。

岡鹿門

水如鏡面盆々照　山似潮頭續々來
幾曲層灣回舵處　喜看萬竈擁崔嵬

鱸松塘

繞港群山列畫屏　明波一片鏡光青
誰知浩蕩北溟水　滙作灣環巴字形

●函館公園（北海道）

函館市街の東南に位置す、地積約壹萬四千坪、南西に函館山を負ひ、北は函館港に臨み、東は津輕海峽より大洋に對し眺望展濶、風光頗る佳なり。本園は明治七年の開設に係り、同十一年官民共同して園を修築し、假山を設け花樹を植え、爾來屢々工を加へて風趣を富ましめたり背後に峙つ函館山は、御殿、藥師、立待の三峰より成り其形宛も牛の臥せるが如きより一名を臥牛山と稱す。

伊藤春畝

一夜涼風生海洲　滿天秋氣入吟眸
悠々詩酒何邊在　偏在臥牛山下樓

芳川越山

休言北島異南洲　到處江山好入眸
紅葉滿山秋似洗　月明巴港幾層樓

●福山舊城址（北海道）

渡島國松前郡福山町に在り、福山は北海道南端の一部會にして舊松前藩時代には城下の一市街として其開闢最も古く四百年來の歷史を有し、史蹟亦尠からず、福山城址も蓋し其一なり、城址は市街の北方、七面山上に存す、歷史の記す所に據れば福山城は慶長五年松前慶廣の創築に係り、東西九十三間南北百二十六間、廣袤八百五十七坪にして正北を追手門とし櫓櫓一ヶ所、東南隅に聳へ、望樓二ヶ所其西方に設けらる、西北に繞れる壕は長さ六十間、東に繞るものは長さ二十間、共に廣さは十間に滿たず、當時之れを陣屋と稱したり、後寛永十六年松前公廣修築を加へたるが文化四年松前章廣、梁川に移封さるゝに及び松前奉行之に據りたり。文政四年松前氏復封し嘉永二年に至り松前崇廣幕府の命を奉じて別に新城を築きたるも明治維新後廢藩して後毀ちて民屋となせり、今の松城町は即ち此の新城址なり。

長尾秋水

海城寒柝月生潮　波際連檣影動搖
從此五千三百里　北辰直下建銅標

同

邊小吏話寒稜　孤館蕭々殘夜燈
熊子關南天欲雪　羊蹄嶺北水成氷

●大沼公園（北海道）

函館を距る十七哩森驛を距る十四哩大沼驛附近にして此地駒ヶ嶽の南麓に所在す、大小二沼ありて兩沼相連りて瓢形を爲し其最も狹き所をセバットと稱し茲に鐵橋を架して汽車を通ず、汽車此の水廊を回りて走り。仰げば巍然たる駒ヶ嶽は目前に峙ち呼べば將に應せんとす、俯せば大小無數の島嶼は碧水に沿ひ凹凸せる灣は數へて三十二に及ぶ風光頗る明媚にして全道第一の公園と稱せらる、四時遊客多く殊に夏期を以て最も盛とす鐵道省は爲めに夏期臨時に大沼公園驛を特設す。

因に云ふ、此地火山噴出物の爲め河流を塡塞して生じたるなりと、軍川、宿野邊川の二水茲に注入し、餘水は更に折戸川となりて流出す、沼中鯉、鮒等を產す。大沼は長祿年間下國氏の臣相原政胤城山の戰ひ敗れて自盡せる地なりと云ふ。

●五稜廓（北海道）

函館市街を距る東北二十五丁、龜田村の郊外に在り。安政二年函館奉行たりし竹內下野守保徳、堀織部正利熙、武田斐三郎をして經營せしめ翌三年土切を起して、元治元年に至つて完く竣成せり、土壘菱花形を成せるを以て五稜廓と號く、周圍に濠を設け龜田川の水を茲に延きて注入す、廓に三門を設け、西南を追手とし、正北、東北に各一門あり、追手門外三角土壘を設け內外を蔽遮し小濠を鑿ちて其兩端を大濠に通せしむ、又五橋を架す而して廓內縱橫に水道を通じ以て飲用に供せり、廓の周圍約千九百間、高さ約一丈五尺、直徑百八十間、地積五萬五千百二十二坪、濠外三面に壘を設く。

明治戊辰の年十月榎本武揚、大鳥圭介、荒井郁之助等幕府脫走の徒茲に據りて官軍に抗し幕軍掉尾の勇を振ひたるも遂に戰ひ敗れて榎本等官軍に降り事平定して後、五年五月之を廢毀し空廓孤然として今尙存し漫ろに當年を偲ばしむるものあり。

現時函館本線の一驛にして上磯輕便鐵道線の分岐點なり。榎本等が最後の血戰を爲せし所は驛の東南二十町に在り。

榎本武揚

七重濱接五稜廓　耳熟朝々喇叭聲
一夜松杉林外雨　懷來感往到天明

●札幌市街（北海道）

北海道廳の所在地にして石狩國の西南に位する大都會なり、東西三十町、南北一里五町、街衢整然として平坦砥の如し市街の大通りを南北に分ち、又創成川を以て東西に區別せり、商賈は多く大通の南に住し、官衙、學校、病院、諸會社は概ね北に在り、就　巨商大賈の多きは一二條通及び南一二丁目とす、而して此間最　繁華殷賑を極む。北海道廳を始め札幌支廳、警察署、郵便局等重なる官衙は備らざるなし。此地明治維新前までは鬱蒼たる密森なりしが北海道拓植の機運熟すると俱に鋭意經營施設に努力し、以て今日の盛況を呈するに至れり。

●札幌公園（北海道）

札幌區北七條の西端にあり、地積約八萬坪を有す。明治四年開拓判官岩村氏の設計に係る、老樹、巨木、泉石布置の巧を盡くし、風趣頗る掬すべし、琴似川の源泉は、園内の池水より流出し、兩岸樹木參差として澗水に映じ夏季一層風致を添え來り遊ぶもの甚だ多し。

●中之島遊園地（北海道）

市街の南端にあり、方原野を隔てゝ豊平川を控へ、西方には藻岳山を負ふ、園の廣袤約三町、長方形にして北西及び南西に各口を設けて路を通ず、園内樹木蓊鬱として幽邃を極め、櫻樹また多く栽植したれば春季は爛漫として美觀を呈す、園の北方に瓢形の一池あり、水清く波靜にして頗る雅趣あり、池中に旗亭を設く池の南方に洋風の一館あり展覽會、品評會等は必ず玆に於て開催せらる、而して平素は北海道物産陳列所として衆庶の縱覽に供す、其の背後に一競馬場あり、毎年札幌神社の祭典當日には必ず競馬會を催すを例とせり。

●神威古潭の絶勝（北海道）

全道有數の名勝地にして、旭川驛を距る西方四里に在り、石狩川の兩岸相峯りて巉崖壁立し、千仞の屏障天を摩して峙つ。此地空知、雨龍、上川三郡の境界點にして、又石狩、上川兩平野の關門たり。今や鐵道開通し、車路又通じ容易に此の天險、自然の奇勝を探勝するを得べきも明治以前にありては、雲棧深く閉ぢて、險崖深潭、異奇の棲息したりしが如し。左に石狩日記の一節を抄す。

神處（神居古潭）シキウシバと云ふに着す、此所土人等皆荷物を上げ乘り來りし舶を繫ぎ置く所なり故に此名あり、又向ふ岸に岩窟あり其奥を知る者なし、雪中には皆此に入て宿すとかや、是より兩岸峨々と聳え、山尖り樹老ひ、怪岩奇石にして苔滑かなり、岩間には種々の異草多く見へ、水怒り谷響き、如何にも龍蛇をも潜ましむるが如く怪まる、なれど別に異なる物も住まざれども斯の如く數十日の水上に潜龍沙魚の居ること奇といふべし土人括槍を提げて岩上に暫時佇立せしが四尺許の潜龍沙魚を一尾と三尺許のチライ（いわないとう）を得來る、又一人は赤箭天麻を五六本取來る、是れは土人の薩摩芋なりとて燒て我等にすゝめ味噌汁にもなし與れぬ、夜に入り跡舟も來りしが故、石上に一罐を傾け、巖根を枕として眠る又一奇なり。十八日早晨蓬を出づれば土人石の回に水を入れて嗽がしむ、余は一人を伴ふて斷崖に攀ぢ巨石を刻ね越し一々名區を見物し行くにホロンプシベと云ふ所兩岸川中へ聳へたる處に一ッの瀧あり、五段になつて落るなり、ホロシユロと云ふは其上水中に大なる烏帽子の如き岩突出す、ホンレプシベは前に同じく南岸壓まる所の瀧なり、奇石水中に拶出して其間獅子飛ともいふべき所にして土人等が常に其下の渦卷ける深潭の上より括槍を遣ふ所なりとぞ、傍に鬼の足跡とて凡そ三圍り許りの井の如き穴三ッあり、深泉一丈餘、又僅に五六間を過ぎてエモシクシといふは山靈の鬼を斬らんとして此處に及先を切込みし處なりと云ふ、サヌシベリといふは兩岸愈よ峯り其上水渦を卷きテッシオコナイとは南岸に一條の飛泉あり、水底に柵を結びし如く一すぢの石垣の樣なるものあり、過ぎてハルシナイといふに出る所にて少し逆流に成りて丸木船も五六艘備へあり、是より又船にて上るなり、其度の間に傍の石面に記し置く。

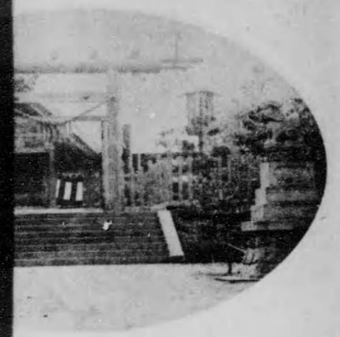
水聲耳既慣　眠到東方白　雲晴日三竿
起來光漱口　殘山亦剩水　危棧蜀中向
歷々起奇景　筆凡慙放翁　山中兩奇絶
神劉與鬼工　看來皆破膽　造化巧無窮
當罅水愈怒　吼々恰如雷　矚目皆堪記
愧無華客才

水底は磊々たる大石苔滑かにして厚く水急なり崖樹枝を接し葉密にして根を露はし、掌立の嶮崖には白糸を亂せしが如く或は布を曝せるかと怪まるゝ飛泉數條の處を過ぎ左の方にイワシャバ（鬼首）といふ處に至る、數丈の巨岩の水中に聳立す土人等は此所にて木幣を削りて途中の安を祈る、アソーナイフイラとは突出したる大岩に流水碎けて波濤を逆立す、カモイネトバチとは七八丈の岩立恰も鬼の體の如き物峙立す此邊に到る愈々急流なり

●氷柱（北海道）

石狩中流の絶勝地、神居古潭は四時その景を誇る、就中冬季に入れば、奇巖怪石、水晶と氷化し、積氷相累りて、一個の一大柱を形成し、到る處に林立するを見る、壯觀言語に絶す、亦是れ北海道に於ける一勝たるを失はざるもの也。

札幌神社



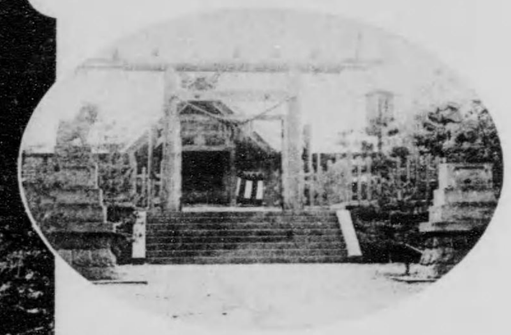
中の島遊園地

したれば春季は爛漫として美觀を呈す、園の北方に瓢形の一池あり、水清く波靜にして頗る雅趣あり、池中に旗亭を設く池の南方に洋風の一館あり展覽會、品評會等は必ず玆に於て開催せらる、而して平素は北海道物産陳列所として衆庶の縱覽に供す、其の背後に一競馬場あり、毎年札幌神社の祭典當日には必ず競馬會を眠る又一奇なり。十八日早晨蓋を出づれば土人石の間に水を入れて煙がしむ、余は一人を伴ふて斷崖に攀ぢ巨石を刻ね越し一々名區を見物し行くにホロンプシベと云ふ所岸川中へ聳へたる處に一ッの瀧あり、五段になつて落るなり、ホロシユロと云ふは其上水中に大なる烏帽子の如き岩突出す、ホンレプシベは前に同じの如き物峙立す此邊に到る愈々急流なり

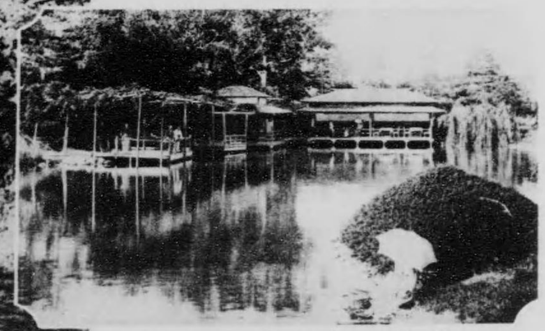
●氷柱（北海道）

石狩中流の絶勝地、神居古潭は四時その景を詩る、就中冬季に入れば、奇最怪石、水晶と氷化し、積氷相累りて、一個の一大柱を形成し、到る處に林立するを見る、壯觀言語に絶す、亦是れ北海道に誇ける一勝たるを失はざるもの也。

神威古潭



札幌神社



中の島遊園地

氷柱

札幌市街

海釣岩

天賣島

手宮公園

アイヌ古文字

船踊港

羊蹄山

◉小樽手宮公園（北海道）

小樽市街の西北十六町に所在す。小樽は後志國の區にして、北西南の三方は山岳丘陵に圍繞せられ、唯東方の一面一帶は小樽港に瀕す、蓋し北海道西海岸第一の要港たると共に、又全道第一の都會なり。手宮は小樽市街の一部にして小樽より分岐したる手宮線の終點地なり。停車場は海に臨み、棧橋を設けて汽車より直出せり。越へて同十三年開拓使、吏を遣はして其圖を寫生せしめたり。其際此地の漁家白鳥三右衛門の地に於て多くの石槍を堀り獲、今博物館内に保管しつゝありと。而して前述の石文に至つては諸家各其意見を異にし、或はクルーニック古代の文字なりと云ひ、或は支那古代の文字なりと云ひ、又は石器時代の事を記したるものと爲し又古代豪族の徽章なりと稱し或は石器時代の墓標ならん等諸說紛

地味痩瘠して耕作に適せず、然かも漁利多きを以て内地より玆に出稼するもの少なからずと云ふ。

◉後方羊蹄山（北海道）

海拔六千四百尺、北海第一の靈山にして一に蝦夷富士と稱す。膽振國虻田郡の西北嶺然として天を摩しつゝあり。素火山にして絶頂大陷凹を爲す其周圍約一里、是れ噴火の址なりと云ふ。傳へ云ふ

●小樽手宮公園（北海道）

小樽市街の西北十六町に所在す。小樽は後志國の區にして、北西南の三方は山岳丘陵に圍繞せられ、唯東方の一面一帶は小樽港に瀕す、蓋し北海道西海岸第一の要港たると共に、又全道第一の都會なり。手宮は小樽市街の一部にして小樽より分岐したる手宮線の終點地なり。停車場は海に臨み、棧橋を設けて汽車より直ちに貨物を揚げ卸すを得べし。舊炭礦鐵道の工場亦茲に存し、市街工場亦多く甚だ殷賑なり。

此地明治維新前は小樽内と稱し、松前家の臣氏家氏の支配に屬し、數十軒の漁家僅に砂濱に散在したる一部落に過ぎざりしが、明治二年政府は開拓使を設置したる以來、札幌市街は駸々として發達するに伴ひ内地との交通益々頻繁となり、各縣各地より移住する者漸次增加し市街は膨脹し、物資集散の燒點地となり、二十三年更に此地に海外貿易を開始し愈よ殷賑を極めて今日の繁盛を呈するに至れり。尚手宮公園の他に小樽公園あり、市内花園町に在りて、一に花園公園と稱す。又同公園内に、居然として蟠屈せる一巨石あり、俗に手宮の石文と稱し居れり、石面にアイヌ文字の刻文あるも何人も之を通讀する能はず頗る難解の文として傳へらる、其文今寫して東京帝國大學に在りと云ふ、聞く所に依れば嘗て小樽埠頭數百歩の西方、百尺許の懸崖絶壁の地に於て石を切りて之を發見したりと、初め榎本海軍中將は開拓使大書記官山内提雲が石鏃、石劍、雷斧及び陶器、古獨髏等を土中より發掘し獲たるを聞き、明治十一年來つて之を觀たる際又此の文を刻したりとぞ、其翌十二年香港大守ヘンヰッシ來觀の時は風雨の爲め腐蝕せられて其大半を失ひ其後又壁崖崩壞して若干尺露出せり。越へて同十三年開拓使、吏を遣はして其圖を寫生せしめたり。其際此地の漁家白鳥三右衛門の地に於て多くの石槍を堀り獲、今博物館内に保管しつゝありと。而して前述の石文に至つては諸家各其意見を異にし、或はクルーニック古代の文字なりと云ひ、或は支那古代の文字なりと云ひ、又は石器時代の事を記したるものと爲し又古代豪族の徽章なりと稱し或は石器時代の墓標ならん等諸說紛々として決する所なし。土人の言に依れば、是コピトの器具なりと云ふ。コピトは即ち小人は短人侏儒の謂にして古人にあらず、或はアイヌ以前此地にエスキモー人種にても住したるにはあらずやとの說を爲すものあるも、恐らく非ならん、現に檜山郡ちいよ村（小砂村）は其昔し小人居りしを以て名づくと、されば小人は短人侏儒にあらずとの說あり。

●小樽港外豹岩（北海道）

小樽港外の海中に在り、海豹茲に來つて岩上に憩ふことあるより此名ありと云ふ。海豹は寒帶に於ける水產動物にて軀幹長く、頭圓くして外耳を有せず四肢共に短小にして五趾に蹼を有す前肢は臂まで皮膚内に隱る、後肢は後方に延び前方に屈する能はず全身に毛密生し光澤ありて體長六七尺、性柔順にして人に馴れ易し。

●天賣山（北海道）

天嚮國苫前郡に屬する島にして、燒尻島の周圍二里にあるもの、之を天賣山と云ふ島の周圍二里八町、島形東北より西南に延長し、其北西偏は最高點六百十八尺に達す、斷崖にして海に臨み、山勢南に面して漸次低下す。天賣山は即ち此島内に在り、風光又掬すべき趣あり。

人家は島の南東岸に散在し、天賣村と云ふ。投錨地亦島の南東側に在り島内の地味瘦瘠して耕作に適せず、然かも漁利多きを以て内地より茲に出稼するもの少なからずと云ふ。

●後方羊蹄山（北海道）

海拔六千四百尺、北海第一の靈山にして一に蝦夷富士と稱す。膽振國虻田郡の西北巍然として天を摩しつゝあり。素火山にして絶頂大陷凹を爲す其周圍約一里、是れ噴火の址なりと云ふ。傳へ云ふ古代阿倍の比羅夫蝦夷を征して茲に政所を設置せりと、アイヌ語には此山をマッカリヌプクと稱す、往時雌岳（マーネシク）雄岳（ピンネシク）と云へり、雄岳は今の後別岳にして雌岳は即ち後方羊蹄山なり。山は整肅なる圓錐狀形を爲し、全山微瑕なく四望一樣の態を示せり。尻別川の本流は山の東北西三方を繞り南方の一面虻田の平野を展開し遠く洞爺湖畔に至る、洞爺村より山麓まで四里十町あり山嶺まで一里十八町、山麓より三、四合目までは樅、椴等茂生し六合目以上は笹原にして八合目以上は絶險にして登岳頗る困難なり、山嶺の眺望最も佳く、風色甚だ雄大なり、蓋し口蝦夷の勝概ね茲を以て盡すと云ふ。

●忍路海濱（北海道）

一に潮路と云ふ。後志國忍路郡鹽谷村の字にして春部岬の東方十八町、海中に突出せる一小地峽に沿へる海濱なり。即ち是れ歌棄磯谷と共に所謂追分節の絶唱として著しく知らる。

忍路高島およびもないが
せめて歌棄いそやまで

其の港は南東に彎入すること約半里、幅僅に一鏈餘に過ぎず、風波を防ぎ得るも小舟の外は入港するを得ず、又戸長役場、警察署、郵便局、學校等ありて、北偏の海邑として比較的諸種の設備あり。

●利尻富士（北海道）

北見國稚内海岬の西南八里の海中に横はれる島嶼あり、利尻島と云ふ。リイシリとは方言高山ある島の義なりとぞ。東西四里、南北五里十町、周圍十五里十六町餘、西北四里を隔てゝ禮文島の香深港と相對す、其間一條の海峽を爲す。島の形狀宛も寶珠の如く、中央に高山あり、利尻富士是なり。山形頗る美にして圓錐狀を爲し、高さ五千七百四十八尺、元來噴火山なるも現今休火山に屬す、山頂四時雪を戴き、山脚は全島に伸張し環海四面より之を望むを得べし、山麓は概ね鬱樹林を爲し、四合目以上に至れば全く火山質の砂礫を以て被はる。島の北海岸に本泊、鴛泊の二村あり、東海岸には石崎、鬼脇、南に仙法志、西に沓形の諸村あり。本島は禮文島と共に北海に於ける著名なる漁場にして春夏の候は商賈の本島に航する者頗る多し。

●室蘭灣（北海道）

膽振國室蘭郡の海岸、太平洋に面する一帶灣形を爲す、之を室蘭灣とす。灣内東西一里十町、南北一里、深さ三十尺、四季風浪の害なく頗る碇泊に適す、埠頭は明治五年の起工に係り長さ二十五間幅六尺、灣内に第五軍港を設置す。灣口の岬上には燈臺を設く、高さ海面より六十九、、燈火は白色にして三海里を照すと云ふ。灣に臨む室蘭港は全道有數の開港場にして大船常に港内に泊し、諸種の設備整ひ、室蘭鐵道の起點にして海陸交通の要衝に當れり。此地函館を距る海上七十九浬、東は浦河、大津、釧路、厚岸、根室等の東海岸一帶の海港に通じ、西は膽振沿岸の漁業地を控へ、市街殷賑を極む。又此地札幌を距る卅三里二十町、小樽を距る四十二里十一町、苫小牧を距る十七里十二町宗谷を距る百十五里餘なり

●アイヌ土人風俗（北海道）

アイヌ土人の風俗は全道各地方に依て多少の相異あるも概して男子は髮を被り髭髯を美にし、目深く眉聯り、額上を剃刷し、耳には銀環を貫き滿身多毛なり。女子も亦髮を被り、白布の帓額を爲し、耳朶に連環を穿つ、其既婚者は口唇に刺墨を施し手甲を刺し、縱横文を爲して以て他意なきを誓ふ。其衣服に於ける、男子は通常楡皮織（アッシ）を着け、衽を左にし居常帶を束ねず。其外出するや必ず弓矢を携へ槍を持ち、脊に長鋏を負ひ、腰に小刀を佩び徒跣にして履を穿たず、其鮭の皮の靴を穿くは雪中を歩む時に限れり。而して雨行には蓑あるも笠を戴かず、其官府に謁し、宴集の際にも酋長は華麗なる蟒服を穿ち或は内地婦人の襠を被る、女子は鍵間に鏡を懸け、鏡邊彩條を穿ち、之に青玉金銀の環、銅鏡等を貫きて裝飾となし以て其容儀を修む、且つ深く肌膚を露はすを耻るを以て水を渡る時と雖も骨て衣を褰げず、其嬰兒に哺乳する時、布を以て之を掩ふ。女子が平生の任務は、薪を採り、楡皮衣を織り、禽獸を養ひ、又良人の出でゝ漁するあれば、從ひ行きて之を助く。

土人の性質、遊俠を好み、食足りて事なき時は常に燕飲して逸樂に耽り、陋屋に甘んじて壯大を好まず、神を信ずる事甚だ厚くして窮達擧げて神意に任す、故に態度鷹揚にして悠々迫らず、多くは朴直魯鈍なり、蓋し名利の念なく、極めて自然にして敢て貯蓄を事とせず、山野に獵し、河海に漁り、山菜を食ひ、獸血を啜り、食は朝暮を凌ぐに足り、住は身を容るゝに甘んず、寔に太古の民たり。而して親子、夫婦、兄弟の間、慈愛孝悌の情に篤く、飲食又必ず禮讓あり、酒を酌むに七分を以て度とし滿酌を卑しむ、土人は曆日なく故に其生年數を知る者甚だ少く、唯だ口碑を以て過去を記憶す。

●アイヌ土人の熊祭（北海道）

熊祭はアイヌ土人の儀式中、最も盛んなるものにて、此祭りを行ふが爲めに、熊の子を捕へ來りて飼養し、三年ばかりにて、之を殺し以て饗宴を張る、此日壇を築き幣を植へ刀槍寶器を具へて神座を飾り萬人親族相會し酒二行にして主人は天地四方を射る、客次で立ち熊を射、遂に壓して之を殺し酒食を供へて祭を畢り、其肉を割き肉を煮て飲宴し酒の盡くるを以て期とす、而して其殺したる熊の頭は之れを棒に挿して、住處の周に立て、其の數の多きを以て家の名譽として誇る、之れをアイヌの熊祭と云ふ。

●義經神社（北海道）

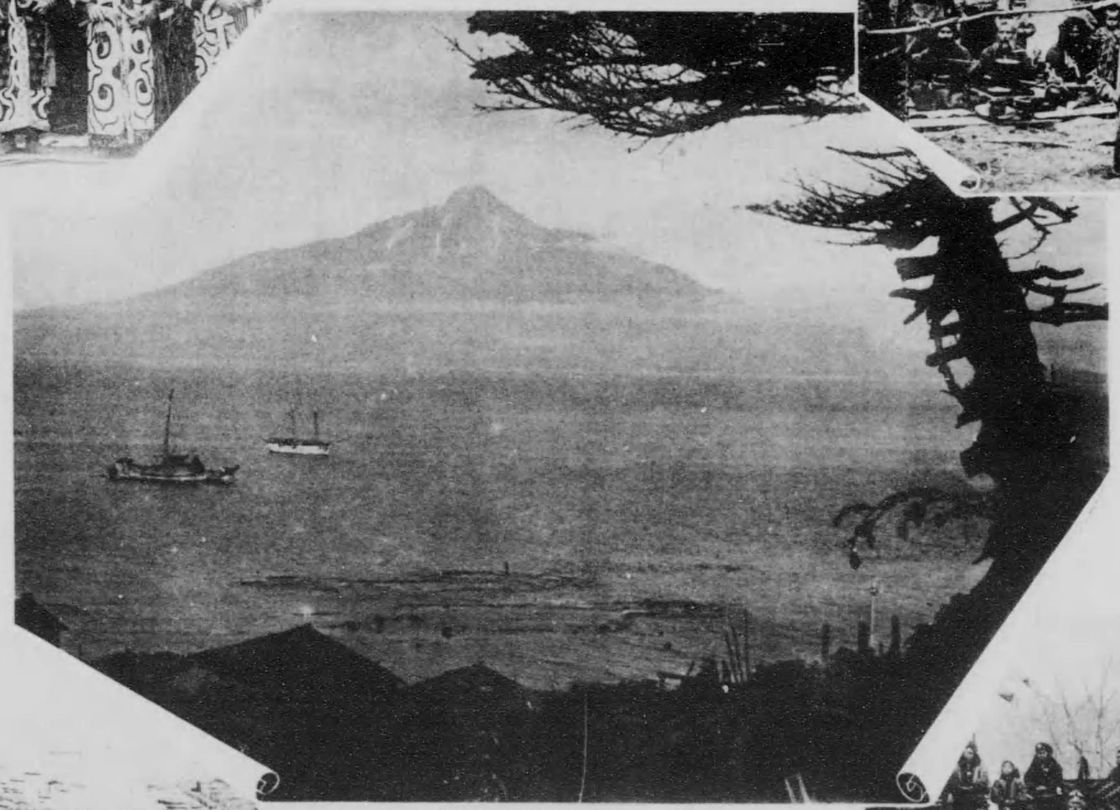
日高國沙流郡、佐璃太より上流五里、平取村字ハイノサウシと云へる地に在り。沙流河の西岸にして義經が城壁の礎、今尚ほ殘片を存せり。傳へ曰ふ、是れ源義經、高館を去つて此地に渡り、河岸の地を相して城壁を茲に築き、以て雄然として四方の夷酋に君臨したりと、義經を祀れる義經神社は、其の巖頭に建てられ、河面より高きこと十餘丈、社側に幾千百年を經たる假松五六株あり、前は一帶屏風の如き巨巖峙ち其間を流るゝ沙流川の碧水溶々として風趣甚だ佳なり。今より百數十年前迄は甲冑を着たる義經の木像社内に安置されたるが寛政の頃沙流の會所へ移し、其後烏有に歸したりといふ。又釧路の海中に義經の橋杭と稱するものあり暗礁中に斗出して、退潮時には現はる、土人の傳る所によれば是義經が十勝岬へ架橋せんとせし時の往址なりと云ふ

アイヌ熊祭

義經神社前のアイヌ

アイヌ土人

アイヌ熊祭



利尻富士

室蘭港

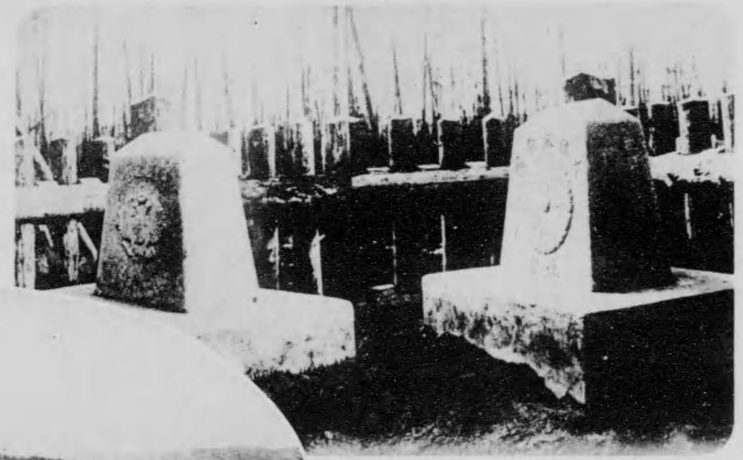
義經神社前のアイヌ

場にして大船常に港内に泊し、諸種の設備整ひ、室蘭鐵道の起點にして海陸交通の要衝に當れり。此地函館を距る海上七十九浬、東は浦河、大津、釧路、厚岸、根室等の東海岸一帶の海港に通じ、西は膽振沿岸の漁業地を控へ、市街殷賑を極む。又此地札幌を距る卅三里二十町、小樽を距る四十二里十一町、苫小牧を距る

に態度鷹揚にして悠々迫らず、多くは朴直魯鈍なり、蓋し名利の念なく、極めて自然にして敢て貯蓄を事とせず、山野に獵し、河海に漁り、山菜を食ひ、獸血を啜り、食は朝暮を凌ぐに足り、住は身を容るゝに甘んず、寔に太古の民たり。而して親子、夫婦、兄弟の間、慈愛孝悌の情に篤く、飲食又必ず禮讓あり、酒を酌

碧水溶々として風趣甚だ佳なり。今より百數十年前迄は甲冑を着たる義經の木像社内に安置されたるが寛政の頃沙流の會所へ移し、其後烏有に歸したりといふ。又釧路の海中に義經の橋杭と稱するものあり暗礁中に斗出して、退潮時には現はる、土人の傳る所によれば是義經が十勝岬へ架橋せんとせし時の柱址なりと云ふ

氷下漁業



日露國境石柱

雪中の樺

樺太土人

鹿

眞岡港

●日露國境標石（樺太）

明治三十七年我國は露國と國交斷絶して兩々干戈相見ゆるに至るや、我が樺太軍は、其翌三十八年七月を以て樺太全土を占領せり。次で露國と和議成るに及び樺太島北緯五十度以南の地は之を全く我が日本の領有とする事に條約確定し、國に據由すべきものあらざれば、詳に知ることを得ざるも、日本の領有として確認せらるゝに至りしは實に慶安四年の交なりとす。同年中、松前氏の家臣蠣崎傳右衛門なる者、松前氏の命を奉じて樺太を視察探險を了し、次で明和年間には和田某、天明五年には新井田隆助等相踵いで同島の狀況視察を爲し、寛政年間に至つては太支廳を置きたり。而して明治八年露國との間に千島樺太交換條約成り、以て曾く樺太を露國の手に委するに至れり、其間に於て樺太領有に關し五年露國代理公使ビツオフ氏と協定を試み、七年榎本武揚露國に赴き折衝する所ありしも皆成らざりき。斯くて三十七八年日露戰爭を經て遂に我領土に復するに至りたり。

●日露國境標石（樺太）

明治三十七年我國は露國と國交斷絶して兩々干戈相見ゆるに至るや、我が樺太軍は、其翌三十八年七月を以て樺太全土を占領せり。次で露國と和議成るに及び樺太島北緯五十度以南の地は之を全く我が日本の領有とする事に條約確定し、國境劃定の事業は日露兩國委員の協力に依つて、明治三十九、同四十の兩年に渉りて終了を告げ、斯くて同地點に設置せられたるもの即ち是日露國境標石なりとす。

標石は立體方形にして下部廣く、上部狹く頂邊尖れり、正面には菊花御紋章を刻し、其上邊に大日本帝國と記す、側面には天第何號、明治三十九年と刻せり。因に云ふ、樺太の北緯五十度は遠内より、西安別に至る一直線に劃せるものにて、東の天測點より西の天測點に至る間に於て境界地點十七票あり。

我が領域たる樺太は北は、北緯五十度を限りて露領薩哈連に界し、南は西能登呂、中知床の二岬突出して亞庭灣を擁し宗谷海峽を隔てゝ北海道と相對す。東は渺茫なるオホツク海に面し、西は間島海峽を隔てゝ西比利亞大陸に對す。其地形南北に長くして東西に短し。故に延長約百二十里に及ぶも幅員は最も廣き部分（幌内河口）に於て四十里内外に止まり、最も狹き所（クシユンナイ地峽）は八里に滿たざるものあり。面積二千二百餘方里にして九州より稍小に臺灣より稍大なり。

樺太が北緯五十度を境界として我領有に歸したるは前述の如く日露戰役の結果なりと雖も、是より先、德川幕府時代に於て既に我邦は同島を領し居たるにて日露戰役の領有は其實我に回復したるものなり、今その來由一斑を述べん。

抑も樺太島最古の事蹟は史乘文獻の之に據由すべきものあらざれば、詳に知ることを得ざるも、日本の領有として確認せらるゝに至りしは實に慶安四年の交なりとす。同年中、松前氏の家臣蠣崎傳右衛門なる者、松前氏の命を奉じて樺太を視察探險を了し、次で明和年間には和田某、天明五年には新井田隆助等相踵いで同島の狀況視察を爲し、寛政年間に至つては我が藩吏を派遣して、久春内、白主の二箇所に勤番所を設置し漁民保護取締の任に當らしめたり。斯くして管轄實行の端は茲に全く開始されたるが、而かも國防警備の施設に至りては何等具備する所なかりし。是より先き天明五年幕府にては勘定奉行松平秀持及其臣山口鐵五郎等を派して蝦夷地全部を探檢せしめ、以來引續き寛政元年には最上德内、和田兵太夫等を、享保元年には中村小一郎、高橋治太夫等を、文化五年には松田傳十郎、間宮林藏等をして巡檢せしめ、其報告に依りて徐々經營の實を擧げたりき。而して松前奉行をして樺太を管理せしめ、南部、津輕の兩藩に命じて守備兵を北海道各地に置きて警固せしめたり。當時樺太守護の任に當りたるは松田傳十郎にして同人は兵二百を率ゐてシラヌシに駐屯し樺太の名稱を更めて北蝦夷と稱し北蝦夷會所なるものを設け以て漁民を保護し漁業の奬勵に力めたり。

幕末に至り露國の南侵的野心と共に露國との折衝漸次頻繁となりたるが國事多端の際、幕府威信を失ひ同島に對する經營太だ振はざりき。明治元年政府は函館に開拓使を置くと共に權判事岡本監輔をして樺太事務を管掌せしめたり、玆に於て、岡本監輔は自ら樺太に渡航し事務所を大泊に設置し之を公議所と稱し、池邊讃、東白浦、久春内、榮濱に鎮撫を置き、始めて劃然たる行政施設を爲すに至れり。明治三年樺太開拓使を特設し次で樺太支廳を置きたり。而して明治八年露國との間に千島樺太交換條約成り、以て暫く樺太を露國の手に委するに至れり、其間に於て樺太領有に關し五年露國代理公使ビツオフ氏と協定を試み、七年榎本武揚露國に赴き折衝する所ありしも皆成らざりき。斯くて三十七八年日露戰爭を經て遂に我領土に復するに至りたり。

●眞岡港（樺太）

樺太西海岸の地にして附近に漁場多く頗る繁盛を極む、港内船舶の出入安全なるを以て樺太内地間との連絡港として最も重要の位置を占む。樺太眞岡支廳、測候所、郵便局、裁判所、病院等あり。

●樺太土人（樺太）

樺太の土人は「アイヌ」「ギリヤーク」「オロッコ」「サンダー」「キールン」「ヨッコ」の六種あり、就中ギリヤークとオロッコの二種最も多く、其他は甚だ少數なり、彼等の生業は多く馴鹿の牧養を職とせり。而して彼等は性遲鈍にして衣食住の程度亦劣等なるが巧みに馴鹿及び橇を使用し能く勞働に堪ゆ、馴鹿は一戸百頭以上を所有する者あり、彼等之を以て橇を挽かしめ或は貨物を運搬せしむ、又彼等は温暖の候には海濱又は河畔に出でゝ漁し冬期には山に入りて獸獵に從事す。

膃肭臍は北知米岬の南方約十浬の海豹島に產す、同島は我邦唯一の膃肭臍蕃殖場たり露領時代には濫獲の結果非常に蕃殖を減じたるも三十八年我領有に歸せる以來獵獲を禁じ保護を加へたる爲め其効果歷々として見るべきものあるに至れり。

永井　禾原

火車邊客到豐原　俄國人乘今尙存
卅載重歸我王土　滿山草木沐新恩

●昌德宮（朝鮮）

纔すに秀麗峻嶺を以てせる京城は、北に北漢山あり南に南山を擁し、漢江の長流は帶の如く西流す、其形勢實に八道に冠たり。

遡りて王都の歴史を顧れば高勾王朱蒙の次子溫祚回下して慰禮城に『百濟國』を建つ、慰禮城は今の稷山にして後、間もなく南漢山に遷れり、溫祚より十一傳して近肖古王高勾麗の侵入を逆擊して之を破り、首都を北漢山に徙したるも後、百二十餘年を經て二十世蓋鹵の代高勾麗の侵略を蒙り、遂に北漢山を捨てゝ熊津即ち今の公州に南遷せり、其後高麗の肅宗宮闕を今の南山『木覓壤』に建て南京と稱したるが六十餘年の後に至りて王業は李成桂王によりて遂げらる、是れ李朝の太祖にして景福宮始め昌德宮等の宮殿は此太祖の創建に係れり。

昌德宮は京城の北部鷹峰山麓に在り、始め太祖は景福宮を營み後昌德宮を建立せるものにして、壬辰の役火災に罹り第十四代の王宣祖之が改築に着手せられ、第十五代光海王に至りて完成し第十九代肅宗王の時更に修理を重ねたるものなり

昌德宮の重なる殿宇は仁政殿、宣政殿、寶慶殿、東宮、宙合樓等にして、仁政殿は其正殿なり、此仁政殿の建築は光海王の朝に起工せるものゝ如く、之を昌慶宮の明政殿に比して規模壯大、裝飾絢爛、李朝後期の技巧を盡せり、殿は五間四面の重層にして、屋蓋は入母屋造に瓦を葺き內外總て色彩を施し、中に寶殿を設け其上に天蓋を懸け、寶座は方形の高壇にして四面に階あり、中央に扉障あり、表面に崑崙の五岳及日月の象を描き、蓋は纖麗なる組物を以て富贍なる軒飾を垂れ、下に精巧なる垂飾を配せり、此宮殿は曾に殿宇の莊麗なるのみならず、丘陵逶迤として相連り、古松林を爲し、清水泉を湛へ、庭園の幽邃亦他に冠絶す、李王殿下は今猶此宮に住はせらる。

●景福宮勤政殿（朝鮮）

景福宮は李太祖の創建に係り、壬辰の役昌德宮と共に火災に罹り久しく荒廢せるを、大院君に依りて再興せられたるものなり、此宮に四門在り南を光化門と稱す是れ正門にして、北は神武、東に在るを建春と言ひ西門を迎秋門と言ふ、太祖の王城なりしを以て、再興なりと雖も規模の大、制度の整然たる昌德宮の比にあらず、光化門を入れば更に內門在り興禮門と言ふ、其內に正殿たる勤政殿在りて、殿は重層にして國王が朝賀を受け大禮を擧げたる所なりき、之に接し宮殿樓閣接す慶會樓亦此內に加はる、三闕重層の光化門は、下層を石造と爲し高さ二十尺其上に重層の樓を設く、桁行七十九尺餘梁間二十四尺餘、全體の權衡美にして樓觀頗る壯麗なり、特に其後方の白岳巍然として高く聳へ覺へず太祖の雄圖を聯想せしむ。

宮闕たりし景福宮及昌德宮等の事を記したれば、又舊蹟たる北漢山の事を略記せん、該山に至らんとせば獨立門より撥把里を經て山城の西門に至るを正道とし約四里を隔つ、別に北門より造紙署洞に至る捷路あれ共前者の如く車馬を通せず北漢山は其北に白雲臺、東に仁秀峰、南に國望峰在り、故に三角山の名あり。

往時此に百濟王城の在りし事は記したり、全山花崗石を以て成り、頂上には登攀易からず、城壁は石築にして重なる城門は二、皆な石築闕門を開き、上に樓閣を構ふ、城內溪谷の間に所々十數戶の民家あり、又山中には曾て『離宮たりし址』『興寺其他の遺蹟存す、上方城壁に沿ふて東將臺及萬景臺在り、眺望廣濶、京城の山河市廛茫として脚下に集まる、秋季に入れば紅楓最も壯觀なり。

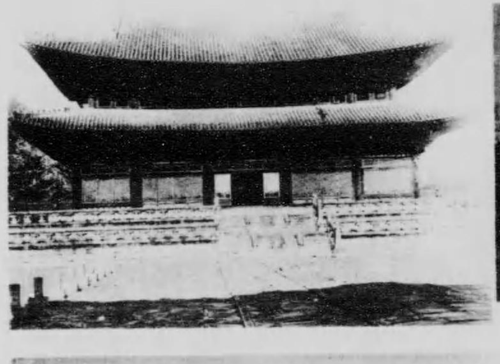
彼の文祿の役に最も關係ある『碧蹄館』は西大門を距る四里餘、京義線一山驛よりすれば二里餘の高陽邑に在り。

小西行長平壤に破れたりとの敗報、遽近の我軍に傳はるや諸軍色を失ひ、驍れも京城に退却して防戰を議す、時に小早川隆景開城に在り退却を肯んぜず、大谷吉隆行いて漸く兵を收めて引揚げしむ、文祿二年正月廿五日明將李如松大軍を領して坡州に至る、此時に方り京城の諸將敵の優勢なるに恐れて退嬰の策を講ず小早川隆景及立花宗茂等、諸將の言ひ甲斐なきを憤り、手兵貳萬五千を以て敵を邀へ戰はんとして西大門を發す、翌廿六日彼我の先鋒碧蹄館に嶺即ち西大門より三里高陽より一里半に衝突し、正午の頃相互の主力高陽附近に戰ひ、遂に敵を潰亂せしめたり、此附近今は赭山禿嶺なるも其當時は樹木鬱蒼として狐虎棲息せりと傳ふ又高陽の西方一帶の水田は敵騎の泥濘中に苦みし地にして、高陽の北半里餘惡隘嶺は明將李如松が井上五郎兵衛の鎗に九死に一生を得て免れたる所、碧蹄館の背後丘上に甲掛樹在り隆景等將卒の休憩せる場所なり此他舊蹟少なからず。

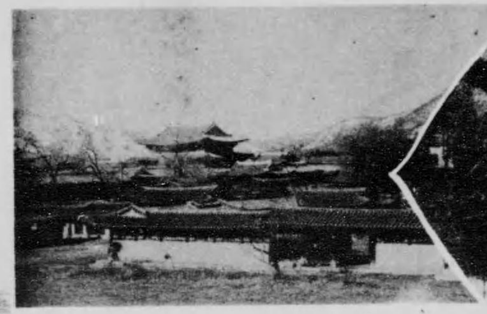
京元線往十里停車場（此所まで市街電車あり）より六里弱にして、南漢山上の一邑、廣州に達す、山は亦是れ百濟最初十代の王城址にして又李朝十六世仁祖の時清太宗の來寇に遭ひ、王は一時此山上に遁れて援軍を俟つこと四十餘日、遂に清軍の重圍に堪へずして降服せる歴史あり現に此所に在る諸官衙の建物は當時の物を其儘使用し居れり、仁祖の行宮址は今ま憲兵隊武術道場たり、此所唯一の邦人旅館入口に『維安椽廳』の額を存す、史を按じ是等古建造物を訪ふ時誠か感慨の念なからんや。

明政殿に比して規模壮大、裝飾絢爛、李朝後期の技巧を盡せり、殿は五間四面の重層にして、屋蓋は入母屋造に瓦を葺き内外總て色彩を施し、中に寶殿を設け其上に天蓋を懸け、寶座は方形の高壇にして四面に階あり、中央に扉障あり、表面に崑崙の五岳及日月の象を描き、蓋は纖麗なる組物を以て富贍なる軒飾を垂れ、下に精巧なる垂飾を配せり、此宮殿は曾に殿宇の莊麗なるのみならず、丘陵逶迤と北漢山は其北に白雲臺、東に仁秀峰、南に國望峰在り、故に三角山の名あり。

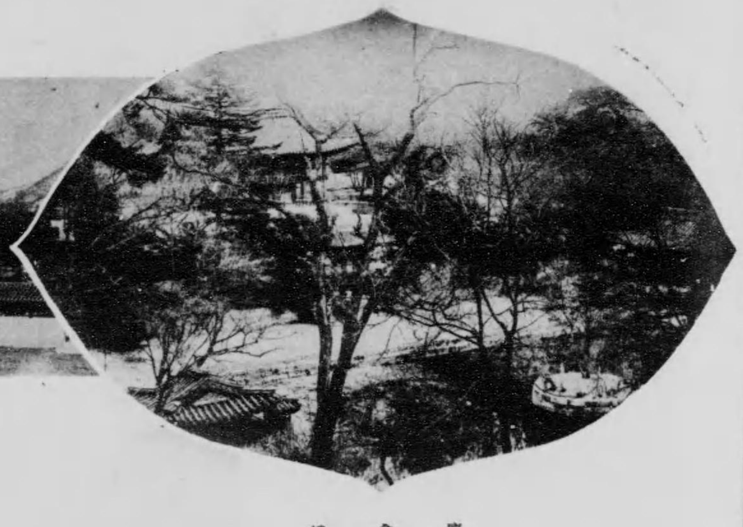
往時此に百濟王城の在りし事は記したり、全山花崗石を以て成り、頂上には登攀易からず、城壁は石築にして重なる城門は二、皆な石築闕門を開き、上に樓閣を構ふ、城内溪谷の間に所々十數戸の民家あり、又山中には曾て『離宮たりし址』重興寺其他の遺蹟存す、上方城壁に沿ふて東將臺及萬景臺在り、眺望廣濶、京城の代の王城址にして又李朝十六世仁祖の時清太宗の來寇に遭ひ、王は一時此山上に遁れて援軍を俟つこと四十餘日、遂に清軍の重圍に堪へずして降服せる歴史あり現に此所に在る諸官衙の建物は當時の物を其儘使用し居れり、仁祖の行宮址は今ま憲兵隊武術道場たり、此所唯一の邦人旅館入口に『維安樣廳』の額を存す、史を按じ是等古建造物を訪ふ時誰か感慨の念なからんや。



勤政殿



景福宮



慶會樓

昌德宮仁政殿

宙合樓

●倭城臺（朝鮮）

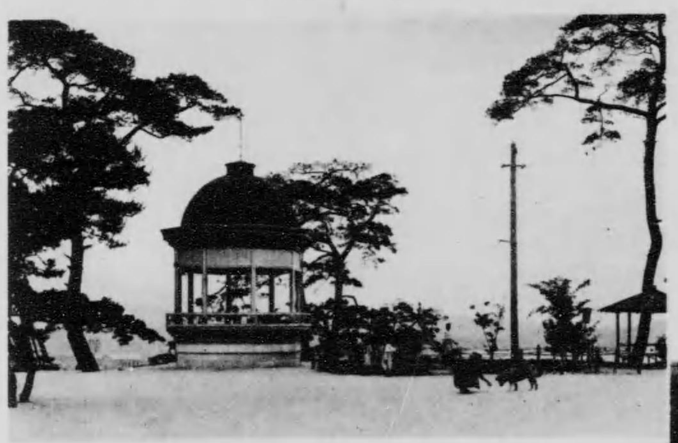
倭城臺は南山方面一帶を總稱せるものにして、文祿の役增田長盛南山に滯陣せる時鮮人之を倭城臺と呼べるに基因す。

其南山は老樹蓊鬱、山勢雄偉、嘗て此に宮闕在りしことを追懷せしむべき地なり、北漢山は峻嶺なりと雖も赭山疎林なるを以て、風致の上に於て南山を凌ぐ能はず、我が朝鮮總督府は山の中腹に在り遣にして半島巨鐘の一と稱せらる此一帶を鐘路通と總稱す、鐘路の名、鐘樓より出づ。

●パコダ公園（朝鮮）

パコダ公園は普信閣より數町鐘路通左側に在り、園内に在る十三層寒水石塔は五百年前は舍利塔として名あり、此塔に就ての考證は區々にして其年代未だ正鵠を得ざるも、元の順帝より高麗忠順王に贈られ、是れ韓國の忠臣を祀れる所にして、老松鬱茂、三面を繞らし、躑躅紅楓の候殷賑を極む、南山を下りて永樂町方面に至れば商品陳列場の設備あり主として朝鮮の生産物を陳列し一般の觀覽に供する外、參考品として内地製産品を出陳す、彼の獨立門即ち日清戰役の時、清國に對して獨立を宣せる記念門を繹ねんとせば西大門外義州通にあり。

更に北門を出で下ること二丁餘の所に



南山公園

廢圓覺寺塔

倭城臺朝鮮總督官邸

パコダ公園

南大門

鐘路

●倭城臺（朝鮮）

倭城臺は南山方面一帶を總稱せるものにして、文祿の役增田長盛南山に滯陣せる時鮮人之を倭城臺と呼べるに基因す。

其南山は老樹蓊鬱、山勢雄偉、嘗て此に宮闕在りしことを追懷せしむべき地なり、北漢山は峻嶺なりと雖も赭山疎林なるを以て、風致の上に於て南山を凌ぐ能はず、我が朝鮮總督府は山の中腹に在りて今は南山公園の一最高燥地たり、統監府設置の當初に比較すれば總ゆる方面の進展は實に著しく、就中京城の激變に至りては今昔の感に耐へざるものあり、市街の整備、家屋の改良、交通機關の擴張、眞に大都市たるに耻るものなし。

●南大門（朝鮮）

李朝太祖五年、趙浚に命じて城廓を築造せしむ、規模は仁王、南山、駱駝の諸山頂に亘り、延長三里餘、高さ一丈乃至二丈の八門を設く就中興仁崇禮の二門即ち東大門南大門最も大にして、城の追手、搦手を爲す、新政以來市の膨脹に伴ひ城壁城門の大部分は道路又は市街と化したるも、東大南大の二門は猶依然として存す、南大門は市内南大門通の中央に在り、附近堂々たる洋式大建造物中に獨り巍然として五百年の面影を保つ、文祿の役小西行長東大門より入城して各城門を固む、加藤淸正後るゝこと三日、南大門に至り小西の兵の固むるを見て、都入りの先陣に後れたる鬱憤に堪へず獨り城外に結陣せりと。

●鐘路（朝鮮）

光化門より電車に乘じ東大門に向ひ、鐘路通に進む途中南大門透と交叉點の右側に普信閣在り、內に高さ一丈、周圍二丈餘の巨鐘を藏す、約四百五十年前の鑄造にして半島巨鐘の一と稱せらる此一帶を鐘路通と總稱す、鐘路の名、鐘樓より出づ。

●パコダ公園（朝鮮）

パコダ公園は普信閣より數町鐘路通左側に在り、園內に在る十三層寒水石塔は五百年前は舍利塔として名あり、此塔に就ての考證は區々にして其年代未だ正鵠を得ざるも、元の順帝より高麗忠順王に贈れりとの說稍や信に近し、石質技巧共に稀有の逸品たり、又園內に大圓覺寺の碑及音樂堂ありて、南山漢陽二公園と相駢んで風致を誇る。

●南山公園（朝鮮）

京城第一の遊園地たる南山公園は山勢の雄偉と眺矚の優雅とを以て既に大公園たるの資格を具備す、總督府始め幾多の建造物は其凸凹各所に點在し、甲午戰捷紀念碑、太神宮、天滿宮等高丘の淸地に在り、仰いて山巔を見れば秀麗群を拔くの雄姿は紫雲靉靆の間に屹立し、蠢々たる北漢の峻嶺、瀟洒たる仁王駱駝白嶽の山は眼界に鍾まり、瞰下すれば京城の全覺宛然畫圖の如く、隱見出沒す、東大門外淸凉里より鐘路及西大門を經て麻浦に達する電車、鐘路より南大門を經て龍山に出づる電車の右往左折する光景の如きは、我が上野の榛名山下に大都市を配せるの觀あり、之を大陸の東端たる大連市に比し來らば、彼の伏見臺上電氣遊園地より其市街と港灣を眺むるに似たり、唯だ尙ほ及ばざるものは市街の擴大と家屋の堂々たらざる一事のみ、滿鮮連絡の交通機關は之より彼我の關係を密ならしめ以て大京城を構成するに至らん。

南山の西麓にある漢陽公園は其眺望亦頗る絕佳、溶々たる漢江の水、楚々たる淸凉の森を指呼の間に萃む、又此東麓には奬忠壇あり、是れ韓國の忠臣を祀れる所にして、老松鬱茂、三面を繞らし、躑躅紅楓の候殷賑を極む、南山を下りて永樂町方面に至れば商品陳列場の設備あり主として朝鮮の生產物を陳列し一般の觀覽に供する外、參考品として內地製產品を出陳す、彼の獨立門即ち日淸戰役の時、淸國に對して獨立を宣ぜる記念門を繹ねんとせば西大門外義州通にあり。

更に北門を出で下ること一丁餘の所に李堈公殿下の別墅石披亭あり、此所より十餘町、一谿流を橫斷する三個の水門あり、弘智門と言ふ、門形窈窕、四邊の景致と相俟つて壯觀を極む、岩角に六角形の一宇あり之を洗劍亭と言ふ、李朝十五世光海君暴戾日に長じ、民心離反して社稷危に瀕せんとす、仁祖陵陽君慨然として起ち、擬君廢立の事を擧げたる所、亭名は當時義士血を啜りて死を盟ひ以て劍を磨したるに因る。

朝鮮は東西に短く南北に長き一大半島にして、其面積壹萬四千百四十三方里なり、而して全道を京畿、忠淸南北、全羅南北、慶尙南北、黃海、平安南北、江原、咸鏡南北に區劃し、各道を府郡島に分ち十二府二百十八郡二島、二千五百二面とす、道に道長官あり府に府尹あり、郡に郡守あり、島に島司あり、面に面長を置く、京城は即ち總督府の下に京畿道長官及京城府尹ありて、首都京城の諸般設備は頗る大規模に基けるものなり。

京城は市區の改正を遂行し、從つて家屋改築より電信電話電燈瓦斯水道の設備に至るまで概ね整備し內地の都市と選ぶ所なきに至れり。

官廳其他の建物としては、朝鮮總督府及李王殿下の昌德宮、京畿道廳、京城府廳を始め諸官衙學校、朝鮮銀行、東洋拓殖株式會社等多數の會社銀行大商店あり淸凉の森を指呼の間に萃む、又此東麓に汽車電車の設備も缺くる所なし。

●漢江の鐵橋（朝鮮）

漢江は朝鮮第四の大河にして、其源は南北二あり、南江は江原道原州の溪谷に發して北西流し、北江は同道鐵嶺より發して東南流す京畿道廣州の地域に於て二流相合し京城の南東を北西流し、下流臨津江を合せ江華灣に注ぐ、流程實に一百餘里、北江には照陽の大支流ありて、其河口と龍山間は小汽艇交通す。

龍山は舊新二區に分れ、舊市街は商家密集して殷賑を極め、軍令部始め師團司令部陸軍倉庫兵器支廠南滿鐵道京城管理局等は新市街に在り、漢江の渡に架せる一大鐵橋は雄大にして他に匹儔すべきものなし、龍山江としての風光地は其下流なり。此處河幅最も廣く、沙原茫々煙巒横はる。

●仁川港（朝鮮）

京城の咽喉を扼して內外に重きを爲すものは仁川港なり、其四十有餘年前に於て蟹戸四五の一寒村たりし濟物浦を知る者該港今日の優勢を見て驚異を禁じ得ざるべし。

港內に横はるものを月尾島と言ひ、內を仁川內港と稱し、島外亦永宗、龍流、永峰、舞衣、信島の諸島嶼碁列し自ら灣狀を形づくる、之を外港と稱す、曾て大院君西敎の禁を嚴にし信徒十二萬人の大逆殺を行ひし時、佛艦七隻來攻あり、明治四年には米艦五隻より二回の攻擊を受け、同八年には我が雲揚艦砲擊事件あり、同十五年京城の亂には花房公使の英艦に難を避けたる事あり、日淸の役に至りて豐島沖の海戰、大島旅團の上陸、又日露役には露艦コレーツ及ワリヤーグの轟沈木越旅團の上陸等、唯だ見る蘇々たる平和の灣頭に翱翔する海鷗と徂徠する白帆の碧る所は多事斯の如し、該港も亦古戰場の一に數へざるべからず。

平和の港灣たる仁川に取りて憂ふべきものは海潮干滿の差三十呎に達する一事なり、故に其築港は閘門式にして海水を港內に充滿せしむる設備を以て天然の缺陷を補ふ、市街は本町京町等を繁華の中心として東西に長く東端粗峴を停車場と爲す是れ仁川驛なり。

市街中央に位する小丘に各國公園在り海上よりする市街の外觀は頗る美にして、各國公園なるものは其名の如く各國有志により設備せられたる好個の記念的公園たり、又市の南海岸丘陵上に仁川公園在り、各國公園に對して元は日本公園或は八阪公園と稱せり、園內櫻桃樹多く遠近の風景を展望す、太神宮、金比羅神社、天滿宮等ありて四時殷賑を極む、而して月尾島に至らんとせば稅關埠頭より渡舟あり十五分にして達す、明治十五年花房公使一行は命を韓舟に託して漂蕩し漸く本島の北端に上陸して後英艦に救はる、南方に八尾、豐島海戰の跡を望み、又露艦爆沈の跡を瞰下し、內港を隔てゝ仁川市街を望み風致亦頗る佳なり。

島內を一周する道路は空氣淸淨、車馬の煩なく風塵到らず逍遙散策には最も妙とす、又道路の兩側には多くの櫻樹を栽培す、花季に入れば觀櫻者を以て全島を埋む、無線電信所は頂上に在り其南角に峙立するものは回轉燈臺にして近海一帶は釣魚に適す。

仁川より毎日航海する汽船に乘じ江華島に至らば此島の風光も月尾島に劣らず、島は漢江の河口に横はり周圍約三里、島中の首都を江華と稱す、曾て高麗の高宗蒙古の兵禍を避けて此地に至り、江都と號し一時半島政治の首腦府を置けり、海岸は斷崖絕壁にして舊砲臺の跡今猶存す、明治八年我が雲揚艦を砲擊せるは此砲臺なり。

●安城川（朝鮮）

安城川は成歡驛を距る北一里餘の所に溶々として長流す京城より汽車二時間にして成歡驛に達するを得、其成歡驛の後部に當る村落は名高き『成歡の古戰場』たり、即ち日淸役の初頭に於て大島旅團の淸軍を擊破したる地なり、東北數丁の地月峰山には淸軍の死守せる砲臺址を存す、安城川は平野の間を流るゝ長河なりと雖も、滿潮の時に至れば深さ數尋に及ぶ、成歡驛に敵を潰滅せしめたる大島旅團は進んで牙山を衝かんとするや、偶ま此川漲溢して渡涉頗る困難を極む、時に松崎大尉は一秒も躊躇する能はずと爲し部下を勵まして渡涉するに臨み敵彈に殲る、驛前の丘上に一基の忠魂碑在り大尉の事蹟を錄す、有名なる溫陽溫泉は次驛天安より自動車三十分にして達す、曾て大院君此溫泉地を愛し浴場を重修せしめ、屢々行遊を試みたる以來其名著はれ今や浴客多きを見る。

●馬山浦（朝鮮）

馬山浦は鎭海灣最奥の一曲浦にして、其港口は南面し西に漆谷東に熊川の諸峰屏立す。

灣內水深くして殆ど缺點なき良港なれとも軍事上の關係より開港を閉され、當港の發展を沮礙せり、氣候溫和、風光佳麗、朝鮮第一の健康地と稱さる、市街は舊新の二區に分れ商厦櫛比す、舊馬山の東端には文祿の役我軍駐在せる城址の廢墟を留む、蒙古井等の舊蹟も在り。

●鎭南浦（朝鮮）

一葦帶水を隔てゝ支那山東省に對し、黃海及渤海の重要地點を占むる鎭南浦は內に在りては西鮮の商業中心市場たる平壤の咽喉を扼し、大同、載寧兩江の流域に跨る富饒農產地を控へ、其商業範圍は殆ど平安南北、黃海三道に亘る。

馬山浦

木浦市街

龍山漢口鐵橋

仁川港

安城川

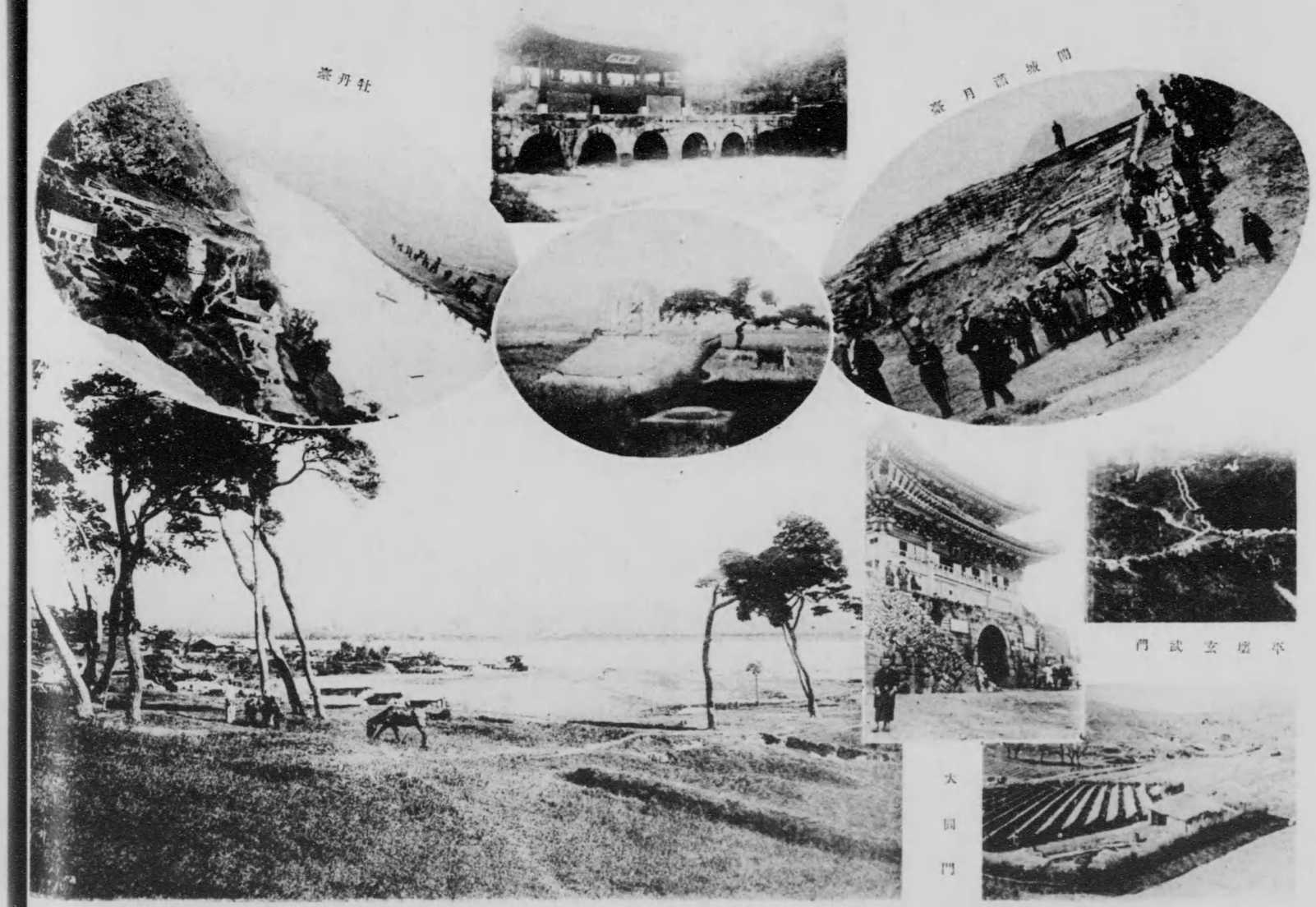
海軍省は艦船を使ひ二回の攻擊を受け、同八年には我が雲揚艦砲擊事件あり、同十五年京城の亂には花房公使の英艦に難を避けたる事あり、日清の役に至りて豐島沖の海戰、大島旅團の上陸、又日露役には露艦コレーツ及ワリヤーグの轟沈木越旅團の上陸等、唯だ見る蘇々たる平和の灣頭に翱翔する海鷗と徂徠する白帆の語る所は多事斯の如し、該港も亦古戰

仁川より毎日航海する汽船に乘じ江華島に至らば此島の風光も月尾島に劣らず、島は漢江の河口に横はり周圍約三里、島中の首都を江華と稱す、曾て高麗の高宗蒙古の兵鋒を避けて此地に至り、江都と號し一時半島政治の首腦府を置けり、海岸は斷崖絶壁にして舊砲臺の跡今猶存す、明治八年我が雲揚艦を砲擊せるは此砲臺なり。

端には文祿の役我軍駐在せる城址の廢墟を留む、蒙古井等の舊蹟も在り。

●鎭南浦（朝鮮）

一葦帶水を隔てゝ支那山東省に對し、黃海及渤海の重要地點を占むる鎭南浦は內に在りては西鮮の商業中心市場たる平壤の咽喉を扼し、大同、載寧兩江の流域に跨る富饒農產地を控へ、其商業範圍は殆ど平安南北、黃海三道に亘る。



●牡丹臺と大同江（朝鮮）

牡丹臺より大同江を望むの寫眞説明に先ちて聊か『平壤の既往及現在』を説かん。

平壤の地は、大同江其東南を流れ、牡丹乙密の二臺東北を擁し、練光、大同の高閣街頭に聳へ、大江溶々樓影を泛べて其秀麗正に一大畫幅たり、顧つて古今をとして西鮮第一の商業地たり、其大同江畔に產する豐饒なる農產物は主として此地に集散し、又近年物興したる西部朝鮮の礦業も此地を中心と爲せり、地は四通八達の樞軸に據り大同江の水運を利し鐵道は釜山滿洲に至る主幹線と、鎭南支線寺洞炭礦線の交叉點に位す、更に近く平壤元山間半島橫斷鐵道の計畫あり將來益益有望を以て屬目せらる。

して、其治世は我が齊明天皇の朝に當り、亦唐朝高宗の時に當る、王の治世間、國運の隆盛前古比なく大に唐朝の文物を輸入し、且つ唐と聯合して百濟を滅亡せしめ、遂に三國統一の大業を成就したり。

太宗の陵は文武王の元年即ち齊明天皇八年の築造に係り、圓形にして其前面に一碑在り、樣式奇古雅趣に富み且つ雄麗なり、地は湖南線西岳驛前數町の所に當

●牡丹臺と大同江（朝鮮）

牡丹臺より大同江を望むの寫眞說明に先ちて聊か『平壤の既往及現在』を說かん。

平壤の地は、大同江其東南を流れ、牡丹乙密の二臺東北を擁し、練光、大同の高閣街頭に聳へ、大江溶々樓影を泛べて其秀麗正に一大畫幅たり、繙つて古今を想へば此山靑水美の天地、嘗て幾たびか興亡盛衰を繰返せり。

太古、檀君太白山檀木の下に降り、國人に擁せられて君となり、平壤に都を定め、國を朝鮮と號す、是れ平壤最初の歷史にして亦朝鮮最古の歷史たり、我が紀元前五六百年の昔既に此地と我國との間に交通ありしことに想到せば一種の興味を以て平壤を觀ざるべからず。

殷の大臣箕子紂王の荒淫を諫めて却て囚はる、纔て紂王は周の武王に滅せられ、箕子其囚を解かれたれば、國人五千名を率ゐて遼東に移り、遂に朝鮮に王となり、爾來子孫相承くる四十一世、九百餘年間、世々王儉に都せり、王儉は即ち今の平壤なり。

漢の初め燕人衛滿なる者平壤に來り國主箕準の寵遇を受け、遂に箕準を逐ひ代りて朝鮮王となれり、其孫右渠位に在り、勢を恃んで漢に抗し、武帝の爲めに亡ぼさる、之れ衛滿の王となりてより凡八十七年の後なり、武帝其地を四郡に分ち、平壤は其樂浪郡に屬し、昭帝の時東府都督府を置かる、後年高勾麗の勃興するに及びて又王城となり其滅後は新羅、高麗及李朝共に西京又は西都と稱し、代々西鮮の重鎭たりき、嘗て文祿の役には征明の將小西行長此地に於て敵使に愆られ全軍を京城に引揚ぐ、日淸役には我軍此所に大捷して終に半島より永久に北方の勢力を驅攘せり、今や平安北道廳の所在地として西鮮第一の商業地たり、其大同江畔に產する豐饒なる農產物は主として此地に集散し、又近年物興したる西部朝鮮の礦業も此地を中心と爲せり、地は四通八達の樞軸に據り大同江の水運を利し鐵道は釜山滿洲に至る主幹線と、鎭南支線寺洞炭礦線の交叉點に位す、更に近く平壤元山間半島橫斷鐵道の計畫あり將來益益有望を以て屬目せらる。

牡丹臺は錦繡山の一角にして大同江畔に屹立し城の內外を睥睨す、昔時小西行長の軍は此所の防備ありし爲め大同の渡河戞に苦を嘗め、日淸の役には淸軍此處に砲列を布き、防戰頗る力めたるも、遂に我が元山朔寧兩支隊の爲め陷落せられたり、臺上に當時の砲壘廢址を存す。

●大同門（朝鮮）

平壤市街の東、大同江畔に巍然として中空に屹立する三層樓の大樓閣、之を大同門と稱す、平壤六門の一にして五百年前李太祖の創建に係ると雖も、現今のものは宣祖の改繕に係り約三百三十餘年を經たり技工の精巧、結構の雄大は建築學上の一大參考に値すと稱さる、小西行長孤軍重圍に陷り進退谷まれる時に當りて、大石某なる者甲冑を脫し單衫を着け矢石雨下する此大門の高樓に登り、審かに敵情を察し勇名を千載に殘せり。

●玄武門（朝鮮）

乙密牡丹兩臺の較部を爲す所、穹隆形の一小門在り、之れ玄武門にして日淸戰前までは門上に樓閣を有せしも今は存せず、往年原田一等卒が挺身城壁を越へ、門扉を開き我軍を城內に入らしむ、爾來玄武門の名、牡丹臺と共に著る。

●新羅太宗武烈王陵（朝鮮）

新羅太宗武烈王は新羅不世出の英主にして、其治世は我が齊明天皇の朝に當り、亦唐朝高宗の時に當る、王の治世間、國運の隆盛前古比なく大に唐朝の文物を輸入し、且つ唐と聯合して百濟を滅亡せしめ、遂に三國統一の大業を成就したり。

太宗の陵は文武王の元年即ち齊明天皇八年の築造に係り、圓形にして其前面に一碑在り、樣式奇古雅趣に富み且つ雄麗なり、地は湖南線西岳驛前數町の所に當り老樹陵の周圍を蔽ふ。

●宮址滿月臺（朝鮮）

高麗王宮の舊蹟『滿月臺』は開城驛より三十町餘字梨井里の丘上に在り、後に松嶽山を負ひ溪水涓々として左右に流れ、地、閑閒、眺望最も佳なり、其殘存せる礎石及石階等を見、規模宏大なる區畫の跡を一瞥せるのみにて當年の壯觀を偲ぶに足る。

●開城と人蔘圃（朝鮮）

高麗の舊都たる開城は、松嶽を北に控へ南は龍岫山に跨り、周圍は羅城を以て包擁せられ、蜿蜒たる山谷平野は亦之を環繞し白川烏川の二水城內を貫流す、

新羅積衰の餘漸く瓦解に傾き、甄萱は全州に據り、弓裔は鐵原に覇を唱へ、兩雄の爭鬪殆ど二十年に迫ぶ、高麗の太祖王建弓裔の一將より身を起し、寬厚の德を以て衆心を得、弓裔の後を襲ひ終に甄萱を殪し新羅の降を納れ、松嶽に都を定め半島統一の大業を完成せり、爾來佛敎を信じ寺院を起し、建築の奬勵、美術工藝の發達に努め、土地開拓を盛んならしめ、以て克く王者の道を盡せる事は史之を證する所。開城人蔘の今日ある偶然に非ざるなり、高麗三十二世四百七十餘年にして李朝となり舊時の偉觀逐年減少せりと雖も、高麗燒及人蔘のみは益々著はる。

●釜山港（朝鮮）

朝鮮の東南端に在る釜山港は、海路僅に百廿浬を隔てゝ我が下の關と相對す。

其往昔に在りては任那の領域たりき、機新羅の領する所となり、李朝三世、世宗の時、對馬朝鮮の間に通信條交を結び、鹽浦、蔡浦、釜山浦の三浦を開き、交易場と定む、此開港當年より僅指すれば實に四百七十有餘年を歴たり、而して當時の釜山浦は今の古館にして現在の釜山港は慶長十四年の己酉條約に依り宗義智の家臣津之江兵庫專ら折衝の任に當り、先づ港灣の擴張を計れるに基く、港口に絶影島横はり冬柏島亦相共に包擁す、玆に於てか天然の防波堤を有する該港は常に悠然たり。

市街は龍頭山の翠丘を中心とし、北は長く草梁釜山鎮に接續し、南は灣の狹部を隔てゝ絶影市街と相對す、市中商店軒を並べ純然たる日本人街を成し市街電車の設備完全にして些の遺憾なし。

龍頭山は一に辨天山と稱し、丘上老松鬱茂して盆池の如き碧灣は脚下に在り、絶影赤崎の峰巒亦風致を添へ、晴朗の日には南方遙かに對馬の島影を望む、頂上に祀れる金比羅神社は宗對馬守の創建に係る。

南濱の龍尾山には武内宿禰加藤清正を祀れる祠在り、又其南麓の魚市場は當港偉觀の一たるに値す、西方に新規模の『大正公園』あり、地域廣濶最も展望に富む、朝鮮近海に在る島嶼中第三位の大島嶼たる絶影島は周圍約七里、其最高點は海拔千二百九十七呎あり、北麓一帶は市街を成し、島内に牧の島鑛泉及造船所等あり、小西行長の築ける城址は市街に隣れる釜山鎮の丘上に存す、草梁古館の丘上には鎮山開港に功勞ある津之江兵庫の招魂碑在り、朝鮮第一の温泉場たる東萊温泉は此所より近し、地は後に金井の山脈を負ひ、前は東萊川の清流に臨める勝區なり。

●大邱市場（朝鮮）

大邱は往古新羅の遠句大縣にして、世祖の時朝鎮を設け都護府と爲せり。

今を距る二百年前時の觀察使閔應珠此の大邱府城を築きて以來漸く大を成し、遂に南鮮第一の商業地たるに至れり、現在地は慶尚北道廳の所在地にして、交通四通八達の樞軸に據り其商權の範圍廣く、春秋二回に開催する市の如きは遠近各地より來集するもの幾萬に上り、肩摩轂擊殷賑なること朝鮮三大市場の一に數へらる、此地方は地味氣候共に佳良なれば農産物に適し、特に果實煙草等農藝産物を以て著る、達城公園は市街の北端に在り、近來市街の膨脹より舊城壁は大部分破壞せられ僅かに公園附近に其面影を見るのみ、園内丘在り老樹之を蔽ひ、幽邃の所に太神宮を祀る、曾て慶州の都府として盛んなりし時は、嶺南の一寒邑に過ぎざりし此地、今や主客顚倒せり。

大邱附近にある新羅時代比豐と稱せる今の太田も亦寂寞たる僻邑たりしが京釜鐵道の開通に伴ひ邦人の來住する者日に多きを加へ、更に湖南線の此地を岐點とするに至り、忽ち今日の大市街を形成せり、而かも我國史に關係深き百濟の舊蹟等其附近に殘存す、次に湖南線豆溪驛の北に突兀として天空に聳ゆる鷄龍山は、江原道春川の牛頭山と共に神代我が素盞嗚尊遷蹤の跡なりと傳へらる。

●叢石嵒（朝鮮）

江原道通川邑より北方に距ること二里の地に、横峯突兀として海を壓するものあり、峰の懸崖條石櫛立、恰も方柱の如く其周各尺餘、其高五六丈、方直平正にして、繩墨を以て削立するが如く大小異なし、又岸を距る十餘尺四株の石あり、水中より聳立す稱して四仙峰と言ふ、峰上古松あり、根幹老蒼して其年紀を知らず。

四仙峰より少しく北すれば、石狀又變じて或は短く或は長く或は峙ち、横はるあり累なるあり、其奇怪異常なる巧匠鑿琢の功に非ずんば、蓋し天地剖判の始め元氣の鍾まる所なるべし、之を叢石嵒と呼ぶ、嵒に臨んで亭を立つ『叢石亭』と名く、昔遶郎南郎永郎安詳の四仙此に來りて遊賞すること日あり、後、碣石を立てて之を誌す、石尙ほ今に存せり、山水の美亦他を壓す。

李達衷

冥搜晨登群玉峰　海日欲上雲錦濃
珊瑚老樹枝葉脫　砥柱濤驚烟霧重
歲月糢糊覩首碣　風霜寂寞蛾眉松
莫詠滄浪濯斯清　休歌慘烈生不逢
老胡曾來獨大叫　仙子已去吾誰從
小立峰頭便上馬　塵埃未合攀高蹤

●元山港と木浦（朝鮮）

元山は北鮮唯一の貿易港にして、灣内の潮流緩漫、水深く大船を碇泊せしむるに安全なり、市街は盛德山の麓に位し、地形上日本海沿岸に於ける貨物及露領よりする貨物は玆に輻湊す、(下の關へ三百五十浬、浦潮へ三百三十浬)元山府廳所在地として最も殷賑を極む。

木浦は桑山江の河口に臨める港にして、其海運上群山と相呼應す、市街は後に諭達山を控へ前面幾多島嶼によりて抱擁せらる、此地貿易の主なるものは米穀棉花海産物なり、今や湖南線の終點地として海陸運輸の便を得、商業繁盛を極め前途ある貿易港に數へられ、群山とは姉妹港たり。

太邱市

正公園」あり、地域廣濶最も展望に富む、朝鮮近海に在る島嶼中第三位の大島嶼たる絶影島は周圍約七里、其最高點は海拔千二百九十七呎あり、北麓一帶は市街を成し、島内に牧の島鑛泉及造船所等あり、小西行長の築ける城址は市街に隣れる釜山鎮の丘上に存す、草梁古館の丘上には鎮山開港に功勞ある津之江兵庫の招魂碑在り、朝鮮第一の温泉場たる東萊等其附近に殘存す、次に湖南線豆溪驛の北に突兀として天空に聳ゆる鷄龍山は、江原道春川の牛頭山と共に神代我が素盞嗚尊遷蹤の跡なりと傳へらる。

●叢石嵒（朝鮮）

江原道通川邑より北方に距ること二里の地に、横峯突兀として海を壓するものあり、峰の懸崖條石櫛立、恰も方柱の如

釜山港

木浦

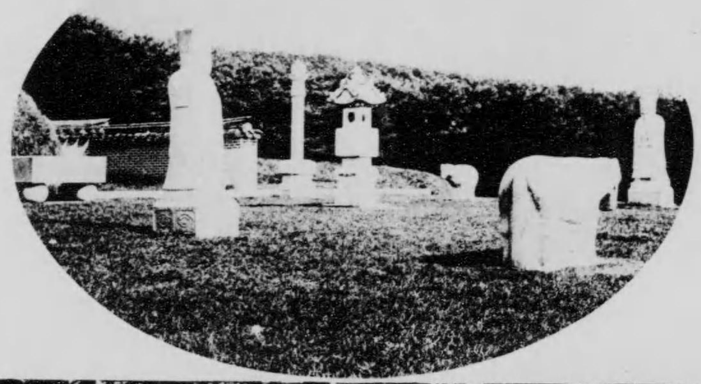
益山

叢石嵒

大邱市場

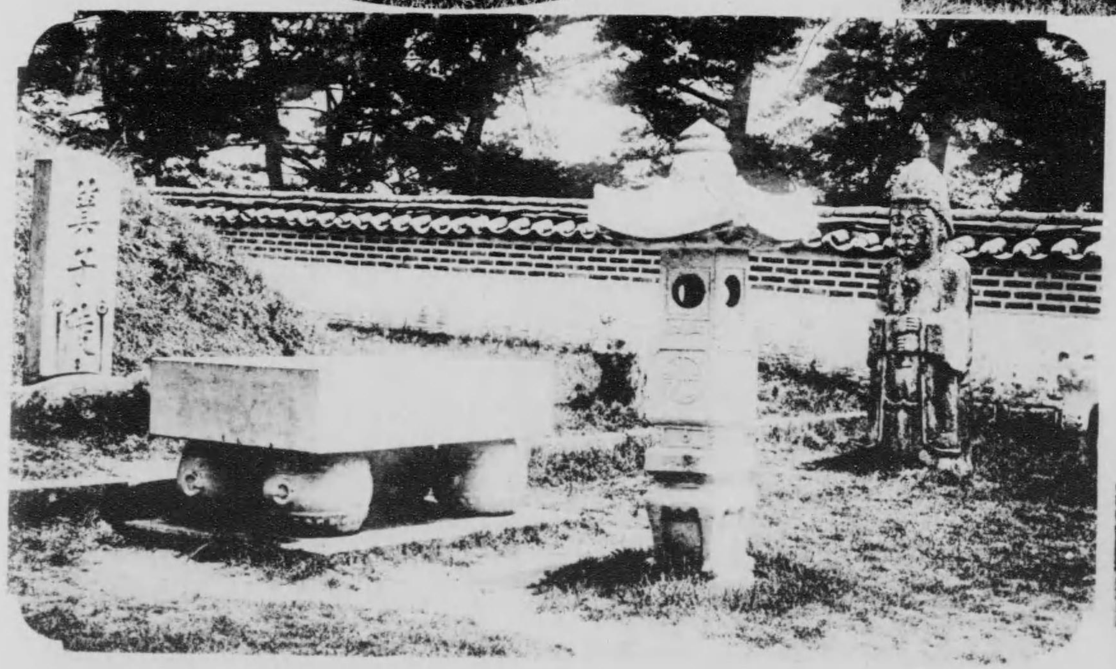
地と　て最も殷賑を極む。

木浦は榮山江の河口に臨める港にして、其海運上群山と相呼應す、市街は後に諭達山を控へ前面幾多島嶼によりて抱擁せらる、此地貿易の主なるものは米穀棉花海産物なり、今や湖南線の終點地として海陸運輸の便を得、商業繁盛を極め前途ある貿易港に數へられ、群山とは姉妹港たり。



大院君墓

孝烈臣忠閣



箕子陵

芬皇寺塔九層

高靈太祖陵

●箕子祠（朝鮮）

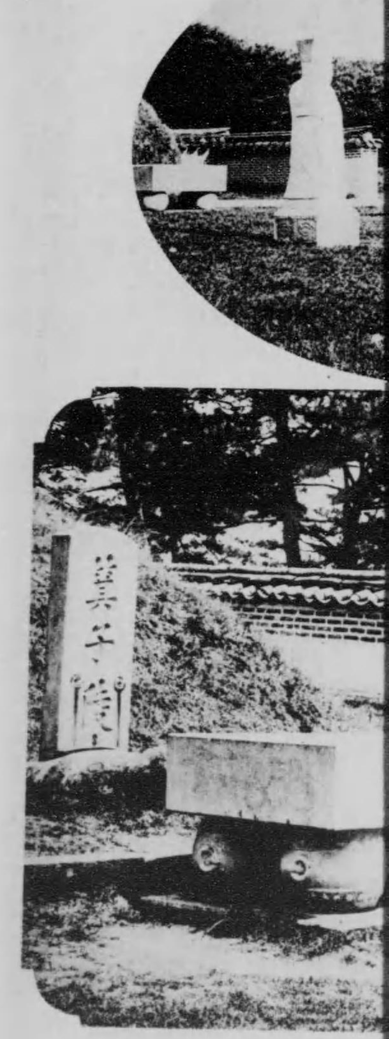
開國の祖は檀君にして、次で王位に即きたる者は箕氏なり、而して王としての箕氏は民に教ゆるに農桑を以てし、平壤に井田を設く、今も田中に故宮の遺蹟あり。

祠は平壤城内に存す、高麗肅宗の十年西京に幸せし時、政堂文學鄭文なる者建議して此祠を立て、李朝世宗の十年に至

●高麗太祖陵（朝鮮）

陵は開城を距る一里餘巴只洞の南麓に在り、所謂太祖神聖王の陵にして一に顯陵と號す、太祖在位二十六年、其死に臨み遺命して葬儀園陵の制は漢魏の故事に則り、儉素を旨とせしむ、惠宗位に即き六月梓宮を此所に葬り、八世顯宗の時契丹の亂に依り梓宮を香林寺に移し、二十二世高宗復た之を奉恩寺に移し、後、蒙

るのみにして荒廢最も甚だしく當初の規模は得て髣髴べからず、其創立は廿七代善德王なりと傳ふ、寺内の九層塔は新羅三寶の一に數へられ、豐公征韓の役我兵其半ばを毀ち後愚僧ありて之を改築せんとし破毀するに當り偶ま水晶の如く透明にして日光を受けて火を發する珠玉を得、今之を栢葉寺に藏すと言ふ、此塔初め九層なりしが上部破壞せられて今は三層を存するのみ初層は二十一尺四寸餘、



●箕子祠（朝鮮）

開國の祖は檀君にして、次で王位に即きたる者は箕氏なり、而して王としての箕氏は民に教ゆるに農桑を以てし、平壤に井田を設く、今ま田中に故宮の遺蹟あり。

祠は平壤城内に存す、高麗肅宗の十年西京に幸せし時、政堂文學鄭文なる者建議して此祠を立て、李朝世宗の十年に至り碑を立つ、文は有名なる卡李良の撰む所なり、又舊城の西北に當りて箭林あり、松楡蓊鬱として日光を陰翳す、之を菟山と言ふ、箕子墓は此中に在り、相傳ふ箕子逝去の後弓劍を造り、之を此墓に埋めたりと、今に箭林を箕林と稱す。

●大院君墓（朝鮮）

大院君の墓は京城を去る二里餘の所孔德里丘上に在り、其紅箭門十字閣碑閣等は貞陵の如く、直徑十尺餘の封陵を築きて腰石を繞らし、左右の後部は圍むに煉瓦の曲欄を以てす、別に小堤を築き封陵の前に石床在り、扁球狀を爲せる四個の石によりて支へらる、其前に石燈を置き左右には望石、羊石、石人、石馬等を順次に配置す。

孔德里は京城郊外の一勝地にして樂峴に隣接し麻浦龍山に近き地なり、大院君此に山莊を築き閑居以て風月を友とし、時に或は内外の政客を招じ能く時事を論じ、老來却て元氣旺盛なりしが、遂に大志を懷きて薨去せり。

森槐南

龍山蒼々曉翠分　長天一色麻浦雲
江山如此人不出　覇戈猶說大院君
可惜身爲天子父　暮年神傷南内雨
骨肉滿眼空羈旅　梧柳洞深啼杜宇
忽然大霧迷四蓬　魂若不毅非英雄
舟人指點孔德里　白楊蕭颯凄以風

【朝鮮】

●高麗太祖陵（朝鮮）

陵は開城を距る一里餘巴只洞の南麓に在り、所謂太祖神聖王の陵にして一に顯陵と號す、太祖在位二十六年、其死に臨み遺命して葬儀園陵の制は漢魏の故事に則り、儉素を旨とせしむ、惠宗位に即き六月梓宮を此所に葬り、八世顯宗の時契丹の亂に依り梓宮を香林寺に移し、二十二世高宗復た之を奉恩寺に移し、後、蒙古の亂に依りて江華に移葬せるが、廿四世元宗假に泥板洞に葬り、廿五世忠烈の時再び此所に還葬せり、陵は丘陵の中腹に位置を占め、後に山を負ひ前に川を控へ左右の地勢滿月臺に似て、稍其規模小なり。

墳は高き土饅頭にして、之を圍むに護石を以てし、其外に石欄を繞らし石獸を配し、石床、長明燈、望柱、石人等前面に立つ、又丘下には丁字閣、碑閣、仁箭門等あり。

●芬皇寺九層塔（朝鮮）

欽明天皇の朝佛教始めて我國に渡來せし時、韓國に於ては既に已に流行し、二十四代眞興王の如きは梁より遂り來れる佛舍利を奉迎し、新宮を泉龍寺と改めて之を安置し、七層の塔婆を起し丈六の佛像を鑄、遂に王妃と共に剃髮するに至れり。

新羅太宗武烈王天下を統一し唐と通じて其文物を輸入し、制度文教全く唐化し盛んに佛教を鼓吹せるより、半島には寺院堂塔多く建立せられ建築上一大發展を爲せり、然るに朝鮮朝に至りて排佛主義の起りしと豊公征韓役との結果多くは廢絶に歸し、現今殘れるは災禍免れたる僅少の石塔婆、石燈籠、石佛等に過ぎず、芬皇寺は其一にして、慶州の南半里に在り、石築の古塔、小佛宇、小僧房を存するのみにして荒廢最も甚だしく當初の規模は得て聲ふべからず、其創立は廿七代善德王なりと傳ふ、寺内の九層塔は新羅三寶の一に數へられ、豊公征韓の役我兵其半ばを毀ち後愚僧ありて之を改築せんとし破毀するに當り偶ま水晶の如く透明にして日光を受けて火を發する珠玉を得、今之を栢葉寺に藏すと言ふ、此塔初め九層なりしが上部破壞せられて今は三層を存するのみ初層は二十一尺四寸餘、上層に至るに從つて其大さを減ず、材料は悉く安山石にして頗る堅固なり。

●李舜臣愍忠祠（朝鮮）

祠は全羅南道順天邑の南に在り、是れ時の韓將李舜臣を祀れる『愍忠祠』なるものにして、海邊の者は時を以て祭を爲し、商船の其下を過ぐる者必ず此祠に詣す。

舜臣字は汝諧牙山の人、賦性英爽不羈、騎射絶倫、而して平素高簡靜默にして褒言なし、膂流威なる之を憚る、時に訓練院奉事兵曹判書金貴榮其爲人を知り、娶すに女を以てせんと計る、舜臣辭謝して曰く、初めて仕路に出づ豈に跡を權門に致すべけんやと、後、珍島郡守となり、尋で擢んでられて全羅左道水軍節度使に任ず、此時に方り壬辰の亂起り屢々我軍と戰ひ、毎戰勝たざるなし、終に順天海口に於て我軍の飛彈に中りて斃る、宣祖王聞いて宸悼し官を遣して吊祭し、特に右議政を贈り以て此愍忠祠を建てしめ其靈を祀る、舜臣其軍を治むるや簡にして法あり、妄りに一人を殺さず四軍志を一にし敢て令に違ふ者なし、其陣に臨み敵に對するや、意思從容、可を見て進み難を知りて退く、故に身、陣中に處するも規律猶自若、概ね以て勝を制せりと。

李楚客の詩中「威名久籌犬羊群、蓋世奇勳天下聞、今日男兒知幾個、可憐忠義李將軍」の句あり。

●金剛山釋王寺（朝鮮）

其名夙に天下に冠たる朝鮮金剛山は全山の廣袤海陸を併せて十數里に亘り、疊萬二千の峰巒重疊相倚り相擁し、數百丈の崭巖簇立、或は萬物相の雄となり、或は海金剛の勝となる、鬱林之を繞り蒼苔雲根を埋め、萬水飛潑し懸りては九龍淵の瀑となり、碎けては十二瀑の玉と爲る、幽禽法を說き清潭佛を念じ、山寺の鐘聲は圓寂の常樂を告ぐ、一たび足を此仙境に運べば杳として太古の想あり、山中秀峰の最も高きものは白馬峰にして、毘盧峰、水精峰之に亞ぐ、日出嶽、月出嶽、獅子嶽、香爐嶽、青鶴峰、雁門嶺、白雲臺、望軍臺、遮日峰、彌勒峰、釋迦峰等の奇嶂群峙し、其規模壯にして且つ大なり。

金剛衆峰の區域は江原道北部の通川、杆城、麟蹄、金城、淮陽五郡に跨り、中央西側の連峯を中金剛と言ひ、長安寺表訓寺の巨刹在り、其東側と沿岸連峰との間を外金剛と稱し、楡岾寺及新溪寺の伽藍を存す、而して沿岸中央、西連峰の海中に沒する處、島嶼、暗礁碁列するもの即ち海金剛の絶景たり、金剛山を繹ぬるには京城より京元線に乘り平康驛に下車し、東新、金城、新安を經て末輝里に至るべし、此間自動車の便あり、末輝里より長安寺に出で內金剛の探勝より始まるを順序とす、元山より平康に出づるの鐵道便もあり、釋王寺は京城元山其孰れよりするも鐵道線によりて達するを得、釋王寺は金剛山中に在る他の古刹と共に堂々たる巨刹にして規模宏大なる殿堂を始め數多の伽院を境內に列ぬ、就中大雄殿、映月樓、不二門等の古建造物は見る者をして賞嘆せしむ、大佛殿中に於ける大小幾多の諸佛像及五百羅漢等珍中の珍たるもの少なからず、他の古刹に比すれば通路に不便なく山下釋王寺驛ありて來り繹る者を迎接す、風致既に絶佳、地の利亦他を凌ぐ而かも近時驛に遊園地の設備あり、老樹鬱然として寺の周圍を包擁し、其崇高の境之を他に求むべからざるものあり。

金剛山の偉觀は其何れの所を眺むるも盡く偉觀ならざるはなしと雖も、今ま內外金剛の偉觀中より三四を撰んで摘記すれば、一萬二千衆峰の大宗たる毘盧峰は日出月出の二峰を瞰下する鬱林の上に屹立し、右方に萬陣臺の連嶂逶迤として現はる、其斷續不定の幽徑を溯流に沿ふて進めば溪岳の美益々曠遠雄大にして攀登難を叫ぶ者に亦快哉を叫ばしむ、摩訶庵を過ぎ妙吉祥を後にし東南麓に迫み法起將軍西嶺の溪間を遡行すれば溪谷三叉す此に架せる四仙橋を渡り白華瀑前を過ぎて內霧在嶺に出づ、內霧在嶺は將軍臺、萬陣臺の鞍部にして毘盧、白馬二高峰の連鎖、日本海と黃海との分水點、內山外山の境界なり、步を轉じて溫井里に出づれば即ち外金剛の地域たり、此西、萬物相の連脈と觀音峰連脈との溪間を寒霞溪と言ふ奇峰秀嶺左右に迫り溪間凡そ三里の長きに亘る。

●洛東鵲院關（朝鮮）

鵲院關址は密陽郡三浪津驛の東南半里に存す、往昔慶尙道中路の要害地として鼓に關を設け、其通行者を取締れる所なり、地は巉巖を負ひ絶壁に臨める所、石門在り其上に層樓を載く、文祿の役小西行長宗義智等此關所に至り奇計を以て守將李珏及密陽府使朴晋等を走らし、遂に其關所を通過せる古蹟にして洛東江畔の勝地たり。

●慶州佛國寺（朝鮮）

佛國寺は慶州の南四里に在り、最も多く新羅朝の遺物を有する古刹にして、豊公征韓の役火災に罹り、後、再建せるものなり、其中央に大雄殿ありて南面し前方東西に石塔婆あり、東方にあるを無影塔と稱し西方にあるを多寶塔と稱す。

其寺院建築の制は我寧樂朝時代の規模と殆ど同一にして、東西兩塔の大雄殿前に立てるは我が藥師寺、法興寺、唐招提寺東大寺等の金堂前面に金銅又は石造の燈籠を立てるものと相等し、之れ當時に於て共に範を唐に採りしものならん、無影塔は其基壇方形にして一面の長さ十三尺三寸五分、高さ約七尺五寸、四面に石段各十級あり、初層の屋蓋に二層の勾欄ありて四面を繞る、此塔は堅緻なる花崗石に精巧なる手工を加へ、且つ均衡と意匠とは非凡の技倆を示す、同寺の內殿は結構壯麗にして美術家の驚嘆する所なり。

●密陽嶺南樓（朝鮮）

樓は密陽驛の西方、邑の東端凝川に臨める地にあり、元嶺南寺の小樓なりしが同寺廢絶後郡守金溪知之を改創して保存せり。地は郡の北に松岡を控へ、西は官道に臨み、大江其間を橫流し、列岫三面に重圍し廣野微茫として平かなること碁局の如く、大林中に蒼蔚す、又龍頭終南の二山左右に峙立し溶々たる凝川の清流之を繞り、樓の楣間に『江山如畫』の扁額を掲ぐ四字能く其佳絶を語るものと言ふべし。

●海　印　寺（朝鮮）

海印寺は慶尙南道陜川郡伽耶山の西にあり、今を距る一千百十餘年前新羅哀莊王の創建に係り、其後數回火災に罹り現今の伽藍は九十三棟にして、殿內に高僧順應利貞希朗の遺像を安置し、又高麗時錄、大藏經及歷代實錄等を藏すと言ふ、大藏經板は高麗高宗の時大藏都監を設け、其二十四年より三十八年に至る十五年間に雕造せるものなり。

柏栗寺藥師像

密陽嶺南樓

海印寺內部

釋王寺は現地元山其驛より鐵道線によりて達するを得、釋王寺は金剛山中に在る他の古刹と共に堂々たる巨刹にして規模宏大なる殿堂を始め數多の伽院を境内に列ぬ、就中大雄殿、映月樓、不二門等の古建造物は見る者をして賞嘆せしむ、大佛殿中に於ける大小幾多の諸佛像及五百羅漢等珍中の珍たるもの少なからず、他の古刹に比すれば通路に不便

在り其上に層樓を戴く、文祿の役小西行長宗義智等此關所に至り奇計を以て守將李珏及密陽府使朴晋等を走らし、遂に其關所を通過せる古蹟にして洛東江畔の勝地たり。

●慶州佛國寺（朝鮮）

佛國寺は慶州の南四里に在り、最も多く新羅朝の遺物を有する古刹にして、豊

海印寺は慶尙南道陜川郡伽耶山の西にあり、今を距る一千百十餘年前新羅哀莊王の創建に係り、其後數回火災に罹り現今の伽藍は九十三棟にして、殿内に高僧順應利貞希朗の遺像を安置し、又高麗時錄、大藏經及歷代實錄等を藏すと言ふ、大藏經板は高麗高宗の時大藏都監を設け、其二十四年より三十八年に至る十五年間に雕造せるものなり。

金剛山釋王寺

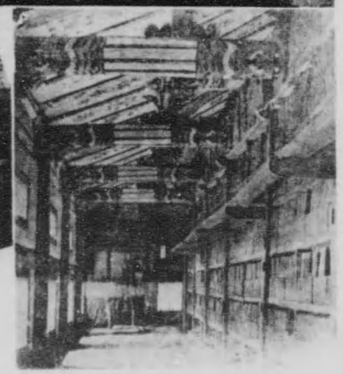
柏栗寺藥師像

密陽嶺南樓

洛東鵲院關

慶州佛國寺

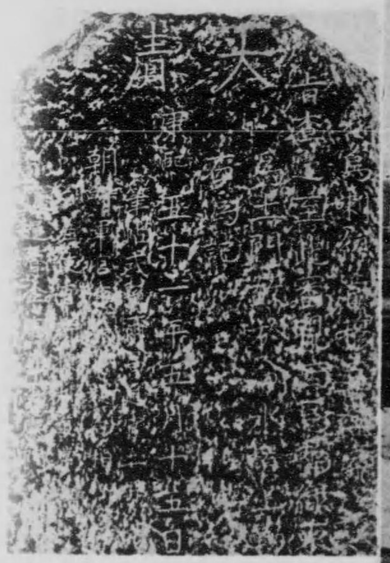
海印寺內部



會寧城東門

赤壁江と杵城

白頭山上の招魂碑



會寧より五國城頭を望む

女眞小富士

宣宗王兩王子潛伏所

●豆滿江（朝鮮）

朝鮮日支滿の國境を劃し、延長九十七里奔馬の勢を以て流下し日本海に注ぐもの、之れ乃ち豆滿江と爲す、一に圖們江と言ひ又土門江とも稱さる。

源を白頭山上の龍王潭より發し正に鴨綠江と背流す、初め東北に向つて流下し長白山脈と江南山脈より分流せらるゝ幾側の溫突室にして、室に盛古堂の扁額を掲ぐ、紀績碑の文は咸鏡北道兵馬評事兼監鄕史の撰に係る、相距る三百二十有餘年、碑は風雨に打れて古色を帶び、室は軒傾けるも其形依然として存し、訪ふ者をして今昔の感に堪へざらしむ。

●間島女眞小富士（朝鮮）

會寧より豆滿江に沿ひ高嶺鎭に向つて

●會寧と舊城址（朝鮮）

咸鏡北道の北部に位し、北は豆滿江を隔てゝ間島に對し、其他は富寧、鍾城、茂山三郡に包圍せられ、大山峻嶺重疊連亘し其郡界を盡せる會寧郡は唯だ一の輕便鐵道あるのみ、他は道路嶮惡言ふべからず、會寧邑は豆滿江右岸にあり、南方茫渺たる沃野を隔てゝ五國山を望み、左に

白頭山上の招魂碑

宗王兩王子潛伏所

●豆滿江（朝鮮）

朝鮮日支滿の國境を劃し、延長九十七里奔馬の勢を以て流下し日本海に注ぐもの、之れ乃ち豆滿江と爲す、一に圖們江と言ひ又土門江とも稱さる。

源を白頭山上の龍王潭より發し正に鴨綠江と背流す、初め東北に向つて流下し長白山脈と江南山脈より分流せらるゝ幾條の衆流を併呑し茂山に至りて稍々大となり、會寧、鍾城、穩城を右に掠め、間島の東岸を左に洗ひ、滿洲の布爾哈爾河と合して、之より流勢南轉し慶源に出でゝ水流二派に分れ、古易島を生み更に琿春川を呑みて河幅益々大となり數町に亘る所あり、慶興背後の丘陵を抱きて大灣曲を成し、左に古への幹東野を涵して露領を過ぎ海に入る、而して江口に吐出する堆沙の一孤島を成するものは鹿島にして其堆沙漸次大陸に連續し、今は半島形を成し其島端はシスロ角と稱せり。

●二王子潛伏舊址（朝鮮）

輸城平野の中央より東海岸に近き所に一村あり高德邑と言ふ、清津港を距る一里餘、羅南を距ること二里の地なり。

此高德邑の兩班朴家の門前に『二王紀績碑』在り、相傳ふ文祿の役加藤清正北進して會寧城に逼るや、府使鞠景仁なる者難を避けて入城せる臨海君、順和君の二王子を縛し來りて降を乞ふ、朴兩班十一代の祖惟一之を知りて大に驚き、駈けて清正の陣に至り、諄々と仁義を說きて二王子の虜を免されん事を懇ふ、清正其誠に感じ二王子を免し且又懇々と將來を語り、朴の誠忠を賞す、朴拜謝して二王子を我家に伴ひ、朝夕身自ら供護の任に當り家人を近づけしめず、後、數月を過ぎて亂平ぐや二王子を都に奉送せりと、當時二王子の潛住せる室は門を入りて正面左側の溫突室にして、室に盛古堂の匾額を掲ぐ、紀績碑の文は咸鏡北道兵馬評事兼監鄕史の撰に係る、相距る三百二十有餘年、碑は風雨に打れて古色を帶び、室は軒傾けるも其形依然として存し、訪ふ者をして今昔の感に堪へざらしむ。

●間島女眞小富士（朝鮮）

會寧より豆滿江に沿ひ高嶺鎭に向つて行くこと一里三十丁、忽ち摺鉢形の一山を對岸に望むべし、其狀恰も我富士山に酷似す、加藤清正會寧より『オラレカイ』即ち今の間島に出づる時、此山を望み女眞小富士と命名すと傳ふ、江畔に巨石在り其上平坦にして廣く十餘名を坐せしむべし、清正此に休憩せりと言ふ。

●白頭山上の國境（朝鮮）

長白山脈の中央より、稍東に偏在して國境に蟠踞し、其大脈南下し天を截して高山峻嶺を成すもの是れ白頭山なり。

山上には大澤あり龍王潭と稱す、周圍六里其深さ測るべからず、乃ち東亞に於ける大河の水源此潭より發し、其西するもの鴨綠江となり、東するもの豆滿江となり、北するもの大瀑布を成し、其下流は松花江となる、龍王潭の東方に『國境標』あり。

國友　隨軒

長白之山突兀劈天起　玲瓏清姿雲外峙
靈氣磅礴橫遠邇　蜿蜒盤桓數千里　嶺
有深潭龍所止　奇靈使人禱生死　煙霧
湧其裏　雷霆走其趾　膚寸崇朝雲氣紫
滂沱注爲黑龍水　滿蒙大野西北指　韓
遼半島東南視　天下無此形勝比　宜哉
千古多自此出矣　遼金元清皆起此　赫
々泰東與國史　英法德美兒戲耳　興廢
何問劉與李　如今又見風雲史　何事崛
崛經國士　雄豪角逐安有已　嗚呼神聖
帝王之業從此始

●會寧と舊城址（朝鮮）

咸鏡北道の北部に位し、北は豆滿江を隔てゝ間島に對し、其他は富寧、鍾城、茂山三郡に包圍せられ、大山峻嶺重疊連亘し其郡界を盡せる會寧郡は唯だ一の輕便鐵道あるのみ、他は道路險惡言ふべからず、會寧邑は豆滿江右岸にあり、南方茫渺たる沃野を隔てゝ五國山を望み、左に車輪茂山の二嶺を仰ぎ、脚下に豆滿江を瞰下す。

會寧は高句麗の舊地にして、胡言に『幹木河』又吾音會と言へり、李太祖の時、幹朶里童孟哥帖木兒、虛に乘じて入居す、世宗十五年元狄哈孟哥父子を弑せるより、酋長を缺く事一年、翌十六年此地の西北賊衝に當り、且つ幹朶里の遺種住めるを以て特に城堡を設け、寧北鎭制節使として之を兼ねしめたり、後、更に會寧鎭を置き、僉節制使を居らしめ、遂に都護府とせり、城址として今ま存するものは、此城砦址若くは城東門と稱せるもの、清正隅なる『合戰』と稱する地の西半里に存す、其合戰の地は清正が明軍を破れる所なりと傳へられ、今猶明兵の古墳三百餘累々として原頭に橫はれり、而して金の居城たりし五國城址は、邑の西方五里雲頭山上に在りて石築の城壁今尙存す、此他は省く。

●赤壁江と杆城（朝鮮）

江原道杆城郡は道の北部なる東海岸に偏在す、其高城方面は太白山脈遠く咸鏡道より來り南走して郡內を縱貫し、金剛山脈巍然として聳立し其餘波四方に蔓延して數多の丘陵を成し、赤壁江其他の河川其間を縫流して日本海に注ぐ、杆城邑は郡內面に在りて海岸を距る二里、又高城邑は赤壁江の右岸に在りて河口燧燧津を距ること一里、此方面勝地金剛山の圈內なれば風致に富む。

●臺灣神社（臺灣）

臺北郊外劍潭山上に鎮座す、地は芝蘭一堡大直庄と言ふ、市街より二十九町を隔つ、是れ臺灣唯一の官幣大社にして、大國魂命、少彦名命及北白川宮能久親王殿下を祭る、造營は明治三十三年を以て工を起し、翌三十五年十月成を告ぐ、此月勅使御差遣あり且又故親王妃殿下渡臺二十七日嚴肅なる鎮座式を擧げ翌二十八日大祭を執行せらる、爾來毎月二十八日を以て月例祭を行ひ、毎年十月二十七八兩日大祭を行ふ。

臺灣神社造營の議は、白川宮殿下薨去の際、夙に唱道せられ尋で貴衆兩院の建議となり、明治三十九年九月時の總督乃木大將は、故白川宮殿下宮祠建設取調委員を設け、角田海軍少將を委員長と爲し委員數名を置き、專ら其事に當らしめたる結果、臺北城外圓山の東部及西部即ち中央部に位する西部を選んで造營すべき事に略ぼ決せしが、三十一年兒玉大將代つて總督となるや、當初の設計を變じ亦規模の擴張を計り、現在の地に鎮座すべく決定せり。

神社鎮座の此山は高燥にして幽雅なり仰げば山容秀靈なる大直山の青巒、後に聳え、俯せば水光明媚なる基隆の碧潭、前に滿ふ、臺北市街は炊烟盛んに起り、圓山公園亦呼べば應へんとす、此靈地にして神靈始めて安んずべく、石磴幾十級宮柱太しく立ちて宮殿最も莊嚴なり、一の華表は大正三年古賀三千人の献立する所、花崗石材を用ひ其雄大なる海内無雙と稱せらる、德川公爵始め華族數十名の進献せる石獅子及燈籠等社前に竝立す、神苑廣濶、井上圓了の詩に曰く

一帶黄流繞社陵　暮天含雨氣將凝
不知臺北何邊在　只隔雲烟認電燈

又逸名子の詩に

鎮南祠宇自莊嚴　回首春風餘澤霑
神氣浩然千載下　劍潭流碧亢龍潛

神社附近には勝地として有名なる劍潭あり、古刹觀音寺あり、劍潭夜光、乳井等あり、基隆溪の大直山麓を環りて迂流する所、溪水碧潭を爲す、是れ即ち尹士楩の「劍潭有樹、名茄苳、高聳障天、大可數抱、峙於潭岸、相傳荷蘭人、揷劍於樹、生皮合、劍在其内、因以爲名」とある所にして、或書は之を記して「毎黑夜、或風雨時、輒有紅光、燭天、相傳、底荷蘭古劍、故氣上騰也」と記し以て劍潭夜光と稱す、然れ共溪水碧潭の勝は異議なきも、劍潭夜光は信ずべらず、觀音寺は神社神苑の傍ら、劍潭に臨める地にあり、寺の西方山仔脚に乳井の舊蹟あり淡水廳志に「水色如乳、甘可瀹茗」と見えたるも、今は荒廢に委しつゝあり。

●臺北市街（臺灣）

臺北は臺灣の首都にして、市は所謂臺北平原の中央、淡水河の右岸にあり、城内及艋舺大稻埕を合せ總稱して臺北市と言ふ、始め三市は箇々獨立市街なりしが改隷の後總督府を城内に置き、其他主要官衙を其四圍に置きしかば、市街自ら膨脹して三市接續するに至り、遂に此總稱的市名の上に大臺北市を構成せるなり、而して城内は臺北城址にして艋舺大稻埕の中間に位す、城は光緒五年時の知府陳星聚の築く所、領臺後城壁を毀ちのみ、内に十東南北及小南の四門を殘すのみ、内に十三街を包容し、總督府を始めとし大小の諸官衙は其中に設けられ、且つ内地人の諸會社銀行商廛等多く此内にあり、今や全く内地人の大市街と化了せり、總督府廳舍所在街を文武街と言ひ、總督官邸は東門街にあり、明治三十四年の建築に係り、鳥屋白壁、巍然として臺北の空に聳ゆる處、實に全臺に俯瞰するの概あり、庭園亦雅趣に富む。

●臺北新公園（臺灣）

臺北城内石坊街と東門街の間にあり。圓山公園に對して俗に新公園と呼ぶ、開設日淺くして蒼古の氣に乏しきも、林泉の奇を凝らし花卉の妍を聚め、噴水あり音樂堂あり、兒玉前總督の石膏像及後藤前民政長官の壽像あり、又工費二十有七萬圓を費して建設せる記念博物館の如きは、此園唯一の偉觀にして、其結構の宏壯なる、實に臺北の誇とするに足る、又圓山公園は太加蚋堡山仔脚庄なる基隆溪畔の丘陵にあり、丘容圓きを以て圓山仔と稱す、一に龍峒山の名あり、地幽雅にして巖石地層を爲して淡水に臨み、風光太だ明媚なり、此園には噴水あり飛瀑ありて年日の清遊に値す。

兒玉源太郎臺灣總督たりし時丘陵に一寺を創し、鎮南山臨濟護國禪寺と稱す。

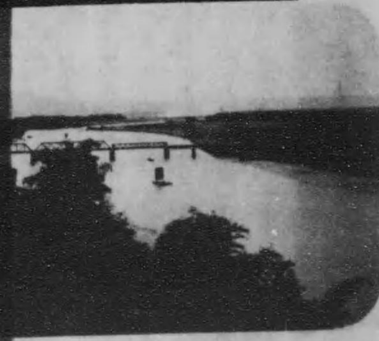
●孟甲街より淡水河を望む（臺灣）

艋舺は淡水溪の支流たる新店溪の東岸に位し、太加蚋堡に於ける最舊の市街にして、昔時蕃人が獨木舟を以て此邊を往來せるより、獨木の蕃語「ワンカア」の近音譯字を以て艋舺と稱す。

淡水河岸に接して殷盛なる遊廓あるが爲めに、艋舺は臺北遊廓の代名詞として用ひらる、然れ共淡水河護岸工事成りて其擁壁の雄大なるは、亦是れ臺北の一偉觀なると共に、孟舺獨特の好風趣なり、此地より淡水河遠近を望むの絶景に至りては、他に比すべき地なし、殊に街の西南端に古刹龍山寺ありて、孟舺街の異彩となり淡水河の好背景となる、此古刹は清の乾隆三年の創建に係り、臺北最古の廟宇たり、閩の泉州安海の分派にして、廟中に觀音佛祖を祀る。

臺灣

艋舺より淡水河を望む



劍潭

所、花崗石材を用ひ其雄大なる海内無雙と稱せらる、德川公爵始め華族數十名の進獻せる石獅子及燈籠等社前に竝立す、神苑廣濶、井上圓了の詩に曰く

一帶黃流繞社陵　幕天舍雨氣將凝
不知臺北何邊在　只隔雲烟認電燈

又逸名子の詩に

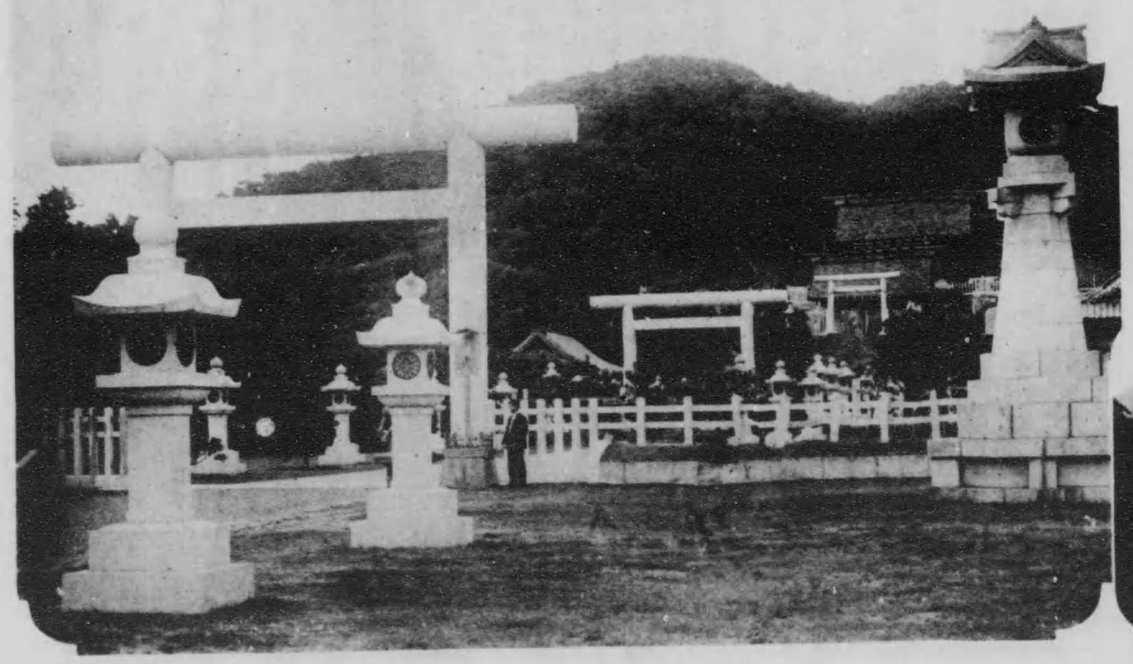
諸官衙は其中に設けられ、且つ内地人の諸會社銀行商廛等多く此内にあり、今や全く内地人の大市街と化了せり、總督府廳舍所在街を文武街と言ひ、總督官邸は東門街にあり、明治三十四年の建築に係り、鳥屋白壁、巍然として臺北の空に聳ゆる處、實に全臺に俯瞰するの概あり、

此地より淡水河遠近を望むの絶景に至りては、他に比すべき地なし、殊に街の西南端に古刹龍山寺ありて、孟艸街の異彩となり淡水河の好背景となる、此古刹は清の乾隆三年の創建に係り、臺北最古の廟宇たり、閩の泉州安海の分派にして、廟中に觀音佛祖を祀る。

臺灣總督府

臺北市街

臺北公園



臺灣神社

淡水河を望む

劍潭

打狗硝船廠

臺中公園

臺中市街

打狗港

阿里山神木

臺灣生番

●臺中市街（臺灣）

臺南臺北の中央に位する臺中は曾て清國が臺灣府城を置ける樞要地にて其沿革亦複雜を極めたりき、清の光緒十一年臺灣を以て一省と爲すや、福建巡撫劉英は先づ臺北の形勢を案じ、北に首府を置かり證せらる、蓋し鳴金紙錢を焚くとは、鑼を鳴らし金銀紙を焚きて神佑を祈る漢族の風習なり然り打狗港は四面陸地に包擁せらるゝ湖狀の入江にして、唯だ西北の一部、僅かに三百五十尺の港口によりて外洋に通ずるのみ、故に各方位の颶風も港内に波濤を揚ぐることなし。

●臺中公園（臺灣）

臺中街元北門舊墩臺の傍らにあり。園は明治三十六年二月官民醵金して土木を起し同十月成を告げ盛んなる開園式を擧ぐ、同四十一年四月西部縱貫鐵道開通式場に供せらるゝに方り、更に規模を

●臺中市街（臺灣）

臺南臺北の中央に位する臺中は曾て清國が臺灣府城を置ける樞要地にて其沿革亦複雜を極めたりき、清の光緒十一年臺灣を以て一省と爲すや、福建巡撫劉銘傳は先づ臺北の形勢を按じ、此に首府を置かんとせり、翌十二年九月後任者劉銘傳實地踏査の結果、劉英の意見に贊し省域の位置を此に定めて臺灣府と稱す、而して舊地名橋仔頭庄と大墩街を合せ臺中と改む、是に於て十五年八月府城を築くべく工を起し、八門四樓を建て又衙署廟宇等を築き、尋で十六年棟宇軍統領林朝棟自ら兵勇を督して城牆を設計し、十七年二月土壁大半成を告ぐ。

此時に當り銘傳の積極的政策は聊か急進に過ぎ、曾なくも島民の怨嗟を買ひて物議囂々形勢甚だ穩かならず、爲めに銘傳の施設する所失敗に了り、遂に邵友濂と交迭するに至り、經費節減の結果工事を中止せしに止まらず、尋で臺灣府を臺北に移すの議決定し、九仞の功を一簣に缺きて半成の城池空しく荒廢に委し、纔かに新庄仔、下街仔の城内に肆形を止めしのみ、帝國領臺後明治二十九年四月新たに臺中街と名け、臺中縣を置き、三十四年八月市區改正を計畫施行し、規模を大にして面目を一新し、今や臺中廳所在の都會地となり、街の東端に停車場を置き、南北交通の中心點と爲す。

臺中廳に於ける行政上の區域は、北は大安溪を隔てゝ新竹廳に界し、西は海に接し南は濁水の支流西螺溪を隔てゝ嘉義廳に接し、東方の南半は南投廳に堺し、其北半は直ちに蕃地に連接す、管内東邊の一部を除くの外、土地概ね平坦にして其中央は濁水の灌漑するあり、爲めに土地肥沃にして最も米作に適す、所謂葫蘆墩米は葫蘆墩地方の產出なり。

●臺中公園（臺灣）

臺中街元北門舊墩臺の傍らにあり。園は明治三十六年二月官民醵金して土木を起し同十月成を告げ盛んなる開園式を擧ぐ、同四十一年四月西部縱貫鐵道開通式場に供せらるゝに方り、更に規模を擴大し施設を完備せり、地は高燥にして境域廣濶、築山あり泉水あり、墩臺は舊時府城の蹟を語り、池中の一亭榭は曩年開院大將宮殿下休憩あらせられたる所、此園にも兒玉前總督の石膏像ありて其治績を謳歌し、後藤前民政長官の壽像は當時の燮理を讃美す、又臺中神社は園の丘陵に鎭座す、社殿莊嚴を極む。

●打狗港（臺灣）

港は臺南廳大竹里にあり、元嶺埕埔庄に屬せる地なり、打鼓、旗後の二山相對峙して港口を扼し、實に臺灣西部海岸に於ける第一の良港たり。

日本水路誌は此港を記して曰く「打狗山は磽确崎嶇として海より峭立し、之を北に臨めば斷頭圓錐形の如し、又遠望すれば島の如く、晴天の時は三十五浬外より見るを得べく、他陸の烟霧に沒する時と雖も、尙ほ識別し易く此低海岸に於ける最要目標たり」と又臺灣稅關要覽には「打狗港は大竹里及興隆里に跨り、夙に鳳山地方に於ける諸市街と、對岸支那の汕頭、廈門、泉州、又は内地の横濱、神戸、長崎との貿易集散呑吐口として知られ、特に南部の特產たる砂糖を以て其輸出の大宗とし、所謂打狗糖の名を以て顯著なり」と記載す、然れ共打狗の港口は暗礁多く潮流急にして、出入に危險多かりし事は、「隔海參差、遠近浮沈、面列於打狗山左右者、西有名石佛嶼、石佛之北、石塔嶼、石佛之南有涼傘礁、舟人經此必鳴金焚紙錢」と臺灣府志の記する所により證せらる、蓋し鳴金紙錢を焚くことは、漢族を鳴らし金銀紙を焚きて神佑を祈る漢族の風習なり然り打狗港は四面陸地に包擁せらるゝ湖狀の入江にして、唯だ西北の一部、僅かに三百五十尺の港口によりて外洋に通ずるのみ、故に各方位の颶風も港内に波瀾を揚ぐることなし。

領臺當時は岩礁港口に横はり、淺洲堤狀を爲して港灣を局限し、碇泊に不便なりしかば總督府に於ては明治四十一年より六箇年繼續事業として四百七十三萬三千圓を支出し、港灣改良の工事に着手し四十三年に至り年限を一ヶ年短縮せる爲め、設計も亦縮少せしが、打狗港經由の貨物は激增して止まざるより、大正元年より繼續年間を十ヶ年間延長し諸般設備に急なりし結果は、遂に今日の良港を構成するに至れり。

●阿里山神木（臺灣）

阿里山は嘉義廳蕃界に聳立す、其山名の阿里は新高山西方に連亘する山彙の總稱にして、鹿林山を最高とし塔山を最低とす、最高なるは海拔九千六百十六尺、最低なるも尙ほ七千五百零尺なり。

阿里山森林は其四千五百尺乃至約八千二百尺の間に於て、面積約一萬一千九十九町歩に亘り、蓋し千古の原生林たり、而して海拔七千二百尺の所に、亭々として天を摩する紅檜の一大樹あり、目通周圍六十五尺、直徑二十尺七寸、枝下四十五尺、全長百三十五尺、樹齡約二千年、今は柵を建てゝ鐵條を廻らし、年々神繩を飾り以て神木と稱す。

●蕃人の風俗（臺灣）

熟蕃生蕃の區別は開化の程度によりて定まる、智識風俗殆ど支那人と異らずと雖も、今尙熟蕃固有の言語風俗を遺存するものあり、一々說明に遑あらず。

●旅順と關東廳（關東州）

關東州の最南端たる旅順は渤海國時代より其名稱を有せるものにして、往昔唐より渤海王城に使する者は海路を此地に取り鴨綠江を溯りて今の輯安縣乃ち王城に至れりとの事なれば、約一千年以前に於て船舶の寄港地たりしことを想像し得べし、而して旅順を軍港とせるは光緒五年時の直隸總督兼北洋大臣たる李鴻章が渤海防備の爲め威海衛と共に經營したるに始まり、日清役の時我軍之を占領し平和克復によりて還附せるに、亞で露國の租借する所となり、極東經營は遺憾なく施されたるも、日露役に及んで再び我軍の占領に歸し、其租借權は我國に移り以て今日に至れり。

港口の東側には黃金山屹として聳へ老虎尾半島の城頭山饅頭山は蜿蜒起伏して西方に扣へ、其岬角を扼す、東西兩港の水相合して外海に通じ、一條の水道は其幅二百七十餘米突に過ぎざるも、水深くして大艦巨舶の來往自由なり、此港口は日露役の際三回に亘りて我閉塞隊が閉塞を企て芳名を青史に留めたる戰場たりき

旅順の市街は新舊二區に分劃され、兩市街の中央を流るゝ龍河の北岸に旅順驛在り、其以東に當る東港に面せる地を舊市街と稱し西港北岸の一帶、即ち露國時代に於て大規模に計畫せる大家巨屋の現存する所を新市街と言ふ、關東都督府たりし關東廳始め其他の官衙及文武官の官舍工科學堂、陳列館、各學校等此に在り、南に西港の細波灩激たるあり、北は案子椅子の二山峙立して自然の屏障を成す。舊市街は商業區にして會社銀行商廈等在り、有名なる二〇三高地は舊新兩市街より望むを得べしと雖も、其白玉山頂に於ける巍然たる一大表忠碑は舊市街日本橋々畔より遠望すれば最も壯觀なり、白玉神社は表忠碑の上に在り。

●二〇三高地の記念碑（關東州）

回顧すれば旅順攻圍軍は攻略作業の進捗に伴ひ、明治三十七年十一月二十六日より、第三回總攻擊を開始する事となれり、即ち右縱隊第一師團の左縱は松樹山、中央縱隊第九師團は二龍山、左翼隊第十一師團は東雞冠山 同北砲臺を攻擊占領し、引續き望臺附近一帶の高地を攻略すべく、別に最も勇壯警拔なる特別枝隊を編成し、步兵第二旅團長中村少將の指揮に屬し、松樹山補備砲臺を奪略し、一潟千里旅順市街に突入すべく計られたり、白襷隊即ち是れなり、同日拂曉龍眼北方に各隊を集合せる第三軍司令官乃木大將は大要左の如き演說を爲せり。

今や陸には敵軍の大增加あり、海には バルチック艦隊の廻航遠きに非ず、國家の安危は我包圍軍の成否によりて決せられんとす、此時に當り特別豫備隊の壯擧を敢行す、予は將さに死地に就かんとする當隊に對し囑望の切實なるものあるを禁せず、諸氏が君國に殉すべきは實に今日に在り、希くは努力せよ。

乃木大將の此演說は大に士氣を亢奮せしめたり、陣中肅として聲なく大將亦暗涙に咽ぶ、鎧袖一觸の元氣を以て進軍突擊せる我包圍軍は激戰更に激戰を重ね、忽ちにして屍山を築き血河を漂らしめ、占領となり奪還となり、遂に二〇三高地を占領するを得たり、嗚呼是れ日露戰史中の激戰記事にして、而かも亦世界戰史に其比を見ざる所なり。

抑も二〇三高地は旅順新市街の西北約二千米突に屹立する要塞地點にして、老鐵山を除き附近最高の堡壘なり、其頂項より俯觀すれば西港全部東港の大部分及黃金山饅頭山より、東西の海面本郭の背面、新舊市街の多くを望み、西方は金家屯、曲家屯、双頭灣附近、胡家屯、小東溝、潘家屯、隋家屯、大劉家、鳩灣附近、凡そ我軍の通路宿營地は皆双眸の中に集まり、椅子山、案子山、白玉山其他幾多の砲臺堡壘悉く眼下に在りしを以て、露軍に取りては金城鐵壁たりしなり、之を占領せられたるが爲めに彼れは總ての上に不利の影響を及ぼせり。

爾靈山險豈難擧　男兒功名期克難
鐵血覆山山形改　萬人齊仰爾靈山

乃木大將の此詩は實に當年を語るものにして、此碑前に立ち當年を偲ぶ者誰か涙なからんや。

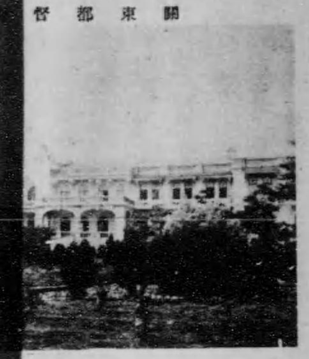
●東雞冠山北堡壘（關東州）

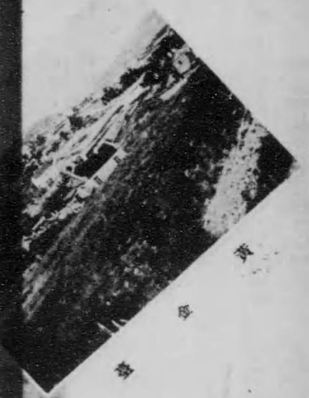
東雞冠山北堡壘は旅順驛より東北一里三十餘町、明治三十七年八月二十一日我第十一師團の攻擊せる堡壘にして、地中戰より大爆破に移り、先づ砲臺の東北角を崩壞すること數回、彼我の死傷最も多數に上り、露軍驍將コンドラチエンコ亦此に仆る、其占領までの苦戰力鬪は戰史に就て見るべし。

●水師營（關東州）

乃木ステッセル兩將軍會見の地として名ある水師營は、旅順驛より西北一里三十餘の一村落なり、其水師營の名を存するは康熙帝の朝此に『水師營』を置き海上警備に任じたるに基因す。

兩將軍の會見せるは一月五日にして、ステッセル將軍は參謀長レース少將參謀勤務コルチエン中尉及副官從騎若干を從へて來會せり、乃木將軍は參謀長伊地知少將川上遼東守備軍行政事務官參謀安原大尉及副官傳騎若干を從へて引見し、懇談數時に及べり、此時の會見場は今も水師營小學堂に充つ。

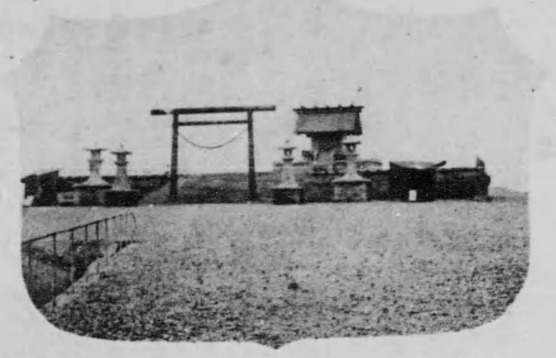

關東都督


關東廳

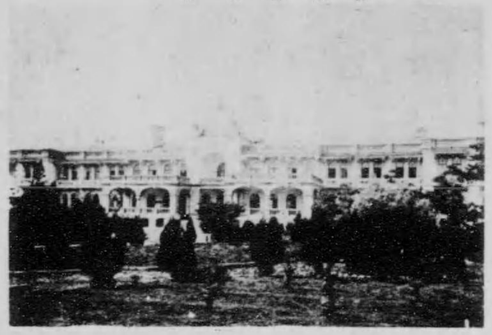
二〇三高地上紀念碑

舍工科學堂、陳列館、各學校等此に在り、南に西港の細波瀲滟たるあり、北は案子椅子の二山峙立して自然の屏障を成す。舊市街は商業區にして會社銀行商廈等在り、有名なる二〇三高地は舊新兩市街より望むを得べしと雖も、其白玉山頂に於ける巍然たる一大表忠碑は舊市街日本橋々畔より遠望すれば最も壯觀なり、白玉

旅順市街

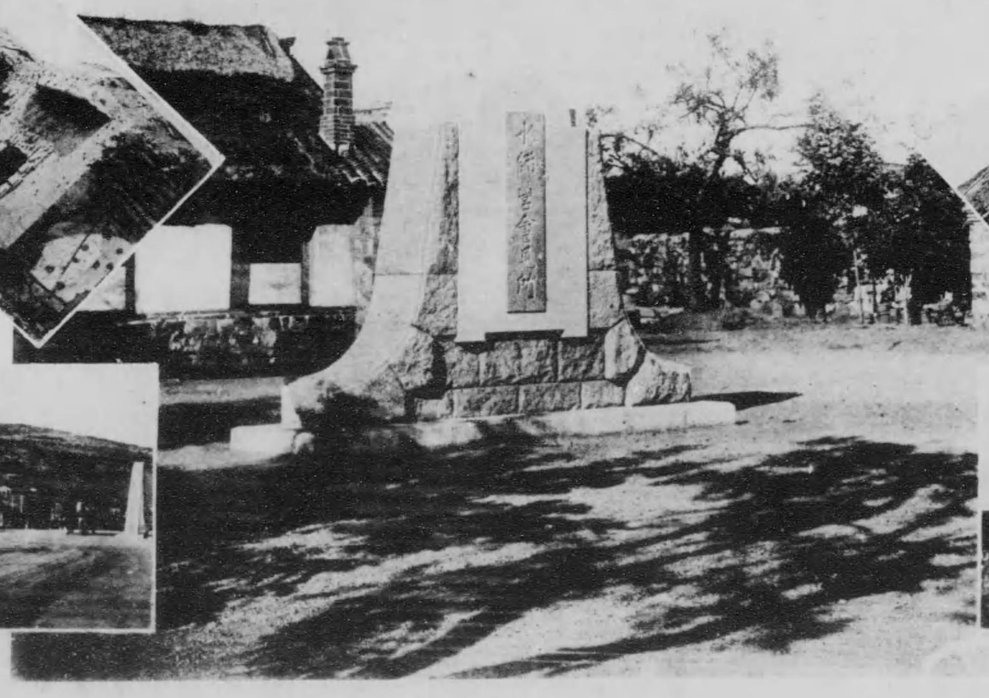


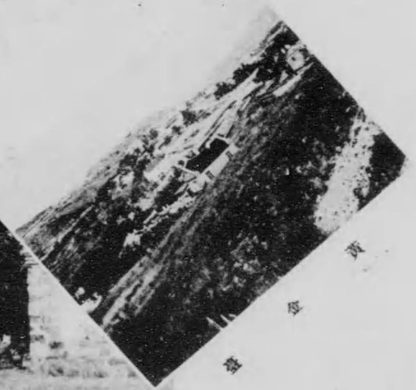
白玉山神社



關東都督府

雞冠北山砲臺





日本橋より白玉山表忠碑を望む

二〇三高地上紀念碑

水師營日露兩將軍の會見場

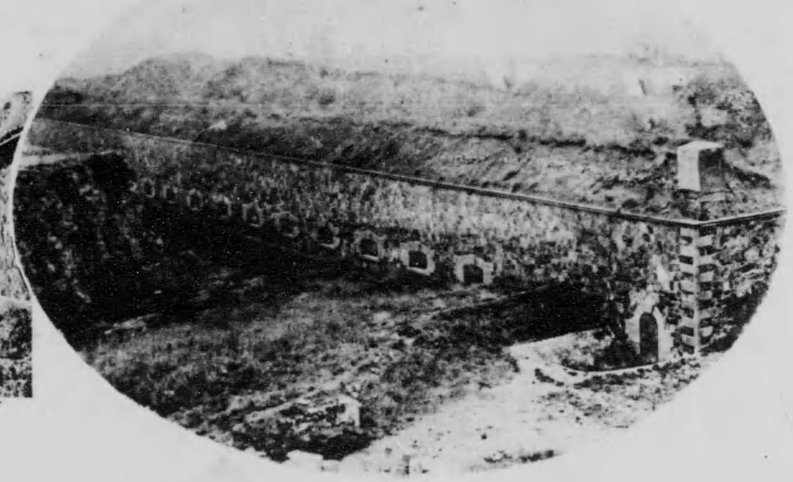
占領となり奪還となり、遂に二〇三高地を占領するを得たり、嗚呼是れ日露戰史中の激戰記事にして、而かも亦世界戰史に其比を見ざる所なり。

抑も二〇三高地は旅順新市街の西北約二千米突に屹立する要塞地點にして、老鐵山を除き附近最高の堡壘なり、其頂項より俯觀すれば西港全部東港の大部分及

兩將軍の會見ぜるは一月五日にして、ステッセル將軍は參謀長レース少將參謀勤務コルチエン中尉及副官從騎若干を從へて來會せり、乃木將軍は參謀長伊地知少將川上遼東守備軍行政事務官參謀安原大尉及副官傳騎若干を從へて引見し、懇談數時に及べり、此時の會見場は今は水師營小學堂に充つ。

一戸堡壘遺址

大案子山



椅子山要塞

旅順北堡壘皇軍全滅の跡

磐龍山東堡壘

海軍閉塞隊記念碑

●北堡壘激戰の跡（關東州）

旅順要塞は敵が天險に加工して金湯と爲したる所なり、其攻略の容易ならざる固より恠むに足らず。

幾深く衢等の勞苦を察し日夜軫念に堪へず、然れ共今や陸海軍の狀況は旅順攻略の機を緩ふするを得ざるも意の如くならざりしは實に已むを得ざりしなり。

東鑑冠山に於ける砲臺及堡壘の完全なりし事は何人も想像に難からざりしが、我攻城砲を以て其砲臺を破壞すべく屢々放てる巨砲も著しき効果を見る能はず、其正面の胸墻二ヶ所に裝置せる八百キログラムの爆藥の如きも、點火爆發して音翼隊を率ゐて激戰せる一戸旅團長の占領に係れる堡壘なるより遂に『一戸堡壘』と稱され、方略にまで一戸堡壘云々と記されたり、望臺の頂上に露軍の使用せる海軍砲二門横はりて當年の激戰を語る。

該方面は殊る處戰蹟にして、之を部分的に說明せんと欲せば戰史の梗概を示さざるべからず、之れ餘白なき本書の蹙し

●北堡壘激戰の跡（關東州）

旅順要塞は敵が天險に加工して金湯と爲したる所なり、其攻略の容易ならざる固より恠むに足らず。

睽深く爾等の勞苦を察し日夜軫念に堪へず、然れ共今や陸海軍の狀況は旅順攻略の機を緩ふするを得ざるものあり此時に當り第三軍總攻擊の擧あるを聞き其時機を得たるを喜び成功を望む情茲だ切なり、爾等將卒夫れ自愛努力せよ。

是れ旅順攻圍軍に下されたる勅語なりき、忠勇無雙なる我攻圍軍の將卒、誰か此勅語を拜して感奮せざる者あらんや、當時全軍屍を以て敵の外壕を埋むるとも必ず要塞を攻陷し、聖慮を安んじ奉らんと意氣天を衝くの概あり、而して十一月二十六日を期し第三回攻擊開始の豫定なりしかば、孰れも震天動地の大激戰を待てり。

先是東雞冠山北砲臺、二龍山、松樹山とも外岸側防穹窖は既に破壞されたるを以て今は强襲によりて奪略すべき計畫あるのみ、突擊隊は豫定の如く十一月二十六日午後一時を期して各方面とも勢鋭く攻擊目標に突進せり、一隊倒るれば二隊次ぎ、遂に山成す死屍を踏み越へて猛烈に攻擊し、二時となり三時を過ぎ日沒に至るまで兵力の續く限り突擊奮戰せりと雖も、最新式の要塞築城容易に近づくを得ず、人柵を架け胸壁に攀ぢ僅かに目的を達せりと思へば、第二の側防機關あり茲に於てか屍を積んで壘と爲し、辛ふじて突入すれば亦咽喉部に防備あり、而かも突擊部隊の進路には地雷を設け鐵柵を構へ、通路を絶つに機關砲あり速射砲あり、殊に頑强精鋭の兵決死力守す、勢ひ此くの如くなるを以て勇猛なる我軍も僅かに砲臺の一小部分を奪取せるに止まり、攻擊意の如くならざりしは實に已むを得ざりしなり。

東雞冠山に於ける砲臺及堡壘の完全なりし事は何人も想像に難からざりしが、我攻城砲を以て其砲臺を破壞すべく屢々放てる巨砲も著しき効果を見る能はず、其正面の胸墻二ヶ所に裝置せる八百キログラムの爆藥の如きも、點火爆發して音響天地に轟き、黑煙濛々として高く揚り北砲臺は一塊の土石をも留めず粉碎飛散せりと見たる時も、其結果を檢すれば唯だ僅かに胸墻の一部を破壞せるに過ぎざりしと言ふ。

我精鋭の兵が辛ふじて敵の胸墻下に迫ると雖も、北砲臺及東雞冠山砲臺よりする、有効の側射を受けて死傷續出し、頓では全滅に陷るべき危殆の形勢に迫れる事さへあり、又苦戰力鬪して一旦占領せる東雞冠山中腹の散兵壕も、忽ち僞勢なる敵の逆襲に遭ひ退却するの已むを得ざる事もありき、是等苦戰の事を巨細に擧げ來らば數十頁に亘るも尙ほ盡きざるなり今に於て東雞冠山の戰蹟を眺め當年を追想すれば肌膚自ら粟を生じ、幾多犧牲の靈に向つて敬意を表するに至る、敵は難攻不落の城に據りて邀戰し、巨彈を放ち爆彈を投じ有らゆる壓迫を加へたるにも拘らず、克く戰ひ克く肉薄して終に勝を制せるものは、陛下の稜威、將卒の精鋭と は言ひ實に天佑と謂つべし。

●一戸堡壘の遺址（關東州）

東雞冠山北堡壘の西に望臺在り、是れ露軍防禦陣地の鎖鑰地とせる所にして、我第十一師團は八月二十四日を以て此望臺攻擊を開始せるも、標高百八十四米突の高地なりしより、敵は據つて以て最も防戰に努めたれば容易に占領するを得ず翌年一月一日に至りて漸く占領せり、其望臺の前面に一戸堡壘遺址存す、當時左翼隊を率ゐて激戰せる一戸旅團長の占領に係れる堡壘なるより遂に「一戸堡壘」と稱され、方略にまで一戸堡壘云々と記されたり、望臺の頂上に露軍の使用せる海軍砲二門横はりて當年の激戰を語る。

該方面は殘る處戰蹟にして、之を部分的に說明せんと欲せば戰史の梗概を示さざるべからず、之れ餘白なき本書の盡し得ざる所なり、東雞冠山砲臺、同北堡壘、一戸堡壘等と共に著るものは盤龍山、大小案子山、松樹山、黃金臺、椅子山、二龍山等亦是れ激戰地たり砲臺たり堡壘たりし所なり、之を繹ぬるには旅順驛より臭水子驛の山河を跋涉すべし、當年屍山血河の跡歷々たり。

●表忠塔と記念碑（關東州）

日露戰役に於ける旅順の攻圍戰は約半歲の久しきに亘り、其包圍區域の如きも、前地戰域を加ふれば實に百方里に跨る、彼我兩軍の激戰他に比すべきものなし、當時歐紙は兩軍を比較論評して旅順防守にして壯烈なりと言はゞ其攻擊の業に齋しては何の辭を以て之を讃せんか、蓋し堅牢驚くべき旅順の砲壘を突擊するは、之を防守するの事業に比し更に偉大なるものあり、同地の防守者は如何に自ら勇壯果敢なりしにもせよ、月桂冠は之を攻圍者に讓らざるべからず、蓋し堅忍、智略、絕倫の勇氣、其他武士の本職と稱すべき一切の點に於て月桂冠は攻圍者の手に落ちざるを得ずと斷言したりき旅順攻圍戰の偉大なること夫れ此くの如し、之に參加し名譽の戰死を遂げ又は偉大の事を以て職に殉せる者の勳功は、之を千載に傳へずんばあらず。

今や當年の戰蹟地を卜して是等殊勳者の忠靈を鎭むべき祠堂、亦其殊勳を永く千載に傳ふべき記念碑等を立て戰蹟の保存を計ると共に國民思想の涵養に資す。

堡壘遺址

●關東洲大連市（關東州）

關洲の關門たる大連は遼東半島の南端にして、南山の丘陵を南に負ひ、北は大連灣を隔てゝ大和尚山と相對し、稍々平崗の地西に連る、門司を距る六百十四浬、上海へ五百三十浬、青島には二百三十九浬を隔つ、灣内水深くして大艦巨船を浮べ得べき安全港なり。

往時は東西青泥窪の二村に分れ、人煙疎々たる漁村に過ぎず、其長汀曲浦徒らに蘆荻の繁茂するに任せたる地なりしも西暦一八六〇年英佛聯合軍の天津北京を攻撃するに當り、英國艦隊は大連灣を根據地と爲し『ウイクトリヤ』灣と命名し、降りて李鴻章の直隷總督たりし時、旅順及大連を經營するや獨人ハイネッケンを軍事顧問たらしめ、其策を容れ地を今の柳樹屯に相して要塞を設け、以て金州半島の要港とせり、大連灣なる名稱の汎く内外に知れたるは此時代なりき、然れ共當時大連灣と稱せるは附近一帶の諸灣を總稱せるものにして、日露戰役の際我軍は柳樹屯を以て大連港柳樹屯と稱し、戰後に及んで露國時代のダリニーを大連と呼ぶに至れり。

大連の發展に就ては聊か既往の沿革を叙せざるべからず、西暦一八九八年三月露國は旅順大連の租借條約を締結するや、旅順軍港に對して一大商港を柳樹屯に設くべく計畫せるも、東清鐵道技師ゲルペッチは灣内の水深を測り、青泥窪沿岸の最も築港に適する事を献策せる結果東清鐵道會社は築港費壹千萬留、市街經費八百八十萬留、土地買收費三十八萬留其他百萬留合計二千十八萬留の豫算を以て、先づ今の沙河口以東の耕地三千二百六十餘歩を買收し、東青泥窪海岸に築港工事を起し、黑咀子海角の一隅を官衙區とし、東西青泥窪の全地區を擧げて一般市街地と豫定し一九〇〇年先づ官衙區の一角に市を構成せり。

當時露國の意圖は此新市街を以て極東經營の根據地たらしむるに在りき、遠方を意味する『ダリニー』を以て市街の名とせる如きは其遠き將來に期待せるものありしなり、故に最大速力を以て市街の設計埠頭の築造及官衙の建築等に從事し、一九〇一年には南關嶺大連間の支線鐵道を敷設し、更に線路を埠頭に延長し或は船渠を造りて艦隊修繕の便に供し、道路、水道、家屋建設、發電所準備等僅かに第一期工事を終へ、進んで更に壹千萬留を投じ第二期經營に着手せんとするに際し、日露國交の斷絶を見、三十七年五月二十八日我軍の占領する所となり、翌三十八年二月十一日紀元節の佳節を卜して初めて大連と命名し、關東都督府の隷下に移り、三十九年九月一日大連民政署を置かれ純然たる民政治下の都市となり、大正四年十月一日より大連市と稱す。

●大連市街（關東州）

大連の市街は露國時代の設計を襲用せるものにして、其官衙區たりし舊露西亞町は南滿洲鐵道株式會社の舍宅及大連醫院該社直屬用地等に使用せらる、日本橋を渡れば即ち元の行政區商業區たる一般市街地なり、露國時代に在りては直徑百露間の圓形大廣場を市街の中心として、此廣場よりモスコー大街、アレキセーフ大街等を放サハロフ大街、アレキセーフ大街、サムソン大街、線形に出し、之を經とし多くの小街を緯織するの設計に出でたるを、我軍の市街を占領するや放線形の大街には、當時の將軍若くは軍衙の名を命じ、其他の街路には國名を以てせり、曰く山縣通、曰く大山通、曰く監部通、曰く乃木町、曰く奥町、曰く寺内通、曰く東郷町、曰く兒玉町及山城、伊勢、信濃、越前、越中、越後等の町名、又は東公園町西公園町敷島町逢阪町の如き雅名を附せるものあり

●表忠碑（關東州）

日露役の時海城以南に於し戰病歿せる陸軍々人及軍族四千餘名の納骨堂を設き其上に表忠碑を立てたるもの東公園町に在り、毎年四月十一日招魂祭を行ふ。

●大連の公園（關東州）

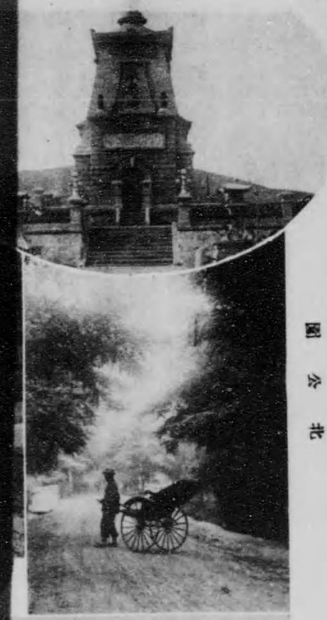
市の西北に在る西公園は露國時代に於ける名稱を襲げり、園内廣濶にして樹木鬱蒼、遊園地設備に於に缺くるものなし、楊柳は老ひて雪枝地を拂はんとし、胡藤繁茂する間に櫻桃點綴し、園内に平地あり丘陵あり山あり谿あり五十餘萬坪の一廓宛然畫の如し、北公園は舊露西亞町に在り、市の東北には松公園ある外市の西方伏見臺の高地に電氣遊園地なる大規模の樂園あり、市街及小崗子を一眸の裡に收め遙かに大連灣を隔てゝ柳樹屯大和尚山に對し眺望佳絶なり。

●大連神社（關東州）

南山の半腹に鎮座する大連神社は一般市民の守護神として崇敬せらる、地は眺下に大連埠頭を望み、境内幽邃市内唯一の靈地たり、其大祭の時は各戸國旗を飜翻たらしめ、業を休み、内外人の參者を以て社域を埋め、市内大に賑ふ。

●老虎灘（關東州）

大連市の南一里餘、海濱に臨める佳境之を老虎灘と言ふ、海水灣入藍碧深く湛へて一漁村を擁し、西方海中に突出する一巖礁あり、老虎の空を仰いで嘯くが如き狀あるより『老虎灘』と稱さる、背後左右の丘陵には松樹翠色を滴らし、前は即ち煙波浩渺として白帆去來し、星ヶ浦と共に郊外清游の地として著はる。



東公園内表忠碑

北公園

東清鐵道會社は築港費壹千萬留、市街經費八百八十萬留、土地買收費三十八萬留其他百萬留合計二千十八萬留の豫算を以て、先づ今の沙河口以東の耕地三千二百六十餘歩を買收し、東青泥窪海岸に築港工事を起し、黑咀子海角の一隅を官衙區と爲し、東西青泥窪の全地區を畫げて一織するの設計に出でたるを、我軍の市街を占領するや放線形の大街には、當時の將軍若くは軍衙の名を命じ、其他の街路には國名を以てせり、曰く山縣通、曰く大山通、曰く監部通、曰く乃木町、曰く奥町、曰く寺内通、曰く東郷町、曰く兒玉町及山城、伊勢、信濃、越前、越中、

之を老虎灘と言ふ、海水滑入藍碧深く湾へて一漁村を擁し、西方海中に突出する一巖礁あり、老虎の空を仰いで嘯くが如き狀あるより『老虎灘』と稱さる、背後左右の丘陵には松樹翠色を滴らし、前は即ち煙波浩渺として白帆去來し、星ヶ浦と共に郊外清游の地として著はる。

東公園内表忠碑

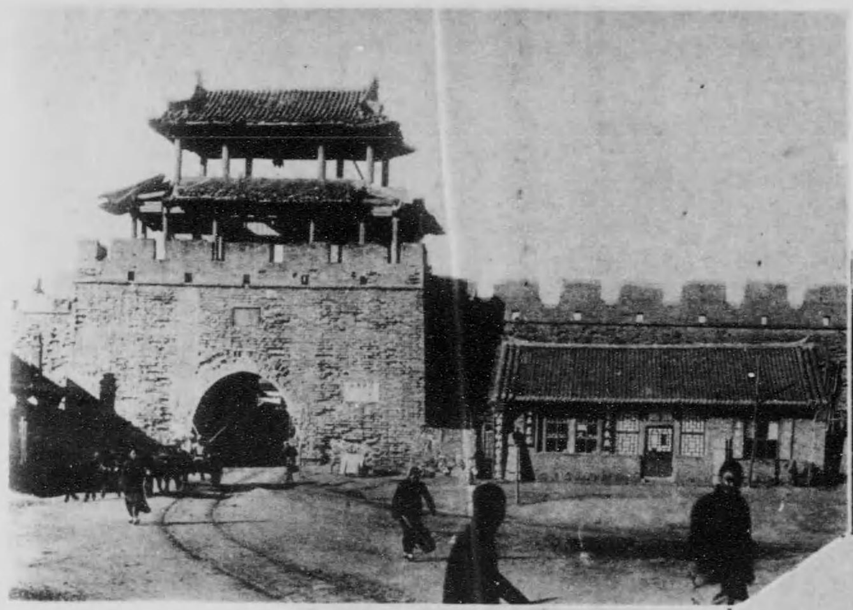
大連神社

老虎灘

西公園

北公園

大連市街全景



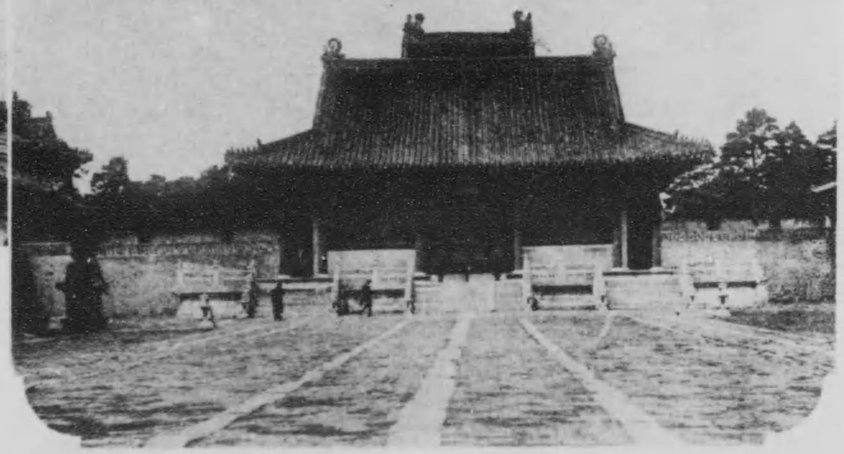
撫順城

見附公園

撫順市街一條通り

東郷坑

老虎坑全景



撫順東陵

●撫順炭坑（關東州）

東洋に於ける大炭田として名ある撫順炭坑は、全面積三方里半即ち壹千六百七十四萬七千餘坪を包括し、其含有炭量八億噸以上の測算なりと聞く。

長白山系の東より來るもの、一は渾河の北岸に於て東西に連亙し、一は其南岸に於て東西に蜿蜒す、渾河は古の所謂小言明なり、又曰く此炭を使用するより生ずる利益は甚だ多しと雖も、就中其最も著しきものは、第一、粘結性少なきを以て燃燒の際火架上に粘着せざるに因り、火夫の技能を要すること少なく、且つ大に火夫の勞力を省略することを得、第二、繼火の際燃へ移り易きが故に釜換を容易ならしめ、且つ汽壓の下降を少なからしむ、第三、燃燒力充分なるを以て煤烟薄く

言明なり、又曰く此炭を使用するより生ずる利益は甚だ多しと雖も、就中其最も著しきものは、第一、粘結性少なきを以て燃燒の際火架上に粘着せざるに因り、火夫の技能を要すること少なく、且つ大に火夫の勞力を省略することを得、第二、繼火の際燃へ移り易きが故に釜換を容易ならしめ、且つ汽壓の下降を少なからしむ、第三、燃燒力充分なるを以て煤烟薄く

を編成し更に楊柏堡に新坑を開き大に出炭額を增加し、最高一日約千四百噸の產出を見、明治四十年四月一日に至り南滿洲鐵道會社之を繼承し其設備に着手せる結果、八百七拾貳萬三千三百三十餘圓の設備費を計上し、頗る大規模の計畫を立て遂に今日の大を成せり。

東郷坑は大山坑の姉妹坑にして、大山坑の東二哩、楊柏堡坑の深部に當る平地

●撫順炭坑（關東州）

東洋に於ける大炭田として名ある撫順炭坑は、全面積三方里半即ち壹千六百七十四萬七千餘坪を包括し、其含有炭量八億噸以上の測算なりと聞く。

長白山系の東より來るもの、一は渾河の北岸に於て東西に連亙し、一は其南岸に於て東西に蜿蜒す、渾河は古の所謂小遼河にして、源を興京界滾馬嶺に發し、一百清里を西北流して英額河に合し、更に西南に流るゝこと二百三十餘清里、撫順城を經て、又西に八十里を流れ、奉天府の南方に出で之より南西に百五十清里流れたる所は大資河なり、此に相合して又六十清里を流れ、海城界より遼河に合し遂に海に注ぐ、撫順炭坑は實に此流域の内に發育せる一大炭田たり。

曾て清人翁壽、王承堯等の採炭せる頃には、揚柏堡川を境界として河東河西に大別し王姓は河西、翁姓は河東に採掘權を有せるも後、其權利露亞銀行に移り、遂に東清鐵道會社の附帶事業となり、日露戰役の結果、我南滿洲株式會社に於て之を繼承し今日に至れる事は世の知る所なり。

撫順炭の特質

撫順炭は日本炭と同じく第三紀層の石炭に屬し、其色漆黑にして光澤强く、其質堅硬而かも揮發分に富み、燃燒熾盛、七千五百カロリーの火力を有する有煙炭なり、此炭の特質は灰分少量にしてクリンカーを生ずること亦少なく、且つ硫黄分を多く含有せざるを以て汽罐を損ずる虞れなし、揮發分に富むが故に瓦斯製造用としては、日本の如何なる石炭も此炭に匹敵すること能はず、從つて燃燒力熾盛なるが爲めに汽罐の焚料としては日本產一等炭と比肩すべく特に鐵道機關車又は船舶用に適すと、是該炭坑長の事實的言明なり、又曰く此炭を使用するより生ずる利益は甚だ多しと雖も、就中其最も著しきものは、第一、粘結性少なきを以て燃燒の際火架上に粘着せざるに因り、火夫の技能を要すること少なく、且つ大に火夫の勞力を省略することを得、第二、纖火の際燃へ移り易きが故に釜換を容易ならしめ、且つ汽壓の下降を少なからしむ、第三、燃燒力充分なるを以て煤烟薄く不燃分の逃出少なく危險の虞なし、烟筒掃除を爲すにも他炭を用ふるに比し凡そ三分の二の勞力を省約し、第四、硫黄分少なきを以て汽罐の保存上に利益なり云々

●東鄉及老虎臺坑（關東州）

撫順炭坑中に於ける代表的坑區は千金寨、楊柏堡、大山、老虎臺、東鄉の各坑にして、大山東鄉の二坑は驛坑たるの故を以て開鑿の中に少なかざる設備を要せるものゝ如し、今ま各坑の沿革を記さん

日露戰役に當りて我鴨綠江軍の一部が敵を追躡して千金寨地方に進擊せるは、明治三十七年三月九日なりき、當時露兵は北走に際して建築物機械等を破壞し、坑内に注水する等復舊事業の妨礙を爲し倉庫材料品の如きは燒燼せしめたり、三月十日彼我の兵渾河を夾みて對峙し、敵の防禦頗る頑强なりしも、我軍の突擊甚だしく一日にして遂に撫順城を占領す。

占領後煙臺採煙所より技師を撫順炭坑に派して整理に着手せしめ、我軍監督の上に引續き採炭し、此時撫順採炭所と名け大本營に隷屬せり、然るに老虎臺楊柏堡の舊坑は悉く滿水せるを以て千金寨舊坑を利用し、極力採炭すると同時に一二新坑の開鑿に着手し老虎臺に於ても亦舊坑の排水及新坑の開鑿を爲し數月にして一日三百噸内外の出炭を見るに至れり、撫順採炭所員の復員を命ぜらるゝや野戰鐵道提理部監督の任に當り、第一採炭班を編成し更に楊柏堡に新坑を開き火に出炭額を增加し、最高一日約千四百噸の產出を見、明治四十年四月一日に至り南滿洲鐵道會社之を繼承し其設備に着手せる結果、八百七拾貳萬三千三百三十餘圓の設備費を計上し、頗る大規模の計畫を立て遂に今日の大を成せり。

東鄉坑は大山坑の姉妹坑にして、大山坑の東一哩、楊柏堡坑の深部に當る平地に位置を占め、老虎臺坑は楊柏堡坑の東千二百六十間、老虎臺河の左岸に在り、

●撫順城と諸陵（關東州）

撫順城は明時代の築造に係る古城にして、撫順驛より東北里餘の所に在り、往昔此に千戶所を置き、渾河の右岸上流に撫順關を設け以て東方に對する關門と爲したるが、清の太宗明軍を薩爾滸山に擊破し、長驅遼陽に南進するに及び、此に旗人を駐屯せしめ佐領をして之を管せしめたり、城壁は小規模なるも南北二門を開き、城北を繞れる山脈は清廷の所謂龍脈にして、西は葛布街北方より薩爾滸山に連亙す、山腹に觀音閣在り故に觀音寺山とも言ふ、境内の撫順十六景を記せる一碑ありて北方面の勝景を語る、又興京古城は即ち清祖發祥の地にして始祖敦化城より此地に遷み、肇祖顯祖興祖太祖の五祖此に居城せりと傳ふる地は撫順より東方に當る、永陵東陵北陵等著名の陵亦此方面に在り、興京永陵一帶を東山と稱す撫順は奉天より東山に通ずる要害たり

●撫順市街と公園（關東州）

千金寨驛の北方本町通を中心とせる撫順市街は東一條通より東七條通に至り、其西を西一條通より西七條通に至る、又之と十字を爲して南北に貫通する街路十五あり、公園は本町大和の二公園ありて共に雄大なり。

老虎坑全景

大正九年七月二十日印刷
同　年同月二十二日發行

編纂兼發行人　東京市四谷區花園町五十三番地　瀨川光行

印刷人　東京市小石川區西江戸川町二十一番地　佐々木俊一

寫眞技師　東京市神田區元佐久間町十番地　槇田眞盛

發行所　東京市四谷區花園町五十三番地
「史蹟名勝天然記念物」刊行會
電話番町一五八八番

同　東京市麹町區紀尾井町六番地
「史蹟名勝天然記念物」編纂局
電話九段九一六番

416
6